堀部安兵衛

下巻

池波正太郎



角川文庫 2984

堀部安兵衛

下巻

池波正太郎



角川文庫 2984

星霜

細井広沢について、少しのべておきたい。

この人物が、安兵衛にあたえた影響は大きく、その運命をも左右したとみてよいからだ。

広沢の父を、辻輔庵という。

輔庵の祖父は細井小左衛門といい、明智光秀の臣で、この人は、あの山崎の戦いに討死をとげた。

辻輔庵は名を知治といって慶長十七年に京都で生まれ、長じて医者となり、のちに遠州・掛川の城主・松平日向守につかえたのである。

輔庵は五尺にみたぬ小さな躰で、

「わしもな、ひとり前の武士となるのがのぞみじゃったが、この躰ゆえ、あきらめたのよ」

広沢にも一度、こういってきかせたことがあった。

さて、輔庵は松平家の臣となるや、遠州・横須賀在の山本某の女とみを妻に迎え、三人の男子をもうけた。

このうちの次男が広沢である。

だから広沢は、掛川の城下で生まれたわけだが、その年、主君の国替えがあったので、父と共

に播州・明石へ移った。

こういう話が残っている。

明石の城下に両腕がない乞食がいて〔とっくり〕とよばれていた。

この乞食、足に筆をはさみ、絵や字をかく。または小さな手製の弓を両足で射て見せたりして見物から銭をもらい暮らしていた。

これが、広沢にはおもしろくて仕方がなく、あまり母親から銭をもらうのも気がひけるので、ついに父・輔庵からもらった短刀を金に替えてしまい、このときは、いたく父から叱りつけられた。

家庭は温厚な父母の仕つけもあり、学問も順当にすすみ、長じてから、広沢は坂井漸軒について儒学をまなんだ。北島雪山から書をまなんだのもこのころらしい。

このころ、すでに雪山は細川家を浪人して諸国をめぐり歩いていたらしく、細井広沢が直接に教えをうけたのは、もっと後のことで、はじめは書簡をもって、長崎にいる北島雪山へ〔書道〕についての教えを請うたのである。

雪山に広沢を紹介したのは、細川家の臣で前田伊介という人だったらしい。

広沢と交際をふかめるようになって中山安兵衛がおどろいたことは、彼が学問、書道のほかにも、剣・槍・柔・弓・馬の諸術に通じ、歌道も京都の公家・清水谷実業について〔ゆるし〕をうけるという、多彩な、すばらしい才能の持主であることだった。

それでいて、広沢の人柄は醇乎たるものがあり、いささかも自分の才におぼれることがない。

師・北島雪山によって引き合された安兵衛に対しては「命がけの友情」をもって互いに心をふかめてゆこうとし、安兵衛もまた、これにこたえた。

広沢が細井次郎太夫と名のるようになったのは、柳沢吉保の家臣となってからだ。細井姓を名のって独立したわけである。

広沢という号は、むかし、曾祖父が明智の臣であったころ、その領地が京都・嵯峨の広沢にあったことに拠ったものだそうな。

北島雪山が江戸へ出てきたのも、広沢が柳沢家につかえてからのことで、ここに、はじめて広沢は師の顔を見たわけであった。

「ながい間、雪山先生とは書状の往来のみであったが、そのときいただくお手紙の中に、ありありと思いうかんでいた先生のおもかげと、はじめて見る先生のお顔と、寸分ちがわぬのに、私は我ながらおどろいたものだ」

と、広沢が安兵衛に語ったことがある。

浮世小路に家を世話したのも広沢だし、柳沢吉保にたのみ、貧乏な北島雪山へ扶持を出してもらい、暮らしを安定させたのも広沢であった。

だが雪山は、広沢の書を見るたびに、

「どうも貴公は下手じゃな。わしの門人の中では、もっとも下手くそだ」

遠慮なく叱りつけながら、先ず筆の持ち方から教えなおした。

「貴公の字は根気によって一人前のものとなろう。くれぐれも、うまい字を書こうと思わず、

一字一字に誠心をこめ、たとえば真剣をもって相手に対する心をもって書かれるがよろしい。剣の道もそうであろうけれど、書の道もまた筆をもっておのれに克つことなのじゃよ」

と、いうのである。

江戸へきた当時の北島雪山は、異常な潔癖があり、

「畳なぞは汚ならしい」

といって、壁も床も板張りにしてしまい、たまに柳沢家から衣服などを拝領したときも、

「だれが手にとったか知れたものではない」

といって、いきなり水洗いにかけなくては身につけなかった。

そのくせ、食べる物なぞは、

「庖丁なぞをつかって食物を切っては味が無うなる」

芋でも大根でも手で割っては味噌汁の中へぶちこみ、来客にすすめたりした。

「どうも先生の手料理だけは、何とも閉口したものだ」

と、広沢がいっている。

花見にいこうといえば、

「お天気にはホコリが渦巻いていて汚ならしい」

と、雨の日でなければ出かけぬし、その雨の中で酒に酔ってくると、

「ああ、もう、あの桜の花の梢から落ちてくる水の何という清らかなことじゃ。ああ、あの水を浴びてみたい」

叫ぶや、くるくると着物をぬぎ捨てて広沢にもたせ、素裸になって桜の木の下で雨を浴びたりする。

こうした北島雪山の姿は、まったく安兵衛の知らぬものであった。

安兵衛が知っている雪山の家には畳も入っていたし、野菜を切る庖丁もそなえてあった。

「雪山先生も三年の江戸暮らしをされたわけだが、このごろは、だいぶんに変られたようです」

と、細井広沢がいうのへ、

「私は、先生の知遇をうけてより、まだ一年に足りませぬ。それが、さびしゅうござる」

安兵衛は、雪山と広沢とのゆるし合った師弟の情愛が、うらやましかった。

安兵衛が浮世小路の雪山宅をたずねたのも、わずか数回にすぎない。

（これから書道の教えを……）

と、考えていた矢先に、雪山は江戸を去った。

けれども、雪山のかわりに細井広沢という年上の友を得たことによって、たちまち安兵衛の環境が変ることになったのである。

北島雪山を見送ったその日に、

「私は、これから堀内道場へまいりますが、安兵衛殿も同道されてはいかが？」

広沢のさそいに、安兵衛は興奮をした。

数多い江戸の剣客のうちでも〔随一〕と評判をとっている堀内源左衛門の道場を見学したい希望は、かねてから熾烈なものがあり、これといった試合の経験もなく、上州の片田舎にある樋口

道場で、ひっそりと剣をまなんでいただけに、

（出来得れば、一手の教えをうけたいものだな）

これが安兵衛の夢であった。

去年、大石内蔵助への返済の金をもって浅野藩邸を訪問したとき、応対してくれた奥田孫太夫という中年の武士も、たしか堀内の門人であるときいた。

（思いきって、奥田殿をおたずねし、道場へ同道していただこうか）

などと思ったりしたものである。

菅野六郎左衛門と伊佐子に別れた二人は、高輪からまっすぐに小石川の堀内道場へ向った。

小石川の水戸屋敷の北から西へかけて、江戸川が流れている。

この川は神田上水の枝流であって、北から西へ、いくつもの橋がかけられているが、江戸川が江戸城の濠へ合流しようとするあたりに舟河原橋があり、その一つ手前の橋を立慶橋とよぶ。

むかし、このあたりに大橋立慶という武士が住んでいたから、この名があるそうな。

堀内道場は、立慶橋の東詰、松平讃岐守下屋敷と通りをへだてた南側にあった。

このあたりは幕臣の邸宅が多く、堀内道場も、以前には斎藤長十郎という旗本の屋敷だったという。

屋敷がまえは、およそ二百石ほどのもので、片番所つきの長屋門があり、敷地も約六百坪。その中にひろい道場が建てられ、主の堀内源左衛門の住居が、これに接している。

広沢と安兵衛が、立慶橋を東へわたりかけたとき、向うからまた武士が立ちどまり、にこにこ

とこちらへ笑いかけてきた。

その武士は、奥田孫太夫であった。

朝からの稽古を終え、道場から帰るところらしい。

「奇遇でござるな」

孫太夫は、安兵衛に、

「あの折のこと、たしかに国もとの大石内蔵助へ――」

と、うなずいて見せた。

「かたじけのうございました」

「大石よりも返書がまいり、貴公へよろしゅうにと申されてでござった」

「大石様が、私に……まだ、おぼえていて下されましたのか」

何も知らぬ細井広沢は、さり気なく川面を見やっていた。

孫太夫は、安兵衛との会話を終えると、広沢に向い、親しげに挨拶をかわしてから去った。

奥田孫太夫、細井広沢、それに旗本の菱沼式兵衛、塩入主膳の四名を堀内道場の〔四天王〕とよぶ。

いずれも剣術のみか、人格、識見にすぐれた武士たちばかりであった。

道場では稽古もひとしきり済んだところで、堀内源左衛門は住居の居間で茶をのんでいた。

広沢と安兵衛は、すぐに居間へ通された。

「これなるは、私の親しき友にて……」

と、広沢が安兵衛をひき合せるや、

「堀内でござる」

丁重に名のってよこした。

門人三百人を擁した大道場の主とは見えぬ素朴、謙譲な態度が自然のままに流露している。

洗いざらしたように粗末な衣服に包まれた体軀も、これが高名な剣客のものとは思われぬほど尋常に見えた。

この日——。

細井広沢は剣をとらず、師への挨拶がすむと、安兵衛を道場へさそい、門人たちの稽古を見せてくれた。

稽古そのものは、とりたててどういうこともないようであったが、

（さすがに……）

と思えたのは、門人たちの礼儀の正しさである。

窪田道場のそれのように、稽古を見ながら私語をかわすこともなく、厳粛な空気が道場に張りつめており、木刀の打ち合う音や気合いの声がひびいているにかかわらず、一種ふしぎなしずけさを安兵衛は感じた。

堀内源左衛門も見所へ出て稽古を見ているのだが、これも眠りこんだように、じっとうごかぬ。

一刻ほど道場にいてから、細井広沢が、

「今日は、これほどのところでよろしかろう」

と安兵衛をうながした。

広沢のいうまま、安兵衛が遠くから堀内へ目礼を送ると、まるで両眼をとじていたように見えた堀内源左衛門が、打てばひびくように返礼をしてよこした。

「中山殿。いささか空腹に……」

「細井先生、腹がすきまして……」

二人は、外へ出るや同時にいい、顔を見合せて笑い出した。

細井広沢が、

「堀内先生門下となるつもりがあれば、私がおたのみしてもよい」

と、安兵衛へもらしたのは、この年の夏である。

願ってもないことであった。

飛びたつような思いがして、安兵衛は双眸をかがやかせたが、

「なれど……」

ためらった。

というのは、上州・馬庭の樋口十郎兵衛のことだ。

安兵衛は、樋口の〔念流〕によって正規の剣術をはじめてまなんだ。

師としての樋口十郎兵衛は、老年ながら人格、技量ともにすぐれた剣客だし、いささかも不足におもうことはない。

はじめのころは少年の安兵衛の木刀の〔太刀先〕へ米俵をつるさせ、体力と気力が、この太刀

先へ結集して米一俵の重さを、

「軽し、と思わるるまでになれ」

と、命ぜられ、一年も二年も、この一事を飽くことなくやらされたのである。

なまなかな技術を排した〔ちからの剣法〕である。

それが自分には、ぴたりとはまりきったような気がしている安兵衛であったが、

（堀内先生の教えもうけたい）

という欲求も強烈だ。

（だが、流儀もちがう堀内道場へ入っては……樋口先生に対して相すまぬことになるのではないか）

その一事が安兵衛にためらいをよぶ。

すると広沢は、敏感にこれを察したらしく、寛濶な微笑をうかべて、

「まことの剣法に二流はなしと思われよ」

と、いってよこした。

「は……」

「私は、まだ樋口十郎兵衛先生へお目にかかったことがないが、樋口先生は、安兵衛殿が堀内門下になることをむしろ、よろこんで下さると思う」

「それはまことのことでしょうか、細井先生」

「また私を先生とよぶ。何度も申したように、私と貴公は友だち同志ではないか。細井なり広

沢なりとよんでもらいたい」

「なれど……」

「なれども何もない。私だとて貴公からまなびとるつもりゆえ、先生よばわりされると、こちらの身のおきどころもなくなる」

きびしく広沢に念を入れられ、このときから安兵衛は「細井殿、広沢どの」と、よぶようになる。

それはさておき、細井広沢の言は正しかった。

安兵衛が上州・馬庭へおもむき、堀内道場入門のことを語るや、樋口十郎兵衛は莞爾として、

「それはよかった。そのように立派な道場の門人となることは、ただ剣のみの修行をおこなうのではなく、多勢の友、有益なる年長者の教えをうけることになるのじゃし、おぬしの将来にとって何よりのことである。細井広沢殿に、よろしゅうな」

と、いってくれたのである。

樋口道場から、安兵衛は越後へまわった。

新発田城外・佐々木村に住む伯父の溝口三郎兵衛を訪ねたのである。

安兵衛は、この伯父に十年も会っていない。

天和三年の夏、十四歳のときに新発田を出奔して以来のことであった。伯父に会えなかったということは、新発田へ足を踏み入れることが不可能だったからで、それも、すべてが解決された現在、安兵衛は大手をふって帰郷できるわけだ。

さすがに胸がおどった。

溝口三郎兵衛は、上田宗貫と名のり、佐々木村の小さな家に住んでいた。

このあたりの風物は、魚釣りが好きだった安兵衛にとってなじみがふかい。

伯父の家は、すぐにわかった。

「おう、おう……」

出迎えた溝口三郎兵衛は、うなるような声をあげ、目をみはったまま、しばらくは言葉も出なかった。

十四歳の甥が十年の歳月を一度に飛びこえて、二十三歳のたくましい若者に成長している感じなのである。

「これが安兵衛か、これが……」

成長の過程を見ていない伯父だけに、伯母をかえり見て、

「夢のような……」

つぶやいたまま、茫然と安兵衛を見つめている。

溝口三郎兵衛の髪は、すっかり白くなってしまったが、そのかわり、ひょろりとした長身の体軀にはたっぷりと肉がついて、

「伯父上、おふとりになられましたな」

安兵衛は安兵衛で、この十年を、あらためてふり返って見るようなおもいである。

新発田藩と安兵衛との間は、うまく了解がついたことは、伯父も安兵衛の手紙によって知っており、

「何よりのことであった。それにしても菅野六郎左衛門様はじめ、皆々方の御芳志を忘れまいぞ」

伯父は仏間に安兵衛をともない、故溝口四郎兵衛夫妻の位牌の前で手を合せつつ、

「安兵衛。おじいさま、おばあさまにお知らせを……」

と、いった。

伯父の長子で従兄の九左衛門は、数年前に召し出され、新発田藩士として城下に住んでいるが、報告をうけて、すぐに駆けつけてきた。

「おぬし、鍛冶屋の虎松のことを知ってか？」

と、九左衛門がいう。

安兵衛も、少年のころの、この親友を忘れるものではない。

「虎松が、どういたしたので？」

「この春に、死んでしもうたぞ」

嫁をもらったばかりだったという。

その日まで元気だった虎松は、深夜、激烈な腹痛におそわれ、もがきぬいて急死をした。

医者にも原因がわからず、強いていえば、夕飯のときに自分が釣りあげてきた鮎を腹いっぱい食べた、いや食べすぎたことがいけなかったのだろう、という程度だ。

医学の進歩が渋滞していた当時にあって、原因不明の人の死は、さしておどろくべきことではなかったが、

（あの虎松が……）

安兵衛も今度の帰郷については、彼をさそい出して、一日の魚釣りをたのしむつもりでいただけに、

「明日、虎松の家へ行き冥福を……」

と、それだけいうのがやっとのことであった。

翌日、安兵衛が新発田城下へゆき、旧知の人びとや、鍛冶屋・市蔵の家をおとずれたことを記すにもおよぶまい。

この夜、城下から戻り、安兵衛は溝口三郎兵衛に、お秀のことをいい出した。

三郎兵衛は、むかし自分の屋敷に奉公していたお秀と甥との間にどんなことがあったか、牛崎の長井弥五左衛門から伝聞している。

だから、お秀に好意をもってはいない。

「私ゆえにと申すのではありませぬが……かかわり合いが無いとは申せませぬ……」

すべてを語り終えて安兵衛が、

「いまのところは、その伊勢や庄次郎方にかくまわれておりますが、このままではすむまいと存じます」

「ふむ。その鳥羽又十郎という盗賊。それほどに恐ろしいやつなのか」

「私だとて、油断はなりませぬ」

「お秀も、困った女じゃ」

「ともかく、他人の家に迷惑をかけることが心苦しいので……」
「なるほど」
「お秀の所在をつきとめたなら、あの又十郎、伊勢や方へも、どんな迷惑をかけるか知れたものではありませぬ」
「よし」
すでに、伯父は察知してくれた。
「いま、お秀には身よりのものもあるまい。わしが引き取ってもよい」
「そうして下さいますか」
「ここへおいて、わしがきびしく仕つけてくれよう」
「は……なれどお秀も、いまはまじめ一方に伊勢やではたらいているそうでございますが……」
「まだ会わぬのか？」
「あの女の身のふり方がきまるまでは、と思いまして」
伯父夫婦と九左衛門夫婦が顔を見合せて、ふくみ笑いをもらした。
その笑いが、どのような性質のものか、安兵衛も直感できる。
恥じて、安兵衛はうつ向いた。
「ふ、ふふ……お秀もお秀じゃが、……あの父上の葬式の最中に、まだまだ子供と思うていたおぬしが、お秀となあ……」

たまりかねたように、溝口三郎兵衛が笑い出すのへ、
「伯父上。そのことはもう……」
「つらいか？」
「つろうございます」
あとは、みんなに、いいようにあしらわれてしまい、安兵衛も冷汗のかき通しである。
滞在五日……。
江戸へ戻る安兵衛を伯父ひとりが送ってくれたが、そのとき、伯父が、妙なことをいい出したものだ。
新発田川に沿った小道を歩みながら、溝口三郎兵衛は、
「安兵衛。おなよのことは、まだ忘れておるまいな」
と、いった。
「は……」
忘れていない。亡父、中山弥次右衛門の寝所から出てきた下女のおなよを見て、少年の安兵衛は彼女の顔をなぐりつけたことがある。
だが、この十年の間に、おなよのことを思いうかべたことがあったろうか……。
ほとんど無かったといってよい。
（伯父上、なぜ、あの女のことを……？）
あまりに突然なので、とまどった安兵衛が、立ちどまって言葉もないのへ、

「おなよには、子がひとりいる」
伯父が何か押しころしたような声になり、ゆっくりといった。
伯父の細い目が光をおびている。
（おなよに子がある……ということは、あの女が嫁にいったということなのだろうか）
安兵衛の屋敷へ下女奉公にきたおなよは、たしか後家だった筈である。
中山弥次右衛門は彼女に手をつけてから一年もたたぬうちに死んだ。
冷たい雨がけむっていたあの日、老僕・伊助につきそわれて新発田城下を去っていったおなよを、安兵衛は舌うちを鳴らして見送ったものだ。
（あれから、おなよは村へ帰り、村のだれかと夫婦になり、子を生んだ……それを伯父上は、なぜ、あらためて、おれに告げるのか？）
伯父の顔は、一種の緊張にひきしまって見えた。
「それでな……」
何かいいかけ、ややためらったのちに溝口三郎兵衛が、
「その、おなよの子の名を弥太郎という」
「や、たろう……」
「うむ」
大きくうなずき、
「その名をおぼえておけい」

「はあ……？」
「おぼえておいてやってくれ、と、申しておる」
「は……」
わからなかった。
けれども、いい終って背を向けた伯父を、一瞬、見守った後に、
（あ……）
電光のように、ひらめいたものがある。
安兵衛は駆けて三郎兵衛の前へまわった。
「伯父上。その子は、亡き父の忘れがたみ、だ、と申されますか」
「と申したら、何とする」
「やはり……」
奇妙な感動が安兵衛の全身へ、しずかにひろがっていった。
「にくむか、その子を……」
「……」
「にくむか、おなよを……」
「いえ……」
目をみはり、安兵衛がいった。
「何やら、うれしゅう存じます」

「そ、そうか」
「私にも弟がおるかと思えば……」
「ふむ。おぬしが、お秀によって男女の愛憎のふかさを知ったのも、無駄ではなかったようじゃな」
新発田を発した安兵衛は、牛崎村の庄屋・長井弥五左衛門宅へ一泊した。
義兄の弥五左衛門も姉のきんも、好転した安兵衛の環境をよろこび、たくましい成長ぶりに瞠目した。
安兵衛は、伯父からきいたおなよの子のことを、義兄にも姉にも語らなかった。
「だれにもいうな」
と、溝口三郎兵衛が念を入れたからである。
伯父は、このことを伯母にも従兄の九左衛門にも洩らしていない。
十年前、中山弥次右衛門の死後、おなよは伊助にともなわれて二王寺山麓の故郷へ帰った。
このとき、安兵衛の祖父・溝口四郎兵衛が伊助を通じ、おなよへ渡した金は十両ほどであった。
「子が生まれたる後は、いかようにも相談しよう」
と、四郎兵衛は伊助へいったのだが、間もなく急死をしてしまった。
そして、この年の秋に、おなよは男子を生んだ。
弥太郎という名も、安兵衛の亡父をしのび、おなよがつけたものであろう。
三国峠の谷間にある法師の湯で、少年の安兵衛に出会った伊助が、これを牛崎村の長井家へ送

りとどけてから故郷・小千谷へ戻って間もなく、弥太郎出生の知らせが伊助へとどいた。

駆けつけた伊助に、おなよがいった。

「この子は、私ひとりの子。それでよいのですから……でも伊助さんにだけは……」

「よう知らせてくれた。だがのう、おなよさん。この子はまぎれもなく、中山弥次右衛門という、れっきとした武家のお子なのだ。腹ちがいながら、安兵衛さまの弟ごさまだぞよ」

「だからというて、それは、ただもう安兵衛さまにとって、ごめいわくになるばかりです」

「だが、おなよさん……」

「安兵衛さまに顔をぶたれたときの、私の気持ちは、伊助さんにはわかってもらえますまい」

「そりゃ、だが……身分ちがいというものじゃないか」

「ですから……いいえ、だから私、この子のことを新発田へは知らせぬつもりなのです」

おなよの意志は強固であったが、伊助としては捨てておけなかった。

溝口四郎兵衛は死んでも、溝口家が、おなよ母子について何らかのかたちで救いの手をのべてやるべきだと思ったのだ。

おなよは、すぐ上の兄の家へ厄介になっていた。

ここへくるとき、もらってきた十両の金も多勢の兄や姉たちが引きちぎるようにして分け合ってしまい、彼らは口をそろえて、溝口家から弥太郎の養育費をとれといい出し、

「なんなら、おれが新発田へいき、かけ合ってくる」

長兄や次兄が、すぐにも出かけようとする。

おなよは、生まれたばかりの弥太郎を抱いて、突然、家出をした。

おなよの家出は、伊助が小千谷へ去って三日後のことだったという。

家出をしたところで、おなよがたよるところは伊助ひとりだ。

「だから、わしがいうたではないか。このことは溝口様へお知らせしなくてはならない。金をもらうもらわぬということだけでなく、この子が父なし子でいてよいわけはないのだよ」

おなよを、小千谷の弟の家へ残し、伊助は新発田へ向った。

そして、溝口三郎兵衛のみに、このことを告げたのである。

三郎兵衛は少しもおどろかなかった。

「ながらく独身の弥次右衛門が、おなよに手をつけたとてふしぎはない。手をつければ子も生まれよう。よしよし、弥太郎がことは、わしが面倒を見てつかわそう」

「こちらへ、お引取り下されますので？」

「そのほうがよかろうではないか。おなよとて、まだ女ざかり。女としての行末をあきらめるにも及ぶまい」

「なれど……」

と、伊助は、おなよの決意が変らぬことをいい、どこまでも彼女が弥太郎へ一生をかけるつもりでいる、と、のべるや、

「それもよし」

溝口三郎兵衛は二十五両をわたし、

「すべて、お前にまかせよう」

といった。

だから三郎兵衛は、このことを妻にも語らなかった。

おなよが、小千谷の町で善七というものの後妻になったのは、翌天和四年夏のことであった。善七には先妻が生んだ一男一女がある。

だから、おなよも相応に苦労をしたろうが、その後、ぶじに暮らしているらしい。

甥の安兵衛を見送ったとき、溝口三郎兵衛は、こういった。

「弥太郎も、いまは傘屋善七の子で十歳になる。おぬしとは兄弟として名のり合うこともならぬ弟だが……わしはいま、ふっと、このことをおぬしにうちあけたくなってしもうたのだ。なぜか、わかるかな。左様、それはな、つまり……何と申したらよいか。人の子として兄弟があるのとないのとでは、だいぶんに生きる道が変ってくるように思う。たとえ名のり合わずとも、おぬしには弥太郎という弟が生きてあるということを忘れるな。このことを、おぬしは、うれしいと申してくれた。それでよい、それでよかった。わしも、うちあけてよかったと思う」

牛崎を出たとき、安兵衛は小千谷へいこうとした。伊助も、いまは六十をこえている筈だが元気らしい。

（伊助にも会いたいし……その弥太郎という弟の顔も、そっと見ておきたいな）

けれども、何となく不安のような、こわいような気がした。得体の知れぬ興奮を持てあまし、

（越後へは、まだ何度もくるのだし、いま少し、おれの気が落ちついてからでもよい）

途中で気を変え、まっすぐに江戸へ戻ったが、江戸ではまた〔事変〕が一つ、安兵衛を待ちかまえていたのである。

安兵衛は先ず戸塚の林光寺へ旅装を解いたのだが、

「昨日な、菅野様から使いがあっての」

道山和尚が待ちかねたように、

「帰ったら、すぐ駆けつけてまいれとのことじゃ」

「何事でしょう？」

「知らんな」

「叔父上の身に何か……」

「そうではない。何やら伊勢やとかいう商家にあずけておいた安兵衛殿の知合いが……」

「お秀の……？」

「ほほう、女ごかや」

「お秀が、どうかいたしましたか？」

「よくは知らぬが、行方知れずになったとか……」

あたりは暗くなっていたが、すぐに安兵衛は松平屋敷へ駆けつけていった。

お秀を新発田の伯父へ托す見こみがつき、今度は安兵衛も伊勢や方へゆき、彼女に会うつもりでいたのである。

「おう、戻ったか」

菅野六郎左衛門は長屋にて、
「安兵衛。一昨日の夜じゃそうな」
「やはり鳥羽又十郎の仕わざで……？」
「そうらしいな」
お秀は、伊勢やで暮らすようになってから健康も取り戻したというし、顔色もあかるくなり、とても自分から出ていくわけはない。
菅野は伊佐子からの報告によってこのことを知ったわけだが、
「まぎれもないお秀の片腕……女の右腕が斬り落とされて残っていたそうな」
「お秀が腕を……」
「だから、やはり又十郎とやらの仕わざであろう」
伊勢やへきてから数か月を経ていた。その間、お秀の身には何の危急もおこらず、お秀も伊勢や庄次郎も気がゆるんでいたのであろうか。
伊勢やの親類にあたる平松や文蔵という薬種問屋が近くの上野広小路にあり、急用の使いを、
「私がまいりましょう」
と、お秀がいい、伊勢や庄次郎の手紙を持って家を出たのが五ツ（午後八時）ごろだったらしい。
「お秀を使いに出したとたん、もしや間違いでもあってはと気がつき、呼び返させようと思いまして……」

翌日、伊佐子と共におとずれた安兵衛に伊勢や庄次郎がいった。

「そう思って、私が腰をうかせたとたんでございました」

裏口の路地で、お秀のすさまじい絶叫があがった。

庄次郎が駆けつける前に、台所や土蔵にいた女中たちや店の者が路地へ飛び出していくと、家家からもれている灯影でうすあかるい路地の向うを、黒い突風のように数人の男たちが一団となって駆けぬけていくのが見えた。

「きゃァ……」

女中たちが悲鳴をあげた。

路地の石畳に、お秀が着ていた着物の袖ぐるみ、その片腕が血しぶきと共に投げ出されていた。大さわぎになり、警吏も出張ってきたが、ついに、お秀の行方は知れない。

伊勢や庄次郎は、すばやく伊佐子をよびよせ、お秀と安兵衛との関係については申したてぬことにした。

それ以外のことは、伊佐子が警吏にのべた。

つまり、お秀は越後生まれの女で、悪漢に襲われたところを伊佐子がたすけ、よくは素性も知らないことながら、気の毒に思い、伊勢やへ奉公させただけのことで、そのほかのことは何も知らぬといったのだ。

伊勢やの奉公人たちは、くわしいことはわからなかったし、女房のお徳は庄次郎から固く口どめをされている。

「ま、そういうわけで、中山様にごめいわくがかかるようなことは先ずございますまい」と、伊勢やはいった。

伊勢やを辞してから、

「私がところへお寄りなされぬか」

伊佐子のいうままに、安兵衛は、はじめて彼女の家へいった。

(せっかく、お秀の身の落ちつくところをきめてきたのに……)

あと二日早く江戸へもどっていれば、こんなことにはならなかったろう。

お秀には、ずいぶんひどい目にあっている安兵衛だが、いまになってみると、

(あわれな女だ……)

手のうち方のおくれたことが残念でならなかった。

「なれど……なぜに片腕を斬り落としたのであろう」

伊佐子が、茶をすすめながらつぶやくのへ、安兵衛は思わず、

「そちゃ、私の身がわりになったようなものだ」

「え……?」

「いや、なに……」

「なぜ、あの女が安兵衛どのの身がわりにならねばならぬのです」

「ま……もう、よいではないか」

「よくはない。伊佐子、きいておきたい」

「これは、あなたの知らぬことだ」
「知ってはいけませぬか」
「いかぬ、というわけでは……」
「知りたい。私は安兵衛どののことを何から何まで知りたい」
顔を紅潮させ、伊佐子はにじり寄ってきて、
「もし、お秀との間に、何かあったのでは……？」
「何か、とは？」
「安兵衛どのは、以前、お秀を好いていたのであろう」
といった伊佐子の両眼がつりあがっている。
老僕の甚蔵も、こんな伊佐子を見るのは、はじめてのことだし、次の間でおろおろしていた。
「のう、安兵衛どの。いうて下され、あの女のことを……お願いじゃ。な、な……」
嫉妬と羞恥と興奮とが一度に伊佐子の激情をさそい、
「安兵衛どの……」
いきなり伊佐子が、しがみついてきたものである。
「伊佐子どの……」
安兵衛もわれ知らず、彼女の肩を抱きしめていた。
まだ夕暮れには間もある。
次の間には甚蔵もいた。

「またれい」

安兵衛も、すぐに伊佐子を突きのけたが、

「いや、いや……」

と、伊佐子は身をくねらせ腕をさしのべてせまる。

「よし。伊佐子どのには何も彼も語ろう」

「え……」

「父母のことも、私の生いたちについても」

「うれしい」

また、しがみついてくる。

甚蔵が気をきかせ、夕飯の菜をととのえるといい、出てゆきかけるのへ、

「爺や。馳走をたのむ」

伊佐子が命じた。

安兵衛は、すべてを語った。

細井広沢にも、まだ語りつくしていないことまで、伊佐子に話した。

話すまい、このことだけは……と思いつつ、自然に口がうごいてしまうのである。

懸命に、目ばたきもせず聞き入っている伊佐子の眸へ吸いよせられたかのように、安兵衛は夢中で語り終えてから、

「つまらぬことをいうてしまった……」

赤くなった。
「うれしい……」
ためいきのように伊佐子が、
「これで安兵衛さまのことを、みんな、私は知ることができたのだもの」
「笑うてくれてもよい」
「いいえ、笑わぬ」
二人、熱っぽい目と目を見合せて手を取り合ったとき、甚蔵が帰ってきた。
冷し豆腐に青紫蘇をそえたものと、茄子の煮つけ、瓜の塩もみなどが並んで、膳が出た。
夕風は冷たかった。
「夏も、もう、おしまいでございますなあ」
甚蔵が酒瓶をはこびながらいうのへ、
「爺や、こちらへおよこし」
伊佐子が受けとり、冷酒を安兵衛の盃へみたした。その仕ぐさが、いかにも女らしい。
「安兵衛どの」
「うむ？」
「お秀は死んではおりますまい」
「私も、そう思う」
「殺すつもりなら、あのときに斬っていよう」

「いかにも――」

翌日から、安兵衛は道場へ通いはじめた。

さすがに門人たちの手腕は、樋口道場のそれにくらべて問題にならぬ。江戸随一をほこる道場だけに人材も多いのだ。

安兵衛は、奥田孫太夫などに手もなくあしらわれてしまった。

道場通いのあけくれに秋も去り、元禄五年も暮れようとしていた。

風雪にかかわらず、安兵衛は朝七ツ半（午前五時）には戸塚村の林光寺を出て、道場へ向った。

この間、堀内源左衛門は一度も口をきかず、また手をとって教えようともしなかったが、十二月十八日の朝、例によって道場へ入った安兵衛に、

「先生がおよびでござる」

門人の浅井喜平という若者が告げた。

道場から玄関口へ出て、左の廊下をたどると中庭に面した堀内の住居がある。

堀内源左衛門は妻女のさきえが点ずるうす茶を喫しているところで、安兵衛が廊下へひざをつくや、

「ま、お入り」

例によって、おだやかな声だ。

「ごめん下されましょう」

入って、先ず安兵衛の目がとらえたものは、堀内の傍においてある大きな笊であった。

笊の中には椎の実が、いっぱいに入っている。
（先生は、この椎の実を何となさるのであろうか？）
妻女が、くすりと笑い、次の間へ去った。
堀内夫妻には子がない。
「安兵衛よ。庭へ立て」
「は……」
「あ、待て。腰の物を持ってまいれ」
どうも、わからなかった。
大小の刀は玄関傍の門人控所へあずけてあるのだが、ともかく、急いで刀を帯し、今度は履物をはき、玄関から出て中庭へまわった。
何のかざりもない庭だが、外塀のあたりから玄関口への垣に沿い、見事な椎の大木が四本あった。笊の中の実は、おそらく、ここから落ちたものであろう。
「先生。刀をとってまいりました」
進んで安兵衛が居間へ声をかけた瞬間、四間ほどはなれたところにいる堀内源左衛門の右手が上がった。
「あ……」
びしりと、顔を打たれた。
堀内が椎の実を投げたのである。

「せ、先生……」

からかわれたのかと思った。

だが、そうでもないらしい。

居間に坐ったまま、安兵衛を見ている堀内の顔は、しごく、まじめなものなのである。

「そこでよい。ぬけい」

「は……」

「刀をぬくのじゃ」

「は、はい」

かすかな胸さわぎがあった。

何をせよ、というのか……。

安兵衛が抜刀すると、堀内が書見台を左手に引きよせつつ、

「かまえよ」

と、いうのだ。

仕方なく正眼に大刀をかまえた一瞬……。

びしり——。

また、ひたいのあたりを椎の実が打った。

さすがに、安兵衛も気がたかぶった。

実のところ、この道場へくるまでは、彼は彼なりに、おのれの剣術への自信もあったのである。

それが、まったく通じない。

三百余を数える門人のうち、安兵衛が勝てるのは、その半数にすぎない。

細井広沢は、このところ主君・柳沢吉保の御用がいそがしいとかで道場にはめったにあらわれず、安兵衛も手合せをしたことはないが、奥田孫太夫をはじめ菱沼、塩入なぞ〔四天王〕とよばれる人びとには子供のようにあしらわれてしまうし、

（おれの剣術は、こんなものだったのか……）

すっかり自信を失ってしまい、するとまた、

「稽古をつむにしたがい、切先がのびなくなるというのは、どうしたことだ」

先輩たちに笑われ、いよいよ剣の力が萎えてしまう。だからこのところ、安兵衛の顔色は冴えない。

そこへ、今度は師の堀内が椎の実で安兵衛をあしらうというのだ。

「先生！」

抜刀したまま、安兵衛は叫んだ。椎の実なぞではなく、木刀をもって教えていただきたいと叫ぶつもりだったが、堀内は切り返すように、

「切れ！」

するどく、いった。

「は……？」

「わしが投げる椎の実を切れ」

馬鹿にしているのでもないらしい。
書見台の上の書物を左手でひらきつつ、堀内の右手が、またあがった。
びしり、びしり……。
つづけて二個の椎の実が躰のどこかへ当った。
（くそ！）
もう自棄気味である。
安兵衛の両眼が瞼を割って飛び出しそうになり、刀のかまえも尋常ではなくなってくる。
また、堀内の手があがる。
飛んできた椎の実の速度には、とても追いつかず、また打たれた。
はらりと、堀内は書物の頁をめくる。読書をはじめたのだ。
読書をしながら椎の実を飛ばす。
また飛んできた。
とても、小さな椎の実を大刀で両断できるものではない。
だからといって、みすみす打たれるのもくやしく、思わず安兵衛は体をひらいて椎の実のつぶてをかわした。
「かわしてはならぬ」
師の声が叩きつけるように飛んできた。
「かわすな、切れ」

「は……」

びゆっ……と、するどく空間をきって、また飛んでくる。

「えい」

夢中で刀をふるったが、とても切れるものではないのだ。

今度は、ゆるやかに弧をえがいて飛んでくる。鳩に豆でも投げるような感じであったが、安兵衛の刀は、むなしく空間に泳ぐばかりであった。

笊の中の椎の実は、いったい何個あったろうか。

これを数えるだけでも半日はつぶれてしまうだろう。投げつくした堀内も堀内だが、歯を食いしばって刀をふるいつづけた安兵衛の根気と体力も、すばらしいものであった。

けれども一個の椎の実も両断することは、ついにできなかった。

読書をつづけているが、堀内は昼飯もとらず、一杯の茶ものまぬままに椎の実を投げつづけたのである。

「これまで」

と、堀内源左衛門が空になった笊から右手をひいたとき、すでに薄暮であった。

途中、二度ほど水をのませてもらっただけの安兵衛だが、終ると、さすがにひざをついてしまい、鞴のような荒々しい息づかいになっていた。

いつの間にか、門人たちもすべて帰ったらしく、道場のあたりも静まり返っている。

これで終りか、と思ったが、そうではない。

「ひろっておけい」
と、おっしゃる。
庭いちめんに散乱した椎の実をひろえというのだ。
安兵衛、涙が出てきた。
堀内は、妻女をよび、行灯に火を入れさせた。
しかも去らない。夕飯もとらず、庭をはいまわっている安兵衛を正座して見つめていた。
あたりが暗くなると、庭へ古風に篝火を焚かせ、安兵衛の手もとを照らしてくれた。
何とかひろい終えたのが六ツ半（午後七時）ごろであったろうか。
椎の実をひろい入れた笊を縁側へおき、両手をついたときの安兵衛の顔は、くやし涙と脂汗にぬれつくしていた。
「よし」
いささかも変らぬ堀内の声が、
「今日は、これまで」
と、いってよこした。
くやしいのは堀内に対してではない、自分に対してのものだ。
椎の実は切れぬとしても、
（これほどのことに、このような、ひどい疲れ方をするとは……いったい、何のために今までの修行があったのだ）

旧師・樋口十郎兵衛に対しても申しわけないと思う。旧師に恥をかかせたようなものだ。

（こんなことでは武士として、いざというときの役には立たぬ）

その口惜しさであった。

今日、安兵衛がしたことは常人の出来得べきことではなく、師の堀内にしても、こんなことを門人にやらせたのは、はじめてのことである。

けれども、堀内源左衛門は一言もそのことにふれず、蹌踉として帰っていく安兵衛を見送ってから、酒の仕度をして入ってきた妻女にいった。

「中山安兵衛。ありゃ大へんなやつじゃな」

堀内の顔に、このときはじめて微笑がうかんだ。

江戸川沿いの道を西へ、関口水道町のあたりまでくると、まるでもう田舎であった。

目白不動の森が見えるあたりから、畑と雑木林がつらなる台地をのぼり早稲田へ出れば、戸塚村は近い。

提灯をさげた安兵衛は穴八幡の社が見える道まできた。ここから右へ下れば林光寺なのだが、この夜はふらふらと歩みつづけ、

（あ……）

気がつくと、高田の馬場へ入りこんでいた。

この馬場は東西六町、南北は三十余間という細長いもので戸塚村の台地の上にあり、寛永十三年に徳川三代将軍・家光が馬場をきずき、弓馬調練のところとした。

「あの馬場があったあたりでな、むかし源頼朝公が軍の勢ぞろいをしたともつたえられているし、かの武田信玄が小田原へ攻め入らんとした折、あそこで馬をこころみられたともいう」

と、これは林光寺の和尚が安兵衛へ語ってくれた。

馬場は「追まわし」と称し、中央の堤を境にして二筋にわかれており、北側の馬場に沿って、美しい松並木がある。

穴八幡や雑司ケ谷の鬼子母神の祭礼には、流鏑馬の式もおこなわれるし、数々の行事があって見物が群集する。いわば江戸郊外の一名所でもあった。

ふだんでも幕臣の馬場としてつかわれていて、あたりの風景もよく、茶店も二、三あった。

林光寺へ来てからの安兵衛は、よくこの馬場へきたものだ。

台地だけに見はらしもよく、ひろびろと展開した田地の彼方に富士ものぞまれる。

早朝、ここへきて振棒を存分にふるっているのを、これも心がけのよい侍が馬を駆けさせつつ、

「精が出ることじゃな」

声をかけられたこともあった。

馬場の西入り口と雑司ケ谷方面からのぼってくる道が出合うあたりに甲州やという茶店がある。

いつの間にか安兵衛は、この茶店の前まできており、気がつくと、すでに雨戸をしめきった戸口の前の石畳の上にすわりこんでいたのだ。

安兵衛は疲労しつくしていた。

(おれは果して、あの椎の実を切ることができるだろうか……?)

そのことだけが脳裡を埋めている。

飛んでくる椎の実を目でとらえることは可能なのだが、一点の椎の実は、あまりにも小さすぎる。

むろん、置いてある椎の実ならわけもなく切断できようが、空間を走る小さな一点を切ることは至難だ。

対象が小さすぎ、刀身へこめる力をどのように統御したらよいのか、まったくわからない。

林光寺へ帰って語ると、

「ふうむ、なるほど……」

道山和尚は手をうち、

「それで安兵衛は堀内どのの心がわかったのか？」

と、きいた。

「先生の心というて、それは、いうまでもないこと」

「何がいうまでもないことなのだ」

「私めを教えさとして下されておるのです」

「そんなこと、きまっているではないか」

「はあ……？」

「しっかりせい。教えるというて、何を教えて下さろうとしておるのか、それがわかるかときいておる」

「いうまでもないこと、剣の道でござる」
「ばか」
「は……まだ、こたえにはなりませぬか」
「ならぬな」
「疲れております。これにて……」
安兵衛にしては、めずらしく弱音をはいたものである。
朝食をすましてから一粒のめしも腹に入れていない。すでに夜ふけだ。
「このこたえができるまで、そこで考えておれ」
和尚も今夜は強硬であった。
「このこたえを得ずして椎の実を相手にしても駄目じゃ。それでは堀内どのの志を無にするというものじゃ」
まるで剣術の師にでもなったつもりらしい。
「和尚……」
「何じゃな」
「腹がへって……」
「何をぬかす。一日や二日、食わなんだとて死ぬるわけでもあるまい」
安兵衛を自分の居間へ残し、ちょうど夜食の膳をはこんで廊下まできた小坊主を、
「そんなものは、いらん、いらん」

追い帰してしまい、自分もさっさと、どこかへいってしまった。
部屋には和尚の躰から発散していた酒の香がこもっている。
（くそ！）
酒瓶があったので取って見ると、もう空になっていた。
安兵衛は腕をくみ、あぐらをかいたまま両眼をとじた。
もう何を考える気力もなかった。
そのまま音をたてて倒れ、眠りの中へ落ちていった。
するどい寒風に目ざめると、朝の光が、うすくただよっていた。
ふしぎに爽快であった。
ほとんど疲れを残していないのは、安兵衛の若い強靭な体力が抜群のものだったからであろう。
廊下へ出て、雨戸をくった。
このとき、安兵衛は無心であった。
昨日のことを忘れてしまっており、朝の目ざめのままに、むしろぼんやりと立って雨戸をあけたのである。
そして、今日も晴れわたった冬の朝空が目に入った一瞬、
「わかった！」
ほとばしるように、安兵衛が叫んだ。
「和尚さまはどこだ？」

本堂を掃除している小坊主をつかまえてきいたとき、
「どうしたな？」
道山和尚がふらりとあらわれた。
「わかりました、わかりました」
「いうて見なされ」
「私の目が、よく見えるようにと……」
「ふむ。それでよい」
むかし、塚原卜伝は、二年もの間、岩を落ちる滝を見つめて眼力を養ったという。
落ちる滝の水が一粒一粒の生きものとなっておのれの目に映ずるまで、滝の前をうごかなかった、などという故事をいい出す剣客もいるし、安兵衛もどこかで一度か二度は耳に入れたこともある。
堀内源左衛門が、この卜伝の故事にならったものかどうか、それは知らぬが、
「おのれに襲いかかる相手の刃、相手の躰のうごきは、烈風のそれよりも早く、こちらの目がとらえねばならぬ。それでのうては強敵に勝てまい」
と、道山和尚は、
「さらにもう一つ、椎の実のうごきの中に安兵衛はおのれの姿を見、天地を見るべきだ」
またむずかしいことをいい出したが、今朝は、それでやめてくれた。
「さ、めしをつめこんで道場へ行け」

「はい」

熱い汁にめしを夢中で食べ、安兵衛は林光寺を出るや、走り出した。

何ともいえぬ歓喜に全身がみたされていて、足も躰もひどく軽い。

道場へついた。

中庭づたいにあらわれた安兵衛を見やって、堀内源左衛門は、にやりとした。

「先生。お願い申しまする」

「うむ」

また昨日と同じようなことがくり返された。

しかし一粒の椎の実も安兵衛の切断するところとはならぬ。

たまに刀身が当ることはあっても、これは払いのけただけにすぎない。

だが、空間を飛ぶ木の実を切り割るということのむずかしさにいどむことは、滝の水を見つめつづけることよりも張り合いがある。

一日中、安兵衛は堀内が投げる椎の実を相手に刀をふりまわし、またも、へとへとになった。

夜に入って落ちた椎の実を笊へ入れ、

「ありがとうございました」

両手をつくと、堀内源左衛門が、

「その笊を持って帰れ」

「は……？」

「わしとても、その椎の実をおぬしが切るまで、つき合うているわけにはゆかぬ」
「はっ」
当然であった。門人三百を擁する堀内なのである。
「わかったかな」
「わかりましてございます」
「よろし。ではいけい」
林光寺へ帰ると、堀内の妻女が風呂敷に包んでくれた椎の実入りの笊を見て、和尚がいった。
「ほほう、やっぱりな」
「え……？」
「ばかもの。堀内先生が一日中おぬしと遊んでいられるか。よし。明日から、わしが投げてやる。わしがおらぬときは、坊主どもが入れかわりたちかわり投げてくれよう。これはおもしろいぞ」
「腹がへって……」
「よし。うんとつめこめ。酒もあるぞ」
堀内源左衛門正春は、下野（栃木県）の生まれだというが、くわしい事蹟はよくわからぬ人物である。
道場の門人たちも堀内の過去を知らぬし、細井広沢などは『知りたいと思うたこともない』のだそうな。江戸へは早く出ていたらしいし、道場も、当初は牛込のあたりへ小さなものをもうけ

ていた。堀内は中津川祐見などとは違って、自分の宣伝もせぬし、はじめのうちは、そんな剣客が江戸にいるのか……という程度のものだったのが、五年、十年とたつうち、少しずつ門人がふえ、堀内自身はこれといった大試合をして世間の目をひきつけることもしないのに、いつの間にか当代一の折紙をつけられるようになってしまった。

いまでは諸侯からの招きも多く、高禄をもって召抱えようとする大名も後を絶たないが、堀内は『わしは町道場のあるじで結構』という姿勢を少しもくずさぬ。

道場の見所にいて門人の稽古を見ているときの堀内は、まるで眠り猫のような感じがして、たよりないほどなのだが、それでいて三百余の門人の一人ひとりへ目がとどいているらしい。

安兵衛には〔椎の実〕をあたえた堀内源左衛門であるが、別の門人たちにも、それぞれ、その性格と力量に応じた指導をおこなっているのだ。

けれども、それが余人の目につかぬ。いつの間に、と思ううちに、門人それぞれの技倆が上ってくるし、人柄が立派になってくる。

さて……。

中山安兵衛は、元禄五年の暮れから翌六年にかけて〔椎の実〕へいどみつづけた。

早朝、林光寺の庭で、和尚や坊主たちが投げてくれる木の実を相手に真剣をふるい、これを拾いおさめてから道場へ駆けつけるという毎日であった。

堀内が投げてよこす木の実とは違い、小坊主がおもしろ半分に投げてくるのへは何度も刃があたるのだが、それでいて、これを両断することは実にむずかしい。対象が小さすぎる。刃先が当

ったかと思うと、そのまま木の実は落下してしまい、刀身は、むなしく空間を断つのみだ。

安兵衛は、もう無我夢中である。

時と日の流れが、まったく意識にのぼらず、菅野六郎左衛門をたずねることもしない。

したがって伊佐子のことも忘れてしまっていたのだ。

元禄六年、安兵衛は二十四歳になった。

髪の手入れをすることもめんどうになり、寝てもさめても木の実のことばかりを思いつめているので月代の毛ものび、これは伊佐子がのぞむのぞまぬにかかわらず総髪とならざるを得ない。

まげは林光寺の僧が、ゆいあげてくれる。

春もすぎようとするころ、久しぶりで道場へあらわれた浅野家の臣・奥田孫太夫が安兵衛の稽古を見て、

「これは……」

瞠目をした。

そのころになると安兵衛の剣は、四天王の一人、塩入主膳でさえも、もてあますほどのねばりが出てきている。

「中山殿。お相手をしようかな」

奥田孫太夫は三尺余の木太刀をさげ、安兵衛をさそった。

二人は、木刀をかまえたまま、およそ小半刻（三十分）に近い時間を一合も打ち合うことなく、にらみ合ったままであったが、やがて、

「もう、よろしかろう」
孫太夫は木刀をみずからひいて、
「打ち合うまでもござらぬ」
と、いう。
安兵衛は一礼したのみで、これにこたえなかった。
それでいて、稽古の（充実）がゆきわたったよろこびが安兵衛の面上にあふれている。
この日、奥田孫太夫は一人の老武士をともなってきていた。稽古が終った後、
「こちらは拙者と同じ浅野家につかえておらるる堀部弥兵衛殿でござる」
孫太夫が、その老武士を紹介してくれた。
安兵衛も名乗って、この、いかにも矍鑠たる老武士を見たが、このときは格別の印象もなかった。
ただ安兵衛のことは孫太夫からきいていたらしく、堀部弥兵衛が親しげに微笑し、
「せっかく、おはげみなされい」
かるく自分の肩へ手をおいてくれたことを、安兵衛はおぼえていた。
安兵衛に武家奉公のはなしがあったのは、この年の夏であった。
奉公先は、千三百石の旗本・稲生七郎右衛門で、このはなしは細井広沢と堀内源左衛門の間ですすめられたものだ。
稲生七郎右衛門は、五十にはまだ間があるが老熟の幕臣で、かねてから細井広沢とは親交があ

る。

広沢は、あまりくだくだしいことはいわず、

「中小姓として奉公するわけだが、道場へは毎日来てもよいし、いえば気まづとめのようなものだ。どうかな、いってみては……」

「これは堀内先生も御存知のことで？」

「いかにも。師を師父ともいう。剣術の上の父である先生も、それがよかろうと申された」

すると安兵衛は、いささかのためらいもなく、

「おまかせつかまつる」

と、こたえた。

この時まで思いもかけなかったことだが、信頼すべき友と師のはからいによることなら、どこへでもとびこむのが安兵衛としては当然なのである。

菅野六郎左衛門にしても、これは同様のことで『おまかせするがよい』と、いった。

菅野の生活は、このところおだやかなものらしく、いつ安兵衛がいっても機嫌がよかった。

松平家における叔父の身の上について、一時は、かなり心配をした安兵衛も、このごろは、それを忘れかけていたのである。

秋になって、林光寺を出た安兵衛は、牛込の稲生屋敷へ移り住んだ。せっかくのびた月代の毛を、安兵衛はまた、きれいに剃りあげねばならなかった。

新春多事

この年――元禄六年十二月に松平左京太夫家来・村上庄左衛門の妹みねと、中津川祐見が婚約をした。

十九歳のみねは、なかなかの美女である。

この縁組みは、まことにすらすらとまとまったようだ。

何しろ、いまの中津川道場には松平家の臣が四十余名も入門しており、殿さまの左京太夫頼純に、何度も祐見は目通りをゆるされており、

「近頃、まれにみる偉丈夫じゃ」

殿さまも祐見が大の気に入りで、

「召し抱えよ」

との言葉もある。

しかし、祐見は、

「まだ剣をもって禄を食めるほどのてまえではございませぬ。いましばらくは野にあって、おのれのわざを磨きとう存じまする」

と謙譲な態度で、これを辞退している。

（心ゆかしき男ではある）

と殿さまは思いこんでいるほどだから、祐見の道場へ家来たちが通うことをよろこんでいるし、寵臣・村上庄左衛門が、妹との縁組みを願い出れば、

「それはよい。躬もうれしく思う」

一も二もなくゆるしをあたえた。

ことに、この秋ごろ、夏の暑さに弱りきっていた左京太夫の健康が思わしくなくなり、吐き気、頭痛が絶えず、このときは菅野六郎左衛門も、

「どうも心配でならぬ」

めずらしく顔をしかめて、安兵衛へもらしたほどであった。

これをきいた中津川祐見が、門人の村上兄弟を通じて、

「それがしも、むかしは鍼医者として名の通った者ゆえ、一度、御病状を診たてたてまつりたい」

と、申し出た。

藩医もいることだし、江戸家老の日根九郎三郎はじめ重役たちも首をかしげたが、村上庄左衛門がいち早く左京太夫に告げてしまった。

「すぐに祐見をよびよせよ」

殿さまの命である。

御殿へ上った中津川祐見は五日の間、夜を徹して治療にあたり、みごと病状を快復に転ぜしめた。さすがに、まだ鍼医としての腕はおとろえていなかったものとみえる。

これからはもう、松平左京太夫の祐見に対する信頼というものは非常なものとなり、何かにつけて、

「中津川をよべ」

と、いう。

二度ほど、祐見は左京太夫の前で剣技を見せたこともあるし、それよりも、むかし諸国をわたり歩いた祐見の見聞は、そのたくみな話術を通じて、世間知らずの殿さまをよろこばせた。

左京太夫頼純は、五十三歳になる。

将軍にもっとも血のつながりのふかい三家の一つの紀州家の次男に生まれ、家康の孫にあたる左京太夫は西条三万石の領主にすぎなくても従四位・少将に任じ、威勢はなまなかな諸大名のおよぶところではない。

左京太夫が紀州から出て伊予・西条の領主になったころ、つきそってきた口やかましい老臣たちもようやく死に絶えたかたちで、五十をこえて尚、左京太夫は若い側室に子を生ませるほど女色には目がないのである。

松平左京太夫の夫人は本多能登守の息女で、頼路と頼廉の二子を生んでいる。

けれども左京太夫は十七歳のとき、まだ結婚前の身で松之助という男子の父親になっていたのだ。

松之助を生んだ女の名は不明である。側室にも迎えられなかったところを見ると、いろいろな事情もあったらしい。このことにふれることが松平家ではタブウになっているようだ。

松之助は、いま伊予・西条の城に住んでいて三十七歳になる。

ちなみにのべておこう。

諸大名には参覲という義務があり、これは隔年交替に江戸と領地とに居住する制度であり、将軍と幕府への忠誠のしるしを法制の上にしめすことだ。

これによって幕府は諸大名を統御し、大名は妻子を江戸屋敷においたまま、領国と江戸との間をいったりきたりするための巨額の費用を必要とする。

ために、参覲交替によってふりまかれる金は、諸国街道の宿駅と江戸を繁栄させたわけだが、こんないいつたえも残されている。

たとえば信州・上田の城下。ここの町人たちは加賀百万石前田家の参覲通行によって大いにうるおい、

「俗に加賀さま景気といわれたものです」

と、いまも上田の古老たちがいう。

ところが松平左京太夫は、幕府から〔参覲〕の義務を免除されているのだ。

だから領国へは、あまり帰ったことがなく、松之助との父子としての交渉もあまりないわけだが、どちらにせよ、参覲のための莫大な費用をつかわずにすむというのは、藩財政の上からも、他の大名たちにくらべて大変なちがいがある。

理由はどうであれ、将軍の親類というだけで、特別あつかいにされている結果が経済の上で有利だということは、

（どうも、うなずけぬことだな）

かねて、安兵衛も思うことである。

さて――。

松平左京太夫の世つぎは、いまのところ、正夫人が生んだ頼路ということになっており、頼路は少年のころ、前将軍・家綱に目通りをして、その資格を得ている。

けれども近年になって領国にいる松之助が、にわかに注目されてきはじめた。

名も知れぬ女が生んだとはいえ、松之助は左京太夫の長子であり、学問にもふかく性行も立派で、西条では家臣や領民の評判がよろしい。

だからといって頼路が凡庸というのではないが、家中の人気は次第に松之助へかたむきつつあるようだ。

西条にいる城代家老・青地郷右衛門や、江戸屋敷の側用人で松井監物などという人びとも、いわゆる「松之助派」であって、

「お世つぎは松之助君のほうが、よろしいように思う」

などという会話が、たとえ茶のみばなしにせよ、彼らの間にかわされるようになった。

家臣たちの間で、一度きまった世つぎを変えたらよい、などという話題が出るのも、

「わが藩は特別なのだ」

という意識があるからだ。

将軍や幕府に甘えかかろうとする態度が殿さまにも家来にもあるということだ。

西条・松平家創立のころ、若い殿さまを指導し、懸命になってはたらいた重臣たちは消え、家臣団は、その二世、三世によってかためられる。

殿さまも、むかしはやかましい老臣へ気がねをしていたものが、ようやく頭を持ちあげはじめ、勝手気ままとなる。

こうした傾向は、当時、どの大名の家にも見られたことで、たとえば安兵衛の旧主・溝口信濃守にしてもそうであったことは、中山弥次右衛門憤死事件ひとつをとってみてもわかる。

将軍家も、しかりである。

家康以来・秀忠、家光、家綱とつづいてきた徳川将軍は、いずれも亡き家康の遺命を奉じた補佐の重臣によってささえられてきた。

それが現将軍・綱吉の代になって、にわかに将軍独裁のいろをおびてきたことはいなめない。

こうなると家来たちは、それが将軍にせよ大名にせよ、上にあるものの権力へ、むしろ取り入ろうとする。

ここに〔派閥〕が生まれる。

戦国時代のように天下をつかみとろうというようなスケールの大きさではなく、最高の権力の下にあって、自分たちの勢力をひろげようというもので、徳川時代のいわゆる〔御家騒動〕の原因は、およそここにあるといってよい。

実は、安兵衛が気にしていた北島雪山の言葉も、ここに関係がある。

あのとき、

「もしや、叔父のことでなくば松平家のうわさでも、お耳にはさまれたのでは？」

と、安兵衛が問いつめたのに対して、雪山は、困りきったあげく、

「もう少し待ってくれぬか、たのむ」

と、こたえている。

このことについて、雪山は江戸をはなれるときも、

「あのことは細井広沢へ申しつたえてあるゆえ……」

といい、折あらば広沢にきけ、というふくみをもたせていた。

いま、安兵衛はこのことを忘れている。

四谷の稲生七郎右衛門屋敷へ中小姓として奉公したばかりで、新しい暮らしにも馴れぬし、木の実を相手に刀をふるうことも一時やめているほどだ。

もっとも堀内源左衛門は、

「もはや木の実を相手にすること無用」

と、いってくれはしたが……。

とにかく、毎日の道場通いが精いっぱいのところで、まさか道場の人たちに木の実を投げてもらうわけにもゆかず、林光寺へいくひまもない。いくら稲生家の好意があるとはいえ、武家奉公をした以上、安兵衛も好き勝手をしているわけにはゆかないのが当然であった。

伊佐子にも、会えなくなっている。

十二月もおしつまってから、菅野家の下僕で千代蔵というものが稲生屋敷へ安兵衛をたずねて

きた。

叔母の宇乃からの使いである。

安兵衛の奉公を祝い、紋服と袴をみずから仕立て、とどけてよこしたのだ。

もっと早くとどけたかったのだが、このごろは若いころのように根気がなくなり、ついつい仕立てるのがおくれてしまった……と、叔母は手紙に書いてよこした。

「……しばらくお目もじをせず、こころさびしく存じ候」

とも書いているのが、少し気になった。

いつもは、このように胸のうちを吐露することがあまりない叔母であったからだ。

裏門傍にならぶ長屋の一つを安兵衛はあたえられており、

「ま、あがれ」

紋服をいただいてから、気やすく千代蔵を部屋へあげて、

「叔父上、叔母上、ともにお変りはないのだろうな」

「はい」

中年の朴訥な下僕は、すぐにうなずいたが、ふと何か思いついたように、

「おききおよびでもございましょうが……」

と、いい出した。

「何を？」

「いえ、その——中津川祐見さまが、村上庄左衛門さまの妹さまをおもらいになるとかで……」

「もらう？……嫁にか？」
「はい。御存知ではござりませなんだか？」
「知らぬ。そりゃ、しかしまことのことなのだな？」
「まことも何も、いま御屋敷では、そのうわさでもちきりでござりますよ」
安兵衛の眼が光りはじめた。
「殿さまのおゆるしも出ましたので、来年春のころに御婚礼があるそうで――」
「ふむ。もう一度きくが……叔父上には何のお変りもないのだな」
「別に……」
むろん、千代蔵にはわからぬことだと思いながら、念を入れずにはいられなかったのだ。なぜなら、菅野六郎左衛門は、安兵衛を通して中津川祐見の過去を知っている。祐見が松平家に取り入っている意中がどんなものであるにせよ、これは祐見にとって、よい気持ちのものではない筈であった。
むしろ誰にも知られたくない過去だといってよい。
一昨年の秋、伊佐子を祐見の手から救ったとき、
「むかしのことはおぼえておらぬ。これからも、そのつもりでおれ」
と、祐見は安兵衛にいった。
菅野が祐見の過去を得意気に吹聴するような人物でないことはいうまでもないが、
（これは……）

急に、安兵衛の胸がさわぎはじめた。

松平左京太夫の庇護のもとに、祐見が剣客として擡頭しようとすればするほど、菅野六郎左衛門の存在がけむたくなることはたしかであった。

村上庄左衛門と祐見が義兄弟ということになれば、菅野とも顔を合せる機会がこないわけがない。

菅野は平気だが、（気取りや）の祐見にとって、これはもっとも厭なことであろう。

しかも、村上兄弟と菅野六郎左衛門の間柄は松平家中でもうわさにのぼるほどの仲の悪さ、である。

村上庄左衛門には、この秋に百石の加増があった。

村上の役目（御前御納戸役）というのは、いえば殿さまの身のまわりを、いろいろと世話をやくのがつとめで、茶坊主の家に生まれただけあって下情にも通じ、

「いささか、お気をおはらしあそばしては……」

などと、たくみに殿さまへもちかけ、下屋敷へ踊り子（後の芸者）をそろえ、飲めや唄えの宴を張るのも、万事、村上がやる。

弟の三郎右衛門は兄のところへ厄介になっているだけだが、とにかく近ごろの村上庄左衛門の羽ぶりは非常なものらしい。

朝から夜まで、つきっきりで左京太夫の世話をするし、殿さまもまた、

「村上をよべ」

万事につけて庄左衛門でなければおさまらぬ。

安兵衛は村上を思うとき、いつも新発田藩の里村伝左衛門のことを考える。

里村は茶坊主でこそなかったが、百石の納戸役から、側用人、家老職にまで引上げられた男だ。殿さまというものはどこも同じで、家をついだ当初は重臣たちに頭を押えられているが、やがて側近に自分の防波堤になるような才気ある家臣をおき、これを次第に立身させ、ついにやかましい重臣どもを押えつけてしまう。

いまの村上庄左衛門も、どうやら、この防波堤になりつつあるらしい。

（だが、里村伝左衛門とはくらべものにならぬ）

と、安兵衛は思っている。

里村は亡父・弥次右衛門をはじめ、祖父・伯父など殿さまにとってうるさい家来たちを追いはらいはしたが、いまは溝口家の家老の一人として忠実につとめているらしい。

「以前のわたしには至らぬところが多々あった。いまにして中山安兵衛を気の毒に思う。もしも安兵衛に帰参の心があるなら、何とでも骨を折ってみよう」

と里村伝左衛門が、安兵衛の従兄・九左衛門へいったそうだ。

去年、新発田へ帰ったとき、従兄の口からこれをきいて、安兵衛は苦笑をした。

むろん帰参の意志はない。

里村の好意と、亡父の憤死とは別のものだ。父が切腹したあの夜のことは、いまも安兵衛の胸の底にはげしくやきついているのである。

菅野のことが気にかかりながらも、あわただしく元禄六年は暮れた。

中小姓という役目は、主人のかわりに手紙を書くこともあり、供もしなくてはならず、なかなかいそがしい。そのかわり、交際のひろい稲生七郎左衛門が特別に諸方へひきまわしてくれるので、安兵衛の顔もひろくなってきていた。

年があけると元禄七年で、安兵衛は二十五歳になった。

この正月十日の午後に、溝口修理につかえる義兄の町田新五左衛門から使いがあって、

「急いだとて詮ないことだが、もしもひまをもらえるなら、きてほしい」

とのことである。

ちょうど稲生家の用人・大沢重四郎から、

「安兵衛殿。年末年始にかけての御用繁多で、さぞ疲れたことでしょう。今日は泊りがけでゆっくりと骨やすめをしてまいられい」

といわれたばかりなので、安兵衛はすぐに溝口屋敷へ向った。

中山姓ではあっても、稲生家では一流の剣客として安兵衛をあつかっているところがあり、用人の大沢にしても口のきき方からして他の家来とは区別する風が見える。

これがどうも気にかかってならないのだが、女中たちをふくめ四十人に近い家来・奉公人のうち、安兵衛を悪くいうものは一人もいなかった。

このころの安兵衛について記したものが残っている。

それは森銑三博士が発見された〔茂木忠八筆記〕というものだが、その中に安兵衛のことを、

「……いかにも骨高に、からりといたし、背丈も中背にて、眼くりくりいたし、しごく柔和の人にて、すぐれて小児を可愛がり候。また貞実なることども申しつくしがたく候」

と、書いてあるそうだ。

切れ長の細い眼をしているのが『くりくりいたし』とあるのは、年少のころの安兵衛の容貌もかなりの変化をとげていたものらしい。

とにかく、この足かけ二年ほどの間の、安兵衛の成長ぶりは、安兵衛が気づかぬままに顔や挙動へあらわれるものらしく、たまさかに会う伊佐子が、

「はじめにお目にかかったころにくらべて、見ちがえるような……」

嘆声を発してやまない。

「それは、こちらで申すことだ」

安兵衛も負けずに嘆声をあげる。

なぜといえば、伊佐子は伊佐子で、何も彼もがらりと変ってしまった。

彼女は、女になった。

つまり男装をやめたのだ。

島田まげに髪をゆいあげ、わりに派手やかな小袖を着てみると、二十三歳の女には見えぬ愛らしさなのだ。

このごろは彼女、坂本の家で神妙に茶の稽古などをやっているようであった。

月に一度、二人が会えばいい方で、三月に一度ということもある。

いつも安兵衛からたずねてゆき、昼飯か夕飯を共にし、二刻（四時間）ほど語り合って帰ってくるだけなのだが、

（伊佐子どのを妻に……）

という心は、かなり充実してきたようだし、それはすぐに伊佐子も感得し、彼女もそのときがくるのを待っているかのようだ。

「武家奉公などなさらなくても……せっかくにのびたさかやきをお剃りになってしまわれたので、伊佐子、くやしい」

という口調も、艶ではある。

義兄に会ってから、菅野へより、年始の挨拶をして一泊、明日は伊佐子をたずねるつもりで、安兵衛は稲生屋敷を出た。

町田家では、義兄の新五左衛門も姉のさちも健在であり、安兵衛には従妹にあたる文という女の子が六歳の春を迎えて可愛いさかりだ。

義兄は非番で長屋にいた。一通りの挨拶がすんでから、町田新五左衛門がいった。

「伊助が死んだという」

「え……まことで？」

すると姉が、牛崎の庄屋の義兄からよこした書状を出してきて、安兵衛へわたし、

「ともあれ、牛崎へ知らせがいったらしいが、そなたは伊助じいやに育てられたようなものゆえ、できるなれば小千谷へゆき、めいふくを祈ってまいるのが道だと思いますけれど……」

「それは、もう……」

つぶやくようにこたえたが、声がつづかない。

「すぐに、というのではなく、いつにてもよいと思います。おひまがとれたときにね」

姉の声をきいているのだか、いないのだかわからなかった。

庄屋・長井弥五左衛門の手紙によれば、伊助の死は、安兵衛の祖父・溝口四郎兵衛と同じようなものであったらしい。

死んだのは去年十一月二十八日朝のことで、伊助が世話になっている弟夫婦の孫にあたる子供が、ひどい寝いびきをかいている伊助に気づき、みなを起したのだという。

医者がきたときには、もう伊助の息は絶えていたらしい。

長井弥五左衛門は、このことを新発田の溝口三郎兵衛と江戸の町田新五左衛門へ知らせると同時に、みずから越後・小千谷へおもむき、ねんごろに弔意を表してくれた。

「雪もふかいであろうに、長井どのがみずから小千谷まで……これもみな、そなたと伊助のむすびつきのことを思えばこそですよ」

姉も、長井の義兄のゆきとどいた手くばりや行為には、つくづく心をうたれたようだ。

「安兵衛どのには手紙も書きれぬおもいがしますゆえ、どうぞ、そちらからおつたえ下さるよう」

と手紙にもある。

伊助も、七十をこえている。

年齢からいえば死ぬこともふしぎではないのだが、

（なぜ、去年のあのとき、小千谷へ寄らなかったのか……）

ひたすらに、それのみがくやまれてならない安兵衛であった。

伊助には七年も会っていない。この老人が自分へしてくれたことは、なみなみのものではなかった筈だ。

（おれとしたことが……）

これであった。

俗に、孝行をしたいころには親が亡い、という。安兵衛には、これをのぞむべくもない、老年の伊助が一日一日と死に向って足を速めていたことは事実であり、それをよくわきまえていたなら、小千谷へ足をのばす機会は何度もあったではないか。

まさに、これは安兵衛の怠慢である。

死んでから悔みに出かけたところで何にもならぬ。伊助が生きてあるうち、江戸土産の海苔でもたずさえ、いささかの小づかいをあたえるべく、安兵衛が小千谷へたずねていったら、もう躰のうごきも自由にはならなかったであろう伊助は、どのような歓喜の表情を見せたろうか……。

町田新五左衛門の主人・溝口修理の屋敷は神田・鷹匠町にある。

屋敷内にある義兄の長屋を安兵衛が出るころ、日は暮れきっていた。

このあたりは、徳川家康が江戸入国の当時、鷹匠たちの宅地があったので、いまもその名残りが人によばれてい、正式の隼町という町名より通りがよいほどであった。

半蔵門から外濠の四谷御門へ通ずる道へ出た安兵衛は、まっすぐ西へ向った。四谷門外へ出れば菅野六郎左衛門が住む松平屋敷は間近い。

左側は麹町の町家で、まだ人通りもあるが、姉がわたしてくれた提灯もいらぬほどに道はあかるかった。

四丁目へかかるところに「ひゃくたんや」という蕎麦切を食べさせる店があって、安兵衛も一度、ここで細井広沢と酒をのみ、そばを食べたことがあった。

その前を通りかかったとき「ひゃくたんや」の表障子をあけて出てきた商人ふうの男が、

「おや……」

うつ向きかげんに去る安兵衛を見送ったが、すぐに、

「おい、ちょいと……」

声を張って呼びとめてきた。

「私か……？」

ふりむいたとき、とっさに、その男がだれかを安兵衛は思い出せなかった。

「斬ろうと思えば、すぐに斬れたな」

と、その男はいった。身なりもぜいたくで、どこかの大店の主人か番頭にも見える。

「あ……」

「思い出してくれたか」

「鳥羽又十郎」

「いかにも」

又十郎の、うすかった眉毛が濃くてふとくなっているのに安兵衛は気づいた。躰にも顔にも、ふっくりと肉がのっており、こちらへ笑いかけるおだやかな表情には、かつての又十郎のするどい風貌の影もなかった。

「ま、歩こう」

先に立って又十郎、

「いや、斬れなかった」

と、いう。

「何？」

「いや、おれがおぬしを斬ろうと思って近よったなら……やはり、斬れなかったろうな」

「斬る気ではないのか」

「ない。いや、斬りかかったとしても、いまのおぬしには歯がたつまい」

又十郎が足をとめ、しげしげと安兵衛をながめた。

「いつの間にか、おぬし、大した男になったものだ……」

ためいきのような、低い低い声なのである。

そんなことは、どうでもよかった。

「又十郎、お秀はどうした？」

「気になるのか？」

「当然のことではないか」
「まだ忘れられぬと見えるな」
「そのようなことではない。おぬしは男と女の間がらを、ただ一つのものとしか思うていないようだが……」
「もういい。おれも、むかしのことは忘れたさ」
「忘れた……忘れてくれるというのか」
「うむ……」
「それは何よりだが……お秀はどうしている。生きておるのか」
「むろん、生きているさ」
というのが、鳥羽又十郎のこたえであった。
「そうか……」
さすがに安堵のおもいで、躰の力が急にぬけた。
「あのときなあ……」
又十郎が苦笑し、
「お秀の右腕を叩き斬って、その次は、おぬしの腕をそう思っていたのだが、あの女が血まみれになって倒れたのをみたとたん、急に、思いもかけぬような気になってな」
「それで引きさらっていったのだな」
「そうよ。おれもなあ……」

又十郎にしては弱々しすぎる口調なのである。

「おれも、これでひどいやつだし、手に入れた女も数えきれぬ。ふしぎなもので、そんなやつが只ひとりの女が忘れきれねえのだ。おわかりかえ安兵衛どのよ」

声が遠のいた。

はっ、として見やると、鳥羽又十郎の姿は右側の火除地の草むらの闇へとけこもうとしていた。

「又十郎……」

「片腕になってしまったが……お秀は元気でいる。ま、安心してくれ」

声も闇へのまれて、

「ふり出してきたな」

かすかにきこえたのが最後である。

又十郎は、完全に消えていた。

(元気でいるといったな、お秀が……)

信じられぬようでもあり、何かまた、のみこめたような気もする。

(だが、盗賊と共に暮らしていることが、お秀にとってよい筈はない。しまった、もっとよく又十郎と談合し、お秀を越後へ帰すように……おれからたのんでみることだったのだが……)

ふり出した雪の中を歩き出すと、伊助の老顔と、お秀の顔とが交錯して胸にうかんでいる。

「何ということだ、何という……」

吐き出すようなつぶやきをくり返しつつ、安兵衛は松平屋敷へ入った。

菅野夫婦は夕飯の膳についていた。

「安兵衛どのも、まだであろう」

と、叔母がすぐ仕度にかかるため台所へ去った後で、安兵衛は伊助の死を告げた。

菅野六郎左衛門は顔をしかめ、

「なればこそ、わしは、おぬしが馬庭へいくたびに、伊助へ会うてまいれと申した筈だ」

「いたりませぬでした」

「わしはまだ会うたことがないが、伊助がことは、いつも気にかけていたのじゃ。思うてもみよ、伊助の生涯の大半は新発田のおぬしが家の奉公にあけくれたのだ。妻もなく、子もなく……いや、伊助にとっては、おぬし一人が我が子のようなものであったろうに……」

さらに菅野は、

「このような失態をしては、人として、いままでの修行が一度に消えてしまうぞ。よう胸にたたんでおけい」

きびしく、とどめを入れてから、今度は、しみじみといった。

「もしもおひまがいただけるなら、いつでもよい。小千谷の伊助の墓へまいってやれい」

その夜、安兵衛はお秀のことをいいそびれた。

お秀のことにしても、伊助に対しても、

（おれの打つ手は一歩も二歩も遅れていたのだ）

残念でもあり口惜しくもあり、恥じてもいたが、それだけに安兵衛の目は、世に、人に向って

一つ大きくひらかれたといってよい。武士として命をかけつつ一日一日をすごしていくという心得は、ここにつながる。

明日も明年もあるとおもえばこそ、伊助へ会うことが一日のばしにのびてしまった。

（まだしも、少年のころ、何も彼もふり捨てて福田源八の後を追い、新発田を出発したときのおれのほうが、いまのおれよりもましであったのではないか……）

ろくに眠れず朝を迎えた。

雪は、つもらぬままにやんでいた。

いうまいとも思ったが、村上庄左衛門の妹と中津川祐見との縁組みについて、安兵衛は菅野にきり出してみた。

朝食がすんだ後で、宇乃は女中と共に台所へ入っており、居間には二人きりであった。

「そのようだな」

菅野は、あっさりと、

「めでたいことだ」

と、いう。

少しも、こだわらぬ態度に、安兵衛はむしろ拍子ぬけのかたちになり、黙っていると、

「中津川祐見も、いまは江戸で知られた剣客であるしその過去をいまさら問うべきでもあるまい。かんじんなことは、これからの祐見が人として剣客として立派な男になる、ということなのだから……」

茶をのみながら、菅野六郎左衛門が淡々と、
「わしも、その心で祐見を見ておる。おぬしもそのつもりでいたらよい」
「いえ、私は……」
「わしがことなどを気にかけるな」
「は……」
「いつも申すことだが……中山安兵衛は、わしの可愛い男ではあっても、松平家の臣ではないのだ」
叔母が戻ってきたし、これ以上、問うこともない。何をきいても菅野のこたえは変らぬだろう。
菅野が出仕した後には、安兵衛は松平屋敷を出て、伊佐子の家へまわった。
先ず、昨夜出会った鳥羽又十郎のことを語るつもりでいたのだが、安兵衛がすわるのを待ちかねたように、伊佐子が興奮して、
「中津川祐見が、また試合をやるのですよ」
「ほう、たれと？」
「辻月丹先生と……」
「何……」
安兵衛も緊張した。
麹町九丁目に、無外流の道場をかまえる辻月丹は、かつて窪田甚五郎と並び称されるほどの名声を持ち、大名の家来や旗本の門人も多い。月丹が、伊佐子の父・原田左門と親しく、いまの伊

佐子の師であることも安兵衛は知っている。

「三日前に、祐見が辻道場へあらわれ、月丹先生へ申しこみをしたらしいのです」

「急のことだな。それで辻先生は受けられたのか？」

「はい」

試合は、きたる一月二十五日にきまったそうだ。

「それも、また急な……」

「わたくし、心配なのです」

「なぜ？」

「だって……」

伊佐子は身をくねらせる。師の身を案ずるにしては声もあまく、仕ぐさもなまめいているのだ。

このごろは彼女、あまり剣術の稽古もせぬためか、だいぶ躰に肉がのり、安兵衛の目の前で、ややなめに見せているくびすじから胸もとのあたりが、むっちりとふくらみ、

「それにしても、祐見は思いきったことを……」

言葉を合せながら、安兵衛の視線は熱っぽく伊佐子へからみついている。

「いや。そのように見つめなされては……」

「別に……」

「それで、辻先生の……」

「うむ。だが、こうなっては、別に仕方もあるまいし、辻先生だとて、みすみす祐見におくれ

はとるまい」

いいさして、その自分の声のむなしさをたしかめようとするかのように、安兵衛は沈黙した。

伊佐子のはなしだと、辻月丹は六十二歳になる。

（まだ辻先生の剣法を見たことはないが、窪田弥市郎をたおした祐見の一撃のすさまじさに、はたして向い合えるのであろうか……）

伊佐子も黙りこんで、障子の陽ざしをぼんやりと見つめていた。彼女も同じおもいなのに違いない。

江戸に門戸を張る剣客ならば挑戦をうけてひき下がれるわけのものではないから、辻月丹は、いさぎよく応じたのであろう。

中津川祐見は九日に試合申しこみをして、およそ半月後には日時をきめた。まさに短兵急な挑戦であって、

（祐見らしいな。しかし、みすみすそれに応じられた辻先生は、どういう心なのか……？）

自信があるからだと見るより仕方もあるまい。

この試合のことは、昨日、伊佐子が道場へ出向いて知った。

「いえ、わたくし稽古に上ったのではありませぬ。先生が湯島天神前の雁金やの籠そうめんがお好きなので、それを持ってうかがったのですけれど……でも、心配になり……」

思いきって伊佐子が、祐見は油断のならぬ男ゆえ、お気をつけられませぬと——と、辻月丹にいった。すると月丹は、

「もとより試合に油断はならぬさ。それよりも、早う、そうめんを食べさせてくれい」

と、こたえた。

妻女は六年前に病歿し、むすめ二人は、それぞれ京と大坂へ嫁入っていて、後つぎの男子の無い辻月丹であった。だから月丹の身のまわりは三人の下僕が世話をしている。

それをよいことに、伊佐子はよく道場へ出かけ、伊勢やの女房にならいはじめた料理をつくっては月丹に食べさせるのだが、はじめのうちは、ひどいものを食わせる、と閉口していた辻月丹も、近ごろでは、

「どうにか物になってきたぞよ」

と、いってくれるようになった。

辻月丹も変った人物で、いつの間にか伊佐子が男装をぬぎ捨ていささか時期おくれの春を迎えただけに、見るたび美しくなまめいてくるのを見ていながら『どうして剣を捨てたのだ』ともきかぬし『好きな男でもできたのか』

と、いうわけでもない。

少女のころから知っている伊佐子の変化を少しも気にはとめないのである。道場の門人たちの間では非常な評判になっていることをまさか知らぬわけでもないのであろうが……。

ことに、はじめて伊佐子が魚や野菜の入った籠をさげて辻道場の台所へあらわれ、

「今日は私が先生のお膳をこしらえてみるからね」

といったとき、そこにいた下僕が、

「気味のわるいことを、おっしゃっては困ります」
ふるえ声になったらしい。
それなのに、その夕暮れ、
「不出来ではございますが、私が仕度つかまつりました」
そのころはまだ男装をしていた伊佐子が膳をはこんで居間へ行くと、
「おう。そうか、そうか」
事もなげに箸をとったそうだ。
辻月丹、背丈は五尺そこそこの小兵で、伊佐子にいわせると、
「わたくしが突けば吹き飛んでしまいそうな……」
たよりなげな老人らしい。
近年は、みずから木太刀をとって門人に稽古をつけることもせず、二十余年前に月丹が諸国をまわり歩いていたころから付きそっている伊上貞八郎、山本忠介の高弟が道場へ立っている。
この二人は、実にすばらしい手錬の持主で、
「二人とも、おそらく大成することであろう」
と、これは堀内源左衛門が安兵衛にもらした言葉だ。
中津川祐見が試合申し込みをしたとき、伊上も山本も、口ぐちに、
「先生が立ち合れるにはおよびますまい。われらが中津川を……」
と、いい出た。それでもよい。この二人に祐見が負ければ辻月丹に敗北したのと同様になる。

窪田道場の二の舞いをしては、という不安が伊上や山本にもあったのだろう。
このとき辻月丹は、つるつるに禿げあがった坊主頭をなでまわしつつ、二人をながめやり、
「ふン……」
かすかに鼻で笑った。
これで、二人とも声がつづかなくなり、さらに顔面を赤らめ、うつむいてしまったという。
月丹を出しては危い、という心は、そのまま、
「われらならば、いまの師よりも勝っていよう」
という慢心につながっていたのを、たちまちに看破され、冷笑をあびせかけられたのである。
「試合当日には、門弟もれなく参集するように――」
辻月丹の指示があったのは、この直後のことだ。
すべてをきき終えたとき、
「伊佐子どの。私も、その試合、ぜひとも見たい」
安兵衛が、たまりかねていった。
このときの安兵衛は、伊助やお秀のことを忘れきっていた。

犬公方

中津川祐見と辻月丹の試合を、安兵衛は見ることができなかった。試合の当日、一月二十五日

には、主家・稲生七郎右衛門の亡母の回忌があり、屋敷内のだれもが多忙をきわめていたからである。

だが当日の夜になって、坂本の伊佐子からの書状を老僕の甚蔵がとどけてくれた。

ちょうど寺から引きあげた後の酒宴が屋敷でおこなわれているときで、安兵衛も落ちついてはいられなかったが、

「で、試合はどうなったのだ？」

勝手門わきに立っていた甚蔵へ駆け寄ってきくと、

「存じませぬが……この、お嬢さまのお手紙に――」

「伊佐子どのの気色は、どうであったな？」

「はい、ごきげんよろしくお帰りになりまして、すぐに、そのお手紙を……」

「何、きげんよくだと？」

「はい」

「そうか。御苦労だったな。これで、帰りにあたたかいものでも食べなさい」

甚蔵へ、いくらかのものをわたした。

安兵衛も江戸の水になれて、こうしたときの心づけは欠かしたことがない。

（辻先生が祐見に勝たれたのか……？）

急いで長屋へ戻り、手紙を読んだ。

伊佐子の筆によると、試合の状況は次のようなものであった。

定刻に道場へ出た辻月丹と中津川祐見を見守る参観の人びとは、門人をふくめ二百余人におよんだという。

旗本・徳山五兵衛も、息・右近をともない、道場へあらわれたらしい。顔のひろい五兵衛のことだから、あやしむには足らぬが、一年後に、右近の師・窪田甚五郎が死去してから、五兵衛は右近を辻道場へ入門させたことを、つけ加えておこう。

さて、中津川祐見は、あの窪田弥市郎との試合における身仕度と同様で、例によって汗どめの鉢巻もしめていなかった。

これに反して、辻月丹は禿頭に物々しく鉢巻をしめ、紋服へまわした襷もいかめしく、あの小柄な体軀なのに何と三尺余の木太刀をとって相対したものだ。

「これを見るや、祐見冷笑いたし候……」

と、伊佐子は記している。

審判は窪田道場のときと同じ横山藤八郎記章である。

この日も、横山記章が二人の剣士の呼吸を合せた絶妙さは特記すべきであろうが、

「ええい！」

あえて、中津川祐見は機先を制し、猛然と、辻月丹の面上へ打ちこんだ。

これは祐見が月丹を見くびっていたのにちがいない。

その無謀さを、いやでも祐見は知らねばならなかった。

襲いかかった祐見のすばらしい体軀が、小兵の辻月丹を押しつぶしてしまいそうに見えた一瞬、

「かあッ！」

声にはならぬような、一種異様な気合と共に、月丹が祐見の頭上へ舞い上った。

辻月丹は、ななめ横に跳躍して祐見の打込みをかわし、その後方へ飛び下りざま、

「む！」

三尺の木太刀が横なぐりに祐見を払った。

「おう！」

祐見もさすがである。

喚き返して月丹の打込みを払いのけ、ふり向いて体勢をととのえるとき、辻月丹は六尺も後退し、ぴたりと太刀を平正眼にかまえる。

「むう……」

低くうめき、祐見はつけこみかねたまま、これは上段にかまえて、二人ともうごかなくなった。

二人の木太刀が噛み合ったすさまじい響音が、まだ道場の中に尾をひいているかのようであった。

それから約半刻（一時間）……。

二人は、そのままの位置をくずすことなく、六尺をへだてて、にらみ合ったままであったそうだ。

この半刻は、あの祐見と窪田弥市郎が対決したときのそれとくらべて、

「あのときは、二人がにらみ合って、じりじりと体を移すにしたがい、おのずから中津川祐見

の気力が窪田弥市郎どのを圧してくるのが、よくわかりましたなれど……このたびは、まさに伯仲にて、月丹先生も祐見も、刻がうつるにつれ顔色白く変り、それがあぶら汗にぬれ光って、私も思わず目をとじてしまいました」

と、後に伊佐子が安兵衛へ語った。

この間、二人は一声も発せず、殺気にみちみちた双眸を空間に嚙み合せたまま、二度ほどわずか半歩を詰め合ったのみであとは彫像のようにうごかなかった。

やがて、どちらからともなく木太刀の切先が、ひくひくとふるえ出し、そのふるえが、次第に激しくなりはじめた。

道場の空気が得体の知れぬものの爆発を臓し、一針の刺激をもゆるさぬところまでふくれあがったとき、

「それまで！」

審判の横山記章が叫び、白扇をかまえて二人の間へ割って入った。

横山記章は月丹に背を向け、ひたと祐見を見つめ、

「勝負、これまでにござる」

今度は、しずかにいった。

祐見がぎりりと白い歯で唇を嚙み、まだるいほどの速度で上段にかまえた木太刀をおろしたとき、辻月丹のかまえも、同じようなゆるい速度で解かれていった。

先ず声にはならぬどよめきが道場内につめかけた人びとの間に流れ、それが声になったとき、

すでに中津川祐見は去っていた。

辻月丹は木太刀をつかんだまま居間へもどるや、無造作に、三尺余の木太刀を投げすて、後から入ってきた横山記章へ、

「うひゃァ……死ぬところじゃったよ」

笑いかけたものだ。

「いや、祐見とても同様。と申すより、先生も祐見も、共に、もはや太刀をふるう力を残してはおらなんだ、かと存ずる。なればこそ引きわけました」

と、記章はこたえた。

辻月丹は、この日、伊佐子だけに、こんなことをもらした。

「試合が終り、木太刀を放そうとしたが駄目でな。手が木太刀に吸いついてしもうたのよ。やむなくそのままで居間へ入り、とんと足ぶみをしたとたんに木太刀が落ちた。このようなことは、わしもはじめてだぞよ」

さらに、

「中津川祐見というやつ。五のちからを十までに出せるやつじゃが……ありゃ魔性の剣よ。今日の試合とても、わしに勝とうというのではなく、ぜひともわしを殺そうという……つまり殺すが勝つ、という剣じゃ。ゆえにこそ、わしもあやつを殺すつもりになった。ぜひにも、わしも死のうが、共にあやつの脳天を打ちくだいて地獄へ落ちるつもりじゃった。それでのうては、わしゃ、ひとたまりもなかったろう」

伊佐子は夕暮れまで道場にいて、辻月丹の食事の世話などをしたが、月丹は酒をのまなかった。
「酒のんだら、そのまま死んでしもうぞよ」
といい、ふわふわに玉子を浮した汁を食べ、
「もうねむるぞ」
さっさと床へもぐりこんでしまった。
道場では門人たちの祝宴が、まだつづいていることだろう、と伊佐子は手紙に書いていた。
手紙を巻きおさめつつ、
「ふうむ……」
安兵衛は興奮して、うなった。
(中津川祐見、それほどの剣士となったか……)
もう自分などでは、とても手がとどかぬところへ祐見は到達してしまったように思える。
細井広沢や堀内源左衛門のいうままに、旗本屋敷へ奉公などしていてよいのだろうか、それもこれも自分には剣士としての上達が見こみないため、
(広沢殿も堀内先生も、武家奉公をすすめられたのであろうか……)
妙に、さびしくなってきた。
「中山様……中山様……」
戸口で、よぶ声がした。
出て見ると、若党の岸井良助で、

「殿様が、およびです」
「私に？」
「はあ。表御座の間へおいで下さい」
宴席にいた親類たちも、だいぶ引きあげていったらしく、いつの間にか屋敷内がしずまり返っている。
安兵衛が内庭に沿った廊下から、
「まいりましてござります」
声をかけると、主人の稲生七郎右衛門が機嫌よく、
「ま、入りなさい」
「ごめん下されましょう」
来客が一人、いるらしいので、安兵衛は心つけて座敷へ入った。
来客は稲生と同年輩の立派な武士で、入ってきた安兵衛を見るや、稲生に、
「この仁が中山安兵衛殿か？」
「いかにも」
と、稲生は、安兵衛に、
「こちらは細川越中守様御家来、定府取次役をつとめおらるる軽部兵庫殿じゃ、などと堅苦しゅう申すより、わしが竹馬の友でな」
引き合せるや、その軽部兵庫が、

「原田伊佐子が危うきところをお救い下されたそうな。身どもよりも御礼申し上ぐる」きっちりと頭を下げた。

伊佐子を救ったことなど、安兵衛は、もう忘れてしまっていたほどだ。本所の雑木林で、彼女と中津川祐見の対決を引き分けたのは、もう、まる三年も前のことになる。

伊佐子は、いまも旧主・細川家へ出入りをしているし、安兵衛のことが彼女の口から細川の家臣たちの間に知られたとしても、ふしぎはない。

この夜、稲生七郎右衛門と軽部兵庫は安兵衛をまじえ、かなり遅くまで歓談したが、近頃細川家で中山安兵衛を召し抱えようというはなしが出ていることを、安兵衛は知らなかった。

これは、故郷の熊本へ帰った北島雪山が、家老・有吉四郎右衛門を通じ、細川越中守の耳へ入れたのが、はじまりである。

「他人のことより、おのれが帰参いたしたらよいではないか」

と越中守は苦笑しながらも、

「なれど、雪山が推挙してよこしたほどの男なら、まず間違いはあるまい。それに、雪山が申すごとく、その中山安兵衛とならば夫婦になってよいと原田のむすめがいうのなれば、あの女はんかいの始末もつこうというものじゃ」

有吉家老は主君の意をふくみ、江戸屋敷の軽部兵庫を通じて、安兵衛の経歴なり人柄なりを、よくしらべることにしたのである。

軽部兵庫は、このことを、細井広沢とも親しい稲生七郎右衛門にはかるや、

「では、まず、わしが屋敷へ引き取ってみようではないか。そうなれば自然に、貴公も中山安兵衛とやらをみることができようし、わしも、それほどの若者ならば、つき合うてみたい」

稲生がいい出し、そこで細井広沢やら堀内源左衛門やらとの相談がまとまり、安兵衛の奉公、ということになった。

細川家仕官のことを安兵衛へもらさなかったのは、もしも〔仕官かなわず〕ということになった場合を考慮したからだ。

中津川祐見がわけもなく松平屋敷へ出入りをゆるされるのとは違い、肥後・熊本五十四万五千石の大守・細川綱利の家中では藩の人事もなかなかきびしい。

軽部兵庫はひと目で安兵衛が気に入ったようである。

すすめるままにのむ酒の強さにもおどろいたが、礼儀正しい挙動や、素朴でいて気性の激しそうな顔貌にも、

（これは、肥後好みじゃな）

と、思った。

細川家の家風にぴったり合う武士と見たわけだ。

ところで……。

三人がのみ語っているころ、中津川祐見は、まだ本所の道場へ帰っていなかった。

神田川河岸の船宿で、村上三郎右衛門ほか三名の門人と共に、彼もまた酒をのんでいた。

この船宿は例の〔島や〕であった。もっとも、いつの間にか経営者がかわり、名も〔玉や〕と

あらたまり、むかしの祐見を知っている者は一人もいない。それで近頃は、その船宿へもよくやってくる祐見なのだ。

祐見の酒は荒々しかった。

（辻月丹ごとき老いぼれと引き分けるなどとは……）

くやしくて、たまらないのである。

夜ふけてから、船宿を出た祐見は、今日の試合の鬱憤もあり、飛んでもないことをやってしまった。

祐見も門人たちも、ひどく酔っていた。

新橋をわたり、柳原の土手を両国へ向いながら、村上三郎右衛門たちは、口ぐちに辻月丹の剣法をののしり、しきりに祐見をなぐさめようとするが、

「うるさい！　だまっておれ」

たまりかねた祐見が怒鳴った。門人たちが罵倒する辻月丹に打ち勝つことができなかった祐見なのだから、月丹への悪口がそのまま自分にあびせかけられているような気がしたのだ。

「帰れ。おぬしたちは、もう帰ってくれい」

振り向いて叱りつけたとき、その祐見の怒声におどろいたのか、土手にうずくまっていた野良犬が一四、咆哮して祐見に飛びかかってきた。

「うぬ！」

祐見が抜き打った。

野犬の首が胴体からなめに飛んで神田川へ落ちこんだ。
門人四人、師匠のすさまじい早わざにもおどろいたが、同時に身がすくんだ。
斬った祐見も、はっとなり、
「しまった……」
と息をのむ。
そこは、浅草御門のすぐ手前で、土手の左は川、右は武家屋敷の塀がつらなり、人影もないと見えたが、
「あっ、だれだ！」
浅草橋の上から人の声がした。門内の詰め所にいる番人が、橋へ出ていて、犬の声に気づいたらしい。
「先生、お逃げなされ」
村上が叫び、祐見の腕をつかんだ。
五人は身をひるがえして土手下へ駆け下り、一散に走った。何も人を斬ったのではない、たかが野良犬一匹の首をはねたところで、中津川祐見ともあろう男が、青くなって逃げなくともよいわけだが……。
そのころ、犬一匹を殺したら大変なことになる法令が出ていたのだ。
これを「生類あわれみの令」という。
この法令について、こころみに手もとの辞書をひいてみると、次のごとくだ。

〔貞享四年、五代将軍綱吉の発布した命令。僧隆光の言により、魚鳥の売買を禁じ、特に犬を愛護させ、これを殺傷するものを斬罪に処した。その趣旨は儒・仏の思想にもとづき殺伐、不仁の風をあらため、慈悲を生類にまでおよぼさせようというのであったが、極端に走って人民を苦しめ、綱吉は犬公方とよばれた〕

浅草門の警衛は、鉄砲や弓、槍などもそなえたいかめしさで、番士三人、足軽五人がつめている。夜まわりの町方（警吏）も、太鼓の音をきいて、一散に浅草門へ駆けつけてくるし、江戸城の内濠、外濠にかまえられた諸門の警備も緊張した。

「散って、逃げろ」

祐見は門人たちに命じ、自分一人になると、亀井町の堀川へ飛びこんだ。

この川は内濠と大川（隅田川）をむすぶもので、だから祐見は堀川から大川へ泳ぎ出て、これを泳ぎきって本所の榊原式部という旗本屋敷横手の岸へはいあがった。さすがに鍛えぬいた祐見の体力である。

舌うちを鳴らしつつ、彼は榊原邸の塀に沿って走り、裏手の雑木林へもぐりこんだ。

この林は、いつか祐見が伊佐子をさそい出して斬殺しようとしたところだ。

（うまく逃げてくれたか……）

門人たちの行方が、気にかかる。

（たかが犬一匹のことで、中津川祐見ともあろうものが、ぬれ鼠のように逃げまわるとは何たることだ）

道場へ帰りついてからも舌うちはやまない。

祐見にしたところが〔生類あわれみの令〕なぞという悪法のばかばかしさを、いまさらながら痛感したのであろう。

（こんなことで、おれの一生が台なしになってしまうのではたまらぬ）

一夜、眠れなかった。

翌日、祐見の杞憂が現実のものとなった。

他の門人たちは、うまく逃げかくれてくれたのだが、村上三郎右衛門のみ、小伝馬町の大沢備中守屋敷裏手で警吏に捕えられたのだ。

むろん、村上は知らぬといい張ったし、帯している両刀にも犬を斬った形跡がない。

だが、役人のきびしい調べに対して、『中津川祐見先生と、新橋の船宿で酒宴をしての帰途でござる』

と村上は吐いた。

船宿を調べると、祐見たちが出ていった時刻が、まさに（お犬さま）の首が飛んだときと一致している。

「あやしいぞ」

ということになり、早速、本町の中津川道場へも役人が出張ってきた。

祐見は、かたく使用人の口を封じておき、のらりくらりといい逃げた。

一方、松平左京太夫屋敷へも調べがいく。

村上三郎右衛門の身柄は一応、兄・庄左衛門へあずけられたわけだが、

「実は、兄上……」

三郎右衛門が、ひそやかに昨夜の事実を告げるや、

「中津川先生、困ったことを……」

庄左衛門は顔をしかめたが、すぐに、

「よし、まかせておけ」

と、いった。

松平左京太夫も、気に入りの村上庄左衛門の口から、弟・三郎右衛門が〔犬殺し〕のうたがいをかけられているときくや、すぐに、用人の松井監物をよび、

「何とかしてやれぬか？」

といったのは、将軍の御側用人・柳沢出羽守吉保へたのみ、この事件を穏便にすます手段はないか、と問うたのである。

松井監物は、いえば左京太夫の秘書官のような役目についている中年の藩士であるが、かねてから柳沢邸に出入りをし、松平家からも彼を通じて莫大な進物を何度も贈りとどけている。

これも何かあったとき、将軍と松平家との間をうまく取りなしてもらうためであるし、

「村上が弟は何もしておらぬそうな。このようなことで、わしが家に傷がついても面白うない」

左京太夫も厭な顔をして、

「時をおいてはならぬ。ただちに手配いたせ」

「はっ」

と、松井監物は、すぐさま柳沢屋敷へ飛んだ。このときに持っていった贈物の底に小判が何枚入っていたかは知らぬが、次の日も、また次の日も、松井用人は忙しく松平邸と柳沢邸を往復した。

そのうちに……。

「万事、よしなにはからいくれましてござります」

松井用人の報告がとどくのと同時に、奉行所でも、この事件から手を引いたらしく、〔村上三郎右衛門にはおかまいなし〕と、いうことになった。

中津川祐見に対しても調べがうち切られたようである。

柳原土手の〔犬殺し〕事件は迷宮入りにされてしまったわけだ。

将軍綱吉の側用人は二人で一人は綱吉が館林にいたころから身近くつかえている牧野成貞（まきのなりさだ）であるが、この人は権勢をふるう型ではなく、あくまでも綱吉への奉仕を柔順におこなっているタイプだし、いまでは新参の側用人・柳沢出羽守に押され気味であった。

「このたびは、うまくすんだが、当分は自重（じちょう）してもらわねば困る」

と、松井監物が村上庄左衛門にいった。

この二人と、西条にいる城代家老の青地郷右衛門は、いわゆる〔松之助派〕の頭株であった。

〔松之助派〕に対抗し、頼路を世つぎに奉じる〔お為派〕の巨頭は江戸家老・日根九郎三郎で、菅野六郎左衛門も忠実なる〔お為派〕の一人である。

お為――すなわち松平家の御ためにはたらく、という意味だ。

殿さまの左京太夫も、このごろは「松之助派」ばかりを側近にしているためもあり、

（将軍に、うまく願い出て、松之助を世つぎに……）

と、考えはじめているふしも見える。

松之助を生んだ婦人は西条に生きているが、頼路を生んだ正夫人はすでに病歿をしており、先年、久しぶりに西条へ帰国した折、左京太夫は立派に成長した松之助を見、その人気のよさも知って、かなり心がうごいたようだ。

もしも松之助が世つぎとなれば「松之助派」の家臣が藩勢力の主体となるのは当然で、そうなれば村上庄左衛門の地位昇進はいうをまたない。

いつであったか……柳沢出羽守吉保が、細井広沢に、こんなことをもらしたことがある。

「西条の松平家が世つぎのことで、どうやら、わしの力を借りたいらしい」

広沢にとっては別に興味もないことだし、問い返しもせず書物の講義に移ったのだが、このことを北島雪山に何気なく語り、

「将軍家御親類の大名方が、側用人の柳沢へ途方もない進物をはこんできてはたのみごとするありさまを見ていると、これからの天下の成りゆきというものが思いやられて……」

苦笑したものだ。

これをきいたときの北島雪山は、まだ中山安兵衛を知ってはいなかった。

だが間もなく、安兵衛と菅野六郎左衛門との関係を知ったとき、不安の表情を見せ、安兵衛に

注意をひいたのであった。

大名の家で世つぎ問題が出るとき、家臣は必ず（二派）に別れる。

（安兵衛殿の叔父ごが、どちらの派に組しているにせよ、めんどうなことにならねばよいが……）

と、雪山は思ったし、安兵衛を通じて知った菅野六郎左衛門の人柄を見て（これは忠義派だな）と感得をした。柳沢吉保などに賄賂をつかうのは別の一派にちがいなく、そうなれば尚更に菅野の身が案じられて、安兵衛にも告げかねた。

「わしの思いすごしであればよいが……」

雪山は細井広沢に、

「ま、いまの安兵衛に告げぬでもよいことじゃが、このことを、おぬしの耳に入れておきたかったのでな」

いいおいて、江戸を去った。

広沢も、このことはまだ安兵衛に語っていない。語ったところで仕方がないし、菅野ほどの人物なら〔松之助派〕のうごきについても目を光らせているだろうと考えたからで、それは事実であった。

今度の（犬斬り）事件について、松井監物が何度も柳沢屋敷へ出かけたことを菅野は知っている。

（村上三郎右衛門は新橋の船宿で中津川祐見と酒をのんでいたという。そこを出た直後に、犬

が斬られた……これは、おそらく祐見の仕わざであろう）

と直感をした。

菅野ばかりではなく、藩邸の者のうちでも、この見方をするものがかなりある。

〔お為派〕のものは、

「そもそも、ろくに素姓も知れぬ剣客などを出入りさせるのが間違いのもとなのだ」

と、激昂しているが、この声は〔松之助派〕がつくる壁によって殿まさの耳へはとどかない。

（このままにしておいたら、どのようなことになるやも知れぬな）

菅野六郎左衛門も、さすがに胸がさわぎ、血が燃えてきて、この事件があってからは夜も眠れぬ。

（思いきって、やるべきであろうか……）

何をやるのか……。

殿さまに諫言しようというのだ。いくら自分がいったところできっとどけられはしないが、手をつかねていては、いまにきっと憂うべき事態がおこる予感がしてならない。

そして、菅野の決意が固まらぬうち、予想もし得ない事件がおこった。

その前夜

その日――元禄七年二月九日も昼近くになってのことだが、菅野家の下女でみつというものが、

長屋裏手の井戸へ水をくみに出た。

宏大な松平屋敷内西側の一角にならぶ長屋の裏側は、石畳の通路になっており、片側は七尺の土塀、その向うは馬場であった。

道路には数か所の井戸があり、西側長屋に住むものは、これを共同で使用する。みつも、その井戸の一つで水をくんだわけである。

菅野の北どなりが宮井数馬という藩士の長屋で、宮井家が切れ目になって細い通路があり、その向うに、また長屋がつづいていた。通路は作事奉行詰所の角をまがり、勝手門または裏門への道につづいている。

手桶二つに水をくみ終えたみつが、振り向いて足をふみ出したとき、

「あっ……」

何のはずみか、つるりとすべり、のめるように転倒した。

二つの桶が下女の手から落ち、傾斜ぎみの石畳へ、いきおいよく水がはねた。

「無礼者！」

怒声をあび、あわてて起き上がったみつの眼は、村上三郎右衛門をとらえた。

ちょうど、村上弟は作事奉行所詰の方向からやってきたところで、桶の水が袴のひざのあたりまではねかかっている。

この長屋裏の通路をぬけて行くと、村上兄弟の長屋への近道だし、三郎右衛門がここを通るのはいつものことだ。

「あれ……」

と、みつは息をひいてひれ伏し、

「おゆるし下さいませ、粗忽を……」

いいかけるのへ、

「おのれ！」

村上弟、いきなり足蹴にしたものである。

みつが菅野家の下女と知っていたわけではない。

彼は、少し前に横目付・飯島半之介のところへ出向き、外出許可を願い出たのだが、ゆるされなかった。

まだ〔お犬さま〕事件があってから日も浅いことだし、

「自重さっしゃい」

と、飯島はきめつけた。

事件以来、村上三郎右衛門は外出禁止をくらっている。

「たとえ身におぼえはなくとも、しばらくは外出せぬほうがよい」

松井用人もいうし、兄の庄左衛門も同意であったが、三郎右衛門は、もうたまりかねている。

一日も早く、道場へ駆けつけ、中津川祐見に会い、自分があくまでも口を割らなかったことと、兄の口ぞえで事件がうやむやになってしまったことなどを手柄顔に語りたくて仕方がないのだ。

だから、この日、たまりかねて兄にもいわず、単独で外出を願い出たのだが、折も悪く、当番

の横目は〔お為派〕の飯島半之介で、飯島は菅野同様、村上兄弟が大きらいな男だし、

「部屋住みの身で勝手なふるまい、相ならぬ」

手きびしく、はねつけてしまった。

（飯島め、いまに見ていろ。兄にいいつけてやる。兄から殿さまへ申しあげてくれる）

兄のいうことなら殿さまは何でもおききなさる、という驕りきった心が、いつも三郎右衛門の言動の裏側にひそんでいる。

むしゃくしゃしながら、せかせかと通路を入ってきたとたんに水がかかった。

ふだんの彼なら、いかに何でも、このような手荒なまねをしなかったろうが……。

「う……うう……」

三郎右衛門に蹴倒された下女のみつは、もろに頭を石畳へ打ちつけ、うなり声をあげ、そのまま気をうしなってしまった。

それまでは人気がなかったのだが、このとき、宮井家の妻女が裏手へ顔を出し、このさまを見て、すぐに菅野家へ知らせた。

「この、ばかものめが……」

さすがに、やりすぎたと思ったのであろう。倒れている下女をにらみつけたまま、村上三郎右衛門は立ちつくしていたが、そのうちにつばを吐き、急ぎ足に裏手通路を去りかけた。

「待たれい」

そこへ、菅野六郎左衛門が木戸口からあらわれた。

こうなっては逃げるわけにもいかない。むしろ三郎右衛門は激怒の表情もすさまじく駆けるように戻ってくると、

「これなるは菅野殿が下女でござるか」

「いかにも」

「ごらんなされ。下女めが、それがしに水をかけ申した。この通りじゃ、この通りじゃ」

袴を両手でたたき、三郎右衛門がわめいた。

菅野六郎左衛門は、あわれむかのように見返し、

「わしが家の下女が粗相をいたしたのに、お身は、なぜ逃げられた」

と、いった。

「逃げはせぬ、逃げはせぬ」

三郎右衛門は、むしろ冷ややかな菅野の態度と『逃げた』ときめつけられたくやしさにあおられ、

「それがしが逃げたと申されたな。え、申されたな」

顔面蒼白となり、つめ寄ってきた。

菅野は、取り合わずに下女を抱きおこし、

「これ、しっかりせよ」

いったとき、宇乃が下僕の千代蔵と駆け出てきた。

「みつを早う……」

菅野は妻と下僕に、ぐったりしているみつのからだをあずけ、目顔で家へ入っていよと命じた。いつの間にか、裏手の通路には長屋の人びとがあらわれ、こちらを見守っている。

「それがしが逃げたと申されるか。え、え……」

村上弟は、わめきつづける。

菅野は、じろりと見やって、

「まだ年若い女の粗相をとがめ、お身は、あの下女が失心するまでになぐりつけられたのか、または足蹴にでもなされたのか」

「当然だ、当然ではござらぬか」

「何、それが武士として当然と申されるのか」

「おう……」

「下女めは、おそらく、お身にわびをいうたことであろうが、それでも尚、あのものを折檻なされた。その折檻にも仕様がある。逃げもならずひれ伏していたであろうものを、失心せしめるまでにいためつけられたのか」

「いうな！」

村上は逆上していた。

ならぶ長屋の裏手から、非番の藩士やその家族などが見守っている中で、菅野へはまったく歯がたたぬ自分を感じるだけに、

（菅野の老いぼれごときに……）

何とか有利な形勢へ持ちこんでから引きあげねばならぬ。

というよりも、そのときの村上三郎右衛門は菅野への憎悪で全身が燃えたち、

「武士たるものに対し、逃げたと申されたな。え、逃げたと……」

あくまでも、そこにこだわった。

「いかにも申した」

菅野も、こうなっては退けないし、ながい間、村上兄弟への怒りをこらえぬいてきていたのが一時に爆発し、

「お身は、下女への仕うちを悔んだればこそ、逃げたのでござろう」

きっぱりと、いった。

「うぬ！」

ここで三郎右衛門は何も彼も忘れた。

興奮にふるえる手で刀の柄をたたき、

「おのれが家のはした女の無礼をわびもせず、武士たるものに雑言あびせたからは、覚悟があろうな」

「雑言ではない。まことのことを申したまでじゃ」

「ゆるせぬ」

「ならば、どうする」

「村上三郎右衛門、そこもとに果し合いを申しこむ」

「何……」

「場所、時刻は、いずれ果し状をもって念入れするぞ、よいか、よいな！」

菅野六郎左衛門は、村上を凝視したが、すぐに視線を転じ、

「この始末、どなた方も見とどけて下されたな」

声を張っていうと、すぐに宮井数馬の声が応じた。

「たしかに見とどけた」

宮井も老熟の士で、菅野とは親交もふかい。

「野口平四郎が妻、お見とどけつかまつりました」

「三田村勘兵衛が家内、たしかに……」

などという女の声も、其処此処できこえた。

いずれも「お為派」の藩士の妻女だけに腹がすわっており、いざというときの証人となるつもりでいい出たのであろう。

菅野はうなずき、今度は激しく村上へ向って、

「無益なる果し合い、おやめなされ」

叱りつけた。

「ふン、卑怯者」

「卑怯で申すのではない」

「だまりなさい。卑怯だ、卑怯だ。果し合いがおそろしいゆえ逃げるのだ」

と、村上はうまくいい返したつもりであったが、

「この上卑怯よばわりは、おだやかでない」

菅野六郎左衛門は屹となった。

「よろし。果し合いのこと、おうけいたす」

「よう申された」

村上三郎右衛門は足をふみ鳴らすように石畳を何度も蹴って、

「いずれ後刻」

いい捨てるや、一散に走り去った。

そのころ、中山安兵衛は稲生七郎右衛門の居間へよばれ、細川家仕官のことについて話をきかされていた。

稲生七郎右衛門の居間には、細川家の取次役・軽部兵庫がきており、

「わが主細川越中守にも否やはござらぬようなれども、ちょうど国もとより、家老・有吉四郎右衛門が出府中にござる。有吉の申すに、一応は中山殿と面談の上で、仕官の儀を納得いたしたい、かように申します」

と、いう。

北島雪山から安兵衛の人柄、経歴などをきいてはいても、有吉家老としては責任上、自分の目でたしかめたいのは当然であった。

安兵衛は、おどろいた。

思ってもみぬことである。

しかも、伊佐子の旧主へつかえることができるなどとは、

「あまり、突然のことにて……」

とまどいつつ、稲生七郎右衛門を見ると、稲生は笑い出し、

「わしがところへきてもろうたのも、つまりは細川家仕官の下ぞなえのようなものじゃ」

すべてを語ってくれた。

安兵衛は感動せざるを得なかった。

（おれは、これほどまでに人びとの御好意を甘んじてうけてよいのだろうか。おれは、それほどの人物ではない。逆境にあったこのおれに腕をさしのべてくれた方々は一人、二人ではない、これを幸運の二字で片づけてしまってよいのだろうか……）

二十五歳になったばかりの安兵衛は、自分で自分の価値をはかることができぬ。

ただ夢中で生きぬいているだけなのだが、評価は別のものであった。

安兵衛の全身から発散する何ものかが、彼を知る人びとに好意を抱かせたことだけは事実である。

ふり返って見ると、

（おれは、ろくなことをしてはいない）

と、つくづく思う。

少年のころから物事を思いたつと、それに深い考えを加えることなく、たちまち実行へうつし

てしまうし、だからこそ、新発田を出奔して親類のものへも迷惑をかけた。
女に迷い、主人を捨てて情痴におぼれ、武士の子でありながら借金をしてまで女を追いかけ、そのためには何度もみにくいさわぎをおこし、死にかけてもいる。
彼の経歴といえば、そんなところだ。
菅野六郎左衛門に救われてからは無事にすごしてきたし、剣術にもはげんだが、それはだれでもやれる当然なことなので、
（細川家へ仕官などと……）
まるで夢をみているようにしか思えぬ。
「では明後十一日の四ツ（午前十時）に、藩邸へおたずね下さい」
いいおいて、軽部兵庫が帰ったのは夕暮れになってからだ。
「大丈夫。案ずるな、安兵衛。もはや決ったようなものだが……なれど菅野殿へお知らせするのは、万事が決ってからにした方がよいな」
稲生七郎右衛門の上機嫌な声も、夢の中できこえているような気がした。
夜、雨となった。
この雨の中を、村上庄左衛門が外出し、本所の中津川道場へ向った。
果し状は、まだ菅野の家にとどけられていなかった。
このところ風邪気味で御殿の奥ふかく病床についている松平左京太夫は、家来二人のこのさわぎを、まったく知らない。

道場を訪れた村上庄左衛門から、すべてをきいたとき、中津川祐見は、即座にいった。
「おやりなされ。三郎右衛門なれば菅野にひけはとりますまい」
「そう思われますか？」
「思うも何も……」
祐見は笑った。
「いま申されたところによれば、その喧嘩の始終は御家中の人びとの目にもとまっているそうな。となれば、こなたから申し込んだ果し合いを今さら取り消すわけにもまいりますまい」
「いかにも」
ここはどこまでも村上兄弟が藩士たちの笑いものになってはならぬし、もし、そのようなことになれば松平左京太夫もよろこぶまい。
殿さまがよろこばぬことは、いままで寵愛をうけていた村上庄左衛門への信頼がうすくなることになる。
「よろしゅうござるか」
と、中津川祐見が、
「この喧嘩は、部屋住みの弟ごがすることで、あなたがすることではない」
「左様」
「菅野六郎左衛門には子もなく縁類もうすいときいています。したがって、彼を討ったところで弟ごが敵もちとなることも先ずあるまいし……」

いいかけて、祐見がふっと沈黙した。
村上庄左衛門が得たりと、
「中山安兵衛……」
「なるほど。あの男がいたな」
「それで、相談にまいった」
「ふむ、あやつが出てくるとうるさい」
喧嘩両成敗は武士の掟であるから、菅野を討てば村上弟も浪人の身となって松平屋敷から出ていかねばならぬが、
(そのことなら、おれがうまくはからえよう)
と、庄左衛門は考えている。
国もとの若殿・松之助が、うまく主家の世つぎとなれば、村上庄左衛門としても、
(おれが家老職に成り上がることも不可能ではない)
胸がときめくほどの予感さえある。
そうなれば弟一人の身柄などは、どうにでもしてやれるのだ。
さらに、
(この機会に菅野を討ってしまえば、却ってよい結果を生むやもしれぬ)
と、思いはじめてもいた。
むろん、菅野の死をいたみ同情をよせる〔お為派〕は少なくあるまい。

しかし、菅野の死をよろこぶ〔松之助派〕もいるのだ。

村上たち〔松之助派〕によって、菅野六郎左衛門の存在ほど気味のわるいものはない。

一人きりの男子が早死をして後は養子も迎えず、自分亡き後の菅野家は『つぶれてしまってもよい』というほどの六郎左衛門であるから、いざ両派が次代の（世つぎ）をめぐって争うということになれば、彼のはたらきぶりには予断をゆるさぬものがある筈だ。

しかし中津川祐見は、

（菅野は安兵衛を養子にするつもりであろう。そうなっては、これから松平家の援助のもとに江戸随一の剣士となるべきおれの邪魔になってこよう）

と、別の見方をしていた。

いまの中津川祐見は、松平家からの納戸金（下賜金）もうけていて、

「当家御出入りの剣客とあれば、それだけの威儀体裁もととのえてやらねばなりますまい」

などと、村上庄左衛門がたくみに進言し、松平左京太夫も、

「よきにはからえ」

というわけなのだ。

それだけに、何人も人を殺し、女のことでみにくい争いごとをおこし、盗賊の鳥羽又十郎などともかかわり合った自分の過去が松平家へ知れたら、いままでの計画も一度に消えてしまうことになる。

この一事において、菅野や安兵衛の存在が邪魔になるのである。

また、村上たち〔松之助派〕が柳沢出羽守にたのんでの世つぎ変更の内部工作も着々と進みつつある。

（このさい、菅野と安兵衛を一度に片づけてしまえば……）

中津川祐見の決意が次第にかたまりつつあるのを、村上庄左衛門は敏感にくみとっていた。

「これは……」

ややあって、祐見が重おもしく口をきった。

「これは、どこまでも、あなたの弟ごと菅野との私闘、つまり喧嘩でござる。すべては、そのひろがりの中において片をつけねばなりますまい」

「いかにも……で、中山安兵衛がことを、どう思われる？」

「きやつめ、年に似合わず思いきったところがある。果し合いのことを知れば、必ず……必ずや菅野の助太刀にあらわれましょう」

「となれば……？」

「安兵衛がことは……」

と、祐見がきっぱりいった。

「この祐見におまかせあれ」

「おう……」

村上庄左衛門も、これで安心をしたらしく眉をひらき、

「おたのみ申す。そのかわり、すべての始末がついた後には、村上かならずや御助力におむく

いつかまつる」

「よろしゅうに……」

祐見も如才なく頭を下げて見せる。

「なれど中津川殿。その中山安兵衛と申す者、近ごろは堀内源左衛門の教えをうけ、なかなかの手練者とかきいていますが……」

これに、祐見は苦笑をもってこたえた。

少年のころからの安兵衛を、ほとんど手玉にとってきた自分である。いまさら安兵衛に負けるつもりはないし、

（おれが手を下さずとも……）

とさえ考えている祐見であった。

村上庄左衛門と、くわしい打ち合わせをすませ、村上が帰った後に祐見は門人八名を居間へよんだ。

この八名は、いずれも浪人あがりの門人で、むかし祐見が旅をしていたころに知り合い、手なずけておいた連中だし、殺人経験も一度や二度ではない。

「実はな……」

祐見が果し合いの件を告げるや、

「こりゃ面白い」

「近ごろは血の匂いを嗅がぬで飯もよう喉へ通りませぬでしてな」

一同、色めきたった。

翌二月十日の朝……。

村上三郎右衛門からの果し状が菅野家へとどけられた。

場処は江戸城北・高田の馬場。

日時は、翌十一日の卯の上刻（午前六時）

さらに『これは村上、菅野両人の私闘であるから立合人は不要であると思う』と念が入れてある。

つまり、どこまでも一対一の勝負という意味が匂わせてあった。

菅野六郎左衛門は、ただちに、

「承知」

こたえてやった。

昨日からの雨があがり、朝から妙になまあたたかい。

この年の旧暦二月十日といえば現代の三月四日にあたる。

菅野は前日、下女のみつに介抱をあたえたのち、

「しばらくは親もとへ帰っておれ」

田町に八百屋をいとなむ親もとへ、人をつけて送りとどけている。これは、彼女の水くみが原

因で主人が決闘することになったわけだから、

「みつに心配をさせては……」

という心から出たものであった。

松平屋敷の人びとは息をこらして、この決闘のなりゆきを見まもっている。あくまでも私闘であるからには、藩士として口を出すこともはばかられるし、たとえ下女ひとりが原因であっても、果し合いにかける意気地は、そのころの武士の世界にあってどこまでも尊重されるべきものなのだ。

「御病気の殿には、いま申しあぐるべきではない」

という意見は〔お為派〕と〔松之助派〕も一致したので、依然、松平左京太夫の耳に入ってはいない。

菅野の老妻・宇乃はつとめて落ちついた様子を見せてはいたが、果し状がとどいた日の昼近くなり、たまりかねたように、

「いちおうは、安兵衛どのに知らせなくてはなりますまいか？」

いい出したが、六郎左衛門のこたえは、

「無用」

の一言である。

そのころ……。

中山安兵衛は、稲生七郎右衛門の使いで湯島天神下の野口五十郎屋敷へ出かけていた。野口は

三千石の旗本で、稲生とはかねてから親しい。

この日も、

「別におぬしをわずらわさぬでもよいのだが、かねてより野口五十郎が安兵衛に会わせよと申していたのでな。この書状をとどけるついでに会うてやってくれい」

と、稲生がいった。

安兵衛の評判はよい。

武骨者で通っている野口五十郎だけに、安兵衛と剣法について語りたいらしい。

野口屋敷へいくと、あいにく主人の五十郎は柳島の別邸へ出かけていて留守であった。

「帰りは遅うなってもよい」

と、稲生にいわれていたから、

(久しぶりで、伊佐子どのをたずねてみよう)

安兵衛は思いたった。

この前に会ったとき、椎の実を伊佐子に投げてもらい、そのまま木の実の入った革袋をあずけてあった。

「では、明日にも参上いたしますゆえ、野口様の御返事を……」

といいおき、天神下からまっすぐに、安兵衛は坂本へ向った。

安兵衛が伊佐子の家をたずねようとするころには、村上三郎右衛門は若党の木津精助というものをつれ、松平屋敷を出て、本所の中津川道場へ到着していた。

木津は若くもあるし気性も激しく、村上弟の供をして道場通いをするうち、

「お前も稽古をしたらどうだ」

祐見にすすめられ、木太刀をとってみると進歩も早く、三郎右衛門のゆく先には必ずこの男が供をするほどに気も合う。

木津は明朝の決闘にも供をするつもりである。これは三郎右衛門の仕度その他の世話をするためで、その意味でなら菅野六郎左衛門も誰か一人、供をしたがえていくにちがいない。

村上三郎右衛門は中津川道場から高田の馬場へ向うつもりだ。

「三郎右衛門は部屋住みの身にて、しかも私闘をおこなうよし、主家御屋敷より出発させるはおそれ多し」

というのが、村上兄のいい分であって、なかなか心得たものである。

「ま、ゆるりとしていたらよい」

三郎右衛門を迎え、祐見が、

「あの老いぼれ、とても貴公の敵ではないわ」

先ず、自信をもたせた。

緊張してはいても、

「むろんのこと」

と、村上弟の鼻息もあらい。

「まだ早い。夕暮れまで玉やで酒でものみ、ゆるりと遊んでまいられい」

祐見は門人三名をそえ、神田川河岸の船宿へ三郎右衛門を出してやり、

「さて、これからだが……」

腹心の門人、土屋惣七、佐々木丹丸、杉山久之進の三人をよびあつめた。

今日は稽古も昼までで打ち切り、旗本の子弟や大名の家来などの門人たちは、むろん村上弟の決闘のことを知らずに帰っていったのである。

「おそらく、菅野家から中山安兵衛へ助太刀のたのみがあると思う。安兵衛は、いま牛込の稲生屋敷にいるわけだが、そこへ菅野からの使いの者がいくことになろう。で、昨夜から三井、橋本の二人に松平屋敷と稲生屋敷を見張らせているところなのだ」

「それで先生、安兵衛を討つのは……？」

「それを、おぬしたちにやってもらう」

「心得た」

「ちと手強いやつだが、実戦の場で何度も白刃の風をあびてきたおぬしたちが押し包めば、こりゃ勝負は知れておる」

土屋たち三人は、いずれも三十をこえたばかりの屈強ぞろいで、

（中山安兵衛ごとき、おれ一人でたくさんだ）

むしろ、不満の色が見える。

「ただし」

と中津川祐見がつけ加えた。

「安兵衛を高田の馬場へいかせてはならぬ。知らせをうければ、すぐにきやつめは松平屋敷へ菅野をたずねるであろうが、そのとき……そのときが夜であろうと昼であろうと、かまわぬ、路傍において斬れ。もしも通行のものに見られたら逃げよ。すばやく江戸をはなれて一年後に戻れ。そのときの恩賞をたのしみにな」

このとき、見張りの一人、三井亀之助が駆け入ってきて、

「先生。安兵衛はいま、他行（外出）中にござる」

と、告げた。

「何、安兵衛が、どこへ？」

「は――稲生の使いらしく、湯島天神下の旗本屋敷へ入りましたが、間もなくあらわれ、上野広小路から坂本へ……」

と、三井亀之助が報告するや、

「坂本……では、あの女剣術のところか」

土屋惣七が、ひざをのり出した。

「いかにもそこまで見とどけ、これへ――」

「で、安兵衛はだれが見張っておる」

と　祐見。

「いや先生。それがまだ……」

別の一人、橋本分蔵は松平屋敷を見張り、菅野からの使いが出るのを待っているという。

安兵衛が伊佐子の家へ入るのを見とどけてから、すぐに三井が道場へ駆け戻ったのは見張りの人数をふやしてほしいというのであった。

「よし、とりあえず土屋がゆけ」

祐見に命じられ、土屋と共に三井はまた外へ飛び出していった。

「めんどうな——坂本におるのなら、あの女ともども叩き斬ってしまってはいかがだ、先生」

佐々木丹丸が叫んだ。こやつは、一度だけ、伊佐子に喧嘩を売られ両国橋の上から、刀を大川へ巻き落とされたことがあるだけに、

(いつかは、あの女、おれ一人だけでも殺る)

と、いい放っていた。

「まあ、待て」

祐見は沈黙し、庭の日ざしをながめた。

昨夜の雨があがってから、急に春めいてきて、陽光もやわらかく、しきりに小鳥の声がする。

すでに八ツ(午後二時)であった。

祐見は机に向い、手紙を書いた。船宿にいる三名の門人のうち年長の阿栗小兵衛へあてたものである。

その大意は『おぬし一人残り、北山、関の二人をすぐ道場へ帰してほしい。おぬしは村上弟の気をしずめ、適度に酔わせておけ。おそくも夕暮れまでにはわしが迎えに行く』と、いうものであった。

この手紙を下男にもたせてやった後に、
「安兵衛は、おそらく日暮れ前に女の家を出ることはあるまい」
と、いった。
「二人とも、ゆるりと仕度せよ。斬りこみをかけるなら日が暮れてからのほうがよい」
「承知」
「ともかく、安兵衛を高田の馬場へよこしてはならぬ。菅野と村上は、あくまでも一人と一人の勝負にしておきたい。それでなくては村上庄左衛門の体面にかかわろう」
「で、先生は？」
「おれか。おれはな……」
いいかけて、中津川祐見はにやりとした。
「おれがことは、ま、よいわ」
安兵衛は、そのころ……。
「久しぶりのことだ。伊佐子どの、木の実を投げてくれぬか」
と、たのんでいた。
「道場へは隙なく通っているのだが、木の実切りの稽古は、あのとき以来やっておらぬ」
「おやすいこと」
伊佐子のこたえは町民ふうのものだったし、声も妙になまめいていた。
伊佐子が革袋の木の実を手のひらへあけこぼしているのを見て、安兵衛は太刀を取り庭へ出た。

晴れていながらも、どことなく淡いくもりをみせて、おもたげに陽光をふくむ空を雁がわたっている。

（春なのだなあ……）

安兵衛は、みちたりていた。

（伊佐子どのは、おれが明日、細川侯へいくことを知っているのだろうか……いや、知っていれば、まっ先に話しかけてくるにちがいない。おれが細川家の臣となり、伊佐子どのと夫婦になる。もし、そうなれば……これは思ってもみなかったことだ）

刀の下緒をといて襷にまわした。

「安兵衛さま。よろしい？」

あけ放った縁側へ坐った伊佐子が声をかけてきた。

「うむ……」

安兵衛は柄に右手をかけ、両眼をとじて神気をととのえはじめた。

伊佐子の指が、木の実をまさぐる。

二人は、約四間をへだてて向い合っていた。

やがて見ひらかれた安兵衛の双眸に光が凝って、しずかに大刀が抜き放たれた、その瞬間である。

「や！」

伊佐子が低く気合を発し、ひざのあたりからすいあげるようなかたちで木の実を投げ打った。

きらり、安兵衛の刀身が陽の光をはねた。
「あ……」
伊佐子が腰をうかし、よろこびの声をあげた。
安兵衛は、むしろ茫然として、庭の土を見つめていた。
木の実は見事に両断され、上の上へ落ちている。
「安兵衛さま、切れましたな」
「切れた、な……」
かがみこんで木の実を手にとった。
思わず、嘆息した。
伊佐子が庭へ飛び出してきた。
「ようも、まあ……」
「思いもかけなんだ。伊佐子どのの投げようが上手だったのだろう」
「いいえ、わたしとて、手裏剣をうつつもりにて投げましたものを……」
「まことか？」
「まことのこと」
「はじめてのことだ」
「はい」
「いや、その……飛んでくる木の実が、あのように大きく見えたのは、はじめてのことだ」

「それだけ眼力が強うなられたのでしょう」
「まさか……このところ、木の実を相手の稽古はしておらぬし……」
「なれど、道場へは毎日……」
「それは……なれど、いままで、どのようにしても切れなかったものを……」
「まことの修行の進歩は、自分でわからぬのが本当じゃと、辻月丹先生も申されてございますよ」
「切れた……とにかく、切れた」
「いま一度、お切りなされませ」
安兵衛は首をふって、いった。
「今日は、これでやめよう」
今度、切り損うのが怖いような気がする。
(いや、これでもう木の実切りをやめよう。それでよいと思う)
ながい間、苦悩してきただけに、うれしかった。
堀内源左衛門も、
「もしも木の実を両断したるときは、二度と切るな」
と、いっている。その意味がどんなものかは知らぬが、このときの安兵衛は素直に師の言葉へ従っただけにすぎない。
「なれど……ついに切れたなあ」

部屋へ上がり、寄りそいながら安兵衛の掌の上の両断された木の実を見ている伊佐子の顔がこちらの肩へふれていた。

その髪あぶらの匂いと、彼女のえりもとからただよう杏の実のような体臭が、安兵衛の血を熱くした。

「切れたなあ……」

と、またいった。

「切れました」

と、伊佐子。

「切れたな、伊佐子どの」

「あい……」

「き、切れた」

「あい……」

見上げてくる伊佐子の視線も熱しきっていた。

切れたよろこびが安兵衛を興奮させ、その興奮が今度は得体の知れぬ情熱に変って

「い、伊佐子どの……」

安兵衛の声が重くるしげになったかと思うと、いきなり女のからだを突き放した。

折角もりあがってきたと思ったのに、と、伊佐子のほうでは気ぬけがしたほどだが、これはちがう。

立ち上った安兵衛は庭に面した障子をしめきり、ふり向いて、火のような眼つきで伊佐子を見すえた。

下僕の甚蔵は、三河島の農家に嫁している姪のところへ出かけ、留守であった。

「安兵衛さま……」

さそいこむような伊佐子の声がした。

安兵衛が走り寄って、いきなり伊佐子を抱きすくめ、唇を千切れるほどに吸った。

「あ、痛い……」

女武芸者にしては、しおらしい。

「ご、ごめん」

「あれ……」

「ゆるされい」

あとは、筆者も知らぬ。

同じ時刻……。

菅野六郎左衛門は居間の机に向い、ながい手紙をしたためている。手紙というよりも、これは主君・松平左京太夫へあてた諫言状なのである。

昼飯をすましてから筆をとり、およそ二刻（四時間）をかけて書き終えるや、これを文箱へおさめ、さらにまた筆をとった。

今度は中山安兵衛へあてた遺言であった。これは、しごく簡単なものらしく、さらさらとした

ため終えるや、別の文箱へおさめる。
そばにいた老妻は、
（さては、安兵衛どのに助太刀をおたのみなされようとて……）
と、胸はずんだが、菅野は、
「この文は、わしが死後、安兵衛へな」
しずかに命じた。
紀州屋敷の塀外で、向い側の松平屋敷から出てくるだろう菅野の使いを見張っている中津川の門人・橋本分蔵のところへ、
「まだ出てまいりませぬか？」
村上の若党・木津精助が走り寄ってきた。
すでに夕暮れである。
「お、精助か。まで出てこぬぞ」
「やがて出てまいりましょうが、そのとき、これをつけてゆき、適当なところで斬り捨てよ、とのことで」
「中津川先生の御命令か」
「いかにも」
「よし、わかった。が、しかし、中山安兵衛はどうする？」
「いま、坂本の、例の女武芸者の家へあらわれたそうで」

「ほう、知らぬのかな、今度の事件を……」
「知らぬと、思われます」
「では、女ともども、坂本で片をつけてしまうのだな」
「よくはわかりませぬが……中津川先生におまかせしておけばよいでしょう」
「もっともだ」
新橋の船宿〔玉や〕にいた木津精助は、祐見が阿栗小兵衛へあてた手紙の中の指令によってうごいたのである。
「で、木津。お前、これからどうする？」
「このまま、まっすぐに高田の馬場の近くへゆきます」
「果し合いは明朝ではないか」
と、橋本分蔵は不審そうだったが、これは祐見の手配によるものである。
試合当日、まだ夜も明けぬうちに本所の道場を出て、遠い高田の馬場へ向うのでは、村上三郎右衛門の力を殺ぐことになる。
それよりも前夜のうちに決闘場の近くまでゆき、ゆっくりと躰をやすめておいた方がよい。
高田の馬場の近くに穴（高田）八幡神社があることはすでにのべたが、この八幡神社の北側に放生寺という寺があって門前町もかなり大きく、町内に〔京や・清左衛門〕という薬種屋がある。
清左衛門は京都の出身で、鍼医をしていた中津川祐見とは、双方とも父親の代からの知り合いだ。

当代の清左衛門は祐見と年齢も同じで、口もかたいし、世故にもたけており、

「京やなら大丈夫」

と、祐見は朝のうちに手紙を持たせてやり、清左衛門の内諾を得ている。

京やへ村上主従と自分も泊り、明朝は目と鼻の先の高田の馬場へ出かけ、悠々と菅野六郎左衛門を待とう、というのだ。

だから、若党の木津精助が橋本分蔵と別れて〔京や〕方へ向うころ、船宿〔玉や〕へは、道場を出た中津川祐見があらわれ、

「村上うじ。そろそろ出かけようかな」

と、うながした。

駕籠二挺をやとって、これに村上弟、祐見が乗り、門人、阿栗小兵衛がつきそい、濃い夕闇の中を〔京や〕方へ向ったのは、それから間もなくのことであった。

祐見たちが船宿を出てゆくころ、本所の中津川道場からは、佐々木丹丸、杉山久之進に、船宿から戻った北山、関の二人を合わせた四人の門人が、坂本の伊佐子宅へ向った。

先発して見張りをつづけている土屋、三井をふくめ計六人が安兵衛を襲撃することになったわけだ。

道場を出るとき、

「万一のときの用意じゃ」

と、佐々木丹丸は半弓と矢を布に包み持った。

佐々木は、むしろ安兵衛よりも伊佐子を恐れている。安兵衛を襲うのは彼が伊佐子の家を出てからだし、夜の闇の中で斬合うことになるから弓のねらいもつけにくいわけだ。

だが、弓を持ってきた佐々木丹丸には別の考えがあった。

ここで、また船宿〔玉や〕へもどる。

祐見たちが出てゆき、しばらくしてから、大川をわたってきた小舟が一つ、玉やの前へ着いた。舟から飛び出した船頭が、

「旦那のおつきだぜ」

玉やへ声をかけると、老主人が奥からあらわれ、

「これは、おそろいで……」

入ってきた二人づれを出迎えた。

この二人づれ、鳥羽又十郎とお秀なのである。又十郎は着流しに両刀を帯し、れっきとした旗本の微行でもあるような姿であった。ちなみにいうと、いまの〔玉や〕の主人は、数年前まで四谷御門前で茶店を出していた孫四郎という老爺であった。

四年前、林光寺から菅野家をはじめておとずれる安兵衛を見つけた又十郎一味の銭神左市が、見張りをたのんだのが、この孫四郎である。あのとき孫四郎のいいつけで、松平屋敷を見張った少年の助松は、いま十九歳になり、玉やの船頭をしているのだ。だから、この船宿は依然として鳥羽又十郎の息がかかっているらしい。

一度は店をたたんだが、今度は配下の孫四郎を主人にして経営させ、鳥羽又十郎はお秀と共に、川向うの小梅村あたりで瀟洒な生活をいとなんでいるのだ。

孫四郎にみちびかれ、又十郎と共に奥の部屋へ通ったお秀の右腕は二の腕のあたりから切断されてい、たれさがった着物の袖が帯にとまっていた。

けれども、お秀は元気である。

又十郎一味に襲われ、伊佐子の家へころげこんだときの憔悴は、いまの彼女のどこにもみることはできない。みっちりと肥えた躰にも年増女の精気がみなぎっているようだし、又十郎に語りかける顔の表情にも、みちたりた女のよろこびが匂いたっていた。

その復讐を恐れ、さらに片腕まで斬り落とされたお秀なのだが、

「これで、おれの気もおさまった」

又十郎は引きさらってきたお秀を介抱し、そのまま、ずるずると一緒に暮らすことになった。

二人の情欲のふかさが、次第に奇妙な愛情を生んだものであろうか……。

「ここも繁昌しているようだの」

と、又十郎は小女が運んできた膳について、お秀の酌をうけた。

「へえ、どうやら……」

孫四郎は微笑をもらし、

「お頭。私はもう、このまま、ここをうごきたくございませぬよ」

「いいとも」

「左様で？」

「うむ。お前も年をとったものな。この船宿の亭主でいてくれ。おれも、これで死ぬ前にはもう一度、大仕事をやってのけるつもりだが、孫爺には残ってもらおう」

「また、おやりなさるおつもりで？」

「まあ、いまのままでいれば、お秀と一緒に老いぼれるまで、何とか食べてもいけようが……それも、いささかさびしいではねえか」

「へえ……」

「ながい間、おれに手を貸してくれた仲間にも、最後にひとつ、いいおもいをさせてやりたい」

すると、お秀が、

「もう、いや……」

甘えるように躰をすり寄せ、

「加賀の浪人、伊丹伝兵衛で、このまま、ひっそりと、暮らしなさる気になって下さいまし」

「わかった、わかった」

又十郎は笑いながら、

「ともかく孫爺よ。この船宿があるので、おれも安心だ。落ちぶれた仲間の息をぬく場処ができたというものだからな」

真の大盗賊は、終りを全うするものだという。

種々の大仕事を重ねた末、一度も警吏に捕えられることなく、一味のものの始末もきちんとつけてやり、首領たるおのれは、市井の一隅に何気なく暮らし、悠々と老いていく。これが大盗賊の手本ともいうべきなのだろうが、果して鳥羽又十郎が、その気になっているかどうか……。

いま、又十郎が考えていることは上方（関西）での大仕事で、そのためには配下の者を、京にも大坂にもひそませてある。

だが、ふたたびお秀と暮らすようになってからは何となく腰が重くなったようで、

（これなら、お頭も、うまく畳の上で大往生をとげられよう）

と、孫四郎もお秀に味方をしはじめている。

まだ老いこむ年ではない鳥羽又十郎なのだが、足を洗うのなら一日も早いにかぎるのである。

「ところで、お頭」

しばらく酒をくみながらの世間ばなしがつづいてから、ふと思い出したように孫四郎がいった。

このとき、お秀は手洗いに立っていて、部屋の中は二人きりである。

「お秀さんがいねえところで、ちょっと、お耳に入れておきましょうかね」

「何のことだ？」

「昼すぎから夕暮れまで、いつもくる中津川の門人どもがやってきましてね」

「ふうん。祐見め、この船宿に、まだおれの息がかかっているとは思っても見ぬだろう。それにしても……あやつ、このごろは江戸でも名を知られるほどの男になった。お秀のことを考えたら、祐見の腕一本、叩き斬ってもいいのだがな」

又十郎は苦笑をしたが、いまはもう、その気もないらしい。

「お頭。今日のはなしは、ちょいと面白うございましたよ。もっとも、あの中山安兵衛とかいう侍にかかわり合いのあることなので、お秀さんの耳へは入れねえほうがよいかと思いますが……」

「え。何のことだ？」

孫四郎は、部屋の一隅に見える柱に手をかけた。すると、どんな仕かけがしてあったものか、四寸角の柱の皮がばくりと口をあける。中は空洞であって、その空洞が二階の部屋——つまり村上弟や中津川門人たちが酒をのんでいた部屋のどこかへ通じているらしい。

二階の話し声は、この空洞をつたわり孫四郎の耳へもれなくきこえるわけであった。

「……なんでも、その果し合いの相手の菅野六郎左衛門というお人は、中山安兵衛の義理の叔父ごだそうで……」

「うむ、そうだ」

お秀が部屋へあらわれたときには、二人とも笑いながら別の話をしていた。

「おい、お秀」

「あい」

「おれはな、ちょいと孫爺に話がある。お前、先へ帰ってくれぬか」

「いや」

「これさ、ききわけのねえことをいうものじゃねえ」

「浮気をなさろうと……」
「ばかな」
「では、大仕事の話でも……」
「そんなことではない」
「それなら私がいてもいいじゃござんせぬか」
「これ、小むすめであるまいし、いいかげんにしろ」
いわれて、お秀もばかばかしくなったのであろう。
「では、お先に……」
やがて、彼女は助松の舟に乗り、小梅村へ帰った。
「どうも、その話の様子では、菅野の果し合いを安兵衛は知らぬらしいの」
今度は、ゆっくりと話をきき直してから、鳥羽又十郎は盃をなめつつ、
「さて、こいつは面白くなった」
つぶやいた。
そのころ——。
坂本では、安兵衛と伊佐子が夕飯を終えたところであった。
下僕の甚蔵には、偶然にも、
「たまには姪ごのところへ泊っておいで」
と、出してやったので、今夜は帰らぬ筈だし、伊佐子としては安兵衛を帰したくない。

白昼の光の中で、伊佐子は、はじめて〔女〕になった。

あれから、どうやって夕飯の仕度をととのえたのか、自分でもわからなかった。二十三歳の、おそすぎた女の花がひらいたのである。

「馳走になりました」

「いや」

「何が？」

「他人行儀なおっしゃりようなのですもの」

「そうかな」

男が見つめると、伊佐子の喉もとから顔へ見る見る血の色がのぼってくる。

かと思うと、何もいわずに女のほうから、ひたむきな視線を射つけてくる。すると今度は安兵衛がうつ向いてしまう。

互いの、先刻ふれあった肉体の其処此処が、膳をへだてていても、まだ強烈に求め合っていた。

「い、伊佐子どの……」

膳をおしのけ、安兵衛がにじり寄って、

「もはや、帰らねば……」

「いや」

「なれど主命によって出てきたのだから、いくら遅くなってもよいといわれても、帰らねばならぬ」

伊佐子の肩を抱き、安兵衛は、女の閉じた眼の瞼の上へ唇をつけながら、
「これで、きまった」
「あい……」
「もはや二人は夫婦だ」
「はい」
「いささか、今日の、私のしたことは、軽率にすぎたやも知れぬが、細井広沢殿にたのみ、きっと夫婦に……」
「うれしゅうございます」
甘えかかる伊佐子に、かつての勇ましい女武芸者のおもかげはどこにもない。
「では……」
思いきって、安兵衛がはなれた。
「今度は、いつ？」
「近いうちに、必ず……というよりも、伊佐子どのも、私を訪ねてほしい」
「かまいませぬか？」
「がまわぬとも。稲生様も、あなたのことは御存知だ」
「ま、なぜに」
「細川侯御家来、軽部兵庫殿な、御存知であろう」
「はい。よう知っております。亡き父とも親しき間柄にて……」

「軽部殿と稲生様とは、ずっと以前から親しき間柄なのだ」
「まあ……」
ここで、細川家仕官のことをいいかけたが、
（いや、まだ、はっきりと決ったわけでないのだから――）
こらえたが、安兵衛の面は、よろこびにかがやいて見えた。
「よかった。伊佐子どののことが、はっきりとして……」
「わたくしも、ほんに、うれしい……」
安兵衛が伊佐子の家を出たのは五ツ（午後八時）少し前であった。
善養寺門前から坂本の通りを上野へ向う安兵衛の後から、
「それ……」
見張っていた中津川門人たちが、ひたひたとつけていく。
そのうちに、
「おりゃ、もう我慢がならぬ」
と、佐々木がいい出した。
「みんな、一足先へいってくれい。おれは、あの女を叩き斬ってくる」
両国橋の上から、おのれの大刀を叩き落とされた屈辱が忘れきれぬ佐々木なのだ。
「よし、だが、一人でいいのか」
土屋惣七が足もとめずにいった。

「いいとも。では……」
佐々木は半弓の包みを見せ、
「こいつでやる」
「ふン、なるほど。よし、血祭りにあげてこい。ただし、見つかるなよ」
「心得た」
佐々木は一散に駆け戻っていく。残った五名が安兵衛をつけて上野山下へ出るころ、松平屋敷の長屋で、菅野六郎左衛門は寝入っていた。
菅野は夕飯のときに、かるく酒をのみ、そのまま床へ入ったのである。
（いまじゃ）
と、老妻の宇乃は思った。
すでに、安兵衛へあてた手紙はしたためてあった。
「……主人は知らせるなと申しますが、私としては何としても心もとなく——というのも村上兄弟ゆえに、どのようなたくらみがあるやも知れませぬ。こちらへきてもろうては菅野も承知をいたしますまいし、安兵衛どのが明朝卯の上刻までに高田の馬場へおもむき始終を見とどけて下さるなら、どのように心強いことか」
というのが、その文面の大意であった。
「佐次兵衛は、おりますか」
宇乃は足音を忍ばせて、家来の部屋へいった。

明朝の供はゆるさぬ、と、菅野からいわれている若党の佐次兵衛と家来の大場一平だが、

「いかぬと申されても勝手についてゆこう」

と、二人いい合っている。

宇乃は、すばやく手紙をたのんだ。

佐次兵衛は勇気百倍といった顔つきになり、

「中山様がおいで下さるなら、もう大丈夫でござります」

大場一平も、

「なにしろ村上三郎右衛門は昨日から御屋敷内におりませぬし、兄の庄左衛門は御側御用人はじめ御重役方と、しきりに密談などをいたしおるそうで……何をたくらむやら知れたものではありませぬ」

「私も、それが気がかりで……」

「では、いってまいります」

佐次兵衛は、ろくに身仕度もととのえず、すぐに宇乃の書状を持ち、長屋を出ていった。

この時刻の外出はゆるされぬことだが、家中のものは、みな今度の決闘のことを知っている。

勝手門の番士も、

「主人の急用にて――」

と、佐次兵衛がいえば、

「通られい」

そっと、潜門をあけてくれた。

（出てきたな）

向う側の紀州屋敷塀外にある松の木陰にしゃがみこんでいた橋本分蔵も立ち上って、

（どこで斬るか……）

濠端へ向って駆けるようにゆく佐次兵衛の提灯の光りを追わんとするとき、

「おい……」

闇の中で声がした。

「え……？」

「卑怯だね、お前方は……」

「何――だれだッ」

ふくみ笑いが、これにこたえた。

「出ろ、出てこい」

見る見る佐次兵衛の提灯が遠去かり、濠端を左へ曲って見えなくなった。

橋本分蔵は気が気でない。

「おのれ！」

ぎらりと刀を引きぬき、声がした闇の中へ突進すると、

「こっちだ、こっちだ」

背中で声がした。

「出ろ！」
「ついておいで」
声が濠端の方角へ遠去かっていった。
安兵衛が帰り、しばらくしてから、伊佐子は雨戸を閉じに立った。
このとき、佐々木丹丸は庭の向うの垣根の外にひそみ、すでに半弓へ弦をかけ、矢を番え、待機をしていたのだ。
縁側に、伊佐子があらわれた。
雨戸をくりはじめた。
その所作にも、彼女のよろこびがはずむように見えたが……。
（うぬ！）
音をたてぬように、少しずつ、佐々木は弓を引きしぼっていった。
伊佐子は部屋の灯を背後にしている。
佐々木丹丸にとって、これは絶好の標的であった。
矢は闇を切り裂いて飛んだ。
「あっ……」
さすがに絶叫をあげて倒れた伊佐子の胸へ吸い込まれるように突立った矢が、佐々木にも、はっきりと見えた。
「むッ……」

うめきつつ、伊佐子は居室へ逃げた。
「くそ！」
佐々木は半弓を投げ捨て、抜刀し、けだもののように突進した。縁側へ駆け上って、見た。
左わきを下に、伊佐子が倒れている。
矢は突立ったままで、まだ血はふき出していない。
「おぼえたか。死ねい！」
わめいて、大刀を逆手に伊佐子のくびのあたりを突き刺そうとしたとき、ばね仕掛けの人形のように伊佐子が飛び起きた。
「あ、おのれ……」
佐々木は、よろめいた。
伊佐子の手が刃物のように脚をはらったのである。
「うぬ」
立ち直ろうとするとき、伊佐子が佐々木の腰から脇差を引きぬいた。
あわてて大刀を振りおろした佐々木の腹へ、伊佐子が躰を打ちあてた。
「うわ、わわ、わ……」
血が、しぶいた。
佐々木丹丸は腹に脇差を突き通されたまま、もんどりをうって転倒した。
これを見返りもせず、伊佐子が、うめき声をあげつつ、縁側へ、そして庭へ出て矢を引き抜き、

「ああっ……」

激痛に思わず叫んだ。

だが伊佐子は、よろめきつつ、善養寺へ向った。

そのころ……。

菅野家の若党・佐次兵衛を追っている中津川門人の橋本分蔵は、まだ闇の中の声になやまされつづけていた。

四谷御門をすぎ、前方に市ケ谷御門をのぞむ濠端の道であった。

右手は江戸城の外濠、左手は武家屋敷の土塀がつらなり、文字通りの「うるしの闇」である。

若党の提灯も、もう見えない。

「おい、卑怯だぞ」

とか、

「お前の師匠の中津川祐見も思いのほかの悪党だな」

とか、相手の声は、前方の道にきこえたかと思うと、突如、橋本が走っている土塀の上からふってきたりする。

橋本、もう夢中で大刀を振りまわしながら、なかば狂人のようになっていた。

「で、出てこい……な、何者だ……」

尾張家六十万石の宏大な屋敷をかこむ塀のあたりへきかかったころ、橋本分蔵は錯乱状態になっていたが、

「もういいだろう。お前のようなやつ、生かしておいてもろくなことはすまい」

尾張屋敷の塀から鼯鼠のように飛びかかった人影が、橋本分蔵へくみつき、くみついたと思うと、すぐにはなれ、

「あばよ」

たちまちに遠去かりつつ、

「冥土のみやげにおぼえておけ。おれはな、天下の大盗、鳥羽又十郎というものだ」

あとは、橋本のうめき声のみが残された。

「うう……く、くく……」

大刀を杖に、それでも必死で、橋本は歩こうとしているが、駄目だ。

ついに、うつ伏せにたおれた。ぴくりともしなくなった橋本分蔵の背に、白鞘の短刀が深く突き立っていた。

ここから市ヶ谷御門をすぎ、しばらくいって火除地の角を左へ曲り、旗本屋敷のならぶ坂や道を西へ進めば四谷の稲生七郎右衛門の屋敷はすぐである。

走りながら、鳥羽又十郎は黒頭巾をかなぐり捨てた。

黒っぽい小袖を着流しにしたままだが、両刀をさし、又十郎は〔玉や〕にいたときのままの武家姿である。

息もきらずに稲生屋敷の門前へ駆けつけると、屋敷内から出てきた足軽二名が定紋入りの高張提灯を高だかと表門の両わきへ立てたところであった。

おそらく、菅野からの使いを迎えて、稲生屋敷が一度に緊張をしたものらしい。

（よかった。これで安兵衛も男になれよう）

又十郎は足をとめ、微笑をうかべた。

又十郎も、いや、このことをつたえた一味の孫四郎も、まさかに安兵衛が外出しているとは知らない。

船宿の二階での、村上弟と中津川門人たちとの会話を、孫四郎は柱の空洞からきいたことはきいた。

だが、坂本の伊佐子のことや、それに対する中津川祐見の手くばりなどはききもらしたか、または村上たちの会話にのぼらなかったか、である。

（これでよい、これでよい）

だから鳥羽又十郎は、すぐにこの場から去った。

（安兵衛どのよ。おれも気が向いたら、明日の勝負を見にゆこうよ。何しろ祐見とおぬしとの決闘だ、こいつは見ものだからな）

しかし何といっても、菅野の妻の手紙が無事に稲生屋敷へとどけられたのは、又十郎の助力によるものだ。

けれども、肝心の中山安兵衛は、まだ帰邸していない。

それをきいた若党の佐次兵衛は、

「お願いにござります。一大事にござります」

思いきって手紙を用人の大沢重四郎に見せた。

一読して大沢用人はおどろき、すぐに主人の稲生へ告げるや、稲生七郎右衛門は、

「表門をひらけ。たれか馬を飛ばせて湯島天神下の野口五十郎屋敷へゆき、安兵衛の足どりをさぐれ」

大声にいいつけた。

菅野の若党・井上佐次兵衛が稲生屋敷へ駆けこむ少し前に、安兵衛を追う中津川門人五名は、

「佐々木は追いついてこぬか」

「こぬぞ」

「ぐずぐずしてはおられぬ」

「よし、やってしまおう」

彼らの前方に、伊佐子から借りた提灯をさげてゆく安兵衛は、そのとき不忍池（しのばずのいけ）と仲町の町家との間の道を西へ向っている。

町家が切れると、彼方に榊原式部大輔の中屋敷をへだてた草地で、これは、すぐのちに茅町一丁目の町家となったところだが、いまはまだ小屋一つ建っていない。

安兵衛は、この草地を突切ろうとして足を速めかけたが、

（や……？）

あたりの闇が、急に、ぐーっと自分の躰を押し包んでくるような異状を感じた。

「だれだ？」

立止って提灯をかざした背後から、
「くたばれ？」
浪人くずれの門人のうちでは若い三井亀之助が走り寄って、
「えい！」
力にまかせた刃が、うなりを生じて襲いかかった。
提灯が飛んで消えた。
「名乗れ」
安兵衛は三井の一刀をかわし、ほとんど、そのままの位置で腰を低くすえ、
「何者だ？」
こたえはない。
暗いが、黒布で顔を隠した刺客五名、ひたひたと追ってくる。
前にものべたことだが、この五人は安兵衛の力量はまったく知らぬ。
いつか本所で、祐見と伊佐子の間へ安兵衛が割って入ったときも土屋惣七、北山平次の二人は安兵衛を見ているのだが、
「何、大したことはない」
「安兵衛よりも、あの女武道のほうが手強いさ」
見くびっていたし、祐見も、
「子供のころから乱暴なやつでな、なれど、おれが玩具にしてきたほどのものさ」

問題にもしていなかった。
それをきいているだけに、五人の刃は先ず安兵衛を包囲すると、
「おれにまかせろ」
土屋惣七がいい、ぬっと安兵衛の前へ立ちはだかった。
「若僧、覚悟はよいか」
「名乗らぬつもりか」
「問答無用」
「鳥羽又十郎一味の者か……？」
と、安兵衛がいったのは、いまのところ、それよりほかに自分を襲うものの見当がつかなかったからであろう。
土屋惣七のこたえはなかった。
いきなり、まだ刀を抜かぬ安兵衛の頭上へ必殺の一刀が打ちこまれた。
闇が、激しくゆれうごき、
「うわあ……」
絶叫をあげ、棒を倒すように土屋がのめった。
土屋を抜打ちに斬って、安兵衛は、ななめ右へ跳躍（ちょうやく）した。
また、悲鳴があがった。
三井亀之助が、よろめき、がくりと膝をついた。

そして、ゆっくり倒れ伏した。

残る三人も、この早業を見てぎょっとしたらしい。

「油断するな」

「何の……」

と、それでも、さすがに何度も実戦の場を経験しているだけに、おめおめとは引き下がらぬ。三本の白刃を迎えた安兵衛も、もう物はいわなかった。

前に杉山久之進、右に関文四郎、北山平次は平正眼にかまえ、じりじりと左から安兵衛の側面をねらう。

夜の闇の中での斬合いだけに、間合もはかれず、互いに互いの呼吸をはかり合って、一対三のにらみ合いがしばらくつづいたが……。

「おう！」

いきなり安兵衛から斬って出た。

猛然と正面の杉山へ打ちこんだ一刀は、見事にかわされたが、安兵衛の躰は前へのめりかけたようにも見える余勢を駆って、左手の北山が平正眼から上段にふりかぶり斬りつけようとする出端を、

「たあっ！」

すくいあげるように胴を払った。

あとは乱闘になった。

北山がたおれてしまうと、あとは二対一である。
三人の男が斬り合うひびきが地に鳴り、熱しきった呼吸が入りみだれ、草原の束から西へ移動した斬合いが、関文四郎の悲鳴と共に一度しずまったかと見えたが、
「えい！」
「おう！」
残った杉山久之進と安兵衛の躰が、すさまじくもみ合って離れたとき、
「ざ、残念……」
ふらりと草地を泳いだ杉山の手から、刀が落ちた。
安兵衛は、荒い呼吸をしずめつつ、くずれるように倒れた最後の敵をながめた。
（な、何者か……？）
刀にぬぐいをかけ鞘をおさめ、其処此処に倒れている五人の顔をあらためたが、見おぼえのある者は一人もいないようだ。
（やはり、又十郎一味の者か……）
この前、麹町の通りで出合ったときの鳥羽又十郎の様子では、
（いまは、おれに恨みを抱いている様子もなかったが……）
とも思う。
まさか、中津川祐見がさし向けた刺客だとは考えても見なかった。安兵衛がもっている祐見の印象は、ここまで下落したものではない。安兵衛も土屋と北山の顔は一度見ているわけだが、暗

いし、提灯は消えているしで、

（やはり、又十郎の仕わざなのか……）

こころみに、

「又十郎、いるか？」

闇に向けて何度も呼んでみたが返事はない。

とにかく、この場を引きあげ、この始末を主人の稲生七郎右衛門へ報告することにした。

稲生屋敷へ帰ってみると、大変なさわぎである。

「安兵衛。よう戻った」

稲生七郎右衛門は玄関の式台に床几を出し、これへ腰をかけ両刀を帯したまま、安兵衛の帰りを待っていたのだ。

その傍に用人・大沢重四郎、若党や足軽も物々しくひかえているので、

（これは……）

夜中に押しひらかれた表門を見ておどろいた安兵衛だが、

「何事にござります？」

主家の異変とみて、表門から駆けこむと、

「な、中山様ァ……」

門傍に立っていた男が、いきなり泣声をあげて抱きついてきた。

「何だ、佐次兵衛ではないか」

「こ、これを、早うこれを……」
佐次兵衛が突きつけた書状は封が切られている。
「危急のゆえとあって、わしが先に見た」
と、稲生が声をかけた。
「は……」
一読して、
「むゥ……」
安兵衛は、うなった。
「早う、おいで下さい」
佐次兵衛が袖をつかむ。
「待て。叔母上は松平屋敷へはこぬようにと申されている。おぬしも読め」
書状を佐次兵衛へわたしてから、稲生七郎右衛門へひざをつき、野口屋敷へ使いの報告をしてから、
「実は……」
不忍池畔の襲撃について告げると、
「そのようなやつどものことなど、どうでもよろしい。後はわしが引きうけた」
稲生は事もなげにいい、
「で、どうするな？」

「おゆるしをいただき、只今よりおいとまを……」
「ゆるすぞ」
「いろいろと、言葉につくせぬ御恩を、こうむりました」
「助太刀にゆくのじゃな？」
「いま、思い至ったことがございます」
「何……」
「先刻、私めを襲いましたる者たち、或いは村上兄弟のさしむけたる刺客かと存じられます」
まだ、祐見を信じていたのだ。
「刀を見せい」
「はっ」
稲生は安兵衛の刀を抜いてながめ、
「これはいかぬ」
といった。
五人を斬った刃には刃こぼれもあるし、血あぶらにくもっている。
稲生が目顔で指図すると、大沢重四郎が奥へ駆けこんでいった。
「安兵衛、顔を見せい」
「はい」
「うむ。その面がまえなら安心じゃが、油断はならぬぞ。おぬしにとって菅野六郎左衛門殿は

かけがえのない……というような言葉ではいいつくせぬ御仁だ。菅野殿あってこそ、今日の中山安兵衛があったものと思え。わかったの」

安兵衛は謙虚にくびをたれ、つぶやくようにいった。

「私は、いまこのときのために生まれ、生きてきたかのように思われます」

そこへ、大沢用人が二人の侍女と共にあらわれた。

大沢は大刀ひとふりを捧げ持ち、侍女たちは、急ぎ用意をしたらしい白の肌着、下帯、それに黒の小袖、馬乗袴などをはこんできた。

いずれも稲生七郎右衛門が心ずくしの品々で、真新しいものばかりだ。

大刀は井上和泉守国貞作、二尺四寸八分のわざもので、新刀ながら、

「充分に役立つであろう」

と、稲生はいった。

急な、短い時間のうちに、これだけの手くばりをしたことをみても、稲生七郎右衛門の武士道の立派さが知れようというものである。

かねてから稲生には尊敬の念を抱いていた安兵衛だが、いまこのとき、ゆきとどいたその配慮をみて、

（稲生様の名を汚してはならぬ）

決闘にのぞむ勇気が、激しい感動と共に衝き上げてきた。

「安兵衛。ゆく先は決めてあるか？」

「はい。林光寺の厄介になるつもりでござります」
「うむ。わしも、それがよいと思うていた。林光寺から高田の馬場は目と鼻の先ゆえな」
「はい」
「よし、ゆけい」
「はっ」
稲生は用意の駕籠に安兵衛を乗せてやり、家来四名を付けてくれた。
しきりに遠慮する安兵衛へ、
「明日の大事をひかえた身じゃ。ま、いまはわしの申す通りにせよ」
と、稲生はいった。
別れを告げ、門の外へ出てから、安兵衛が駕籠の中から、
「佐次兵衛。早うもどれ。もどって叔母上におつたえしてくれ、明朝のこと、安兵衛力のかぎり叔父上を御守りいたすとな」
「ありがとうございます、ありがとうございます」
林光寺へ到着したとき、四ツ半（午後十一時）をすぎていた。
安兵衛が駕籠に乗っての深夜の来訪を見て、
「これは、どうしたことじゃ」
床へ入っていた道山和尚もおどろいたらしい。
ここで、稲生の家来たちは帰った。

安兵衛が、すべてを告げると、道山は目にも見えぬものを探りとるかのように空間の一点を凝視していたが、やがて、

「菅野殿が果し合いをするような相手とも思われぬほどのおろかなやつじゃな、村上三郎右衛門は……」

「なれど、果し状を突きつけたは村上でござる。武士の意気地、これを逃げては叔父上の生くる瀬はありませぬ」

「ま、それは別として……菅野殿は村上めと斬り合うことによって、もっともっと、別の大きな目的をとげようとしておられるのやも知れぬ」

「は……？」

「それだけにこの果し合い、こなたにいささかの手落ちもあってはならぬ。このことを、おぬしもよくよくわきまえておけよ。どこまでも菅野殿の進退が見事に、立派におこなわれねばならぬ。そのような助太刀をせねばならぬ。よいか、よいな」

寺の僧たちの耳へも、すべてがつたわったらしく、深夜の林光寺は異様な緊張に包まれた。

僧たちは和尚の命によって、いそがしくはたらいた。

風呂場に新しい湯がわいた。

酒の仕度がととのえられる。

「安兵衛、風呂へ入ってきなされ」

「いや、そのような……」

「場合ではないというか、ばかめ。いまのおぬしは、心も躰も、こちこちに硬張っておるではないか。そんなことでは、ろくな助太刀もできまい」

「では、いただきます」

風呂へ入ると小坊主が背をながしてくれた。

「あ、血が……ここにも……」

小坊主が声をふるわせる。

先刻の斬り合いのとき飛んだ敵の血が、安兵衛のくびすじや手首、足にもこびりついていたのである。

「なるほど、これでは……風呂へ入ってよかったな」

「この血、どうなされました」

「何でもないよ」

「あの……あの、中山さま……」

「何だね」

「明朝、あの……高田の馬場で……」

「きいたか」

「はい」

「おぬしにも、いろいろと世話をかけたな。木の実を投げてもろうたり、背中をながしてもろうたり……」

「何をおっしゃります。そのようなあらたまったお言葉をきくのは、いやでございます」
「なれど、礼を申しておかぬと……もう二度といえなくなるから……」
「いやでございます、いやでございます」
小坊主、泣きながら背中をこすっている。
湯気の中に安兵衛は伊佐子の顔を思いうかべていた。中津川門人五名を斬ってからの安兵衛は彼女のことを忘れきっていた。相次ぐ事件の突発に対処するだけでも、彼の強健な心身は精一杯であった。
林光寺の風呂場へ入り、あたたかい湯けむりにつつまれたとき、
「伊佐子どの……」
ふっと、安兵衛は虚脱したように心身がゆるんだ。
細川越中守の家臣となり、新妻の伊佐子に見送られ、礼装で熊本城へ登城をする自分の姿が安兵衛の脳裡をかすめたのである。それをふりきるかのように、
「出るぞ！」
怒鳴るようにいって、安兵衛は立ち上った。
和尚の居間へ戻った。
「おう、よしよし。さ、ゆるりとのめ」
今度は酒である。適当にあたためた酒を二合ものむと、安兵衛は酔いはじめた。
「よし、よし」

和尚は、そこにのべた床の中へ、安兵衛を寝かせ、
「さ、何も思わず、のびやかに眠れ」
ゆっくりと、安兵衛のくびすじや肩をもみほぐしはじめた。
「和尚さま、そのようなことをなされては……」
「遠慮するな。え、よい心地じゃろ。さ、ねむれ、ねむれ……」
かすかに雨の音をきいたように思ったが急に、地底へのめりこむように安兵衛は眠りに落ちていった。

高田の馬場

翌二月十一日の朝、菅野六郎左衛門は八ツ半（午前三時）に床から起き出した。
昨夜半からふり出した雨は、もう上っている。時刻は早いが、平常の目ざめと変らぬ様子で洗面をするし、
「髪を……」
これも一日が始まるための習慣で、宇乃に髪をととのえさせる。ひげも、きれいに剃った。
朝飯の膳も平常と変らぬ。
「いかなる大事が起きようとも、人の暮らしは努めて変えてはならぬ」
というのが菅野の信念であるから、老妻・宇乃も、五十九歳の老夫を決闘の場へ送り出す朝で

はあっても、激情をこらえ、淡々とうごいている。

それでも、宇乃の表情の底には、かなり『強い』安心が宿されていた。夫は知らぬが、今朝のことを安兵衛につたえることを得、しかも安兵衛は、力のかぎり……の助勢を誓ってくれたのである。

（いまごろ、安兵衛どのも起き出してくれたろうか……）

味噌汁を、飯を、夫に給仕しつつ、また一方では、

（夫のいいつけにそむいてしもうた……）

と、宇乃は悔いてもいる。

中山安兵衛という若者の気性を好んだからこそ世話をしてきたまでのことで、そのために自分の危急へさそい出し、安兵衛の将来を消してしまうことは、

（もってのほかのことだ）

というのが、菅野の考え方であった。

いや、果し状を受けて以来、そのようなことは考えたこともない。

菅野が箸をおき、愛情のこもった微笑を投げかけてきた。

「はい？」

「ながい間、苦労をかけたの……などと、いまさら、まじめくさって申すのもいかがなものか……なれど、礼を申す」

ひざに両手をつき、頭をたれる。

「わたくしこそ……」
宇乃も礼を返した。
老妻が茶をいれるとき、菅野が、
「そなたものまれよ」
といい、夫婦は、しばらくの間、黙り合い、目を見合わせつつ、茶をのんだ。
大場一平も佐次兵衛も身仕度をし、息をひそめ、主人の出発を待ちかまえている。
「のう、宇乃……」
「はい」
「今日のことは特別のことではないのじゃ、わかるか……わしが死ぬる日は今日のことがのうても、いつかはくる、それも近いうちにな。そのとき、わしとそなたは今このときのような別れを告ぐることになる。同じことなのじゃ、わかるの」
宇乃は泪ぐんだ。あまりに夫の言葉がやさしく、いたわりをこめたものであったからだ。
「早いか、遅いか……それも、わずかの月日の違いあるのみ……」
菅野は立ち、
「では仕度を……」
と、いった。
白の肌着、茶の小袖、野袴といった身仕度をすましたとき、大場一平と佐次兵衛が部屋へ入ってきた。

供をするというのである。

「ならぬ」

菅野は拒否した。すると、

「では、これにて、ごめんつかまつります」

二人が同時に叫び、短刀を引き抜き、腹へ突き立てようとした。その意気ごみは只事でない。この日の供をしなくては菅野の家来として恥になる、物笑いになる。

「それは生きながら死ぬるも同じでござります」

というのが、二人の叫びだ。

これは封建のころの義理とか体裁とかいうものではない。二人の家来が主人の菅野へ対する愛情のふかさが、こうした言動をよぶのである。

ということは、もしも二人の家来に危急あるとき、主人は必ず命を賭してこれを救うに違いないだけの愛情をかけていたことなのだ。

菅野も、ここに至って、

「主従の縁じゃな……では、供をしてもらおう。なれど一名じゃぞ」

「それは……」

「いやでござります、承服いたしかね……」

「ま、ようきけい」

菅野は床の間へおいた二つの文箱を指し、

「あのうちの一つは殿さまへあてたる書状である。わしが死したる後、あの書状がどのような反響をおこすか……それは知れぬ。申すまでもないが、後に残るは、これなる老妻ひとりじゃ。お前たちのうち一名は、もしもその心があるならば一命をかけて後始末にはたらいてもらいたい」

結局、二人は自室へもどり、くじをひいたらしい。

大場一平が供をすることになった。一平は中年でもあるし、日頃は洒脱剽軽のおもむきある男で、この日の供をするには、たよりなげでもある。

だが、大場は意外に落ちついており、緊張のため顔色変じた若党の佐次兵衛にくらべ、この朝は、むしろ凛然として見えた。

佐次兵衛はくやしがったが、考えて見れば宇乃が只ひとり残されるのであるから、これに付きそう者がいなくてはならぬ筈だと思い直したらしい。

「では……」

長屋の玄関へ出て、菅野六郎左衛門は宇乃へふり向き、

「つとめて、面白う暮らせよ」

こちらの胸の底まで沁み透るような微笑をうかべた。

この場合、宇乃としては、

「首尾よう……」

と、こたえるより言葉がなかった。

長屋を出ると、顔は見せぬが、となり近所の藩士たちが戸の隙間から見送っている気配を、菅野は、はっきりと感じた。

だれにともなく一礼をし、勝手門へ向う。

まだ暗い。大場一平が提灯を持ち先に立った。

勝手門を出るとき、番士の坂口某が、

「菅野様。少し前に村上庄左衛門、出ましてござる」

と、ささやいた。

菅野は、にこりとうなずいたのみである。

このころ、戸塚の林光寺では、道山和尚が、

「そろそろ起きなされ」

と、安兵衛をゆり起こしていた。

安兵衛が風呂場で水を浴び、昨夜、稲生がくれた肌着と黒の小袖をつけ、和尚の居間へ戻ると、

「心得てもいようが、少しにしておきなされよ」

和尚みずから給仕して熱い粥を椀にもってくれた。

「これは、おそれ入ります」

「まだ早いので、みなを起こさず、わしが粥をたいたが、どうじゃ、よう煮えておるかな？」

「結構に……」

これからの決闘について、もう道山は一言もふれない。

以前、安兵衛がこの寺に暮らしていたときといささかも変らぬ態度で、

「昨夜、ちょと降った雨のためか、いかにも春のあかつきらしいあたたかさじゃな」

立って雨戸をあけた。

外は、まだ暗い。

「ほう……靄がたちこめているぞ」

「左様で」

「ときに、よう眠れたかえ?」

「それが……」

と、安兵衛はにっこりして、

「ふしぎに、夢も見ませなんだ」

「そうか、そりゃよかった。そりゃよい」

「和尚様のおかげにて、躰をもみさすっていただくうち、たちまちに……」

それが安兵衛にもうれしい。

実は昨夜、この寺へついたとき心も躰も、骨も肉も、ばらばらにくだけてしまうかと思われるほど疲労していたのである。

短時間ではあったが、その熟睡によって心も落ちつき、若さにみちみちた彼の肉体の機能は生き生きと躍動しはじめている。

肉体の恢復が心の平静をよび、これからの自分のはたらきに自信を生んだ。
食事のあとも、ゆるりと身仕度にかかり、袴をつけ、革足袋をはき、国貞の大刀と、亡祖父の形見である長船清光一尺八寸の脇差を帯し、玄関口で草鞋をつけた。
山門への道の両側に、起き出した僧たちがならび、あたりに赤々と篝火が燃えている。
「和尚様。では……」
「おお、いってこい」
僧たちは合掌して、安兵衛を見送った。
安兵衛は目礼を返しつつ山門を出るや、もう振り向きもせず暁闇の中へ溶けこんでいった。
村上兄弟が果し合いの場所を高田の馬場にえらんだのは偶然にすぎない。
だが、安兵衛にとって、これは非常に有利な立ち場を得たといえよう。
このあたりの地形は、くわしく安兵衛の頭の中にたたみこまれていたし、
（おそらく村上兄弟は無頼の徒をあつめてくるに違いない）
そのことに対しても覚悟している。
あくまでも昨夜の襲撃を村上方のたくらみと信じている安兵衛だけに、
（村上も、叔父上の助太刀におれが出向くことは承知の上。まして昨夜のことが失敗に終ったからには、今朝の人数も二人や三人ではあるまい）
と思っていた。
靄がこめる畠道を、安兵衛は南へ下った。

微風がつめたかった。

その風で靄がゆれうごいているような感じがする。

ほのかに……あかつきの闇も明るんできたようだ。

斜面の道をかなり下ってから、安兵衛は右へ切れこみ、樔林へ入った。

この林へきて、あの、どんぐりとよばれる木の実を拾い、稽古につかったこともある。

今度は、斜面をのぼりはじめる。

段畠の雑木林の中をのぼってゆく。

ということは、高田の馬場の北側の崖下へ出ることになるのだ。

間もなく崖下へ出た。

崖といっても、ここまでのぼってくれば六尺ほどのもので、その上にがっしりと竹矢来が組まれていた。

竹矢来の向うに馬場がひろがっている。

ここまできて、安兵衛は、

(そうだ……)

ふっと思いつき、脇差しを抜いて袴の裾からひざ頭の上までを切り取ってしまった。これなら袴が脚にからむことはない。

竹矢来を越え、馬場の中へ入って屈みこんだ。

あたりに目をくばる。

靄がこめたひろい馬場には人気もないようであった。

まだ果し合いの時刻には半刻（一時間）近くの間があった。

竹矢来に沿って、東へ進む。一町ほどいくと藁屋根の見所が建てられてあり、この馬場で弓術や馬術の試合がおこなわれるときは、このあたりに幔幕を張ったり、ござを敷いたりして参観の席となるわけだ。

見所の背後は、崖を切りくずしたときにわざと残した小高い築山が約一町ほど、東の入口までつらなっていた。

ここにも松が植えこんであるし、椎の木のかなり大きいものも残してあった。

安兵衛は、この築山へのぼった。

ここからだと東西六町、南北三十余間という馬場の全貌に、およそ目がゆきとどくからだ。安兵衛は、（叔父上も村上も、おそらく東から入ってこよう）

と、見当をつけている。

その東の入口は安兵衛のすぐ左に見え、入口の向うの道に並ぶ二軒の茶店は、まだ寝しずまっているらしい。

正面から右手にかけ、ひろがる馬場を二つに割った中央の堤がはしり、これが西の入口までつづいている。

安兵衛は椎の木蔭へ腰をおろした。

こちらの視界はよくきくが、馬場からは絶対に見つけられることはない。

なぜ、彼は此処へかくれたのか……。

一つには——もし万一、村上三郎右衛門が正々堂々の勝負をいどむため、ただ一人で乗りこんできた場合、安兵衛が出てゆけば菅野六郎左衛門の恥になる。そのときは、

（たとえ、叔父上が村上に殪されても、おれは助太刀せぬ）

決心であった。

もしもそのときは、菅野が殪れた後に、出てゆき、村上弟を其の場から去らせず、叔父の敵として討つつもりだ。

だが、おそらく、村上弟は、このようにいさぎよい勝負をいどむまい。

（必ず助勢の人数をそろえてくるに違いない……）

とすれば……。

はじめから安兵衛一人が馬場へ出て待機していたのでは、敵方のうごきを助けるようなものである。

先ず、かくれて敵のうごき、人数などを見きわめてから出てゆくべきだと、安兵衛は考えている。

おそらく菅野は一人でくるだろう。もし供をつれても若党・佐次兵衛のみ、と、安兵衛は予見していた。

こちらは多くみて三人。

相手は何人くるか知れたものではない。

あかつきの微風に靄がうすれはじめた。
安兵衛は土にあぐらをかいたまま、刀の下緒をぬいて襷にかけ、ふところから用意の鉢巻きを出してしめた。
もう一つ、用意のものがある。
竹の水筒に入れた冷酒であった。
それも、ほんの三口か四口……。
「うまい」
おぼえず声を発し、しずかにのんだ。
のどから胃の腑へ流れこむ冷や酒が、安兵衛の精気を勃然とさせた。
最後の一口をふくみ、大刀の柄へ霧をふき、わらじの緒をたしかめ終えたとき、
（あ……叔父上……）
安兵衛は見た。
東から馬場へ入ってきた菅野六郎左衛門は編み笠をぬぎ、これを大場一平へわたした。
（大場一平が供か……）
いささか安兵衛も落胆した。
剽軽で善良なこの中年男は大好きなのだが、こうした場合に役立つとは思われず、
（かえって足手まといになるのではないか……）
危惧せざるを得ない。

菅野は、あたりを見まわしてから大場に何かささやき、見所の近くまでいってから、大場が用意してきた床几に腰をおろした。

大場は、傍に片ひざを立て、仕度にかかる。

安兵衛は、右へ移動した。

築山の下、十間の向うに菅野主従が見える。

大場一平は、さすがに緊張した表情らしいが、鉢巻きをしめ、たすきをかける動作も落ちついているのが安兵衛の目にもよくわかり、

（これは……）

意外であった。

「一と一の果し合いなれば、手を出すな」

菅野の声がきこえる。

大場は、うなずき、主のうしろにまわり羽織をぬがせにかかる。

菅野は、老緑色の小袖に白のたすき、白い鉢巻きをしめ、野袴の股立をとった。

その一つ一つの動作は落ちついていながら、六十に近い老人とは見えぬほどの闘志があふれている、安兵衛は感動をした。

靄が、ほとんどはれた。

まだ陽はのぼらぬが、暁闇は見る見る朝の白い光に変った。

雀の囀ずりが馬場の木立に起り、崖下の農家で鶏が鳴いている。

菅野も大場も、仕度を終えて沈黙したまま、じっとうごかぬ。
と……。
大場一平が主へ何かささやき、屹として東の入口を見た。
安兵衛も築山の木蔭で視線を転じ、
（来た……）
刀の鯉口をきった。
村上三郎右衛門が若党・木津精助を従え、東から馬場へ入ってきた。
木津が何かいい、三郎右衛門が立ち止った。菅野主従を見たらしい。
村上主従は、もう決闘の仕度をととのえていた。
（二人きりか……）
と、安兵衛は気ぬけしたかたちであったが……。
（や……？）
彼方の堤の上に二つの人影を見て、緊張した。
堤上の松の木蔭に立っている二人の男を、
（だれか？　どちらにせよ村上方にちがいあるまい）
顔かたちが松の木に邪魔されてよくわからぬが、
（あの二人が出てくると叔父上のうしろにまわることになる）
少しずつ、安兵衛は築山をすべり下りていった。

堤の上と、菅野とを絶えず注視しながら、飛び降りて駆けつけられる位置に身がまえた。

（かくれている敵の助勢は、あの二人きりであろうか……？）

卯の上刻を告げる何処かの寺の鐘の音が、馬場へ流れこんできた。

菅野六郎左衛門が床几から立ったのは、このときである。

およそ七間の間をへだて、近寄ってきた村上三郎右衛門主従も立ち止った。

「村上殿。一人と一人、正々堂々の立ち合い、菅野六郎左、満足に存ずる」

と、菅野から口をきった。

村上弟、こたえない。

「さがっておれ」

菅野が大場へ命じたので、村上も仕方なく、若党に（さがれ）と目顔でいったらしい。

双方の家来二人、二間ほどうしろへ退った。

菅野と村上が、同時に大刀を抜き払った。

堤上の人影は、じっとうごかぬ。

水のような朝の大気の中に、二つの刃は依然、七間の距離をたもち、微動もしない。

空が、あかるくなった。

そのとき、東側から馬場へまぎれこんだ野犬一匹、人影に気づいて恐れげもなく吠えたてつつ、駆け寄ってきたが、

「えい！」

「おう！」
ひびきわたった気合いの声に戸まどい、今度はあわてて逃げた。
菅野と村上弟は、どちらからともなく進み合い、同時に斬りこんだ。
刃と刃が嚙みあい、
「おう！」
「む！」
ぱっと飛び離れたとき、村上三郎右衛門の顔は鉛色に変じている。
「や、やあ……」
菅野が肉迫した。
村上は、じりじりと追いつめられたかたちでまわりこみ、菅野の背中が築山の裾にひそむ安兵衛の前へきた。
安兵衛からは、村上弟の顔が、はっきり見える。
村上三郎右衛門は、あきらかに自信を喪失していた。
（こ、こんな筈ではなかった……）
菅野ごとき老人を斬り殪すのは、
「おぬしの腕なら、わけもないことだ」
と、現に昨夜も放生寺門前・京やの座敷で中津川祐見もいっていたではないか……。
村上が斬りつけていったとき、これを避けようともせず走り寄ってきて、村上の刀身をはね返

した菅野の激しい気力と、その一撃でこちらの手へしびれがきたほどの剛剣に、

（これは……）

と、村上は息をのんだ。

剣術は何流をまなんだなどと、菅野六郎左衛門は一語も洩らしたことがない。

しかし、なみなみでない鍛練を経た者でなくては、祐見も目をかけていたほどの村上三郎右衛門に、これだけ目ざましい対抗ができる筈がない。

それと見て、村上の若党・木津精助が菅野の側面へまわりかけた。

「手出し無用！」

叫んだのは大場一平である。

大場は菅野の背後をすりぬけ、木津にそなえた。

「うぬ！」

もう村上弟も必死だ。

低く腰を落とし、歯をむき出し、醜悪な形相となり、菅野のかまえに身を叩きつけてきた。

二人は縦横に飛びうごいた。

二度、三度と刀身がからみ合い、また飛び離れたとき、村上三郎右衛門の顔半面に血がふき出している。傷は浅いらしいが、おびただしい流血であった。

堤の上から人影が浮いて出た。

（あ、祐見……）

安兵衛が腰を浮かした瞬間であった。
藁屋根の見所の向う側から突如走り出た男が、抜刀して菅野の背後へ襲いかかった。
祐見門人の阿栗小兵衛である。
彼は、安兵衛が馬場へあらわれる前、どこかにひそんでいたらしい。
安兵衛も、これには気がつかなかった。
なぐりつけるような阿栗の一刀を肩先に受け、菅野六郎左衛門がよろめいたとき、大場一平と木津精助も斬り合いはじめた。
堤上から飛び下りた中津川祐見と村上庄左衛門も、こちらへ駆け寄ってくる。
同時に、中山安兵衛も国貞の大刀を引きぬきざま、築山から跳躍した。
肩を切られて飛び退った菅野へ追い討ちをかけようとした阿栗小兵衛に、
「阿栗、うしろを！」
彼方から駆け寄りつつ中津川祐見が怒鳴った。
はっ、と振り向く阿栗を、安兵衛が声も発せずに斬った。
血飛沫と共に阿栗の手から刀がはね飛び、絶叫をあげて彼は転倒した。
菅野の眼前にせまっていた村上三郎右衛門を、
「待てい」
安兵衛が刃をふるって牽制した。
たじろぐ村上弟のうしろへ、祐見と村上庄左衛門が駆けつけてきた。

「安兵衛……」

菅野六郎左衛門のうれしげな声がきこえたが、その顔も見ず、安兵衛は正面の敵三人に備えつつ、

「叔父上。中津川祐見を殪さねば、すべては無になります。祐見を討つまで、お一人にて……よろしゅうござるか」

「大丈夫じゃ」

祐見が羽織をかなぐり捨てた。

「安兵衛、来たのか……」

じっと見つめる祐見の双眸に、不審のいろが浮いていた。

（では、土屋はじめ六名の者たち、安兵衛に斬殺されたのか……信じられぬ……）

なのである。

「中津川祐見、村上庄左衛門、このざまは何か」

と、安兵衛が詰った。

祐見は、それに返事もせず、傍の村上兄へ、ささやいた。

「庄左衛門殿。弟ごの助勢をなされ。それがし中山を斬る」

村上兄はうなずき、羽織をぬぎ捨てる。

「みな殺しじゃ」

と、うめくように祐見がいった。

大場と木津の斬合いは、かなり離れ、馬場の東口のあたりで、力ずくの闘いをくり返しているようだ。

「来い。来いよ、安兵衛」

さそいつつ、祐見は村上兄弟とはなれた。

「祐見。おれは今まで、おぬしがこれほどに、みにくい男とは知らなんだ」

と叫ぶ安兵衛に、祐見は冷笑をもってむくいたのみである。

村上兄弟が菅野へ迫った。

しかし、それにかまってはいられない安兵衛であった。

祐見を殪さねば叔父への助勢は不可能だからだ。

「来いよ。来い」

「応」

目と目をひたと合せつつ、祐見と安兵衛は横へ移動した。

二人は四間をへだてていた。

祐見が足をとめ、一歩退いて抜刀した。

ひと息いれ、兄の助勢を得ただけに村上弟も、しきりに気合を発して菅野へ攻めかけている。

安兵衛は正眼に刀をつけ、祐見は平正眼にかまえ、そのまま二人は、まるで蟻の歩みにも似たゆるい速度で間合いを詰め合っていった。

二人の間合いが二間に詰ったとき、いい合せたように安兵衛と祐見は、じわりと止った。

刃より先に、活と見ひらかれた二人の眼と眼が空間に斬りむすんでいた。

一瞬ではあったが……。

二人は互いの、十余年にわたる交渉の、さまざまな場面を、白熱する光芒として脳裡にとらえたようである。

次に、二人は一個の剣士として、闘志の凝塊としての対決へ没入した。

安兵衛の双眸が放つ圧力をはね返そうとするかのように、

「やあ！」

祐見が、するどい気合いを発した。

その気合いを押し返すほどの無言の迫力が安兵衛の睥睨にこめられており、

「むゥ……」

低くうなった祐見が、さっと右手へ躰を移した。

（こいつ、いつの間に……）

いつの間に、これだけの剣士となったのか……である。

七年前の正月に、お秀を中にはさんだ愛慾のもつれから、十九歳になったばかりの中山安兵衛を、草津川の河原で散々な目にあわせた中津川祐見である。

それからいままで、祐見は安兵衛の剣術を見たことがない。

むろん、祐見は祐見なりに〔修行〕に努めてきたつもりでいるし、七年前の印象が何といっても強くこびりついていて、

（安兵衛なぞ、おれが出るまでもあるまい）

と、真底からそう考え、浪人上りの門人たちをさし向けたほどであった。

だから安兵衛にも、

（祐見には、とてもかなわぬ）

という意識があってよい筈だし、事実、あの窪田道場での試合ぶりを見たときには、

（さすがに祐見殿だ）

素直に感嘆したものだ。

だが、今朝の安兵衛が祐見と相対したとき、先ず感じたことは、

（中津川祐見とは、こんな男になり下ってしまったのか……）

その軽蔑である。これは祐見への闘志を倍加させたといってよい。

同時に、

（では、昨夜の刺客五人、祐見がさし向けたのだな）

瞬時にわかった。

表向きは一対一の果し合いというかたちをとりながら、助勢の門人をひそませ、さらに村上庄左衛門と共にあらわれ、菅野六郎左衛門を徹底的に抹殺してしまおうという汚れた決意の裏側には、

（村上弟ひとりでは、もしもということがあろう）

その不安もあったにちがいない。

そのすべてが、昨夜死んだときめこんでいた安兵衛の出現によって、安兵衛にさとられてしまったわけだ。

十四歳の安兵衛を三国峠で救ったときの青年・中津川祐見は、少年の安兵衛が向けるひたむきな尊敬の念をこころよくうけとめていたものだ。その安兵衛がいま、露骨な軽蔑を刃と共に自分へ突きつけている。

祐見は躍起になりかけていた。

「たあっ……」

中津川祐見が、みずからの気力をふるい起すかのような気合いを発し、一歩、右へ寄った瞬間、猛然と安兵衛が斬りこんだ。

かわした祐見が反撃する間もなく、打ちこんだ安兵衛の刃がはずみ返ったように下から斬りあげる。

「おう……」

うめいて、祐見は飛び退った。

祐見の両眼は激怒に血走った。

恐れげもなく、安兵衛が追ってくる。

低く、うなりつつ、祐見は後退した。

高さ六尺の堤の裾が祐見の背後にある。

そして、その堤へ背がつきそうになるまで退ったとき、祐見が弦をはなれた矢のような逆襲に

転じた。

安兵衛も躊躇なく突進した。

噛み合った刀身と刀身とは、そのまま密着し、

「やあ！」

「おう！」

激しい鍔ぜり合いとなる。

さすがに、安兵衛の顔面も青ぐろく変じ、ねっとりと脂汗が浮いていたが、

「えい、えい……」

すさまじい気合いと共に押してくる力の苛烈さに、

「う、うう……」

刀身をふりほどく隙もつかめぬまま、祐見は、ついに堤の土へ背中を押しつけられてしまった。

刃と共に自分の体軀を祐見のそれへ斬りこんでしまうつもりなのか。

このまま、安兵衛の力を放置していたら、彼の刃はこちらの刃ごと、

（おれを押し斬ってしまうだろう……）

祐見も必死であった。

思いきって、祐見は堤へついた背中に力をこめ、右足を飛ばして安兵衛の腹を蹴った。

安兵衛は飛び退きざまに刀を打ちこんだが……。

体をまるめて、ななめ前方へ飛び出した祐見が、

「来い！」
さそいこむように叫んだ。
そのうごきを追った安兵衛の剣がすばやくのびた。
これを祐見は待っていたのである。
これは祐見の若いころからの得意わざで、敵の刀身へこちらの刀身を合せると同時に、腰と腕をひねりざま、敵の刀を巻き落とすか、はね飛ばしてしまうのだ。
かつて安兵衛も、その妙技を数度見たことがあるのだが、
「えい！」
見事に巻き落とされた。
安兵衛の大刀が手をはなれたとき、おそらく祐見は、
（しめた）
と、感じたろう。
だが、それも一瞬のことであった。
巻き落とされた大刀のことなど少しも意にとめることなく、安兵衛は長船清光の脇差を抜き打ちに、祐見へ斬りつけた。
そのとき、中津川祐見の剣も安兵衛へ打ちこまれていた。
けれども、大刀を落とされた敵が、まるでそのことにかまわず、水の流れるほどの自然さで脇差を抜き打ちざま、飛びこんできたので、

「あっ……」

祐見の一刀は空を切り、あわてて腹をひいて立ち直ろうとしたとき、安兵衛は祐見の左腕から肩にかけて切りあげつつ飛びぬけていたのである。

ぴゆっ……と、血が疾った。

むろん致命的な傷ではないが、祐見がうけた衝撃はするどかった。

「こやつ……」

振り向いて剣をかまえた祐見へ、またも安兵衛が突撃した。

身をかわす余裕がなかった。

祐見は歯をむき出し、手負いの猛獣と化して迎え撃った。

人の声か、刃の叫びか……得体の知れぬ音響が大気を引き裂き、今度は祐見の大刀が朝の陽に光って宙へはね飛ばされた。

どうしたものか、手が地へつくほどにのめった祐見のくびすじへ、安兵衛の片手なぐりの一刀が打ちこまれた。

びしゃっ……と、血が地上へ叩きつけられ、首のない中津川祐見の胴体が物凄い勢いでおよそ三間ほども走ってゆき、ぎくりと止ったかと見えたが、急に戸が倒れるように伏した。

安兵衛は、大きく股をひろげたまま茫然としていた。

その耳へ、二組の決闘の声が、音がよみがえってきた。

（あ、叔父上……）

祐見を殪した直後の虚脱から安兵衛はぬけ出した。

（そのとき、おれは、首まで沈んだ泥沼の中から這い上るような気持ちがした）

と、後に彼は語っている。

大場一平と木津精助の決闘は相変らず東口のあたりで、ふらふらともつれ合いながら、まだつづけられている。

菅野六郎左衛門は、築山下の松並み木をぬいつつ闘っていた。

菅野は、よろめいている。

よろめく菅野へ押しかぶさるように村上兄弟が斬りかかっていた。

呼吸をととのえる間もなく、和泉守国貞の大刀を拾う間もなかった。

安兵衛は、駆けた。

血だらけの菅野の顔が、躰が、村上兄弟の背中の向うに、ちらちらと見える。

「叔父上！」

安兵衛は全身の力をふりしぼり、走りつつ呼びかけた。

村上庄左衛門が、ぎょっとして振り向いた、その顔めがけて、

「む！」

足をとめ、安兵衛が斬った。

村上兄の顔が叩きつぶした西瓜のようになった。

村上三郎右衛門が狼狽して飛び退くのを見やりながら、安兵衛は菅野に寄りそった。

菅野六郎左衛門は紙のような顔色になり、目のまわりに隈が黒く浮き出し、肩で呼吸をしているが、刀はしっかりと正眼につけていた。

「叔父上」

と、安兵衛は菅野にぴたりと身をつけ、村上三郎右衛門をにらみ、

「叔父上、中津川祐見は討ちとりましたぞ」

叫ぶや、村上弟が（とても信じられぬ）といった顔つきになり、ぱくりと口をあけた。

「うむ……」

菅野が、にこりとしたようだ。

村上兄弟に包みこまれ、数か所の傷を受けている菅野の右半面と、どこを斬られたものか袴いちめんが血びたしになっている。

村上弟も負傷しているが、むろん、菅野ほどの重傷ではなかった。

だが、目の前で兄を討たれ、祐見までも殪れたときき、ちらりと振り向いて祐見の首のない死体をたしかめたらしく、

「う、うう……」

絶望のうめきをもらし、刀をかまえながら、ふらふらと退いてゆく。

「叔父上。あとは村上三郎右衛門ひとり」

と、安兵衛は菅野の耳へ口をつけ、

「安兵衛は助勢いたしませぬぞ。御立派に……よろしゅうござるか、御立派に――」

と、いった。

菅野は力強く、うなずく。

その左腕をささえ、安兵衛は村上弟を追いつめた。

大場一平が刀を杖に近づいてきた。

屹と見やった安兵衛が、

「おお、見事でござった」

大場は何度もうなずく。口もきけぬらしい。

東口の松並み木のあたりに倒れている木津精助の死体を、安兵衛は見た。

「さ、叔父上……」

「うむ」

菅野六郎左衛門は安兵衛にささえられていた左腕をぬき、大刀の柄にかけた。

大場は精も根もつき果てたらしく、尻を落とし、うつむいてしまった。

菅野は、ほとんど生色の消えた顔に一念をこめ、じりじりと村上へつめ寄ってゆく。

安兵衛も共に進む。

「助太刀……」

と、村上三郎右衛門が恨めしげに安兵衛をにらみ、

「助太刀、ひ、ひきょう……」

泣くような声でいう。

「だまれ！」
「ひ、ひきょう……」
「黙れ、村上。こなたは汝のごとき卑怯な仕わざはせぬ。汝の相手は菅野一人だ。来い、斬って来い！」
「うぬ……」
村上が逃げかけた退路を安兵衛がふさいだ。
「あ、あっ、あっ……」
眼前に迫った菅野へ、村上弟は大刀をふりまわし、それでもまだ横合いから安兵衛が斬りつけてくるのではないか……と、おびえた。
菅野六郎左衛門の剣が、ぴくりとうごき、
「やあ……」
かすれた気合いもろとも、突き進んだ。
村上三郎右衛門の悲鳴があがった。
菅野の剣は、村上の腹を突き通していた。
仰向けに倒れた村上弟へのしかかり、大刀を手放した菅野が短刀を抜いてトドメを入れた。
「叔父上、御見事」
抱き起こす安兵衛に、
「うむ……」

うなずいた菅野六郎左衛門は、どっと心身のゆるみを安兵衛の両腕へゆだね、しずかに両眼を閉じ、切迫した呼吸の中から、

「本望じゃ」

かすかにいった。

このときの決闘は約半刻（一時間）にわたったという。

斬り合っている者には一瞬の緊張にも似た時間と思われたが、いつの間にか朝の陽ざしが馬場の凄惨な光景を浮きあがらせ、馬場の茶店の人びとや近くの百姓たちも恐る恐る入ってきて、

「あ、林光寺のお武家さまだ」

という声もあがった。

見ると、西口の茶店・甲州やの亭主である。

安兵衛が手まねきすると、すぐに駆けてきてくれた。

「御亭主。すまぬが、戸板を二枚、都合してくれぬか」

「へい、へい」

亭主が駆け戻り、他の茶店の者と何か話しはじめた。

大場一平が、はうようにして傍へきた。

「大場殿。御苦労でござった」

安兵衛は、このとき、はじめて目の中が熱くふくれてくるのを知った。

まったく剣をもって闘うことなどできよう筈がないときめこんでいた中年の大場一平が、若い

木津精助を殪したのである。

大場のはたらきがなく、木津が村上兄弟と共に菅野へ斬りかかっていたら、おそらく自分が祐見を殪す前に、

（叔父上は斬られていたろう）

と、推測がつくのだ。

大場は、菅野をのぞきこんで、

「いかがで？」

と、きいた。

安兵衛は苦しげにあえぐ菅野を抱きしめ、

「大場殿。おかげにて叔父上は、見事、村上三郎右衛門を討ってとりました」

「それにしても安兵衛様……よう駆けつけてくれましたな」

茶店の男たちと百姓たち、合せて四人が戸板を運んできた。

戸板へ、菅野と大場を横たえ、安兵衛は腹につけた小判四枚を出し、

「これでたのむ。二人を林光寺へはこんでくれぬか」

とたのんだ。

二人を乗せた戸板が地面から浮き上ったとき、安兵衛は国貞の大刀を拾い、鞘におさめた。中津川祐見の首は馬場の土へめりこむように転がっていた。

その首をかかえ、胴の上へおき、安兵衛は襷をはずし、着物の袖を引きむしった。

胴から放れたときの祐見の首はすさまじいものであったろうが、いまはもう死の静謐が彼の相貌をおだやかなものにしている。

その首を、引きさいた袖でおおってやり、安兵衛は片手拝みにおがんだ。

十余年前の三国峠で、少年の自分へ投げかけてきた中津川祐見の人なつかしげな微笑を、いまも安兵衛は忘れていなかった。

後日

菅野六郎左衛門は、この日の五ツ半（午前九時）ごろ、戸塚の林光寺で息絶えた。

林光寺には医者も薬も用意されてあった。

道山和尚自身は高田の馬場へ出てゆかなかったが、僧二人がすべてを見とどけ報告をしたものらしい。

担ぎこまれた菅野主従を見るや、

「すぐに庫裡へ……」

と、和尚は命じたが、菅野は、

「いや、のちのち、この寺に迷惑がかかってはなりませぬ。安兵衛、庭先をお借りせよ」

あくまでも固辞をした。

菅野の傷処はおよそ五か所で、このうち左股と胸の傷がもっとも深かった。

大場一平は気つけの薬湯をのむと、見る間に元気を恢復してゆくのがよくわかったが、菅野の手当を終えたとき、医者は安兵衛と和尚へ、目顔で、

（もう、いけませぬ）

と、知らせた。

そのときまで昏睡状態にあった菅野六郎左衛門の唇がうごいた。

「叔父上、安兵衛ここにおります。叔父上！」

戸板に仰臥している菅野へ、かがみこむと、

「よい……よい匂いじゃ」

うっとりと、目をとじたまま、菅野がいう。

そこは鐘楼の裏手から内庭へ通ずる陽だまりで、菅野の戸板のすぐ傍に沈丁花の一群が植えこまれており、ひらいたばかりの白い花が濃厚な香りを放っている。

この中国原産の灌木の香の烈しさ、なやましさについては、

「寺内に、ふさわしくない」

と、林光寺の先住が、しばしばもらしたそうな。

「叔父上……」

「見事であったぞ、今日のはたらき……」

「は……」

「大場、一平……」

「一平、ここにおります」
起き上っていた大場が、顔をよせた。
「おお……」
菅野は、いたずらっぽい微笑をうかべ、
「おどろいたわえ、大場……」
「は……」
「よも、あれほどに、おぬしが剣をふるうとは、思いもよらなんだわ」
「おそれ入ります」
「ありがたかったぞ」
「は……」
菅野は、目をとじたまま、苦しげな呼吸を、しばらくととのえているようであったが、やがて、ぽっかりと両眼をあけ、
「安兵衛の顔……かすかに、見ゆる……」
つぶやいた。
そして、まわりにいる人びとの顔をながめまわし、感謝の意をあらわそうとするかのようであったが、にぎった安兵衛の掌へ、急に、ぴくぴくと握力が加わったかと思うと、菅野六郎左衛門の顔を、躰を、不帰のかげが蔽った。
菅野が息をひきとって間もなく、林光寺の下男の知らせによって、菅野家の若党・佐次兵衛、

下僕・千代蔵が駆けつけてきた。

このほかに松平屋敷の足軽・仲間が十余名も出て、一手は高田の馬場へ、一手は林光寺へ向い、決闘の後始末をした。

村上兄弟の父で、いまは隠居の身の村上宗栄も駕籠できて、馬場に倒れている兄弟の死体を見るや、

「おろかものたちが……何ということをしてくれたのじゃ」

号泣したという。

林光寺からの知らせをうけた菅野の妻・宇乃は、

「これは、相手方も同じ御家中ゆえ、先ず御目付へおとどけせねばなりますまい」

と、佐次兵衛に命じ、横目の飯島半之介まで届け出させたので、果し合いの結果は一時に松平屋敷内へ知れわたったものである。

宇乃は、しっかりしていた。

林光寺の下男から、くわしく様子をききとり、負傷した大場一平のために駕籠を用意させ、おそらく戸板で運ばれてくるにちがいない老夫のためには敷きぶとんを、さらに三人分の着替えまでととのえて、佐次兵衛を出発せしめた。

林光寺で亡き主人を見た佐次兵衛や千代蔵について、のべることもあるまい。

戸板に横たわった菅野六郎左衛門の死体は白布をもって蔽われ、これを松平屋敷の仲間六人が担ぎ上げた。

大場一平は血まみれの衣類を着替えて駕籠に乗った。
「佐次兵衛。おれはゆかれぬ。叔母上がことをたのむ」
と、安兵衛はいい、大場一平には、
「叔父上のはたらきぶり、くわしゅう叔母上へつたえて下さい」
「心得ました」
このとき足軽・仲間の指揮にあたった松平家の臣・中根権太夫に、安兵衛は、こういっている。
「義理の叔父・菅野六郎左衛門と村上三郎右衛門殿との果し合い、これにて相すみましてござる。尚、相手方助太刀びとの村上庄左衛門、中津川祐見、及び中津川門人某は、私、中山安兵衛が討ち果しました」
つまり、その意味合いでの仕返しがあるならば、菅野には関係なく、中山安兵衛一人に向けておこなわれたい、と、いったのである。
村上兄弟の遺族は六十をこえた宗栄老人と、妹のみねのみであった。
だが、村上兄や中津川祐見を討たれたことについて恨みに思う者がないとはいえぬ。現に松平家中の士で祐見の門人になっている者も少なくはない。
それらの人たちが、間違って大場一平へ復讐をいどむようなことがあってはならぬ。
以後のすべては、自分ひとりの肩に負うつもりで、安兵衛は念を入れたのだが、
「うけたまわってござる」
中根権太夫は心強く受け合ってくれた。

菅野の遺体をまもった人びとが林光寺を出てゆくのを見送ってから、安兵衛は井戸端で全身を洗い、髪もゆい直してもらった。

気がついて見ると、安兵衛の小袖は左のえりもとから胸へかけて切り裂かれており、このほかにも数か処のやぶれがあった。おそらく、中津川祐見の切先によるものだろうが、

「こりゃ、おどろいたわえ」

道山和尚が、水をあびている安兵衛の躰をつくづくとあらため、

「おぬし、まったく手傷をうけてはおらぬぞよ」

と、いった。

「はあ……」

「おどろいたなあ、あれだけの、すさまじい斬り合いをしたというのに……」

「私も、ふしぎに思うております」

「ふうむ……」

和尚は、まぶしいほどに晴れあがった早春の空を仰ぎ、

「今日の、おぬしのはたらきは、おぬしが持っている力量をこえたものじゃ。天の加護があったのじゃな」

「はい」

「どんな心地がするな？」

「は……」

しばらく考えた後、安兵衛は、
「人ひとり、生まれ出てより死ぬるまで、それぞれに生くる道は、永く、けわしく、めんどうなものでございますが……死ぬるときは一瞬でございますな」
「いかにもな……」
「人は必ず死ぬるもの、でござりますな」
「それが身にしみてわかったか？」
「はい。私も和尚様も、一日一日と死につつあるのでございますな」
「それで？」
と、和尚もなかなかうるさい。
いつもなら閉口する安兵衛なのだが、このときは、すらすらとこたえた。
「ゆえに……人は、死ぬるつもりで生きなければならぬ、と思い至りました。このことは、いつもいつも、菅野の叔父から申しきかされていたことでございますが……それが、そのことが、今日はじめて……」
「人生の究極とおぼえたか」
「はい」
庭で、叔母がよこした小袖、袴に着替えた。
「これから、どこへゆくつもりじゃ？」
「とりあえず稲生様へ……」

「いかにもな」
「その後のことは、まだ決めておりませぬが、どちらにせよ、しばらくは江戸に……」
「それはいかぬ」
「いや。私を敵と思うものあれば、逃げかくれはしたくありませぬ」
「村上のものは別に手出しもいたすまいが、中津川の門人どもがな……」
「はい」
「よし、いけ。何事も、もはや、おぬし一人の判断で見事に始末がつけられよう」
「おそれ入ります」
昨夜からの心づくしに対し厚く礼をのべたのち、和尚が仕度してくれた編笠をかぶり、安兵衛は稲生屋敷へ向った。
このとき、まだ彼は伊佐子の死を知らなかった。
林光寺から四谷の稲生屋敷までは、わずかな道のりである。
安兵衛が門前へさしかかると、門番の平十郎が道に出ており、
「あっ……」
と、叫んで門内へ飛びこんでいった。
表門をさけ、勝手門へまわった安兵衛は、
「中山安兵衛でござります。まことに御面倒ながら、御用人、大沢重四郎様まで申しあげたきことがござります」

と、呼びかけた。

門の扉は閉ざされている。

そして、昨日までは、この稲生の家来だった安兵衛であるが、いまの彼は門内へ入ることをつつしまねばならぬ。

なぜといえば、何人もの武士――それも、れっきとした大名の家来をもふくめて斬り倒している身だからである。

この始末がつかぬかぎり、天下晴れて大道は歩けぬ。

菅野や村上のことは松平家が始末するだろうけれども、安兵衛は昨夜かぎり稲生家から暇をとっている。

だから、またも浪人の身となったわけだ。

その安兵衛を狙って飛びかかる復讐の剣がないとはいえぬ。

（ことに、祐見の門人は黙っていまい）

と思うし、村上兄弟と同じ松之助派の松平藩士の中には、かなり中津川道場へ通っていた者がいるときいたことがある。

こういう身の上になったのだから、他人の、しかも幕臣として身分をもつ旧主人の稲生七郎右衛門には、いささかの迷惑もかけてはならないのだ。

これは、そのころの武士として心得ておくべき当然のことでもあった。

「しばらく……しばらく、お待ち下さい」

ききおぼえのある足軽の声が門内でして、あわただしく駈けてゆく足音がする。
門内がざわめいてきた。
安兵衛は、編笠をとった。
数人の足音が門内に起り、勝手門へ近づいてきて、
「中山殿か……」
用人・大沢重四郎が興奮を隠そうともせず、
「委細は承知つかまつった」
「え……では？」
「当屋敷よりも人をつかわし、果し合いの始終、かげながら、見とどけ申した」
「左様で……」
夢中で気がつかぬことであったが、半刻にわたる決闘のうちには、かなりの見物もいて、その中には鳥羽又十郎もいたのだが、むろん、安兵衛は知らぬ。
「お見事なるはたらきぶり、しかと主人にもつたえ申した」
「はっ」
安兵衛が門の扉に向って頭をたれたとき、門内にかたまっている稲生家の人びとが、たまりかねたように歓声をあげた。
「かずかずの御配慮をいただき、安兵衛、御礼の言葉もございませぬが……いまは御承知のごとき身の上。御挨拶を申しあげ、引きとらせていただきまする。稲生七郎右衛門様へ、よしなに

……」

「あ、待たれい」

「何か？」

「申しあげたいことがござる」

大沢用人の声が、このとき、ようやく落ちつきを取り戻し、

「柳島村に、渋井次郎左衛門と申する名主がござる。これは三百年も相つづいた旧家にて、柳島へまいれば、すぐにわかり申そう。主人より、すでに手配してござるゆえ、ひと先ずそこへ身をおよせなされい」

何から何までゆきとどいた稲生の配慮であった。安兵衛は、ありがたく旧主人の好意に甘えることにした。

「大沢様……」

「何かな？」

「昨夜、稲生様より拝借いたしました国貞の一刀、刃こぼれ血あぶらの汚れもひどうございますゆえ……」

「おう、おう、それほどにおはたらきなされたか。して、そこもとは」

「ふしぎに、傷ひとつ負うてはおりませぬ」

「おう、おう……」

「で、国貞の一刀でござりますが、もしも我が身に万一のことあっては、と、存じますゆえ、

手入れもいたさぬまま、まことにぶしつけにはございますが、いま、お返し申しあげたく……」

「いや。国貞の一刀は、そこもとのものでござる。主人は差しあげた、と申しておる」

これも好意に甘えるより仕方がなかった。

江戸の東郊・柳島村は、現代の江東区・亀戸町にふくまれて、ほとんどが煤煙たちこめる工業地帯になっているが、元禄のそのころは林光寺のある戸塚村よりも草ぶかい田舎であった。

名主・渋井家の屋敷は、すぐにわかった。背後に雑木林を背負った堂々たるかまえで、ひろい中庭には能舞台もあるほどだ。

むかし、このあたりが戦乱に見舞われたころ、当時の渋井家の主は、柳島、砂村（現、砂町）の村民たちのすべてを、この宏大な屋敷に収容し、離散させなかったといわれている。

現当主の次郎左衛門は、三十をこえたばかりの壮年であるが、こころよく、

「稲生様とは三代つづきの知合いでありますゆえ、心おきなく、おとどまり下さい」

そして一言も、決闘のことにふれぬ。

これは、よほど肚の据った人物と見てよい。

いえば、敵の刃を待つ安兵衛をかくまうことになるのだが、

「中山様のことは、当屋敷では私のみが存じておりますゆえ、この屋敷のものたちへは秋山新五郎とお名のり下さるよう」

と、いってくれた。

奥まった一室が、安兵衛のためにあたえられ、すぐに風呂場へ案内された。

すでに陽は、かたむいていた。

風呂場で裸になって見ると、思いもかけぬ箇処に返り血がこびりついている。

中津川祐見の血か、村上庄左衛門の血か……。

（叔父上の亡きがらを迎えて、叔母上は、どうなされていることか……）

やっと、そこへ思いがいった。

それまでの安兵衛は、何時、どこから襲いかかるか知れたものではない敵の刃にそなえ、全身の毛穴がふさがれたような緊張をもちつづけていたのだ。

入浴を終えて出ると、夕飯の膳が出ていた。

今朝、林光寺で軽く二椀の粥を食べたきり、安兵衛の腹には何も入っていない。さすがに、

「ああ……」

おいしくて、ためいきが出た。

食事中に、ふと気づいた。

額から頬のあたりにかけて、何か、ちくちくと痛むのである。

「すみませぬが、手鏡を拝借いたしたい」

渋井家の女中にたのむと、女中が急に目をみはって、

「ま、血がにじんで……」

という。

鏡で見た。

額いちめんに、点々と血が浮いている。はじめは返り血が落ちなかったのかと思ったが、そうではなかった。

（そうか……）

やっと気がついた。

いまごろになって気がつくのも妙なものだが、事実このときまで痛みもおぼえなかったし、血も浮き出さずにいたのだ。

原因は、こうである。

中津川祐見と斬り合ったとき、二人の太刀と太刀が打ち合い、鉄火をほとばしらせ、そのとき、刃の微細なかけらが飛んで、安兵衛のひたいへ突き刺さった。おそらく、祐見の顔面も同様であったろう。

安兵衛は酒で洗った縫針をもらい、手鏡で顔をうつしつつ、針で顔面にめりこんだ刃の細片をほじり出した。

そして、このときはじめて、

（よくも、祐見を斬れたものだ……）

むしろ愕然となった。

女中の知らせで渋井次郎左衛門が駈けつけ、家来のものたちもあらわれ、安兵衛のこのさまを見ながら、

「すさまじいものじゃ」

「ほんにおそろしいような……」

ささやき合っている。

懐紙の上へほじり出した刃の細片は十余におよび、

「もはや、手がくたびれました」

安兵衛は投げてしまった。

この後、二日にわたり、まだ奥にめりこんでいたかけらが浮いて出てきた。筋肉に押されて皮膚へ浮いて出るものだろうか……。

何しろ、林光寺の柱へ叩きつけては鍛練し、異常なまでに発達した安兵衛のひたいであるから、このような状態を起すことも考えられぬことではない。

この夜、安兵衛は眠れなかった。

心身は疲労しつくしているのに眠れない。

刺客にそなえる緊張ではない。

(今日の、おれのしたことは人として武士として、間違いがなかったろうか……)

という反省であった。

菅野六郎左衛門の決闘を、果して充分に助け得られたろうか、である。

何よりも、祐見門人の阿栗小兵衛が自分より先に馬場へひそんでいたことに気づかなかった油断が悔いられた。後にあらためて見ると、阿栗が走り出て菅野の肩先へ浴びせた傷は、ごく軽いものであったが、

（やはり、おれの油断だ）

と、思わざるを得なかった。

あれほど注意をして馬場へ入り、あたりを見まわしたのに、阿栗の存在に気づかなかったことは、

（もしも、あの男が、もっと手練の者であったら、叔父上は村上弟を殪す前に後ろから斬殺されていたやも知れぬ）

それを考えると、あぶら汗がふきあがってくる。

叔父夫婦のこと、中津川祐見のこと、伊佐子のこと、稲生七郎右衛門のことなど、それからそれへと連想が連想をよび、興奮をうむ。

ついに一睡もせぬまま二月十二日の朝を迎えた。

細井広沢が柳島の渋井屋敷へあらわれたのは、この朝である。

稲生家から、広沢の耳へも通じていることだろうと思ってはいたが、

「よう、来て下された」

さすがに、安兵衛は飛び立つようなおもいで部屋を走り出て、廊下をわたってくる広沢を出迎えた。

その後の菅野家のありさまについて、安兵衛は何よりも、この年長の友人の力を借りて、様子をきき出さねばならなかった。

「お知らせする暇がござらなんだ」

部屋へ招じ、安兵衛がいうと、
「いやいや」
細井広沢は、激しくくびをふった。広沢にしてはめずらしく双眸が強く光り、顔面に血がのぼっている。
「ようも、して、のけたな、安兵衛殿」
「は……？」
「すべては稲生様からきいた」
「そうでしたか……」
「前夜から当日にかけてのふるまいぶり、広沢も、きいておどろいたよ」
「と、申されると……？」
「立派なものだ、おぬしに、あれだけのことがやれようとは、まことにすまぬが私は思うてもみなかった」
「夢中でした」
「夢中だからこそ、人の真髄が出る、おりゃ、おぬしのような男を友にもち、誇りにおもう」
「いや、そのような……困る、私は困る」
「堀内先生にも申しあげておいた」
「ありがとうござる」
「松平屋敷は、いま大変なさわぎだそうな」

「やはり……それで？」

「なれど、菅野御遺族は安泰に保護をうけておられるというし、昨夜も通夜がおこなわれ、弔問の藩士たちが引きもきらなかったという」

「さ、左様で……」

「ま、いまのところは、それ位のことしかわからぬが、私も私なりに手をまわしてあるし、くわしいことがわかり次第、すぐに知らせる。ま、いまのところ、安心してよい」

「かたじけない。かたじけない」

広沢を見て気がゆるんだためか、得体の知れぬ感情が激してきて、目の中が、じわじわと熱くなった。

今朝も晴天である。

江戸市中とちがい、木も草も早春の陽にぬれ、土の香が部屋の中にまでにおってきていた。

「ところで……」

ややあって、細井広沢がいった。

「ところで、いま一つ、むごいことをきいてもらわねばならぬ」

「むごいこと……？」

「うむ……昨夜、細川侯の家来、軽部兵庫殿より、私のもとへ使いがあってな。左様、軽部殿は、おぬしも顔見知りの間柄であったな」

「はあ。稲生様御屋敷へ見えられたとき……」

「うむ、うむ」

「それが、どうかしたのですか？」

細井広沢は、一瞬、ためらったようだ。ごくりと広沢の喉が鳴った。

安兵衛は、わかったような気がした。

高田の馬場事件を知った細川家が安兵衛を召し抱えることをやめにしたのであろう、と推察したのである。

（別に、それが、むごいことでもあるまいに…当然のことだ）

わずかに安兵衛が微笑をもらしたとき、

「いや、違うぞ、安兵衛どの」

と、広沢がいった。

「え……？」

「おぬしが考えていることと私のいうこととは違うらしい。実はな、伊佐子どのが一昨夜、死んだのだよ」

そこへ、女中が茶を運んできたので、細井広沢は安兵衛の反応をたしかめようともせず、つと立って縁側へ出た。

中庭の向うに、がっしりとした母屋の藁屋根がのぞまれ、そのあたりに咲く梅の花が匂っていた。

茶をおいた女中が廊下へ出てきたのを見やると、表情を硬張らせている。

安兵衛を見返って見た女中は、広沢に何か問いかけたそうな様子をしめした。
広沢は無言でくびをふって見せた。
女中が去ってから、広沢は部屋へ戻った。
安兵衛は、いらいらとこれを待っていて、
「いったい、伊佐子どのが、どうしたと申される。死、死んだ、と、申されたな」
「いうた。ま、きけい」
「まことなのか……」
「まことだ」
広沢は、語りはじめた。
あのとき、佐々木丹丸を討って戸外へ出た伊佐子は、胸のちょうど左の乳房の下へ突き刺さった矢を引きぬき、傷口を押えて善養寺へ入った。
善養寺では、大さわぎとなった。
すぐに町医者がよばれ、手当てがおこなわれたが、伊佐子は、
「中津川祐見の門人に襲われて……」
いいさしたまま、伊佐子は昏睡状態におちいったという。
いい残した言葉は、この一言のみであった。
安兵衛が茅町の草地で祐見門人五名を殪し、稲生屋敷へ戻ったころに、伊佐子は息をひきとった。

善養寺では、取りあえず池の端の伊勢や庄次郎へ知らせ、伊勢やからの使いの者が細川越中守上屋敷へ走った。

細川家からは、軽部兵庫ほか七名が坂本へ駆けつけてきた。

軽部は、伊佐子と安兵衛の間柄を知っているから、すぐに、稲生七郎右衛門屋敷へ報告をした。

これが、安兵衛を林光寺へ送りとどけた稲生家のものが帰邸して間もなくのことである。

稲生七郎右衛門は、このことをきくや、

「で、伊佐子どのは、すでに息絶えたのでござるな、間違いはござらぬな」

使者に立った細川家の士へ、何度も念を押した。

「間違いはござりませぬ。それがしも軽部様と共に駆けつけ、この目にてたしかめました」

「左様でござるか……」

稲生は暗澹となり、

「実は、こちらも……」

と、安兵衛が菅野の助勢をすることのいきさつを、実にくわしく、時間をかけて語った。

これは、使者から軽部兵庫へ、さらに軽部から細川越中守の耳へ、事態をあやまりなくつたえるためである。

明日の決闘が、どのような結末をみるかは稲生も知らぬ。だが、もしも安兵衛が生きて帰れば、

(細川家の仕官は、彼にとって、もっとものぞましいことである)

と、信じているから、安兵衛と細川家とのつながりを絶ちたくはない。そのためには、事態を

できるかぎり明確につたえておかねばならぬと考えたからだ。
きいているうちに使者・山中某の顔色も引きしまってきた。
「伊佐子どのの一死を、いま中山安兵衛につたえることは、いかがなものか……」
語り終えた稲生七郎右衛門は、
「まだ息があるなれば、別のはなしでござるが……」
「いかにも。うけたまわったるごとき大事を問もなくにひかえておられた中山うじなれば……」
「そこもとも、左様に思わるるか……」
「はあ」
稲生は、安兵衛へ知らせぬことに決めた。
使者が帰った後、稲生は大沢用人をよび、すべてをつたえ、
「屋敷内のものへはロどめをせよ」
と、命じた上、
「安兵衛生きてあれば、屋敷門前まで挨拶にまいろうが、そのときも知らせるな。そうなれば、すぐさま柳島の名主屋敷へひそませねばならぬ。果し合いの後始末は、むずかしいものじゃ」
「心得ましてござります」
「さて、安兵衛の身が落ちついてからのことだが……」
と、いつの間にか稲生七郎右衛門は、安兵衛の勝利を当然のことのように思いはじめていたらしい。

「さて、伊佐子の死をたれが知らせるかじゃ」
「それは、細井広沢様をおいて他にござりますまい」
言下に、大沢用人がこたえた。
「うむ。できた。まことに、そちの申す通りじゃな」
空は白みかけている。
間もなく、高田の馬場では決闘が開始されようと気づき、
「そうじゃ、まだ細井殿には何も知らせてはおらなんだ。そしてまた、安兵衛の姉が嫁ぎ先の、ほれ旗本の溝口修理殿家来で町田何とやら申す……」
「はい。すぐに双方へ使者をたてまする」
こういうわけで、決闘の後、門前へあらわれた安兵衛へも、大沢用人は伊佐子の死を告げなかったのである。
細井広沢からすべてをきき終えたときの中山安兵衛について、くだくだとのべるにもおよぶまい。
こういうときの人間の状態については、だれも同じようなものなのであろう。
まして、安兵衛のように幼少のころから何度も突発事件に出会っている男は、おどろきに耐える能力が人一倍そなわっており、広沢も以外に思ったほど落ちついて見えた。
だが沈黙の後に、うめくような声が安兵衛から発した。
「おのれ、祐見め……」

というのが、その言葉であった。

このときまでの安兵衛は、わが手に討った中津川祐見に対して、むしろ哀悼の心がつよくうごいていたのである。

あれだけの力量と智能を持っていた男が、おのれの剣名をあげるためとはいえ、安兵衛から見て、実に、ばかばかしいまねをしてのけた。

松平左京太夫という将軍の親類にあたる大名へ取り入り、この庇護をもって江戸随一の剣士となろうとした。その野望についてというよりも、野獣のような、素性も知れぬ浪人あがりの門人を何名も傍におき、こやつらをあやつり、自分のみか伊佐子までを暗殺しようとした。その〔やりくち〕の卑劣さに対し、勃然と怒りがこみあげてきたのだ。

むろん、佐々木丹丸が独断で伊佐子を襲ったことを祐見は知らぬ。

だから安兵衛は、伊佐子も祐見の指令によって討たれたと思いこんだわけだが……。

どちらにしても、中津川祐見のとった行動は唾棄すべきものにちがいなかった。

安兵衛も、相手を討った後に、このような激怒を抱くという経験をしたことがない。

「高田の馬場に落ちていた祐見の首をつかみ戻し、力のかぎり踏みにじってやりたいとさえ思いました」

と、後に安兵衛は姉のさちに語っている。

「で……伊佐子どのの亡きがらは？」

ややあって、安兵衛がきくと、広沢が、

「坂本の善養寺へ、ひと先ずほうむられたそうな。細川家の人びとが出張ってきて、万事に、よく念がいきとどいてな」

「広沢殿は、伊佐子どのの……」

「おう、見た。おだやかな死に顔になっていたよ」

「おだやかな……」

「昏睡におちいり、おぬしの夢を見つつ、息絶えたのやも知れぬな」

「下僕の甚蔵が、朝帰って、さぞ、おどろいたことでござろう」

「うむ。げっそりとな……亡きがらの傍にうずくまっていたようだ」

今日は、もう帰るべきだと細井広沢は思った。

「明後日、また、まいる」

「お手数をかけました。この上とも、たよりにいたしおります」

「この屋敷から当分は一歩も出られるなよ。それにしても……いまの、おぬしを見たら、北島雪山先生は、何と申されようかな……」

細井広沢が帰っていった後、安兵衛は茫然と部屋にすわりこんだまま、時をすごした。

一昨夜、別れたときの伊佐子は歓喜の絶頂にあって、肌も眼もかがやいていたのである。その彼女が、いまは土の中に埋められてしまって、ふたたび安兵衛の前へ、あらわれることがないのだ。

どうしても実感が、わいてこない。

悲しみよりも、あの夜の、自分の躰に激しくふれた伊佐子の肉体の其処此処の感触が、なまなましくよみがえってくるばかりであった。

あの、女の精気にみちみちた彼女の肌や肉が、死んだ……のである。

その夜から、渋井屋敷の人びとは、めったに安兵衛の部屋へ近づかなくなった。細井広沢が事情を語ったものであろうか。

三度の食事、入浴の知らせなどに声もなく女中が出入りするだけで、この心づかいは、安兵衛もありがたかった。

いそがしい身なのに、それからも細井広沢は、たびたび訪問してくれた。

「菅野殿が身をもって投じた石は、見事に的中したらしい」

と、広沢はいった。

高田の馬場での決闘の結果が、松平左京太夫家中にひろげた波紋は大きかった。

殿さまは、菅野六郎左衛門や村上兄弟の死体が運び込まれてくるまで、まったく事情を知らず、

「このようなことを、なぜに隠していたのか」

激怒して、江戸家老・日根九郎三郎を責めたが、

「これは両人の私闘にござります。ゆえに、両人ともそれぞれの武士の意気地あってのこと。これをはばむこともならず、まして殿の御耳へ入れる必要もござりませなんだ」

いつもは温和な日根老人だが、菅野の死をきいてからは態度が、がらりと変ってきた。

同じ〔お為派〕の家臣たちも、

「菅野殿の死を無駄にしてはならぬ」

色めきたってきた。

菅野が、村上三郎右衛門のような下劣な人物を相手に果し合いをしたのも、一つには藩士たちの感奮をうながすためである。

しかも、決闘の様子は、奉行所の調査によって、すべてあきらかになった。ことに馬場付近の茶店の者たちや農民たちの目撃によって、村上兄弟が中津川祐見と組んでの仕かけ方の卑怯さ、安兵衛や大場一平のはたらきぶりの神妙さが明確となったので、

「屋敷内の士をすべて集めよ」

と、日根家老は命じ、殿さまの前で、決闘の始終を説明した。

こうなると村上兄弟を支持していた「松之助派」も一言もない。

左京太夫にしても、いかに村上兄弟を寵愛していたからといって、これでは文句のつけようがない決闘のありさまである。

そこへ、殿さまにあてた菅野の遺書が宮井数馬から提出された。

殿さまは、一読して、顔面蒼白となった。

菅野の遺書は、村上兄弟や祐見については少しもふれていないが、かなり浩瀚なものであった。

遺書の内容は知られていないが、どのようなものであったか、およそわかろう。

ことに、松平家の苦しい財政状態や政治のゆるみについて、菅野は今まで殿さまの耳へもとどかなかった実状を事こまかに記し、いまのうちにみずから先頭に立ち藩中の気風を刷新して領国

領民のために政治をととのえぬかぎり、いかに将軍家親類の大名といえども必ずほろぶことをするどく示唆していたらしい。

事は、奥御殿の女中たちの取締りにまでおよぶ遺書であったという。

「頭が痛い」

左京太夫は、また寝込んでしまったが、日根九郎三郎はかまわずに病床へ押しかけ、菅野、村上両家の今後の処置について談合をもとめる。

「この件は、どこまでも両人の私闘という一事にござります」

と、日根家老は殿さまに反省の色が濃いのを見て、もう余計なことはいわなかった。

「となれば、喧嘩両成敗。どちらに片手落ちがあってもなりますまい」

「いかにもな……」

結局、こういうことになった。

村上兄弟の父・村上宗栄については「おかまいなし」で、故庄左衛門の俸禄は一時召しあげられ、あらためて百石を下しおかれる、というわけだ。中津川祐見と結婚することになっていたむすめのみねへ、いずれ藩士の子弟がえらばれ聟に入れば、村上の家名は絶えることがない。

菅野家については――。

「故六郎左衛門には一人の子なきゆえ、家は断絶」

となった。

したがって菅野の老妻・宇乃は松平屋敷から出てゆかねばならぬのだが、落ちつくさきは、西

尾隠岐守の家臣・寺岡主水方にきまった。

寺岡主水は、宇乃の実家の遠縁にあたる人物で、

「よろこんで引きとらせて頂く」

と、宇乃へ申し出たものである。

さらに、松平家から宇乃が一生を終えるに充分な御納戸金がわたされることになった。

次いで、日根家老の進言により、大場一平が七十三石三人扶持の士として松平家に召し抱えられることになり、若党・井上佐次兵衛も取り立てられた。

まことに整然たる始末であり、村上宗栄も、

「ありがたき仕合せ」

と、よろこんだし、宇乃にとっても異存がある筈はない。

こうした処置が完了するまでに、およそ一か月を経た。

この間、安兵衛は細井広沢のいう通りに柳島の名主屋敷を一歩も出なかった。別に逃げかくれしたわけではなく、町奉行所へは届出てあって、事後の指示を待っていたのだが、やがて奉行所から、

〔中山安兵衛にはおかまいなし〕

と、正式に通達があった。

そして、覚悟していた中津川門人の襲撃もない。

安兵衛はまた自由に大道を歩むことを得たわけだ。

安兵衛が柳島を出て、はじめに足を向けたのは、坂本の善養寺である。

伊佐子の、ま新しい白木の墓標は、あたりの樹木がふきあげた新緑の中にあった。

彼女の父・原田左門の墓は熊本にあるのだが、

「伊勢やどのからの申し出もありましてな。伊佐子どのの墓は当寺に、ということになり、まもなく伊勢やどののはからいにて立派な墓石もたてられましょう」

と、和尚がいった。

寺の帰りに伊勢やへいった。

それから、麹町御門内の西尾隠岐守上屋敷にある寺岡主水の長屋へ、いまは未亡人となった宇乃を訪問した。

善養寺でも伊勢やでもそうだったが、ここは武家屋敷だけに、

「いま、寺岡殿長屋へ、かの中山安兵衛が訪ねてきておるそうな」

「あれほどのはたらきをした御仁の面だましい、一目、見たいな」

屋敷の男も女も、寺岡の長屋のまわりにひしめく始末である。

「安兵衛どの。何と申してよいやら、ありがとうて、ありがとうて……」

宇乃は泣いた。いままで張りつめていて泪ひとつ見せなかったのだが、安兵衛を見て一度に気がゆるんだのであろう。

「おききおよびでございましたろうが……」

と、安兵衛は唇を噛んだ。

「私めが、もそっと力ある者なれば、叔父上もあのようなことにはならずにすませたものを……ともあれ、中津川祐見を斬ってとるまでの間、村上兄弟二人を叔父上におまかせしたこと、口惜しゅうてなりませぬ」

「何の……」

宇乃は、ここで菅野の遺書を安兵衛へわたした。

「叔父上の……」

思いがけぬことだっただけに、封を切る安兵衛の手がふるえ出した。

(叔父上は、おれに何といいのこされたのか……)

ひらいて見ると文面はくだけたもので、しかも簡潔(かんけつ)きわまるものであった。

さて、何と書きおこうか……。

ながながの厚誼(こうぎ)を、ありがたく、うれしゅう思い存ずる。

末長う、こころたのしき酒をのみ候へ。

六郎左

安兵衛どの

それだけの遺書なのである。

「お、叔母上……」

たまりかねて、どっとふきあがった涙のままに顔をくしゃくしゃにしつつ、安兵衛は、その遺書を宇乃へわたした。

その夜は柳沢出羽守屋敷に住む細井広沢の長屋へ泊り、この菅野の遺書を見せると、

「ああ…」

めったなことにはおどろかぬ広沢も感嘆の叫びと共に、

「私は、菅野殿を、これほどの仁とは思わなんだ」

と、いった。

高田の馬場の決闘によって、中山安兵衛の名は、江戸府内に知れわたった。

世の中は、指導階級である武家が幕府創成以来はじめての堕落ぶりをしめしているし、将軍みずから下らぬ信仰にこりかたまって無道の悪法をしくという始末である。

ながらく戦乱も絶えているため、都市文化が異常に発達し、商業は栄えて町民が奢りたかぶるのはよいが、生産階級の農民その他は、いつになっても楽にならぬという時代なのである。

どの人間にも、ふたたび戦国の世がこようとは思ってもみない。

それは結構なことなのだが、そのため、おのれが人間であることも忘れてしまっている。

自分は、いつまでたっても死にたくはない、死ぬものではない、不幸な目にはあいたくない、悲しみを味わいたくない……という苦難から逃避して安楽を願う心が異常なまでにふくれあがっている。

諸方に寺ばかりできて、寺の坊主がまた武家の権力とむすびつく。

そもそも将軍家が隆光のような僧のいうままにあやつられているのだし、庶民もまた信仰によって苦をのがれようとつとめるわけだから、このころの江戸には、めったやたらに寺ができたのである。

こういう時代に——。

一人の若い武士が義理によって一命を投げうち、果し合いの助太刀をしたという事件は、何か異状なものさえ感じさせる。

もしも安兵衛が、あの決闘で、中津川祐見にでも斬殺されていたなら、

「ばかなことをしたものではないか」

というものも出ていたろう。

だが、安兵衛は見事な活躍をしめした。

「大変な男がいたものだ」

「立派なおさむらいさまもいたものだな」

「えらいものだ、若いのに——」

となった。

心あるものは、別の立場から、

「いまの世に正義の心は失われずにいた」

と、感動をする。

細井広沢の主人・柳沢出羽守も、

「そなたは中山安兵衛と親しき間柄じゃそうな。どうじゃ、中山を当家に召し抱えたいと思うが……」

と、いい出した。

いま飛ぶ鳥を落すいきおいの柳沢出羽守の家来になるというのなら、だれでも二つ返事で飛びつくところであろう。

「さて……安兵衛が何と申しましょうやら」

「ともあれ、腹のうちをきいて見てくれぬか」

「は――」

こたえたが、安兵衛を柳沢家につかえさせるのは大反対の細井広沢であった。

（おれも、ひまをもらって浪人になろう）

とさえ思っている。

柳沢出羽守吉保という主人も、自分が家来になったはじめのころは、

（怜悧なお人じゃ）

と見ていたのだが、このごろ、つくづく嫌気がさしてきて、がまんならない。

将軍の威光を背後にした柳沢の所業は、日ごとに汚ならしいものとなってくるし、こうした主人にまじめくさって書物の講義をするのが耐えられなくなってきたのだ。

さいわいに、恩師・北島雪山も柳沢家から去ったことだし、今までは師のためにこらえていたことも、

（もうよいであろう）

安兵衛を主人に引き合せるよりも早く、

「おひまを頂戴つかまつりたし」

と広沢が申し出た。

これには柳沢出羽守もおどろいたらしいが、

「近年つくづくと、わが身の勉学の至らぬを嘆きおりまする。このあたりにて出直し、みっちりとおのれを鍛えたいと存じまするので――」

言葉はやわらかいが広沢は一歩もゆずらなかった。

「何も、そのような急なことを申さずともよいではないか」

「ひとり前の学者となりましたる上で、また御抱えいただきとうございます」

というが、二度と主人をもたぬつもりの広沢であった。

「困ったことよのう」

出羽守も自分の家来たちは可愛いがる。

それに、いざとなると気が小さく弱いので、広沢のような筋金の入った男の前では、どうしても押し切られてしまう。

「きっと戻ってまいるか」

「ひとり前の学者となりましたなれば……」

「広沢。もはやじゅうぶんではないか。いまのそなたの力量をもってすれば、決して……」

「いやいや、左様なものではござりませぬ。学問というものの深さは計り知れませぬ。いったん、おのれに不足をおぼえましたなら、人へ講釈をすることもはばかられますゆえ」

「そうしたものかの……」

「はい」

「で、中山安兵衛がことは何とする？」

「私、おひまをいただきましたる上、中山に面談いたしましょう」

「そうしてくれるか」

「は――」

うけ合ったが、出羽守の意は安兵衛につたえぬつもりだし、たとえつたえたところで、安兵衛はくびをふるにちがいない。

第一、こんな話をもっていったなら、

（おれが安兵衛に笑われるではないか）

なのである。

柳沢出羽守ばかりでなく、安兵衛を家来にしたいという大名の使いが絶え間なく柳島の渋井屋敷を訪問してくる。

「それどころではありませぬし、第一に、渋井家がめいわくいたしますので……」

と安兵衛は、たまりかねて戸塚の林光寺へかくれた。

とにかく、非常な人気であった。

堀内源左衛門へ挨拶に出向いたときなどは、道場にいた門人たちが、まるで凱旋の武将でも迎えるような歓呼をあびせかけてきたものだ。

（困る、めいわくだ……）

と思いつつ、胸の底のどこかに、何かはれがましいような、こそばゆいようなものがある。

まだ柳島にいたころだが、新発田藩からも使者がきた。

使者は、辻平馬である。平馬が小姓をしていたころ、安兵衛の亡父・中山弥次右衛門切腹の原因ともいうべき事件を目撃したことは、すでにのべた。

いまは江戸詰めになっている辻平馬が安兵衛を訪問したのも『召抱えたい』という溝口信濃守の意をつたえるためであった。

溝口信濃守が、中山弥次右衛門横死のことを後になって心にとがめていたことはたしかであった。

それだけに、今度の安兵衛のはたらきが評判となるにつれ、

「中山安兵衛は、元わが家につかえたる者の遺子でござってな」

などと、江戸城中へ上るたびに親しい大名に語ったらしい。

新発田藩の家来となるのなら、安兵衛の場合、復帰ということになるわけだが、溝口信濃守がしめした条件は、

「四百石にて召し抱えたい」

という思いきったものだ。亡父・弥次右衛門は譜代の家来で、二百石の俸禄をもらっていたの

だから、その倍である。

この申出をうけたとき、

（あの殿さまが、ついに、このおれを四百石で迎えにきたのだ）

一瞬ではあったが、安兵衛の顔に得意の色がういた、やも知れなかった。

とにかく、その一瞬の快感を何にたとえたらよいだろう。

端的にいえば、

（ざまを見ろ！）

とでもいいたいところか——。

だからこそ、

「いまのところ仕官のつもりはござらぬゆえ、おことわり申しあぐる」

きっぱりと辻平馬へいい切ったときの痛快さも、尋常のものではない。

「いや、それは……」

辻平馬は青くなって、

「おことわり下されては、それがし腹を切らねばなりませぬ。殿におかせられては、ぜがひにも中山殿をお抱えあそばしたき御意向にて……」

しどろもどろに、頭をすりつけんばかりにしてたのむのである。

平馬は、弟の千之助にくらべたら、はるかに凡庸な人物だと安兵衛は思った。

何とたのんでも承知しないので、

「いずれ、御重役方のどなたかが、こちらへおたずねいたすでござろう」

しおしおと辻平馬は帰っていったが、次の日には用人の佐治藤右衛門がやってきた。この人は亡き父とも気が合っていたようだし、人柄も立派であるだけに、安兵衛も困り果て、

「よく考えて見とうござる」

一時のがれにこういって、佐治用人を帰した。

そして林光寺へかくれたのである。

「貴公も、いろいろと胸にふくむところもあろうけれど、中山弥次右衛門殿一件について、殿は後悔しておられる。ここのところは、すっぱりとむかしを忘れ、戻っていただけまいか」

佐治藤右衛門の丁重をきわめた言葉なのである。

悪い気持ちはしなかった。

(このように、おれがもてはやされてよい筈がない。そもそも助太刀はおれ一人ではない。大場一平も、おれにおとらぬはたらきをしているではないか)

と思い、さらに　伊佐子の死への悲しみが日一日とふかまる中において、世上の人気の派手やかさを(困る!)といいつつ、安兵衛はうれしくもないわけではなかったのである。

或る日、夕飯のとき、道山和尚の酒の相手をしていた安兵衛に、

「少しの間、江戸をはなれていたほうがよいな」

和尚がいった。急のことで返事をためらっていると、

「それそれ、何とやらいうた……越後の、おぬしを育ててくれた……」

「あ、伊助のことでしょうか」
「それよ。まだ墓まいりをしていまい」
「そうでした」
「いってきたらどうじゃ」
「なれど、まだ後始末が……」
「もう何もおこらぬさ」
「左様でしょうか」
「江戸をはなれ、頭を冷やしてくるがよい」
「え……？」
「江戸にいると、おぬし、おのれが気づかぬままに……」
と、和尚は拳を二つならべ、鼻の上に立てて見せた。天狗の鼻をしめしたのである。
「そのとき、おれは、もう何といってよいか……躰中に火がついたようになってしまってな。恥ずかしくて顔も上げられなかった。和尚は、まさに、おのれの胸底にひそむものを看破しておられたのだ」
後に安兵衛は語っている。
このごろでは彼が林光寺にいることを知った近辺の者が、山門のあたりをうろうろしており、いま評判の中山安兵衛を一目でも見ようとする。中には女の身で境内へ入りこんでくるのもいた。こういうとき、安兵衛があらわれようものなら目ひき袖ひきのありさまで、称賛の視線と声を

露骨に安兵衛へあびせかけるのだ。

（困ったことだ）

顔をしかめながらも、まんざら悪い気持ちはしない。

いま、安兵衛といったら、江戸市中の鼻たれ小僧まで知らぬ者はないのである。

諸家の使者も林光寺を訪問するようになったし、知名の旗本なども『ぜひ一夜、席を共にいたしたい』なぞと招きをよこす。

事件が事件だけに安兵衛の「人気」には諸人の尊敬の念がふくまれている。人気役者のそれとは、いささか違う性質のものだけに、

（困った、困った……）

と思いつつ、彼らの視線を感じるにつけ、

（なれど、よくも中津川祐見を斬れたものだな）

ふっと、そんな気がおきてくるのだ。

（あ、いかぬ。おれは慢心しかけている）

自戒のそばから、

「ぜひとも、中山殿の御来駕を得て、われら、御教示をたまわりたい」

江戸の剣客たちからの使者がやってきたりすると、これを謝絶しておきながらも、

（おれが、これほどに有名な男になろうとは、ばかばかしいことだ）

と、舌うちをしてみるのだが、顔には、何やらこそばゆいようなうす笑いが浮いたりする。

だから、道山和尚の何気ない〔天狗の鼻〕の仕ぐさを見たとき、安兵衛は五体が電撃につらぬかれたように思えた。

ややあって、彼は蚊の鳴くような声で、

「明朝、越後へ、出立いたします」

と、こたえた。

安兵衛が林光寺を発ったのは三月二十日ごろと思われるが、約一か月を経て、越後・小千谷から帰ってきた。

ついでのことに新発田へも牛崎へもいきたかったのだが、どうしても、その気になれない。今度の事件については、江戸にいる姉のさちから、くわしい手紙が牛崎の義兄夫婦にも、新発田の伯父たちにもとどいているらしいし、それでなくとも、交通不便なそのころにあってさえ、江戸から百余里もはなれた美濃国・加納宿の旅籠屋で桜井平兵衛という人が書きのこした日誌に、

〔……江戸において越後の士、中山安兵衛、伯父の敵討をなすとの風聞あり〕

との記述があるそうだ。これが二月二十日の日誌であるから江戸で起った事件が諸国へ知れわたるのは意外に早かったのである。もっとも〔伯父の敵討〕と記してあるのは、間違いで、安兵衛の場合は〔義理の叔父の助太刀〕と、いうのが本当である。

けれども、当時、江戸市中にあってさえ敵討にしてしまった匂いがあるようだから、うわさがうわさをよび、遠いところへ届くころには講談の〔高田の馬場〕がしめすように、安兵衛が十八人斬りをしたというほどの大げさなものになっても、ふしぎはあるまい。

それだけに、いま親類の人びとに会うこともためらわれ、小千谷の伊助の墓へ詣り、伊助の弟に供養の金をわたしたりして、三日ほど、安兵衛は滞在をした。

この小千谷滞在のときに安兵衛は腹ちがいの弟弥太郎が江戸へ丁稚奉公に出ていることを知った。

伊助の弟・長次郎がいうには、

「何でも浅草にある瀬戸物問屋で柏や藤蔵とかいう店じゃときいておりますが……」

だそうな。

それだけきけば、充分であった。

小千谷の町の傘屋善七方の前を、一、二度通り　安兵衛は、ちらりとおなよの姿も見た。

おなよは、めっきり老けて見えたし、二人の子を生んだときいた。

（弥太郎は、たしか十二歳になった筈だ）

亡父・中山弥次右衛門が無事に生きていれば、弥太郎も妾腹ながら中山家の次男坊として、おそらく刀を帯すこともゆるされていたろう。

（どのような顔だちなのかな……）

江戸へ戻ったなら、ともあれ一度、彼の奉公先をたずね、ひそかに顔を見たいと考えながら、安兵衛は小千谷を発し、上州へ入って馬庭の樋口道場を訪問した。

樋口十郎兵衛は、まだ健在としており、高田の馬場の一件については、

「うわさをきいて以来、毎日、菅野六郎左衛門殿の冥福を祈っておった」

とのみ、いっただけである。

安兵衛のはたらきについては一語もふれようとはせず、

「久しぶりに稽古をいたそうかの」

すぐに道場へ出てくれた。それが、いまの安兵衛にはたまらなくうれしかった。

むかしながらの泊り稽古をしばらくして、江戸へ戻ったのである。

江戸では、またも安兵衛の人生を……というよりも決定的に彼の一生を左右することになった人物が、彼の帰りを待ちかねていた。

家名

安兵衛の帰りを待ちかまえていたのは奥田孫太夫と同じ浅野家の臣で堀部弥兵衛金丸という老人である。

孫太夫が林光寺へきて、

「安兵衛殿。気にそむまいが、ひとつ今度はおれの顔をたててやってくれぬか。毎日のように堀部殿がな、おぬしの帰りはまだか、おぬしに会わせろというて……いやもう家中にも評判の一徹者でな。おれも、せめられて実は弱っておるのだ」

という。

安兵衛も一度、堀内道場で、孫太夫から堀部老人を紹介されたことがある。

あのとき、

「せっかくに、おはげみなされい」

と、自分の肩へ親しげに手をかけてくれた堀部弥兵衛の顔を、まだ安兵衛はおぼえていた。

「私に、堀部殿は何の用事なので？」

きくと、孫太夫は苦笑をもらしたまま沈黙をしたが、ややあって、

「めしを共に食いたいそうな」

「ははあ……」

「おれがたのまれたのは、それだけのことだ」

「何やらわかりませぬが、私、まいりましょう」

「そうか、いってくれるか」

孫太夫はよろこんだ。後でわかったことだが『安兵衛殿に会わせろ』という堀部弥兵衛のさいそくは執拗をきわめたものであったらしい。

三日後、安兵衛は久しぶりで鉄砲洲の浅野内匠頭上屋敷へ向った。

弥兵衛は、屋敷内の自分の長屋で「おもてなし」をしたいのだそうだ。

安兵衛が、大石内蔵助に借りた金五両を返すため、浅野藩邸をおとずれ、奥田孫太夫にはじめて会ったときから四年の歳月がすぎている。

約束の七ツ時（午後四時）に藩邸へ着き、勝手門の詰所へ、

「奥田孫太夫殿へ……」

と、安兵衛が申し入れる声をきいて、
「それにはおよばぬ」
詰所の奥に待ちかまえていた堀部弥兵衛が門番の足軽を突き退けるようにして、
「やあ、これはようこそ」
顔中が口になったような笑い顔で、あらわれた。
「や、これは……」
「さ、こちらへ――」
「本日は、おまねきにあずかり……」
「あいさつはめんどうでござる。さ、こちらへ」
堀部弥兵衛は、このとき六十九歳。留守居役をつとめ、俸禄は三百石であった。
「今日は非番でござってな。朝からもう待ちかねておりましたよ」
留守居役というのは、江戸藩邸にあって一種の外交官のようなつとめをするわけだから、弥兵衛の言動もさばけており、前に一度顔を合せたきりという間柄なのに、
「孫太夫殿にせがみましてな。ごめいわくでござったろう」
自分の長屋へ案内するまでに、たちまち安兵衛の緊張をといてしまった。
部屋へ通されると、いきなり酒になった。
これがまた、ひどくうまい酒なのである。
今日のためにと、弥兵衛は半月もかけて選りぬいた酒であったから、

「これは……」

酒好きなだけに、安兵衛の双眸がぱっとかがやいた。

「いかがじゃな。お気に入られたか？」

「大へんに結構な……」

「そりゃ、ありがたい。思いきりのんで下されい。それがしも相伴つかまつる」

弥兵衛ものみはじめる。

これがまた、ひどいのみぶりなのである。

大ぶりな盃で、ぐいぐいとのむ。

弥兵衛の妻女は若といい、五十九歳になるのだそうだが、見たところ十歳は得をしている。肌つやもよく、てきぱきと立ちうごくさまが見るからに軽快で、このような酒席には返って気持ちがよかった。

ほかに幸といって十八になるむすめがいるときいていたが彼女はまだあらわれぬ。台所で下女を指図しながら酒肴をととのえているらしかった。

肴も吟味されたものばかりで、ことに安兵衛の好きな〔そば切り〕が出たのにはおどろいた。

手打ちのそば切りを大根おろしの入った辛い汁にひたして少しずつ食べながら酒をのむのが安兵衛は好きであった。

これは細井広沢に教えられたもので、酒のさかなには〔そば切り〕が、もっとも安兵衛に合うのである。

弥兵衛は何もいわぬが、このように安兵衛の好みまで知ったのは、いずれ奥田孫太夫あたりの口からきいたものであろう。

安兵衛は、心のこもった堀部夫妻のもてなしに感動せざるを得なかったが、

（なぜに、このような好意をしめしてくれるのだろうか？）

どう考えても、わからぬ。

はじめは高田の馬場でのことをきき出されるのか、と、困りきっていたのだが、一向にその様子もない。

そのうちに、安兵衛も気にならなくなってきた。この老人と、くつろいだ気分で酒をのむ快適さにすっかりひたりきってしまい、

「実は私、四年前に、この御屋敷へまいったことがございます」

安兵衛から語りはじめた。

「ほほう」

と、弥兵衛は目をみはる。

「奥田殿からおききおよびではありませぬか？」

「いいや」

「それは、奥田殿が私の恥をおかくしなされたのでしょう」

「それは？」

「実は、以前に、お家老の大石内蔵助様に金を拝借いたしまして――」

「貴公が大石様に――これはまた……」

酒をはこんできた妻女もびっくりしているところを見ると、本当に知らなかったものらしい。

奥田孫太夫のゆきとどいた思慮を、こちらからぶちこわしてしまうようであったが、口をきってしまった以上、もう仕方がなかった。

それに、堀部夫妻の前でならもう何でもさらけ出してよいような解放感をおぼえ、

「実は……」

ざっと、京都での事件を語り、

「浅野家の方々とは、ふしぎに、そうした御縁がございましたので……奥田殿が親しゅう私をみちびいて下さるのも、これまた同様の……」

「いかにもなあ」

堀部弥兵衛の酒光りのする顔が歓喜にふるえている。

安兵衛がふと気がつくと、部屋の隅に若い女がいて、熱心に自分を見つめていた。

その若い女が、弥兵衛のむすめの幸であった。

「ひとりむすめでござってな」

弥兵衛が引き合せると、

「幸でございまする。ようおこしなされました」

むすめらしくもなく、はっきりと安兵衛を見つめたまま、てきぱきといった。母親ゆずりの快活な気性らしい。

若と幸が去った後で堀部弥兵衛が夜の色に包まれた庭へ、ふと視線を転じながら、
「安兵衛殿は養子にまいられるおつもりなど、ござらぬかな？」
何気なくいってよこした。
「それは……」
安兵衛は朱塗の大盃を膳において、
「前にも二度ほど、養子縁組みをお世話下された方々もありましたなれど、私が養子にまいっては、中山の家をたてる者がおりませぬ。先程も思いきって申し上げましたように、亡父、弥次右衛門が、あのような死にざまをいたしましたので、ことさらに私も中山の家名を捨てかねるのでございます」
「なるほど」
「浪人暮らしのままで一生を終えるにいたしましても、やはり養子に入るつもりはありませぬ」
「もっともなことじゃ」
「だいぶんいただきました。そろそろ、おいとまを」
「左様か。無理におひきとめもなるまい」
と、弥兵衛はあっさり承知をしてくれたが、
「以後、御交誼を願えましょうな？」
まじめな表情になり、むしろきびしい口調で、

「今後は心おきなく互いに酒をのみかわす仲となりたい。御承知下さるか？」
尚も念を押してきた。
「こちらこそ、お願いいたします」
安兵衛も、この老人が好きになった。一夜だけの交歓なのに、
（いささか、おれもつつしみを忘れたかな）
と思うほど自分の身の上を語ったりした。こんなことはめったにないことなのである。
翌日、安兵衛は堀内道場で細井広沢に会った。広沢も柳沢出羽守からはなれ、気楽な浪人暮らしをはじめるようになったので、このごろは、よく道場へもあらわれるのだ。
いま、広沢は深川八幡宮にちかい町家で妻子と共に暮らしている。
安兵衛が昨夜のことを語ると、広沢が笑い出した。
「そりゃあ、安兵衛。とんだ仁に見こまれたな。これは大変だぞ」
「え……？」
「堀部老人さ。老人、おぬしを聟にするつもりさ」
「まさか……」
「だが、あの老人、七十に近くなって、子といえば、あの幸どの一人だ」
今度は安兵衛がおどろいた。弥兵衛には後つぎの男子が、それもかなりの年配の子息がいて、孫の一人二人いるにちがいないと思っていたからだ。急に、だまりこんだ安兵衛へ、
「あの老人、喰いついたら、とてもはなれぬというぞ」

広沢が、いたずらっぽくいった。

堀部弥兵衛のくわしい事蹟は、中山安兵衛ほどにあきらかではない。

九州出身の若い浪人だった弥兵衛が浅野家につかえたのは、およそ五十年前の正保二年で、当時の殿さまは浅野長直である。

だから弥兵衛は、長直と、長友、現内匠頭長矩の三代につかえてきたわけだ。

弥兵衛にも男子があって、名を弥兵太（一説に弥一兵衛）といい、これが非常な美男子であったそうだ。

後年、弥兵衛が安兵衛に語っている。

「わしにも女房どのにも似ぬ美しさであったよ」

美しさばかりでなく、剣術も学問も相当なものであったというから、弥兵衛がこの後つぎにかけたのぞみは大きかった。

弥兵太が、十六歳の夏であったが……。

そのころ堀部家に本多喜平次という者が厄介になっていて、この男は弥兵衛の妻・お若の遠縁にあたる。

浪人してゆきどころがないのを弥兵衛が引きとり、面倒を見ていたのだが、お若は、

「とても御世話の仕甲斐があるような者ではございませぬ」

大反対であったらしい。

その通りであった。

喜平次は、しばらくすると美少年の弥兵太にいいよりはじめた。つまり衆道（男色）ごのみのやつだったのである。

あるとき弥兵太が机に向って読書をしているうしろから、

「弥兵太どのよ。つれなくするものでないぞ」

そっと忍び寄った喜平次が、いきなり抱きついてきた。

いつも手をにぎってきたり、すれ違いざま、そのあぶらぎった額を押しつけてきたりするのを我慢していただけに、

「およしなされ！」

弥兵太が、たまりかねて突き飛ばし、

「武士たるもののすることがそれだけでござるのか。喜平次殿には文武の道もなく人の道もないようでござるな」

思いきって叱りつけた。

十歳も年下の弥兵太に叱りつけられたこのことが、本多喜平次を激怒させた。

もともと粗暴な性質で、物事に耐えることができず、いつも官能のうめきだけに駆りたてられているような喜平次であるから、

「ようも、ほざいたな？」

叫ぶや、抜打ちに弥兵太の後頭部を斬った。

「あっ……」

血しぶきの中で、うめきながら、これも脇差しを抜いた弥兵太が、
「何をする……」
猛然と喜平次に立ち向った。
瞬時の争闘であったが、すさまじい物音がしたので、ちょうど非番で別室に昼寝をたのしんでいた堀部弥兵衛が、
「何事じゃ」
廊下へ出たとき、これを突きのけるようにして本多喜平次が庭へ逃げた。喜平次も血みどろになっている。左腕を斬り落とされたのだ。
「ち、父上。無念……」
廊下へあらわれた息子が戸板でも倒したように殪れた。
「待てい」
堀部弥兵衛は、すぐに、それと察し、庭から長屋の通路へ逃げ出た本多喜平次に追いつき、
「おのれ！」
突き倒しておいて馬乗りになり、差していた短刀で喉を突き通し、たちまち仕止めた。
これが、およそ二十年も前のことだそうだ。
この話を、安兵衛は奥田孫太夫からきいた。
細井広沢と安兵衛が語り合っているところへ、孫太夫があらわれたのである。
「そういうわけでな……」

と、孫太夫は広沢と顔を見合わせ、

「たしかに細井殿の申されるごとくだ。きっと、あの老人、おぬしを養子にもらいたいといい出すにちがいない」

「ですが、……堀部殿が昨夜、私に養子縁組みをのぞむ気はないかと申されましたとき、私は中山の家名を立てねばならぬことをはっきりといいました」

「それで、老人は何というたな」

「もっともだ、むりもない、と申されました」

「そこが、くせものじゃ」

孫太夫は頭をかいて、

「だからおれも堀部殿に会わせたくなかったのだが」

すると広沢が、

「ま、よいではありませぬか。安兵衛と堀部老人のかけひき、これアみものでござるよ」

などと、からかうのだ。

安兵衛も、それほど気にならない。

あれほど、はっきりと養子にならぬ意をつたえてある。まさかに堀部家へのぞまれるとは知らぬから、きっぱりといい切っておいた。それだけに、ふたたびあの老人が養子縁組みのことを持ち出すとは思えない。

堀部の養子になるということは、つまり、あの幸というむすめと夫婦になることである。

行く先、結婚をせぬつもりはないが、伊佐子に死なれてまだ半歳も経ていない現在、それは安兵衛の思いもおよばぬことだ。

いま安兵衛は、髪の毛をのばしはじめている。

細川家からは、高田の馬場事件以後、何の音沙汰もなかった。他の大名からは仕官のまねきが絶えぬというのに、細川越中守だけが前にきまりかけていた仕官のことをまとめようともしない。

「大名の家というものは、それぞれに違った気風があってな。細川家は、伊佐子どのが中津川一味に殺害されたこともふくみ、いろいろと迷っているのだろう」

と、細井広沢はいった。

公儀からの裁きはついても、いまの安兵衛から危険が去ったとはいいきれぬ。

現に、祐見の門人だったと思える武士たちが、入れかわり立ちかわり林光寺の周辺をうろついているようであった。

肥後熊本五十四万石という大藩だけに、こうした安兵衛の身柄を引き取って、後に問題や事件が起ることをおそれているのだと考えられぬこともない。

安兵衛は、あきらめていた。もとの浪人に戻るつもりで、月代の毛を剃らぬことにしたまでだ。

「総髪になさいませ。きっと似合います」

といった伊佐子の言葉を、安兵衛は洗顔の水にうつるわが顔を見るたびに思いおこし、哀しげなためいきをもらすことがあった。

夏になると、師の堀内源左衛門が、

「中山の身柄についても、そろそろ考えてやらねばなるまい」

と、細井広沢にいった。

「いまも林光寺の世話になっているそうな。それもよかろうが、菅野六郎左衛門殿も亡くなり、仕送りも絶えたとなれば、安兵衛も寺の厄介者では心苦しいであろうし、好きな酒も思うようにのめまい」

「いや先生。あの寺の和尚は、中山を我が子同然に扱うておるらしいのです」

「ほほう。中山は、実にしあわせな生まれつきじゃ」

「なれど中山も、自力で暮らしたいと思うております」

「仕官の気持ちには、まだならぬのか？」

「はい。高田の馬場の一件以来、おのれの未熟さをつくづくと知った。これでは仕官をしても充分な奉公はできぬから、と、このように申しております」

「あれだけのはたらきをしたのではないか」

「ところが、いささか慢心をいたしましたようで……本人もそれに気づき、それで……」

堀内源左衛門は、沈思の後に、

「わしが道場で代稽古がつとまろう」

「中山にで？」

「うむ。下のものたちへ稽古をつけさせ、わしが何とか彼が暮らすものだけはあたえようが、どうじゃ」

「それは、中山も大よろこびでありましょう」
このことを告げられ、安兵衛は、
「道場の代稽古など、おもはゆいことですが、なれど一所懸命につとめてみます」
と答えた。
こういうわけで、林光寺を出た安兵衛が牛込の天竜寺竹町の町長屋へ住みつき、堀内道場へ通うようになったのは初秋のころであった。
安兵衛の新しい住居は、旧主人・稲生七郎右衛門の屋敷に近い。
稲生も、しきりに、
「諸家のまねきも多いときいていたので差しひかえていたのじゃが、もう一度、わしがところへ戻らぬか」
すすめてくれたが、安兵衛の決意をきくと、
「それもよかろう」
小者や下女たちを長屋へよこし、炊事道具や夜具などをととのえてくれた。
これで安兵衛の生活も一応の落ちつきをみせたわけだが、それを待っていたかのように、俄然(がぜん)、堀部弥兵衛が養子の交渉に乗り出してきた。
それまでに二度ほど、安兵衛は堀部家へまねかれてゆき、例によって酒宴でもてなされていたが、弥兵衛は一言も養子のことを口に出さぬ。
(広沢殿や孫太夫の申されることは、いささか大仰な……)

と、安兵衛は安心していたのだ。

ところが弥兵衛は直接に交渉をするのではなく、久世出雲守の家来、中根長太夫という人にたのみ、中根から堀内源左衛門へ、

「安兵衛殿を養子に迎えたい」

と、申し入れたのである。

「さあ来たぞ。どうするな、安兵衛」

細井広沢は手をうってよろこんだ。

「むろん、おことわりするまで」

ことわったが退くものではない。秋から冬にかけて堀部弥兵衛の執念もおとろえなかったが、道場へ通いつづける中根長太夫の根気も非常なものであった。

中根長太夫は細井広沢とも親交があり、下総・関宿五万八千石、久世出雲守の藩中でも人に知られた老熟の武士である。

安兵衛も広沢の紹介で、二、三度会っていたし、

「このはなしが堀部殿から出たときには、それがし思わず手をうってよろこび申した。これは、まことに似合いの組合せと存ずる」

どういうところで弥兵衛に共鳴したのか知れぬが、

「引きうけたる以上、堀部弥兵衛、安兵衛の父子ができあがるまでそれがしも一命にかけて取りもちをいたす決心でござる」

いくら堀内源左衛門がことわっても断固として退かない。

翌元禄八年になると……。

「この上は、中山安兵衛と談合ねがいたい」

と、堀内も逃げてしまった。

それでも引かないのである。

春になると、今度は内藤丹後守の家来・三沢喜左衛門、秋元但馬守の家来・間瀬市左衛門という二人の武士が長太夫に加わり、三人が交替で、堀内道場へ押しかけたり、安兵衛の長屋へきたり、あらわれぬときは書状をもって迫るのだ。

堀内源左衛門も困り果てて、安兵衛に、

「いずれも名ある方々が、あのように力を合せ取りもちをするところを見ると、堀部弥兵衛殿は、当代まれなる人物にちがいないが……それにしても、あの方々の執着ぶりには、ほとほとまいった」

「おさわがせをいたし、申しわけもございませぬ」

「どうじゃ。この上は、おぬしが堀部方へまいり、弥兵衛殿に会うて、はっきりと、もう一度おことわりしては……」

「は――そういたします」

「なれば、間に入られた中根殿たち三名の方々の顔をつぶしてはならぬぞ」

それで、中根、三沢　間瀬の三人にも堀部宅へきてもらった上で、安兵衛は浅野藩邸へ出向い

ていった。

それは伊佐子の一周忌もすんだ春の或る日のことで、安兵衛が浅野屋敷の勝手門から入り、火の見櫓に沿った通路を曲ろうとすると内玄関に通ずる内門から奥田孫太夫が裃姿で出てきた。

「安兵衛殿か……」

孫太夫がすまなそうに、

「おれが引き合せたばかりに、いかいめいわくをかけてしまったようだな。これから堀部殿へか」

「はあ」

「ことわりにゆくのだろうが、よほどうまくことわらぬと……」

「はい」

「何しろ、あの老人は、これと思いこんだら腹をかけてやる仁でな」

腹をかける——というのは、命がけでやるということなのだ。

安兵衛も顔をしかめた。

「いや、すまぬ。ゆるしてくれい」

「いえ、それは……私も堀部殿のような御仁に見こまれましたことは身のほまれとも思いますが、これだけは、どうも……」

「おれも何度か老人にいったのだ。安兵衛殿にかまわぬでくれとな……ところが承知をせぬ。実にどうも困ったことだ」

返って安兵衛が、孫太夫をなぐさめるかたちになった。
孫太夫に別れて堀部家へいくと、すでに中根ほか二士も到着していた。
「ようまいられたな」
交渉たけなわとなってから会うことを避けていた堀部弥兵衛なのだが、例によって機嫌よく安兵衛を迎え、
「いよいよ、おぬしの口から引導をわたされるのか……なれど、どうもあきらめきれぬわえ」
いったが、とてもあきらめている口調ではない。
すぐに酒がはこばれた。
安兵衛は盃をとろうともせず、
「私ごとき者を、これまでにお目にかけくだされたること、何と申してよいやら……まことに有難く存じますが……」
どこまでも丁重に、ことわった。
「いや、ようわかり申した」
と今日の中根長太夫が、ばかに物わかりのよい口調で、
「こうなっては、いたしかたもあるまい」
すると間瀬市左衛門が、
「堀部うじ。もはやこれまで」
といえば三沢喜左衛門も、

「すっぱりと、あきらめられい」
と、口を合せる。
(やはり思いきって、自分の口からことわってよかったな)
安兵衛も、ほっとした。
「何やら、がっくりといたしたわい」
堀部弥兵衛も、あきらめたらしく、
「では、いっこん」
安兵衛に盃をとらせ、みずから酌をしてくれる。
この時、中根長太夫が何気なく安兵衛に問いかけた。
「中山殿。貴殿がもし、中山家の二男、三男に生まれ、家をつぐべき長兄があったとすれば、このたびの養子縁組みについて、何と考えられるな?」
「それは……」
と、安兵衛も、うまく話がついて気がゆるんでいたし、それに事実、そう思ってもいたので、
「武士として、堀部家のような家にのぞまれること本懐でござる」
「では、弥兵衛をおきらいではない?」
「きらいなどと……私は慕わしく思いおります」
「何、したわしいとな」
弥兵衛が、きらきらと両眼を光らせつつ、何度もうなずいて見せる。

「中山の家名をたてる身でなければ、よろこんで……」
思わず、安兵衛がいった。嘘ではない、そう思ったことがあるのだ。
すると……。
この安兵衛の言葉を待ちかまえていたように、堀部弥兵衛が、ぐいとひざを乗り出し、
「では、家名をたてることさえできるならば、この爺と父子の縁をむすんで下さるのか」
するどい気魄のこもった声で、いった。
安兵衛は、ぽかんと口をあけたまま弥兵衛を見つめた。
（そのようなことができる筈はないではないか。この老人は何をいい出すのか……）
中根たち三人も、一様に姿勢を正し、にらむように安兵衛へ視線を集中した。
これは、どういうことなのか……。
堀部の姓をつがぬ位なら養子に迎えても仕方がないのだ。それでは堀部家をついだことにならぬから、菅野六郎左衛門の場合と同じように弥兵衛が死んだ後、堀部家はつぶれることになり、したがって浅野の家来でいることも不可能であること、いうまでもない。
しかし、弥兵衛は、
「いかがじゃ。中山の家名をたてることを承知ならば、わしと父子になって下さるのだな」
尚も念を入れてくる。
中根長太夫も、
「武士の一言。たしかにうけたまわった」

きめつけるようにいうと、三沢も間瀬も、大きくうなずいて見せた。

「それは……なれど、そのようなこと、できよう筈がござらぬ」

安兵衛も、むっとした。からかわれているのでなければ、このような冗談が出る筈もない。

「いや、できるできないではない。貴公の思うままにいたせば、弥兵衛と父子のちぎりをむすんで下さるのか、ときいておるのでござる」

中根長太夫が、笑いもせずにまた反問をくり返した。

こうなると安兵衛も一度に頭へ血がのぼってきて、面倒になり、

「いかにも！」

怒鳴りつけるように、こたえた。

ばかばかしくもあり、いまさか自棄気味にもなっていたことはたしかである。

その『いかにも！』の声をきくや、堀部弥兵衛が躍り上るように両腕を天井へ向って突きあげ、

「よろしい！」

と叫んだ。

「よろしい。わしは殿へ申しあげる」

安兵衛は度胆をぬかれた。

そんなことを殿さまの浅野内匠頭へ申し出たところで、ゆるされるわけがない。

「ともあれ、私は、これにておいとまをいたしとうござる」

たまりかねて安兵衛がいい出すと、

「左様か。おひきとめもなるまい」
堀部弥兵衛は、あっさりとうなずいてくれたが、得体の知れぬ興奮に面をかがやかせ、
「くどいようでござるが、只今の一言、うそいつわりはござるまい」
「ござらぬ！」
乗りかかった舟で、安兵衛も引き下るわけにはゆかぬし、第一、不可能なことにきまっているという安心感があるから、きっぱりとこたえ、早々に堀部家を辞去した。
浅野藩邸を出てから、
（今日は幸どのの姿が見えなかったな……）
ふっと、それを想い出した。
堀部家では……。
「よしよし、これでよし」
弥兵衛が、まだ興奮をしている。
中根たちも、
「おぬしのたのみにより、われらも口うらを合せておいたが、弥兵衛殿よいのか」
「まこと、浅野侯へ申し出るつもりなのか？」
「笑われるぞ」
すると、弥兵衛が思いつめたように、こたえた。
「笑われてもよい。わしは安兵衛殿と父子になりたいだけのことだわ」

これから十日後——堀部弥兵衛が、このことを浅野内匠頭へ申し出たものである。
浅野内匠頭は堀部弥兵衛の申し出をきいて一笑に附してしまった。
「老巧なそのほうが、あまりにもたわけたことを申す。ほどほどにせよ」
という主君へ、弥兵衛は、
「どうあっても、おゆるしを頂きとうございまする」
いい張ってきかぬ。
内匠頭もついに怒って、
「ゆるさぬ！」
はねつけておき、奥へ入ってしまったという。
このことを奥田孫太夫が安兵衛の浪宅へきて告げた。
安兵衛は瞠目した。
老人、本当にやったのである。
内匠頭が怒って、
「それならば、いとまをつわかす」
といえば安兵衛を養子にすることによって堀部弥兵衛は浪人になってしまう。
浅野家のように家臣を大切にする気風がある大名ならば尚更に、後つぎにもならぬ養子縁組みをゆるす筈はない。
これ以上に、弥兵衛がいい張るのなら、みずから辞職し浪人となってから安兵衛を迎えるより

手段はないのだ。

まだ、弥兵衛も辞職するなどといい出してはいないし、内匠頭も、

「出てゆけ」

といったわけではないのだが、このまま弥兵衛が引き下るとは思えぬし、いきがかりでどんなことになるか知れたものではない。

すべてをきいて、安兵衛は、ふかい嘆息をし、

「弥兵衛殿は、それほどまでに、この私を……」

つぶやいたきり目をとじてしまった。

「まるで、女の深なさけのようなものだが……よほどに思いつめていたものと見える。おれも、これほどとは思わなんだ」

奥田孫太夫も事態が只事でないのを知って、

「あの老人、こうなったら後へは退くまい。たとえ浪々の身となっても、おぬしを迎え、おぬしと共に暮らすつもりであろう」

といった。

夕暮れで、長屋の通路を走りまわる子供たちの声がやかましい。

暗くなった部屋の中で坐りこんだまま、ながい沈黙をつづけている安兵衛を、孫太夫も持てあまし気味になって、

「では……ともあれ……おれは帰る」

いったとき、急に安兵衛が顔を上げた。
「お待ち下さい」
「え……？」
「これは、どうも……」
いいさして、安兵衛が笑い出した。まるで泣いているような笑い声なのである。
「どうした？　中山……」
「弥兵衛殿に負けました」
「何……では、おぬし……」
「養子にまいります。堀部家の人になりましょうよ」
「ふむ……なれど同情はいかぬ」
「いえ、そこまでに思いつめて下された武士の情意、私も男としてうれしく、また冥加に思います」
「そ、そうか……」
「細井広沢殿に知らせたい。御同道下さるか」
「承知した」
二人して深川の細井宅を訪問し、すべてを告げるや、広沢は事もなげに、
「そうなるだろうと思うていた」
といい、さらに、

「こうなった上は、おれも反対などせぬよ」

と、つけ加えた。

この年――元禄八年六月二十九日に、浅野家江戸家老・安井彦右衛門、大目付・植村与五左衛門、用人・奥村忠右衛門の三人が、堀部弥兵衛の長屋へあらわれ、

「そのほう、養子願いの通り、もっともにおぼしめされるによって、勝手次第につかまつるべし」

と、主君・浅野内匠頭の許可をつたえた。

内匠頭も、中山安兵衛が堀部家をつぐのなら、

「中山安兵衛ほどの男が弥兵衛の聟となり、行末は我が家の臣となること、まことにめでたい」

大いによろこんでくれたわけだ。

弥兵衛を知り安兵衛を知るもののうち、この縁組みに異論をとなえたものは一人もいない。

あの徳山五兵衛でさえも、安兵衛が挨拶に出向くと、

「これは似合いの父子じゃ。なるほどのう、こうした組合せができるものとは……世の中の人の縁というものは、ふしぎなものではある」

と、いったそうだ。

ここに――中山安兵衛は堀部安兵衛となり、名乗りの応庸も武庸とあらためた。安兵衛は二十六歳であったが、すぐに堀部家へ入ったわけではない。

養子縁組みの契約は交したけれども、その後、足かけ二年ほどは天竜寺竹町の長屋にあって、文武の修行をつづけた。

堀部弥兵衛の熱情にうたれて決意はしたものの、すぐ堀部家の人となり、むすめの幸を妻に迎える気にはなれぬ何ものかがあったのである。

いうまでもない。それは、伊佐子のおもかげが安兵衛の胸底へ微妙に投影していたからであろう。

安兵衛は当分、何も彼も忘れて剣をみがき、学問に精を出した。

細井広沢の指導によって、書道にうちこんだのも、このころのことである。

広沢が手本に書いてくれた〔千字文〕を、くり返し習うこと数十度におよんだとつたえられてもいる。

元禄十年秋——。

安兵衛は正式に堀部家へ入り、二十一歳になっていた幸と夫婦になった。

翌年の春になると、堀部弥兵衛が隠居することになり、安兵衛が浅野家へ出仕し、馬廻り役として二百石を給せられた。

弥兵衛の俸禄三百石のうち百石は（留守居役）の役料であったが、隠居料として新たに五十石が給せられ、さらに町住居をゆるされた。

「たのむぞよ」

気軽に、弥兵衛は老妻と共に藩邸の長屋を出、近くの小田原町へうつり、元医者の家だったも

のを買い取って暮らしはじめた。

安兵衛は養父同様の定府（江戸屋敷勤務）であったが、この年の十二月に尾張大納言の夫人・千代子の死去があり、このため弔問の使者として名古屋へおもむいている。

別記するにおよばぬようにも思われるが、これは堀部安兵衛の勤務ぶりが非常に優秀であったことをしめすわけだ。

歳月

浅野内匠頭は、以前に北島雪山から書道をまなんだことがある。

おそらく、雪山が江戸へきて柳沢出羽守の扶持をもらう前の、放浪時代のことであったろうと思われる。

このとき雪山は、赤穂に半年余を滞在した。

だから大石内蔵助とも交際があったらしく、安兵衛が堀部家との縁組みについて長崎に住む雪山に知らせたとき、

「浅野家は武士の巣として申しぶんなき結構をそなえおる家柄にて、まことにめでたいと思う」

と、返事をくれた。

さらに雪山は、内匠頭にも内蔵助にも書簡を発し、安兵衛のことをよろしく……と、たのんで

いる。

このことは、まだ正式に堀部家の人となる前のことだが、

「そちの聟となるべき男が、雪山先生とこのようなつながりをもっていたことは、いささかも知らなんだ」

と、内匠頭が上機嫌で堀部弥兵衛へもらした。

それまで内匠頭は、

「柳沢家をはなれてより、雪山先生の行方が知れぬ」

かねがね心配をしていたらしいのだが、いまの雪山が病を得て長崎に住んでいると知り、浅野家からも相当な見舞金が送られたらしい。

こういうわけで、浅野内匠頭は安兵衛に対して、まだ顔も見ぬうちから好意を抱いたようだ。

北島雪山の死が浅野家へ報ぜられたのは、安兵衛が名古屋出張中のことであった。

江戸へ戻って、はじめて安兵衛は雪山の死を知った。

雪山は十月二十二日に、六十二歳の生涯を終えていたのである。

深川八幡のそばにある細井広沢の家を安兵衛が訪問したのは、元禄十年も暮れようとする或る日のことで、

「ま、堀部さま。江戸へお戻りでございましたか」

広沢の妻のもや女が生まれたばかりの次男・勇を抱いてあらわれた。

もや女は十八歳。

細井家を辞して、この深川へ居をかまえた広沢に嫁いだときは十六であったという。
広沢は在宅で、
「おう、よく来られた」
いつもと変りなく、にこやかに安兵衛を迎えるのだ。
（広沢殿は、まだ雪山先生の亡くなられたことを知らぬらしい）
とっさに、安兵衛は思った。
広沢は広沢で、安兵衛の沈んだ顔の色に、すぐ気づいたらしいが、
「もや。すぐに酒の用意を……」
と、いった。
「いや……」
安兵衛は手をあげて制し、
「それどころではござらぬ」
「何がさ？」
「御存知ではないと見える」
「何が？」
「北島雪山先生が長崎において、お亡くなりに……」
いいかけると、広沢が事もなげにうなずいた。
「御存知でしたか？」

「むろん、知っている」

広沢の微笑は消えていない。

（この人は、恩師の死を悲しまぬのであろうか……）

安兵衛でさえ、あの浮世小路をたずねての、雪山との交歓の思い出だけでも、

（もはや、あのように先生とたのしく酒をくみかわすこともできぬのだ）

感傷にひたり、さいなまれて、酒盃を手にする気持ちにもなれないのである。

だが、広沢は妻女をいそがせて酒の仕度がととのうや、

「先ず、いっこん」

と、すすめた。

重苦しい表情をくずさぬまま、安兵衛は盃をとった。

「中山……いや堀部安兵衛よ」

「何でござる」

「おぬし、雪山先生の死去されたのをいたみ、そのように沈んだ顔のいろをしているのか」

「酒をのむ気には、なれませなんだ」

「いや、ありがとう。その心は亡き雪山先生にも通じよう」

「広沢殿は、悲しくありませぬか？」

「悲しかった……六年前の、あの朝……ほれ、おぬしもおぼえていよう。江戸を発つ先生を高輪の七軒茶屋まで見送ったことを……」

「はあ……」

「あのとき、おれは……おれにとって、雪山先生は亡き人となっていたのだ」

この言葉をきいたとき、安兵衛は電光のようなものに躰を打たれたような気がした。

見送ろうとして茶屋を立つ一同を、

「そのまま、そのまま……」

と制した北島雪山が、細井広沢の顔を見守りながら、

「広沢どのよ。もはや会うこともあるまい」

といった、その声を、いま安兵衛は、まざまざと思いおこした。

広沢が、

「はい」

こたえたとき、すでに雪山は背を向けて街道へ出ていた。

茶店の縁台に腰かけたまま、狂った人のように激しく両手で顔をおおい、むせび泣いた細井広沢の姿も印象的なものであったが……そのときには別に、ふかく心にとめてはいなかったものだ。

「あのときに……」

と、広沢は微笑をうかべたまま、

「あのときに、おれは先生と死に別れている。あれから六年。いまはもう悲しみをのりこえてしもうた」

「はあ……」

「これは何もおぬしにきかそうためではないが、老年の師をもった若い弟子なれば、いつ死に別れの日がくるか知れたものではないのだよ。そのつもりで師は教え、弟子は学ぶ。もっとも、若い弟子のほうが先へ死ぬこともあるがね。そうなりゃ尚さらのこと死に別れのつもりになって学ばねばならぬのさ」

「おそれ、いった……」

「何も、おそれいることはない。当然なのだよ。師匠が亡くなってから、あれも学びたかった、これも教えてもらいたかったと悔むなどとは愚の骨頂というものさ」

師が長崎へ去ったその日から、広沢は雪山と死に別れの覚悟をきめ、雪山もまた、そのつもりになって江戸を発った。

あのころの広沢が何となく冴えぬ顔貌をしていたことも、安兵衛は思い出した。

「近ごろ、躰の工合でも悪いのですか？」

などと、きいたこともあったように思う。

「いや、別に……」

と、広沢は多くを語らなかったものだ。

「それで、広沢殿は心おきなく雪山先生からまなんでおかれたのですな？」

「いかにも。先生は、こう申された」

「何と？」

「わしのもっているものを、みな、しゃぶりつくせ。そのために、わしの命がちぢまってもよ

いのだ、とな……」

安兵衛が浮世小路へ遊びにゆき、たらふく酒をよばれて帰っていったその夜、柳沢邸から泊りがけでやって来た細井広沢を相手に、北島雪山は翌日の夕刻まで一睡もせずに書を教えたこともあるらしい。

そのころの書道というものは、現代のように生やさしいものではない。

一字一字に気力をこめ、気合をこめて筆をとる弟子のそばで、師も同じように力をいれて教えこむ。

それは、武芸を習うのと同じような緊迫があり、字句の解釈や表現についての講義でも、

（明日、わしは死ぬやも知れぬ）

と、師は思いつつ教えるのだし、弟子のほうでも、

（今夜のうちにきいておかぬと、明日は先生が亡くなられてしまうやも知れぬ）

と感じつつ、教えをうけたのだ。

雪山と広沢の間に、このような激しい錬磨がおこなわれていたことを、安兵衛はまったく知らなかったといってよい。

「そういうわけでな……おれは、いま先生が亡くなられたときいても、別に、おどろきはせぬ。冷たい男だと思うかね」

「いや……よく、わかりました」

「わかったら、さ、のもうではないか。こうして二人なかよく酒をくみかわすことが何よりも

亡き先生によろこんでいただけることなのだからね」

「左様でした」

安兵衛が広沢の家を出たのは八ツ半（午後三時）ごろであったろうか……。

酒もかなりのんでいたのだが、少しも酔いがこなかった。

（広沢殿は、やはりすぐれた人だ。それにくらべて、おれなどは……）

広沢が雪山に対したように、自分は樋口十郎兵衛や堀内源左衛門に相対していたろうか……。

いまは亡き菅野六郎左衛門夫妻にも、まだまだ、つくしたりなかったようである。

高田の馬場での決闘が終ったとき、安兵衛は林光寺の和尚に、

「人は日毎に死へ向って歩みつつあることを、身にしみてさとりました」

と、いったことがある。

あれから四年たったいま、このことを忘れつつあるのではないか……。

知らず知らず、安兵衛の足は日本橋の浮世小路へ向っていた。

かつて北島雪山が住んでいた、その家の前にたちつくしたまま、安兵衛はいつまでもうごかなかった。

浮世小路から浅草御門へ、ぼんやりと安兵衛は歩んでいる。

築地・鉄砲洲の浅野藩邸へ帰るのなら、まるで反対の方角であった。

浅草御門を出て、目の前に新橋を見たとき、

（や……いつの間に、ここへ……）

はじめて、われに返ったといってよい。
冬の風が鳴っていた。
厚い雲の層に陽はかくれ、師走の人も荷もあわただしげに往来している。
風に突き飛ばされるような煤竹売りの声が、あたりに流れていた。
（あの船宿、たしか島やというたが……まだあるな）
はじめて江戸へ出てきて〔島や〕へ中津川祐見をたずねてから十一年の歳月を経たわけである。
なつかしげに、安兵衛は船宿の前へ立った。
（や、島やではない、店の名が変ったな）
安兵衛が、軒端の掛行灯の文字を見上げたときであった。
「あ……」
何気ない様子で船宿の店へ出てきた女が思わず声を発し、
「や、安兵衛さま……」
よばれて見て、一瞬、わからなかった。
でっぷりと肥えた三十女なのである。
「お秀でございます」
「おう……」
「ま、このようなところで……」
「久しかった……もう十年になる」

「あい……」
「いまも、鳥羽又十郎殿と一緒か？」
お秀は、これにこたえず、
「ま、ともあれ、おあがり下さいませ」
先へ立ち、船宿へ入ってゆく。
「よいのか……」
「ここは、わたくしの店でございますもの」
「え……左様か。道理で店の名が変っていたのだな」
「ここへ、前においでなされましたのか？」
「ずっとむかし、ここで中津川祐見に酒をのまされ、ひどい目にあったことがある。それがもとで、おれは江戸をはなれ……そして、おぬしと出会うた」
「では、あのとき……」
「いかにも」
通された二階の部屋も、模様変えはしてあるが祐見と酒をのんだときのそれであった。
案内をしておいてから、しばらくの間、お秀はあらわれなかった。
女中が火鉢をはこび、酒肴の仕度をととのえてくれ、その後に身じまいをなおしたお秀があらわれて、
「ごめいわくをおかけしはなしのお秀を、おゆるし下さいますよう」

「いまさら、何を……むしろ面倒をかけ、おぬしを苦しめたのは、このおれやも知れぬ」
「あれからのち、安兵衛さまが評判をきくたび、うれしゅう胸をはずませておりました。御立派になられて、ほんに」
二重にくくれたあごをふるわせ、お秀が一本しかない左手で目を押えた。袖口からのぞいている彼女の手首の、あまりにも白く肥えてしまったのを見て、安兵衛は微笑をさそわれた。
「お秀も、しあわせのようだな」
「このように、ふとってしまいまして……はずかしゅう存じます」
「何の……女ごは肥やかなるが、ゆたかに見えてよろしい」
「奥さまとの間に、お子さまは？」
「ほう。おぬし、おれが堀部家へ入ったことを知っていたか」
「この店へも諸方の御武家方が見えまする。安兵衛さまの評判を……」
「もうよい。それよりもお秀、又十郎殿がいるなら、お目にかかりたいな」
「それが……おりませぬ」
「別れたのか？」
「いいえ」
「では……？」
「一年ほど前に、上方へ稼業にまいりまして……」
「まだ、盗賊を……」

「あい。それが、どうやら失敗ったようで、大坂を逃げ中国すじへかくれたという知らせはございましたが……それきり何の音沙汰もございませぬ」

お秀は笑っていた。

「又十郎が帰ってこようとも、また帰らずとも、わたくしはかまいませぬ。又十郎が、この船宿の女あるじにしてくれましたゆえ、もう死ぬまで、どなたさまへも御めいわくをかけることもあるまいかと――」

「なるほど」

お秀の健康そうな肌には、血の色が生き生きとみなぎっている。

「いや、女はつよいものだ」

「まあ、意地のわるい安兵衛さま」

やっと打ちとけて、安兵衛も盃をとった。

「このようなことをおきかせするまでもないとは存じますが……わたくしにとってもうれしかった事なので」

と、お秀が語りはじめた。

あの夜、稲生七郎右衛門邸の安兵衛へ急を知らせるため、菅野の若党・佐次兵衛が出たのを、祐見門人の橋本分蔵が暗殺しようとしたときのことだ。

あのとき、鳥羽又十郎が橋本を刺さなかったら菅野の妻宇乃の手記は安兵衛の手へわたらなかったかも知れぬ。

それだけに、
「そうか……そのようなことがあったのか」
安兵衛は息をひいたまま、うめくように、
「おれは何という果報者なのか……あきれるばかりだ」
「みな、あなたさまのお人柄ゆえにございますよ」
「だが、よかった。そのことを、しかと耳にして……」
「又十郎は他人にいうなと、かたく口どめをいたしましたが、安兵衛さまだけには、あの男が、このようなことを一つだけでもしてくれた、と、知っていただきたかったのでございます」
部屋に灯が入った。
「や、これはいかぬ。もう帰邸せぬと……」
「また、お見え下さいましょうか」
「うむ」
うなずいたとき、ふっと安兵衛が思いついたことがある。
「お秀。たのみがあるのだが」
「わたくしに——まあ、うれしいこと。何なりとお申しつけ下さいませ」
「実はな、おれの腹ちがいの弟のことなのだが……」
お秀が、目をみはった。
お秀は、このことを全く知らなかった。

手早く安兵衛が語るのをきいて、

「おなよさんに中山弥次右衛門さまのお手がついていたことはきいておりましたが、身ごもっていたとは……」

「そこで、たのみというのは、いまも話したように弟の弥太郎は浅草田原町二丁目、柏やという瀬戸物問屋に奉公をしているらしい。おれもこれまでに何度か、その店先を通ってみたが、どれが弟なのか……まだ一度も見たことがないのだ」

「わけもないこと」

のみこみが早いお秀は、すぐに、

「きっとお引きあわせいたしましょう」

「まあ待ってくれ」

「でも……？」

「ただ、いたずらに会うのなら、おれ一人でもやれる。おぬしにたのむというのは、そこなのだ、よいか。つまり、弟が中山弥次右衛門の子であると知っているなら、おれも会いたい。なれど……もしも……」

もしも、おなよが再婚した傘屋善七の子にしており、弥太郎もそのつもりでいるのなら、

「これは、考えてみなくてはならぬ。いきなり会うて弟をおどろかせてもなるまいし、名のり合ったほうが弟のためにしあわせなのかどうか、それも……」

「なるほど。わたくしは年ばかりとってしもうて……むかしのままに野放図な女でございます

なあ」

「それは、おれも同様」

「でも、わたくしのためにあのような境遇に落ちなさいましたのを、ようも、これまでに……」

お秀の両眼が、きらきらとかがやいている。

その目のかがやきは純粋な感動のあらわれであることが、安兵衛にもよくわかった。

歳月の流れというものはふしぎなもので、十年前には、激烈な愛慾にひたりこみ、泥の中を這いまわっているような二人の暮らしがあったのだ。

それがいま、何のこだわりもない〔昔なじみ〕の友情とでもいったようなものが互いに交流しあい、そのこころよさが、お秀にも感動をよんだのであろうか。

「弟ごさまのことは、たしかに引きうけました」

お秀は、たのもしく受け合ってくれた。

「こちらのことは知らせずにな」

「わけもないこと。又十郎がわたくしにつけておいてくれた心きいた者も二人や三人はおりますゆえ」

安兵衛は苦笑した。あの怪盗との縁が、いつまでもお秀という女によってつなぎとめられていることが、ふしぎであった。

藩邸へ帰ると、

「おう、安兵衛。待っていたのじゃ」

舅の堀部弥兵衛が老妻をつれて隠居所から遊びにきていた。

「大石内蔵助殿が京都藩邸へこられた折に手に入れられた珍品を、わざわざわしに送って下されたのじゃ」

「ほう、珍品を……」

「まあ、いま食べさせるゆえ、たのしみにしておれ」

台所の方で妻が下女と共に夕飯の仕度にかかっているらしいのだが、嗅ぎなれない強い動物の匂いが居間へも流れこんできはじめた。

「あれは、何の匂いでございますか？」

「いまにわかる」

「父上。鳥を焼いているので？」

「ま、そんなものだわ」

酒をくみかわしているうちに、妻や姑が顔をしかめつつ、

「このようなものを、ようも大石さまが……」

とか、

「臭うて気味わるうて」

口ぐちにいいながら、運び出してきた皿を膳にならべた。

「ははあ、こりゃ猪の肉でござるな」

と、安兵衛。

「ま、食べてみよ」
ほうばった安兵衛が、
「うまいものですな」
と、いった。
「何じゃと思う？」
「やはり猪の肉で？」
「牛の肉じゃ」
「これは……」
生まれてはじめて牛肉をのみこんだ安兵衛だけに、少し気味悪そうな顔つきになったことは、たしかである。
元禄のころから近江牛が食肉に供せられていたことを知るものは少い。
それよりも、ずっとむかし、戦国のころから牛の良肉を主剤にした薬もできており「本草綱目」には、
「黄牛の肉は佳良にして甘味無毒。中を、安んじ気を益し、脾胃を養い腰脚を補益す」
と、ある。
大石内蔵助が送ってよこしたのは牛肉の味噌漬であった。
七十歳にもなり、ようやく隠居の身となった堀部弥兵衛の長寿を祈る、という意味もふくめた贈りものなのであろう。

内蔵助がそえてよこした手紙は、次のごとくだ。

口上

しかるべき方より内々到来にまかせ進上いたし候。彦根の産、黄牛の味噌漬、養老の品ゆゑ、そこもとには重畳かと存じ候。せがれ主税などにまゐらせ候と、かへって、悪しかるべし。大笑大笑。

若いせがれなどに食べさせては精がつきすぎ、かえって毒であろう、と書きそえてあるのが、安兵衛にも可笑しかった。

女たちは口にしなかったが、火で炙った牛肉の味噌漬を男二人で、ペロリと平げてしまった。この牛肉を京都から送ったときの大石内蔵助は、まだ北島雪山の死を知っていなかったらしい。年が明けた元禄十一年の正月に、赤穂へ戻った内蔵助から、弥兵衛と安兵衛にあてて、雪山の死をいたむ手紙がとどいた。

〔玉や〕のお秀の手紙を持った小者が、藩邸に安兵衛をたずねてきたのは、その翌日であった。手紙によると、お秀は弥太郎に会ったらしい。

その日は御殿へ出仕をしていたので、翌日の非番を待ちかね、安兵衛は新橋の船宿へ向った。お秀が、孫四郎や助松などの、もと又十郎の配下だった者をつかって弥太郎のことをきき出すのは、わけもないことであった。

弥太郎はいま、十六歳になっており、柏や方の奉公人になってから五年になるという。

「年期の十年をつとめあげれば番頭にもしようし、ゆくゆくは、のれんも分けようと柏やのあるじは申しております」

と、玉やへあらわれた安兵衛に、お秀がいった。

「おれのことを申したのか？」

「いいえ。柏やの右どなりに大和やという菓子屋がございます。その店の菓子を、わたくしのところへ入れるようにいたしましたし、左どなりの三味線師とも親しゅうなれました。弥太郎さまの評判をさぐることなぞ、わけもないことでございました」

「それは、いかい造作をかけたな」

「いいえ、このようなことでお役にたちますなら、お秀はうれしゅうございます」

「さて、そこでだが……」

「あ、わかりました、わかりました。弥太郎さまは、おなよさんが後ぞえに入った傘屋善七というお人の子になっておりますけれど、ご自分では、そのお人が本当の父親ではないと、うすうすは感じているように思えます」

「そうか。うすうすにな……」

「いまも申しました三味線師・菊岡正兵衛という人の女房で、およしさんと申すのが、となりのよしみもあって柏やへはよく出入りをしておりますが、このおよしさんが弥太郎さまを前々から可愛いがり、ときおり家へよんで菓子などをあたえたりしていたようで……」

「ふむ。では弥太郎が、その三味線師の女房に、傘屋善七は実の父ではない、と、もらしたのかな」

「あい」

「では知っておったのか」

「なれど、まことの父が中山弥次右衛門さまだとは気づかぬようでございます。おなよさんも、くわしいことは申さなかったのでございましょう」

「なるほどな……で、おぬしは弥太郎を見てくれたか」

「あい、かげながら……」

「ど、どのような男に成長していたか。きかせてくれい」

思わず安兵衛の声がはずんだ。

「それが……」

と、お秀は笑い出し、

「中山弥次右衛門さま、そっくり」

「父上にか……」

「何やらいかめしいお顔だちで、体つきもたくましく、見たところは二十(はたち)をこえているように思われます」

「ほほう」

「それでいて、奉公ぶりはとなり近所でも感心するほどのまじめさで、柏やの主人夫婦にも気

に入られているそうな……」
「会うて見たいな」
「そうでございましょうとも」
「名のり合うことは、いまのところひかえねばなるまいが、かげながらでも」
「わけもないこと。これからまいりましょう」
「では、たのむ」
この日、夕暮れになって藩邸へ戻った安兵衛が妻のお幸にいった。
「いやもう、まるで亡き父上に生きうつしであったよ」
この後も安兵衛は、お秀を通じて義弟・弥太郎の身から絶えず目をはなさぬようにした。
一年のうち何度かは浅草に足をはこび、弥太郎の姿を蔭ながら見守っていたようである。
（間違いなく成長をしてくれればよいが……もしも弥太郎が苦難をうけるようなことになれば、蔭ながら力になろう）
という気持ちからであった。
二年、三年と月日が流れた。
浅野家につかえる身となってから、
（居ごこちのよいところだ）
安兵衛は満足している。
浅野家の父祖は清和天皇から出て、美濃の土岐氏とも同族だという。

戦国のころ、浅野長政の代となって豊臣秀吉につかえ、この長政が秀吉の五奉行のうちの一人であったことはよく知られている。

秀吉の歿後、浅野長政は徳川家康にしたがい、三代目の浅野長晟のときに安芸・広島四十二万石に封ぜられた。

この広島の浅野家が、赤穂の浅野や、備後・三次の浅野の本家ということになる。

で……。

播州・赤穂の浅野家についてのべると、浅野長政の三男・長重が、その藩祖であり、上州・真壁や常陸・笠間の城主などを経て赤穂へ封ぜられた。

これが正保二年というから、安兵衛が浅野の臣となった元禄十年からさかのぼること約五十年ほどになる。

この長直の孫が現藩主・内匠頭長矩ということになる。

「祖先の偉業を、はずかしめてはならぬ」

というのが内匠頭の口ぐせであって、祖先・長直が常陸（茨城県）から遠い播州（兵庫県）へうつされたときの苦労はなみなみのものではなかったらしい。

幕府の命令ひとつでおこなわれる大名の国替えというものは、風土も気風も全く違う他国へいって、新しい領主となり、国を、領民を、おさめてゆかねばならぬ。

浅野長直は、赤穂四郡五万三千石の藩主となってから、新田の開発や塩田の改良・拡張などを積極的におこない、将軍からもその治績をほめられたし、これは大正になってからだが、あらた

めて長直の治政がすぐれていることをみとめられ、従三位を贈られている。

いまでも赤穂へゆき、かなり往時をしのばせる遺跡をめんみつに見れば、浅野長直という殿さまが、その当時でも『名君』と評判されたいわれがわかるように思える。

それは、水道工事の遺構ひとつを見ても判然とする。

播州は気候も温暖で収穫もよく、それに『赤穂の塩は日本一』とまでによばれた塩田を保有し、『浅野は五万三千石の家柄だが、あの塩の収入をふくめれば八万石に相当する』と、うわさされたものだ。

だが、内情は少し違う。

浅野長直という大名は、家臣を大切にした人で、家臣団の構成も、その人数も五万石の大名としては層が厚く大きい。

したがって、

「収入はゆたかでも、蓄財のゆとりなどはなかった」

という史家もいるほどだ。

ともあれ、長直が子孫に残そうと心がけたのは「金銀財宝」の類ではなかった。

いざというときに、たのみになる家臣たちと、治政ととのった領国を残したえたのである。

長直が病歿したのは寛文十二年夏で、長男・長友が後をついだが、この人は藩主の座についてから五年で病死してしまった。

それで、長友の子・長矩が九歳で家督をし、延宝八年に祖父・長直の官名をうけ内匠頭となっ

たわけだ。

父が藩主だったのはわずかに五年なので、内匠頭にとっては祖父の業績を、そのまま受けついだかたちになる。

それだけに内匠頭が背負っている責任というものは、かなり重い。

ぶじに藩主をつとめ終えて、次代にゆずりわたしたところで、

「当然のことだ」

といわれるまでだし、もしも政治に失敗でもあれば、

「長直公の名をはずかしめた」

と断定される。

それだけに内匠頭は懸命であった。

どこかの大名のように愛妾を何人もこしらえ酒色におぼれるなどということは思ってもみない。

三次の分家から迎えた正夫人・阿久利との間に子が生まれなかったので、

「内匠頭は男色家だ。義士の一人、片岡源五右衛門も彼の寵愛をうけたらしい」

なぞというものもいるが、さてどうであろうか……。

ひどいのは、夫人の実家があった三次地方でいわれていることで、これは、

「内匠頭は阿久利姫に対して非常に冷たく、ゆえに子供もできなかった」

というものである。

そうした目で見れば、どのようにも映るものだ。

だが、それらの説に対して、筆者は何もいわぬことにしよう。

とにかく、内匠頭が身をつつしみ、みずから質素倹約を励行して藩風を引きしめていたことは事実だ。

するとまた、後世の人びとの中に、

「内匠頭はケチだ。ケチすぎたのだ」

と、いい出す者がいる。

このことについては、いずれのべよう。

まだ徳川幕府成ってより八十年ほどの当時にあっては、一国の大名といえども米の収穫をもって財政をまかなったことはいうまでもない。

ゆえに〔倹約〕は美徳であったのである。

これ以外に財政を維持し、ととのえる道はないのだし、それを自分から先に立っておこなった大名というのは凡庸の人物ではないのである。

浅野内匠頭が、物を大切にすることは人並以上で、身辺の紙、筆などの類にいたるまで無駄なつかい方をしない。

勘定方から帳簿を取りよせて調べたり、意見を細々とのべたりもする。

「殿さまがあれでは気がつまる。一藩のあるじなのだから、こまかいことまでにお気をつかわせられず、もそっと鷹揚になさるべきだ」

という家臣もいる。

こうした内匠頭なのだが、

（なるほど。これでなくてはならぬ）

と、堀部安兵衛が大いに共感した一事がある。

それは〔防火〕についてだ。

当時、江戸市中の要地の防火を大名たちが担当していた。

火事は江戸の名物で、あまりに火災が多いため、一般の市民たちは財産の安定を考えることができず、風のつよい冬の夜などは落ちついて眠ることもならなかったらしい。

こんな話もある。

余裕のある町家などでは、上野の寛永寺のような大きな寺、比較的安全な場所にある寺へ金を預けておいたそうだ。すると寺では百両について年一分ほどの利子をつけてくれたという。

ま、町家にしても武家にしても火事の被害は同じことで、大名たちが市中の防火を受けもつのは当然のことだ。

また火事が起ると、防火担当の大名でなくとも、臨時に、

「火消しに出よ」

と、幕府が命ずることがある。

これを〔奉書火消し〕とよんだ。

加賀百万石の大守・前田綱紀の夜話に次のようなことが記されている。

『その時分、浅野内匠頭、たびたび奉書火消しに御出で候。名誉なる火消しの上手にて、毎度消しとめ申さるるにつき、内匠頭御出で候えば、諸人、もはや火事の鎮まり申すべき由、申し候』

浅野が火消しに出れば、

「もう大丈夫」

と、いわれるほどに、この藩の消防隊は有名であったわけだ。

奉書火消しの命が下れば、内匠頭自身が陣頭に立って指揮をとる。

これは安兵衛が堀部へ入る数年前のことだが、赤坂一帯が火事となり、このときも出動をした。

赤坂には広島の浅野本家の屋敷があって、内匠頭が駆けつけたとき、早くも炎に包まれていたが、

「つづけ！　余につづけい！」

みずから殿さまが火の中へ躍りこみ、

「それ、梁を切り落せ。南側の長屋を引きくずして飛火をふせげ」

猛然と指揮をとった。

主人が火中へ飛びこむのを家来たちが黙って見ていられるわけがないので、一同、必死にはたらく。

「太平の世の火事は戦場と同じじゃ」

というのが、内匠頭の持論であった。

前田綱紀の夜話には、

『……かようの儀、大体の者の成りがたき事の由にて、ことの外御感じ候。いかさま常体の人にてはこれなく候……』

と、ある。

自分の屋敷が火事になったのならともかく、奉書火消しを命ぜられるたびに殿さま自身が火中に指揮をとるなどというのは、実にめずらしいことだ。

また、火災・消防についても絶えず研究をおこたらない。

ひまがあると家来を集め、江戸や赤穂の地図をひろげて、

「このあたりより発火し、このあたりまで燃えひろがったとき、もし北風つよければ何とする」

などと質問をする。

家来たちが答えにつまると、

「諸人の上に立つべき士が、そのようなことで何とするぞ」

きびしく叱りつけられるのだ。

倹約家の内匠頭が、竜吐水などをはじめ消防用具の整備には出費を惜しまない。

これほどに消防への関心をもっている内匠頭だから、平常でも消防訓練をおこなう。

安兵衛も藩邸内の長屋へ住むようになって十日目の夜ふけに、

「や！」

けたたましく邸内に鳴りひびく番木や太鼓の音に目ざめ、

「父上！」

床を蹴って大刀をつかみ、そのときはまだ隠居所に移っていなかった弥兵衛の部屋へ駆けつけると、

「うむ。早う身仕度をせい」

弥兵衛はすでに起きて、火事頭巾、火事羽織などを身につけているところだ。

「出火でござる！」

「大台所より出火！」

邸内を走る藩士の声が高まった。

安兵衛は戸外へ飛びだして、ながめまわしたが、空にはいちめん星が光っているだけで炎の色もない。

そこへ弥兵衛があらわれ、

「大事ない。これはな、火消しの稽古なのじゃよ」

ようやくに、うちあけてくれたものだ。

この消防演習は、いつやるときまっているわけではない。すべては内匠頭一人の胸のうちにあることで、早朝でも夜ふけでも、殿さまが思いつくと、その場で『何処何処より出火の体にせよ』と、指令を下す。

そうなると、江戸でも赤穂でも、実際の火災そのままの訓練がおこなわれるのである。藩士たちも侍女たちも、足軽、小者も、いっせいに飛び起きて計画通りの演習をするわけだが、

「それ、風が東へまわったぞ」

内匠頭の指令ひとつで、

「飛火をふせぐため、作事小屋を引きこわしてござります」

とか、

「間に合いませぬ。表御殿に火がかかりました」

とか、家来たちもいそがしい。

はじめてのときは、さすがの安兵衛も度肝をぬかれたものである。

その、はじめての夜の光景を安兵衛は忘れてはいない。

消防演習が終り、家臣一同が諸方の襖を打払った大広間へあつまると、大廊下のあたりから、手燭の灯にかこまれた内匠頭があらわれた。

家紋を浮き出させた胸立や火事羽織、頭巾にいかめしく身をよろった殿さまが大薙刀をかいこみ、つかつかと御座の間の床几に歩みよって腰をかけると、

「一同、あつまりおるか」

一同平伏。すると、

「このたびはよし。一同、手ぬかりなくはたらきくれた。このたびのはたらきを、ゆめ忘るる

な」

といい、さらに、

「いつも申すことではあるが……火消しの演習を、ただ火消しのためのみのものと思うな。武士たるものの一切がふくまれておると思い、これよりも事にあたってはげめ」

一語一語、念を押すように申しわたして奥御殿へ去っていった。

一同解散である。

安兵衛は感服をしていたが、中には、

「今夜は早かったな」

「これで、いささかの失敗でもあれば、夜が明けるまで長ながとお叱りをうけねばならぬ」

「それがつらさに必死で火消しか。あは、はは、は……」

などと、ささやきかわす家来たちもいたようだ。

しかし安兵衛は、消防演習の中には武士たるものの一切がふくまれていると思え——といった内匠頭の声が、いつまでも忘れられなかった。

これはやはり彼が武道の中に人生をかけて生きてきたからであろう。

この演習の模様をきいた前田綱紀が夜話にこう記している。

『薙刀を抜身にて御持ち、少しも臆れ申す体も候えば手討ちにも致さるべき体に候……』

少し異常ではないかと笑った大名もいた。

ということは、いまの世の中には〔異常〕がないものと思いこんでいるからだ。

火災というものは非常、異常の事態であって、
「ゆえにこそ、人の世のいかなる非常の事態にも対処すべき心をやしなうのが、余の火消し演習である」
というのが内匠頭の持論であった。
堀部安兵衛も、この演習を何度も経験した。
殿さまが赤穂へ帰っているときは、
「やれやれ」
「今度は国もとの連中が、いじめられるぞ」
かげ口をたたく家来もいるが、堀部弥兵衛にいわせると、
「そのようなやつらは、家中の士のうちの、ほんのわずかばかりじゃよ」
だそうである。
他人のことはどうであれ、安兵衛にとって消防演習は少しも苦にならない。
妻の幸との間に、どうしたわけか子は生まれず、このことだけが安兵衛夫婦のなやみであったが、五年の歳月はたちまちにすぎた。
そして、あの事件が起ったのである。

浅野と吉良

元禄十四年三月十四日。

安兵衛の主君・浅野内匠頭長矩が江戸城内において吉良上野介義央と刃傷におよんだ事件は、二百数十年を経た現代にも種々のかたちでアピールされているほど有名なものだ。

この小説は、いわゆる「忠臣蔵」を書くためのものではないが、堀部安兵衛を描くためには、やはり、ぬきさしならぬもののようである。

で——簡略ながら、この事件を追ってみたいと思う。

この事件が起ったとき、堀部安兵衛の余命は、以後まる二年を残すのみとなったのだ。

徳川幕府が、毎年のはじめに、京都朝廷へ新年の挨拶をおこなうため、高家が将軍の名代として京へのぼる。

この年、高家衆の筆頭・吉良上野介が役目に任じたわけだが、朝廷では幕府への答礼として武家伝奏の公家が江戸へ下る。

この勅使が江戸へ到着すると、竜の口（現在の千代田区丸ノ内一丁目付近）の伝奏屋敷が宿舎となり、幕府では諸大名のうちから接待役をえらび、勅使をもてなすわけだ。

この年にえらばれたのは浅野内匠頭と伊達左京亮村豊（伊予・吉田三万石）であった。

内匠頭は、二月四日に江戸城へよび出され、

「当春、年頭の祝儀として御参向の勅使御馳走御用おおせつけらる」

と、月番老中の秋元喬知から申しわたしをうけた。

武家の世界も儀礼づくめになりかけていたころであるから、将軍によって命ぜられた接待の役

目は大名にとっては名誉とされているわけだが、

「つつしんで、おうけつかまつりまする」

と、こたえはしても、心底からよろこべるものではない。

どのような役目をつとめるにせよ、幕府の命令をうけてすることには、相応の出費がともなう。

現に、三年ほど前のことだが、あの新発田藩でも、

「麻布新堀の御普請おおせつけらる」

というので、幕府から工事を命ぜられ、里村伝左衛門が江戸へ出張して奉行をつとめたらしいが、工事の手ぬかりがあったりして莫大な出費を要したという。

いまも新発田城外・佐々木村に住む安兵衛の伯父・溝口三郎兵衛が、

「新田をひらき領内の政事をととのえ、藩の蔵の中も、いくらかゆとりができたようであったが、それもこれも、このたびの御普請御手つだいの出費により、元も子もなくなってしもうたそうな」

と、安兵衛に手紙でいってよこしたものだ。

しかし、浅野家では接待役をつとめて赤字になるようなことは、むろん無い。

浅野内匠頭は、この日、鉄砲洲の藩邸へ戻るや、江戸家老・安井彦右衛門、藤井又左衛門、それに留守居役の建部喜六などをよび、

「御馳走役をおおせつけられたぞ」

と知らせ、さらに、

「余が天和三年に接伴の役目をつとめた折は十七歳であったし、それに二十年に近いむかしのことでもある。近ごろは儀式の次第も大分に変っておるようじゃ。そのほうたちも遺漏なくいたすように」

「ははっ――心得ましてござりまする」

「尚、月番御老中の申されたるには、このごろ、年々の接伴御馳走の、ややもすれば重すぎるようであるゆえ、なるべく、万端手がるく心得るよう、とのことであった」

とにかく、目出度いことだというので、広島の浅野本家や奥方の実家などから、次々に祝儀の贈物がとどけられる。

藩邸は、にわかにいそがしくなった。

安兵衛も、祝儀答礼のための使者に出たりして、数日は落ちついて食事をする暇もなかったようである。

養父の堀部弥兵衛も老妻をつれて長屋へ泊りこんでくれた。

「むかし、殿が、この御役目をつとめられた折には、このようなさわぎはしなかったものじゃよ」

と、弥兵衛がいう。

「毎年のことじゃしな。世の中も、いまのように派手やかなものではなかったゆえ、めんどうなこともなかったわえ」

年少の内匠頭が接伴役をはじめてつとめたのは天和三年のことで、いま思い返せば、中山弥次

右衛門が切腹をし、十四歳の安兵衛が新発田を脱走して三国峠で福田源八を斬ったのも、その年のことなのである。

ふっと、安兵衛が感慨ふかい眼の色になったのを見て、弥兵衛は、

「どうしたのじゃ？」

「いや、別に……その、天和三年の御役目の折、江戸家老は大石頼母様でありましたそうな」

「いかにも」

大石頼母良重は、内蔵助の祖父良欽の実弟である。

この人は実にすぐれた家老であって、長直から長矩にわたる三代の殿さまにつかえ、ことに長直が、

「余のむすめを嫁にもろうてくれい」

息女の鶴姫をあたえ、この大石頼母夫妻の間に生まれた長恒は、ついに殿さま（長直）の養子になったほどだ。

次に生まれた男子も殿さま一族の養子となっているし、この頼母良重系の大石家は絶えたかたちになっている。

今は亡き大石頼母が残していった当時の記録は参考になるところも多いが、二十年後のいまとなっては、そのままで通用するべくもない。さいわい七年前に備後の浅野分家（内匠頭夫人の実家）が接伴役をつとめていたので、分家の江戸屋敷へも使者が飛んだ。

こうした下調べをすましたころ、接伴指導役ともいうべき吉良上野介が京都から帰ってきた。

高家・吉良上野介は将軍名代として、朝廷への年賀をすませ、二月二十九日に江戸へ帰ってきた。

高家という役職は、幕府の儀式、典礼、めんどうな朝廷との間の諸礼式をつかさどるもので、室町時代以来の名家がこれに任じている。

吉良家も足利将軍の一族であったし、上野介は、高家肝煎という上席にあり四位少将に任ぜられているほどだ。

ゆえに勅使接待の大名は、吉良の指図によって役目をつとめねばならぬ。

こういうことになると禄高は四千石ながら、吉良の権威は非常なものであって、浅野内匠頭も伊達村豊も、上野介が帰るや、すぐさま呉服橋内の吉良邸へ、あいさつに出向いた。

芝居や映画だと、このあいさつに浅野家の進物が少ないというので、吉良が大いに腹を立てる。そして進物の多い伊達には何も彼もていねいに教え、浅野には、さまざまの手違いが起るように仕向けて意地悪をする、ということになるわけだが……。

伊達家が、どのような進物をしたものか知れているわけではない。

しかし、浅野内匠頭が、

「吉良家への付けとどけを先へするのはいかがなものであろうか。お役目の相すみたる後に礼をつくすべきじゃ」

と、いったのは事実だ。

この〔付けとどけ〕というものは金一枚であったそうで、いわば挨拶代りのものだし、これを

先へ持ってゆくのは慣例のようなものである。だから浅野家でも、

「これはやはり、先へとどけましたるほうが、よろしいかと存じます」

留守居役の建部や近藤が進言すると、

「かまわぬ。余の申すごとくにせよ」

内匠頭に、はねつけられてしまった。

すでにのべたように、この殿さまはすべてにおいて事細かく、よくいえば几帳面に、悪くいえばせこましく、いちいち自分の目をもってたしかめなくてはおさまらぬところがある。殿さまに内密で「付けとどけ」をしたりして、もしも後でわかったときには、きびしく叱りつけられるわけだ。

だからといって叱られるのがいやさに手をつかねていた江戸藩邸の重役たちの無能さにも、

「あきれ果てたものじゃ」

事件後、すべてを知って堀部弥兵衛が、むしろ愕然としたほどなのである。

安兵衛に家をゆずるまでは、留守居役として江戸における浅野家の外交官の役目をつとめてきた弥兵衛だけに、

「そこもとには金一枚ほどのたくわえもないのか」

と、建部喜六へ喰ってかかったそうだ。

藩金を持ち出すことがはばかられるならば、自腹を切ってでも、殿さまの耳へは入れずに「付けとどけ」をするのが留守居役の常識である。

まして内匠頭のような主人を補佐するためには、江戸家老や留守居役が首をかけても、なすべきことはなさねばならぬ。

だが、このことを堀部弥兵衛が知ったのは事件後のことであるから、手のつくしようもない。

さらに――。

接待の費用のことで、こんな話もつたえられている。

内匠頭は、二十年前に自分が役目をしたときの四百両と、下調べによって得た（近ごろは千二、三百両）という費用の中を取って七百両に見つもったというのだ。

二十年前にくらべれば、むろん物価も倍以上になっている。

「月番御老中よりも、質素に相つとむるよう申しわたされたことゆえ、七百両でよい」

殿さまみずからが決定し、これを吉良上野介にはかると、

「それはならぬ。朝廷からの御使いをもてなす重き御役目。大名一代に何度もつとめるわけのものではない。費用を惜しんではならぬ」

といって、これも後へひかぬ。

するとまた内匠頭もいい出したら聞かず、ついに七百両で押しきってしまった。

たとえば勅使の宿舎の畳のヘリ一つにしても前年よりは安い物で間に合わせるというわけで、事ごとに吉良の指図とは喰い違ってくる。

吉良も、おもしろくないから内匠頭へは良い顔をしない。

そういうことが、つもりつもって浅野の癇癪が爆発したのだ、と、こういう説である。

また、こういう説もある。

『浅野内匠頭は、二十年前につとめたときも吉良上野介の指図をあおいだのだが、このとき、大石頼母のような名臣の補佐によって、つつがなくつとめ終えたにもかかわらず、吉良によって不愉快な思いを何度もさせられたのだ。だから、吉良へ対する不快の感情が二十年も内攻していたのである』

と、いうのだ。

だが人の説というものは、人それぞれの好みによって成りたつものであるから、たとえ一片の史料でも読む人びとへ、さまざまな投影をあたえるものなのだ。

そこでひとつ、これは、当時に生きていてしかも吉良と面識があり、親類の縁もあった大名の率直な吉良上野介観を一つの史料として読者に見ていただこう。

この人物を津軽信政という。

津軽家は陸奥（青森県）弘前四万七千石にすぎぬが、藩祖為信以来、世に知られた大名である。ことに津軽信政は英明な殿さまで、剛毅果断、しかも政務に通じ、一代のうちに領国の封邑、石高を増すこと、およそ十八万石に達したなぞといわれている。赤穂の浅野家どころではない。表向き四万七千石でも実際は、その四倍もの収穫があったほどの実力者ということなのだ。

この津軽信政の従弟の子に津軽政兜といって四千石の幕臣がいる。

そして政兜の夫人は、吉良上野介の次女なのである。

つまり、津軽信政の〔またいとこ〕の妻が吉良のむすめ、ということになる。

ちなみにいえば、吉良上野介の息・綱憲は上杉家へ養子にゆき、米沢十五万石の領主だし、三人のむすめも、島津、酒井、津軽と、いずれも名ある大名・武家へ嫁している。このような勢力を背景にした彼の地位は、隠然たる勢力によって裏づけられていたのだ。

そこで津軽信政の吉良観へもどろう。

信政の言行を忠実に記録した「玉話集」という書物が、いまものこされている。

それによると——。

信政が神田の藩邸にいたころ、あるとき吉良上野介をまねき、御馳走をしたことがある。

このときは他に旗本や御城坊主なども招待された宴席であったが、はじめのうちは、吉良も料理に箸をつけていたのに、米飯が出されると一箸もつけようとしない。

接待に当っていた津軽家のさむらいが、

「いかがあそばされましたか？」

たずねるや、吉良上野介は、いきなり、

「料理はけっこうじゃが、飯は不味くて口へ入り申さぬわ」

満座の中で、きこえよがしにズケズケといい放った。

この声を耳にはさんだ津軽家の御膳番をつとめていた者が、

「人のところへ招ばれてきて何ということをぬかすのだ。たとえ飯がまずくとも、うまいといって食べるのが人の道というものではないか。こうなっては、われらも殿様からお叱りをうけるは必定。場合によっては腹切らねばならぬ。よし、この上は上野介の頭を打ち割り、おれは腹切

って見しょう」

こういって、宴会の席へ飛び出そうとするのを、やっと同僚が押しとどめた。

この御膳番は、

「さてさて上野介は士畜生なり」

と、きめつけている。

ところで、津軽信政は満座の中で吉良に毒づかれても、にやにやと笑って相手にならない。後になって家来たちをとがめることもしなかった。

『上野介様は、わがままなる御人のよし、風聞ありしが、さもこれあるにや』と、玉話集は記している。

吉良の傲慢ぶりは、当時かなり評判のものだったということが、よくわかる。

実子の三郎綱憲を妻の実家である上杉十五万石へ養子にやったときの老獪な手段といい、吉良上野介について不利な挿話は掃いてすてるほどある。

〔忠臣蔵〕の美名、その影響力の大きさのために、吉良は損をしているというので、彼が自分の領地（三河）では非常な名君であったことを強調する人も多い。

だが、傲慢無礼な政治家などが我が家へ帰ると、良き夫、良き父親に変ずることは現代にも存在するのである。

惜しむらくは、浅野内匠頭が津軽信政ではなかったということだ。

勅使（柳原大納言資廉ほか）は三月十一日に江戸へ到着した。

十二日には江戸城へおもむき勅諚を将軍に伝奏する。
十三日は城中での饗応。
いずれもすみ、十四日になった。
十四日は将軍が勅使に答礼するための儀式がおこなわれる。
浅野内匠頭の刃傷は、この日に起った。
渡辺世祐博士の研究によれば……。
その朝、勅使登城を待ちうける諸大名が居ならぶ江戸城内で、内匠頭が吉良に向い、
「今日もまた昨日のごとき格式にてお迎えいたせばよろしゅうございますな？」
念を入れると、上野介は、
「浅野侯には、かねて先例を調べられ、諸方にもお問い合せあって御役目をつとめられるべきことをいまさら、この場におよんでおたずねあるか」
と、満座の中で大声にいい放ち、
「そのような途方もなきことを申し御馳走役がなるべきか」
嘲けり笑い、奥へ引きあげていった。
吉良上野介が諸大名の耳へ、きこえよがしにいったのは、津軽邸宴席の場合と同じである。
内匠頭は激怒を懸命に押えているようにみえたが、このときは何事も起らなかった。
しばらくして、御留守居番・梶川与惣兵衛が吉良上野介に打合せることがあって大広間から大廊下のあたりへ通りかかった。

すると、そこに浅野・伊達の接伴役がいたので、梶川は内匠頭に向い、

「拙者儀、今日、伝奏衆へ御台様（桂昌院）よりのお礼の御使いを相つとめまするによって、諸事よろしきようお願い申しあげます」

と、あいさつをした。

内匠頭が、

「心得申した」

こたえて、白書院の方へゆきかけたとき、向うから吉良がやってくるのが見えたので、梶川は近寄り、梶川自身の筆記によれば、

『……御使の刻限早く相なり候儀を、一言二言申し候ところ、誰やらん、吉良殿のうしろより……』

吉良の背後から、浅野内匠頭が、

「この間よりの遺恨おぼえたか！」

叫びざま、小刀をぬいて切りつけた。

背中を切られて、吉良がおどろき、ふり向いたところを、内匠頭の二の太刀が切ったが、これは吉良のかぶっている烏帽子の金具にあたり、さらに額を傷つけたのである。

吉良は衝撃に声もなく、ふらふらと倒れたが、梶川は、これを飛び越えるようにして浅野内匠頭へ飛びつき、

「殿中でござる」

利腕もろとも、はがいじめに抱き押えた。

梶川の大力は評判のもので、内匠頭は、ねじ伏せられてもがきつつ、こう叫んだ。

「上野介には、この間からの意趣あって、殿中にて恐れ入ることなれども、ぜひにおよばず討ち申した」

たちまちに殿中大さわぎとなった。

この中を、梶川与惣兵衛は内匠頭を押えこんだまま通りぬけ、柳の間へつれこむと、

「残念でござる。なれど躬も一城の主にて乱心はいたしおりませぬ。お上に対しうらみを抱いたのではなく、恐れ多いことであるから官服をぬがせていただきたい」

ようやく内匠頭も落ちつきを取りもどし、一同に取りかこまれた中で、そういった。

吉良は、医師の詰所へはこばれて手当てをうけたが、いまにも息絶えんばかりのありさまで、なかなか出血がとまらなかったという。

城外・大手口に参集している諸大名の家来たちは、城中で異変が起ったときいて騒ぎ出した。

そこで目付・多門伝八郎が、松板の裏表へ、

『浅野内匠頭、吉良上野介へ刃傷におよび候、両人とも殿中に於て御糺中につき、諸供方騒動致すまじきものなり』

と書いて大手口へ触れた。

それで大手口の混乱もしずまったが、ただ浅野と吉良の家来たちだけが騒いでいたと、多門伝八郎が〔筆記〕を書きのこしている。

堀部安兵衛は、当日、伝奏屋敷につとめていたが、

「まことか……」

すぐに、みずから大手口へ駆けつけて触書をたしかめた上で馬へ飛び乗り、鉄砲洲の藩邸へ駆け戻った。

こうした場合、とりあえず異変の第一報を国もとの赤穂へ知らさねばならぬ。

安兵衛は、この役を買って出るつもりであったが、

「おぬしには残っていてもらわねばならぬ」

奥田孫太夫が押しとどめた。

安兵衛のような、たよりになる人物に居てほしかったのであろう。

「これから、どのようなことになるやも知れぬ」

と孫太夫は、さすがに緊張で青ざめていたが、

「今日のことについて、安兵衛殿は思いあたることはないか」

と、きいた。

「殿は、吉良との間に起ったことは何事につけ、われらの耳へはおもらしにならなかったので、しかとはわからぬ」

安兵衛の声も変らない。

狼狽して、やたらに叫び、駆けまわる藩士たちの声や物音が、藩邸にみちている。

このさなかに、萱野三平、早水藤左衛門の二人が急使にえらばれ、襷鉢巻も物々しく早駕籠に

飛び乗った。

これが赤穂への第一報で、刃傷のあったことと、家中のものが騒動せぬようにと老中からの申し渡しがあった、ということを知らせるのみにとどまった。

ときに八ツ時というから現在の午後二時ごろであったろう。

この早駕籠は夜を日につぎ、宿場から宿場へ乗りつぎ、十九日の夜明けに赤穂へ到着したのだが、このとき、すでに浅野内匠頭は三十五年の生涯を終えていた。

近年になってよくいわれることに――浅野内匠頭には〔癇え〕という持病があり、強烈な頭痛もちであり、これが十四日当日の曇天、その不快指数によって発作をおこし、吉良へ切りつけたというのがある。

まるで内匠頭を狂人あつかいにした説で、これが〔怒り〕を忘れた近代人の解釈の仕方であり、こういう説をなす人ほど、その著書の中で、大石頼母を内蔵助の父だなどと間違ったことを平気で書いている。

したがって、

『内匠頭は大石内蔵助をきらっており、内蔵助はいつも叱られたり閉門になったりしていた』などという説を、そのまま、うのみにしてしまう。

これは刃傷のあった年に、内蔵助が城へ出仕をせず、自邸に引きこもっていた事実を取りあげているのであるが、赤穂へゆき史料をしらべてみると大分に違うことがわかる。

この年の二月十七日に、内蔵助の四歳になるむすめが病死していて、ために、彼が自分から出

仕を遠慮し、喪に服していたのだ。

内蔵助が、たびたび閉門になったなどということを裏づける事実は何もない。

これと同じような意味で、よく取りあげられるのは内匠頭の短気、その癇癪の一事であって、

『一国の主でいながら、自分ひとりのかんしゃくを爆発させたために、領国を失い多勢の家臣たちを路頭に迷わせるというバカなことをした』

と解釈してしまう。

これも恐ろしく性急な物の見方であって、浅野内匠頭が激怒をかたちにあらわした事実は、十四日の刃傷のみであり、そのほかには彼が異常な「かんしゃくもち」であったことを裏づける材料は何も残されていないのである。

筆者は浅野びいきでもなければ吉良びいきでもない。

この小説を書くについて、現存する史料を読み、さらに新しく得た史料の中から浅野と吉良の確執を追っているのだ。

吉良上野介は、

「浅野にうらみをうけるおぼえは、いささかもござらぬ。浅野は乱心したにちがいありませぬ」

と公儀の取調べに対していい張るし、内匠頭はまた、

「このたびのことについて一言も申しひらきはござりませぬ。将軍家に対しては、いささかのうらみもなく、まったく私一個の宿意をもって刃傷におよんだのでござる。この上は、いかよう

のおとがめをおおせつけられようとも、私からは、かれこれ御返答を申し上げるべきすじはありませぬから、よろしく御処分を願いたい。ただ、吉良上野介を討ち損じたること、残念に存ずる」

とのみこたえて、吉良へのうらみについて、くどくどとは申したてていない。

つまり男の喧嘩に、いいわけ無用という、いさぎよい態度だったわけだ。

男の、つまり武士の喧嘩は両成敗という定法が幕府にある。

だから殿中で喧嘩さわぎをおこした浅野と吉良は、共に罰をうけねばならぬ。

一応の取調べを終えた目付多門伝八郎以下四名が、この結果を老中から側用人・柳沢出羽守へ、出羽守から将軍・綱吉へ言上すると、ただちに、

「浅野は田村右京太夫へ御預けの上、場所柄をもわきまえず、自分一個の宿意をもって刃傷におよんだのはふとどきにつき、切腹おおせつけらる」

と将軍の裁断が下った。

そして吉良上野介へは、

「危難にのぞみながら、よく時節をわきまえ、場所柄をつつしんで手向いをいたさざりしは神妙である。よって何のおかまいもなし。勝手次第に城を下り、傷の養生をするよう」

と、これはほめられてしまった。

吉良は手向いをしなかったのではなく、できなかったのだ。一太刀うけて気絶せんばかりだったのは梶川筆記を見ても容易にわかる。

目付たちは、とりあえず取調べの第一段階として報告をしただけで、これから尚、この事件の

調査をめんみつにおこなうものとばかり思っていたから、あまりに性急な裁決におどろき、

「御申しわたしのうち、田村右京太夫へおあずけの儀は承知つかまつりましたが、浅野へ切腹おおせつけらるる儀は、しばらく御猶予が願いとう存じます」

多門伝八郎から柳沢出羽守へ申したてた。さらに多門はいった。

「浅野内匠頭儀、何事にも正直に申したて、いかにも神妙の様子に相見えまする。内匠頭は五万三千石の城主にて、その本家は世にきこえたる大身の家柄でござります。それを、われらが一応の取調べをなしたからと申して、ただちに切腹をおおせつけられるは、あまりにも御手軽と申すものではございますまいか。ともあれ、本日ただちに切腹のことのみはおとどまり下されとうござります。それがしも小身のものではござりますが目付をつとむる以上、上の手ぬかりをそのまま引きうけ、浅野を切腹させることはなっとくがまいりませぬ。われらも公儀役目のものとして悪しきところは御いさめ申しあぐるべきと存じまする。いま一度、切腹の儀は御考え直し下されますよう、お上へ御願い申しあげたてまつる」

これをきいた若年寄の加藤越中守と稲垣対馬守が、

「もっともであるな」

うなずくや、多門伝八郎はひざをすすめ、

「また吉良上野介儀、たとえ神妙のふるまいと申されても、これは浅野が一身一家を投げうっての刃傷にござります。それにはそれだけの理由が必ずございましょう。通りいっぺんの御詮議にて、浅野は悪し吉良は良しときめらるるものにてはござりますまい。かさねての御詮議を願わ

しゅう存じまする」

力をこめていった。

しかし、若年寄を通じての、この願いも、たちまちにはねつけられた。

多門ら目付たちの意見は、老中から柳沢出羽守へつたえられたが、

「すでに結着したることを変更すべきではない。内匠頭切腹の手つづきを、ただちにとるように」

とのことだ。

これをきいて多門伝八郎が、

「上様（将軍）の御沙汰なればともかく、柳沢侯の一存をもって、そのような御処置をなさるのでは、われら承知できませぬ。いま一度、上様のおぼしめしをうかがっていただきたい」

と、つっぱねる。

また、若年寄が、これを柳沢につたえると、出羽守は、

「なるほど上様に言上してはおらねど、側用人たるわれらが、しかと上様の御意をうけたまわって申しつけたことである。この上も、とやかく申すならば、多門伝八郎のみを差しひかえさせよ」

激怒ただならぬものがあった。

これで万事は終った。

いかに将軍・綱吉の寵愛ふかい柳沢出羽守の権力が強大なものであったか……さすがの多門伝

八郎も、ついに沈黙せざるを得なかった。

側用人というものは将軍のそば近くにつかえ、将軍の命を老中につたえ、老中の言上を将軍につたえるが役目であって、格式は老中に準ずるといえども、威望はそれをしのぐといわれている。しかし、老中を通じて言上を願った多門ら目付役の声は、柳沢が、自分一存で断ち切ったのだ。柳沢出羽守という人物は、このように、おのれの役目をないがしろにして権勢をほこっていたがために、後年の吉良びいきも、よくいうものはいない。

また将軍に直属して政務をつかさどる老中たちにしても、老中に次ぐ重職をつとめる若年寄にしても、上は側用人の権力に押され、下からは硬骨の目付役に突きあげられ、二度も三度も、あたふたといったりきたりするありさまは見苦しいきわみである。

彼らは多門伝八郎らの進言をもっともなことだと思いつつ、中に入ってこれを主張する気力も誇りもなく、ひたすらに柳沢出羽守をおそれ、単にうろうろと、上下の声の取次をやったにすぎない。

ところで……。

すでにのべた幕府の一役人として浅野・吉良の両人を取りしらべた多門伝八郎が、この突発事件を見る目、考える心というものは、そのまま、浅野の家臣たちの心情であったといってよい。

事件の日の夕刻、浅野内匠頭は罪人としてのあつかいをもって、陸奥、一ノ関の領主・田村右京太夫の屋敷へ送りこまれた。

愛宕下の田村邸へ御預けとなった内匠頭は、約一刻（二時間）ほど後に邸内庭先において切腹

をさせられたわけだが、このことをきいたとき、

「まさかに、そのような……」

堀部安兵衛と弥兵衛は異口同音に、思わず声を発し、顔を見合せたものだ。

主人が切腹ときまり、浅野藩邸内の騒擾は、むしろ絶望的な沈黙に変った。

「吉良上野介は殿の太刀をうけて絶命したものと見えるな」

と、堀部弥兵衛は推測をしたし、安兵衛もまた、

「いかにも。左様でなくば、このようにあわただしい御公儀の御仕置きがあろうはずはござらぬ」

事実、夜に入るまで、吉良の死亡説が藩邸内をみたしていたのである。

その中に、本家・分家から問い合せの使者が駆けつけてくるし、幕府からも目付役・天野伝四郎ほかがやってきて、事件の次第を説明し、

「火の元を用心し、決して騒ぎたてまじきこと」

念を入れた。

つづいて、幕府は内匠頭の従弟にあたる戸田氏定（大垣藩主）と、分家の浅野長垣を呼び出し、申しわたしをおこなった。

これは刃傷の次第と内匠頭の切腹を正式につたえると同時に、

「一類中相談申しつけらるべく候」

とある。

領国赤穂の城、江戸藩邸などをすべて引きわたすことを、浅野家の親類大名の連帯責任として、きびしく命じたわけだ。

驚愕と悲嘆の相次ぐ中で、藩士たちは、もう声も出なかったが、一時も早く屋敷を引き渡さねばならないので半ば虚脱状態になりながらも必死ではたらいた。

屋敷中の諸道具、衣類、書類などをはこび出し、諸方へあずける手筈もつけ、内匠頭夫人もどこかへうつさねばならない。

「かまわぬ、わしのところへもはこびこめい」

と、堀部弥兵衛は、夫人の道具類の一部を飯田町の隠居所へ、みずから指揮して移させたりした。

夜に入って、原惣右衛門と大石瀬左衛門の二人が第二の注進として赤穂へ出発する。

この間、内匠頭の用人・片岡源五右衛門が、ただ一人で田村屋敷へおもむき、主人との最後の別れをした。

むろん罪人ということで、声をかわすこともできず、目と目を見合すだけの面会なのだが、副検使として田村邸へきていたこれも多門伝八郎が他の役人との喧嘩腰のはからいがなければ実現しなかったものである。

浅野内匠頭が、片岡源五右衛門にあてた遺書を、わかりやすくしめすと次のごとくだ。

『今日の城中における刃傷については、かねて、そのほうたちへ知らせおくべきかとも思っていたが、しかし、やむを得ざることゆえ知らせるひまがなかった。さぞ不思議に思うであろう』

源五右衛門が藩邸へ戻り、この遺書をしめすと共に、吉良上野介が生きていることを知らせたとき、藩邸内は、ふたたび異常な興奮に包まれた。

赤穂にて

播州（兵庫県）赤穂は、国鉄の鈍行で京都から三時間余、姫路からは一時間たらずのところにある。

駅前広場と、その向うに展開する街路は、現代日本の、どこの駅前にもある同じような風景であるが、その街の中を十分も歩かぬうちに、いつの間にか、五万三千石の古い城下町へ入りこんでしまう。

市役所で発行している小冊子の序文の一部を次にぬきがきしてみよう。

『赤穂は往時より忠臣蔵を以て鳴り、名塩をもって知られ、かくて国立公園赤穂御崎の媚景と板越生島の佳景をひかえ（中略）春は紅霞色映える城趾の大石祠に義芳をなつかしむもよく、夏は松さわやかな瀬戸の海べに碧りの潮を浴びるもよく、秋は朝霧たちこめる千種川の清流に釣糸をたれるもよく、冬は閑雅な花岳寺庭園をめでつつ茗茶を喫するもよい』

美文をつらねた例のごときものではあるが、この城下町を包む周囲の景観は、いまだに古格を存して美しい。

だが、あかるい瀬戸内海にのぞむ塩田のひろがりも、近年は採算がとれぬというので思いきっ

て縮小され、近代産業の誘致がなされるらしい。そうなると、この古びた城下町の風景も非常な変貌をとげることになるであろう。

そうなれば、元禄のころのおもかげを何とか嗅ぎとることも不可能になってしまうにちがいない。

いまのところは、城塁をかこむ町なみのわらぶき屋根にも、加里屋とよばれる旧城下町の諸方に建てられた義士宅趾の石標にも、往時をしのばせる息吹きが、まだかすかにたちのぼっている。

ということは、史蹟周囲の風物が死絶えていないからだ。

これで道がこわされ、新しくひろい舗装道路となり、建造物が山や木を隠してしまったならば、史蹟をしめす石標は単なる石の柱にすぎなくなる。

赤穂駅から南へ約二十分ほども歩くと、せまい道の両側にならぶ民家の向うに、ちらりと城の石垣と櫓が見える。これが大手口であって、白蓮のういた濠にかかる大手門橋をわたり城内へ入ると、南へ、まっすぐにのびている幅のひろい道の左側に、一目で、

（ははあ、あれだな……）

とわかる武家屋敷の長屋門がのぞまれる。

これが、大石内蔵助良雄の屋敷跡で、長屋門のみは当時のままである。

むろん修築はしたろうが、明治になってから、これをこわして塩の倉庫にしかけたそうだ。

それを、識者相はかって大石邸保存会を設立し、邸内数戸の士族屋敷も買収して、元禄の聖域を定めたのである、と観光用小冊子が記しているように、旧大石邸内は、現在、大石神社になっ

ており、その一部に残る小池をかこむ一画は、むかしながらのおもかげをとどめているという。

ところで……

堀部安兵衛が、江戸から赤穂へ到着し、この大石邸・長屋門をくぐったのは四月十四日も夜に入ってからであった。

安兵衛は四月五日に江戸を出発し、百五十余里を十日間で赤穂へ到着している。

同行は奥田孫太夫・高田郡兵衛の二人であった。

三人が大石屋敷へ入ったとき内蔵助は城から下り、入浴中で、

「しばらくお待ち下さいますよう」

茶菓をはこんできた女中の後から、内蔵助の妻・りくがあらわれた。

孫太夫も郡兵衛も赤穂にいたことがあり、りくを見知っているが、安兵衛は赤穂へきたのもはじめてなら、りく女に会うのもはじめてのことである。

（おそろしいほどに背丈の高いお人だな）

と、先ず目をみはった。

五尺六寸をこえていたというりく女だから、五尺三寸ほどしかない夫の内蔵助よりも背が高く、しかも立派な肉づきをもった体格で堂々たるものだ。

安兵衛のあいさつをうけて、

「あなたさまが……」

りくは人なつかしげな口調で、

「堀部様は当家へお泊めするよう、内蔵助が申しておりまする」

と、いった。

孫太夫も郡兵衛も、それぞれ赤穂に縁者がいるし、そこへ泊るわけだが、安兵衛にはそれがないので、

「わしがところへまいられい」

と、孫太夫もそのつもりでいたのだ。

りく女が出ていって間もなく、

「お待たせを……」

大石内蔵助が三人の待つ書院へ出てきた。

焦茶色の平服に小肥りの体軀をゆったりと包んだ内蔵助の顔は、風呂あがりのつやつやとしたもので、

「遠路を御苦労にござる」

声をかけながら三人の前へすわった様子が、まるで今度の大事件を夢のように思っているほどの何気なさなのである。

三人のあいさつをうけてから、

「安兵衛殿。久しかったな」

内蔵助が、にっこりと笑いかけた。

安兵衛、いささか感無量といったところだ。

十九歳の彼が、京都の寺町・四条上ルところの刀屋の店先で、内蔵助に声をかけられ、五両余の金を借りたのは、もう十五年も前のことになる。

十五年目に再会した安兵衛は三十二歳。大石内蔵助は四十三歳になっている。

「そのせつは危うきところをお救い下されまして……」

「いやいや。御返金の折の念の入ったるなされ方を、この孫太夫殿の手紙で知り、ただただ、おそれ入った。こなたはすっかり忘れてしもうていたので……」

「冷汗がながれまする」

「あのころにくらべると……」

いいさして、内蔵助はつくづくと安兵衛をながめまわし、

「いやもう、何と申してよいやら……」

「は……？」

「そこもとの何も彼もがいやなに、いま風呂桶の中で、そこもとの、むかしの顔を思いおこし、ここへ入って見たとき、まるで顔つきも体つきも変ってしもうていたのでな。いや、内蔵助うれしゅうござる」

そこへ夕飯の膳がはこばれてきた。

高田郡兵衛は、じりじりとしていた。

主君が切腹し、主家が取りつぶされるという大変の中で、藩士たちは、そのまま浪人となって放り出されればよいというだけですむわけがない。

喧嘩両成敗という定法を幕府みずからが破り、あまりにも簡単迅速に始末をつけられてしまった浅野家に反し、喧嘩相手の吉良上野介には何のとがめもないのだ。

江戸にいる藩士たちの中には、時をおかず同志をつのって吉良屋敷へ討入りをかけようと激しいうごきもあるというのに、首席家老の大石内蔵助が三人を迎えた態度には少しの切迫感もない。

「御家老」

たまりかねて、郡兵衛が口をきるや、

「ま……」

と、内蔵助が軽く手をあげて制し、

「いまさら、こたびの急変をなげく言葉をかわし合うまでもあるまい。先ず、ゆるりと腹をこしらえてからにいたそう」

孫太夫が大きくうなずき、目を光らせ、ちらりと安兵衛を見た。

(どうだ。大石殿のたのもしさは……)

と、いいたげなのである。

給仕の女中たちが、郡兵衛の血相におどろきながら膳の仕度をととのえる間に、安兵衛が内蔵助へ、

「御心痛のことと存じまする」

こころみに声をかけると、

「することが山ほどありましてな」

けろりとしたもので、

「この内蔵助にはせわしすぎる毎日でござるが、先ず一日一日を、後始末の一つ一つを解怠なく片づけてゆかねばならぬ。かようなときには……」

と、内蔵助は三人へ酒をすすめつつ、

「かようなときは、つとめて気をゆるやかにたもつことが肝要」

などと、まことにのんびりしたことをいう。

ここに至って、奥田孫太夫の顔にも不審の色が走ったようだ。

食事中にも、

「弥兵衛御夫婦に、おかわりはないか？」

とか、

「さてもさても、安兵衛と浅野家とは、奇妙な縁にむすばれていたのでござるな」

とか、内蔵助の話しかけてくることは、いちいち三人の胸へひびいてこない。

この一か月の間に、内蔵助は内蔵助で一身に背負いきれぬほどのはたらきを、いやでも強いられた筈である。

内匠頭の切腹を報じた使者の後から、次々に飛脚が赤穂へ到着した。

内匠頭の弟・浅野大学が閉門を命ぜられたこと。江戸藩邸も没収され、赤穂城引渡しの命が下り、幕府は受城使として脇坂安照（播州・竜野五万三千石）木下公定（備中・足守二万三千石）の両大名のほか、目付として荒木十左衛門、榊原采女の両幕臣を赤穂へ出張せしめた。

これらの人びとが兵をひきいて赤穂に入るのも今日か明日かにせまっているのである。だから大石内蔵助も、安兵衛たちを迎えたこの夜まで、のんきに遊んでいたわけではない。

このときの内蔵助がとった処置の立派さは、いかな吉良びいきの史家たちもみとめるところで、第一に藩札引替えの件である。

藩札というものは、それぞれの大名が自分の領国のみにかぎって発行している紙幣のようなもので、当時、浅野家は九百貫目の藩札を領民へ出していた。

金にして一万二千両である。

この藩札は、いうまでもなく浅野家との取引きにのみ通用するものだから、一時も早く金に替えて領民を安堵させなくてはならぬというのが内蔵助の先ず着手したことで、

「もしも、このさいに領民を難儀させては浅野の名をはずかしめることになろう」

準備金では不足なので、広島の浅野本家へ銀三百貫の借用をもとめたが、本家の殿さまは江戸にいるので、

「われらの一存ではからうわけにはまいり申さぬ」

本家の年寄役・沖忠裕に、ことわられてしまった。

こうするうちにも江戸の騒ぎを知った領民たちが勘定所へ押しかけて藩札の引替えをせまる。

内蔵助が苦心の末に、藩札一両に対し四つ引の六割という定めで引替えを完了するまでには、領民たちのさわぎもかなりひどかったようだ。

これが終ると、今度は藩士たちへの割賦金の支給である。

いえば退職金のようなものだが、これも割当てが実にめんどうをきわめている。

家老の一人、大野九郎兵衛が、上にうすく下にあつい割当だ、と不平をいい出し、そのとたん自分の藩金のつかいこみを摘発され、あわてて赤穂を夜逃げした插話も、このときのものだ。

九郎兵衛が家族をつれ、舟で海上から城下を立ちのいたのは安兵衛たちが赤穂へつく二日前のことである。

吉良が生きていることを知った藩士たちの怒りをしずめ、

「開城の上、公儀よりの上使、御目付に検使を請い、その上で、御城大手門にて一同切腹、そのさい、こなたの存じよりを申しあげたなら、御公儀も、これをとりあげてくれるやも知れぬ」

と、衆議を一決させたのも内蔵助の力であった。

存じより、というのは、

「吉良上野介がそのままであるのなら、浅野家においても、内匠頭弟・大学をもって家をたてられるようにしていただきたい」

とのことだ。

さらに、

「もしも大手門で切腹が不可能なときは花岳寺において追腹し、吉良の処置について嘆願しよう」

と、きめた。

公儀の上使は、むろん兵をひきいてやってくる。

浅野家のものが城に立てこもることは充分に考えられるし、幕府の緊張も只事ではなかったようだ。事実、内蔵助は表向きだけでも一度は藩士たちの籠城説に同意している。

安兵衛が赤穂へついたのは、こうしたさわぎが一応は落ちつき藩士一同は息をつめて上使を待ちかまえているときだったのである。

安兵衛や孫太夫の決意は、

（吉良上野介を討って亡き主君のうらみをはらす）

一点に、しぼられていた。

この「うらみ」というのは、単に吉良のみではなく、幕府みずからがおこなった不法な処断へ対して、ひたと向けられているのだ。

後に、吉良邸討入りのさいにも赤穂浪士は直接、幕府や将軍に向けて「うらみごと」をのべてはいないし、

「吉良殿を討ちとめることができなかった内匠頭の末期の胸のうちを思い、われら家来どもは、これをしのびがたく、討入りを決行するものである」

ことを口上書にのべている。

だから一見すると吉良への憎悪だけで復讐を決行したように思われるが、大いにちがう。

そしてまた当時は、吉良を討ち主君のうらみをはらすという一事をもって、公儀政道のあやまりを衝いたことが、だれの心にも、よく了解されたのである。

内匠頭の死後、まるで、あわてふためいてでもいるかのような幕府の裁断が下されるにつれ、

「これは吉良殿の首を討つことのみでございますな」

堀部安兵衛が弥兵衛にいった。

「いかにも」

弥兵衛も躊躇なくこたえた。

安兵衛には、少年のころから遭遇したいくつかの事件によって、

（これだ？）

という生き方が直感的につかめている。

亡父・弥次右衛門切腹事件のときに自分がとった無謀にも思われる出奔も、足軽・福田源八を斬ったことも、それが大いに新発田藩の反省をうながした結果になっている。

さらに、菅野六郎左衛門が、死をかけて下劣な村上兄弟の挑戦をうけて立ったことも、松平家の政道に良き結果をもたらしたことは、すでにのべた。

いまこのとき――。

浅野内匠頭の刃傷事件をさばいた幕府という巨大な政権へ、小大名の家来たちが反省をもとめる手段といえば、

「吉良上野介を討つ」

ことが、もっともよいのだ。

複雑をきわめ、堕落しきった幕府の政治機構に対し、いかに弁論をもって立ち向ったところで、適当にもみ消されてしまうばかりか、返って機会を失うことになる。

こちらの嘆願の声がとどくほどなら、すでに、あの多門伝八郎が事件直後に発した〔声〕も、将軍や幕府閣僚たちの耳にとどいているはずだ。

いや、とどいたにしても、あのような無茶苦茶な裁決が下ったわけであるから、結果は同じなのである。

しかし、安兵衛や孫太夫たちが独断で吉良を討っても、これは個々の〔うらみ〕になりかねない。天下に向けて問いかける一大事ならば、赤穂の家臣たちと同調して歩みをもって事にあたらねばならない。

安兵衛や孫太夫が、その夜、大石内蔵助にのべた意志も、およそ、そのようなものであった。

内蔵助は、三人の言葉を一語もさしはさまず熱心にききとってから、

「そこもとたちの心底、ようわかった」

ふかく、うなずいてから、

「なれど、こなたは御城引渡しの折に、上使、御目付へ向け、御家再興の嘆願をすることに決したのでござるから、内蔵助はあくまでも、その一事にはたらくつもりでござる」

と、いう。

別に気負った声でもなく、淡々と手短かにいっただけなのだが、安兵衛たちは妙に圧迫された。

それでも、安兵衛は、

「その嘆願、果して公儀の耳へとどきましょうか？」

念を入れると、内蔵助が微笑をした。

「とどかせる決意にて嘆願いたす」
「なれど……」
「はばかりながら、内蔵助には存じよりもござる。いかがであろう。そこもとたち、すべてを内蔵助におまかせ願えまいか。そこもとたちの一命をおあずけ願えまいか」
いわれても、たよりないことは事実だ。
城をうけとりにくる幕府の使者に、
「どうぞ、浅野家の面目が立つようにして下さい」
泣きついたところで、どうにもなるわけではあるまい。
しかし、この夜は、まったく手ごたえのない内蔵助の反応が三人の激情をよぶようなものではなく、議論にもならなかった。
結局、安兵衛は大石邸へ泊ることになり、奥田孫太夫と高田郡兵衛は夜ふけてから出ていったが、
「安兵衛殿。おりゃ何となく気落ちがしてしもうたわ」
孫太夫が、門のところまで送ってきた安兵衛へ苦笑を見せ、
「むかしから、御家老はあのような仁にて、いかなるときも変ることがない。肚のうちで何を考えておられるのやら……」
首をかしげつつ、去った。
翌十五日は藩士たちも、それぞれの屋敷を引きはらうことになっており、その後は城下の遠林

寺が浅野家の詰所になる。

孫太夫たちが去ってから、安兵衛の血が急に熱くなりはじめた。

（このまま、むざむざと御城をわたしてしまっては取返しがつかなくなるのではなかろうか……？）

内蔵助の嘆願を上使たちが『よし。ききおく』とこたえ、城を受けとってしまえば何のことはないのだ。

安兵衛は居ても立ってもいられなくなり、

「御家老のおゆるしがあれば、いま一度、お目にかかりたく存ずる」

寝間へ案内に立った家来に申し入れた。

「よいとも」

内蔵助は、すぐに居間へ安兵衛をまねいた。

大きな行灯を両脇に置き、そのあかるい灯下で内蔵助が書類をしらべたり、筆をとったりしているところへ、安兵衛は入っていった。

「さ、ここへ」

内蔵助は筆をおいて、

「二人きりで、いっこん酌みもうそうか」

「私、申しあげたき儀が……」

「おお。何でござる」

「御城を、むざむざと明け渡して……それでよろしゅうござるのか？」
「左様に決した」
「なれど、その折の嘆願によって、われらの武士としての誠が公儀に通じましょうか、安兵衛は無駄だと存じます」
「ふむ」
「このたびのことについては、よほどに、われらも覚悟をきわめ、何事にもためらうことなく思うところに進まねば機を逸しましょう。もしも……もしも、城に立てこもって公儀からの寄手を相手に闘い、われら討死となっても、赤穂藩士の赤心は通りましょうかと……」
「籠城な……」
「はい」
「なれど、それでは公儀に刃向うことになり、御家の再興はのぞめまい」
「御家老にうかがいまする」
「うむ？」
「亡君御舎弟・浅野大学様をもって御家を再興することが、たとえ出来得たといたしましても……こなたが何度も頭を下げ、公儀も仕方なくこれをとりあげ、当てがい扶持ほどの小さな家と名をもろうたところで、こたびの御公儀片手落ちのなされ方が消ゆるものではございますまい。吉良上野介は相も変らず高家筆頭として羽ぶりをきかせ、浅野家は以前にもまして小さく身をこごめながら、あれ見よ、あれが泣き泣き嘆願して公儀の袖にたよりすがった浅野の姿じゃと、天

下の笑いものになるは必定にござる」

いいつのるうちに、安兵衛も感情を激してきて、

「私は、いやでござる。吉良の首をはねるか、籠城するか、御家老も意を決していただきたい」

叫ぶようにいった。

「そこもとの心底、相わかった」

と、相変らず大石内蔵助の声はしずかなものであったが、その顔貌には今までに見なかった緊張がうかび、鳩のような小さな目が張り裂けんばかりに見ひらかれ、

「安兵衛殿」

また何かいいかける安兵衛を押えつけるようによびかけた低い声には名状しがたい力がこもっていた。

安兵衛もすぐれた剣士だけに、このときの内蔵助の小さな体軀にみなぎる異常なまでの迫力を感ぜぬわけにはゆかなかった。

沈黙して、にらむように見つめてくる安兵衛へ、内蔵助が急に声を張っていった。

「わしはな、天下に恥ずるような御家再興を願うてはおらぬ……」

「え……？」

「だれの目から見ても、浅野家の面目が立派に立つほどの再興を願うています」

そのようなことが可能なのだろうか……と、脳裡のどこかで思いつつも、安兵衛は相手の力強い声にうたれて全身の力がぬけきってしまい、巌のように見える内蔵助の前で頭をたれた。

翌日、奥田孫太夫と高田郡兵衛は遠林寺会所の重役の奥野将監をたずねて、

「この上は籠城を――」

と迫ったが、奥野も、

「われらも内蔵助殿に同意をし、広島の御本家をはじめ御親類方へも無事に御城を明け渡すことを約定いたした。これを破ることはなるまい」

承知をしない。

翌十六日――。

公儀目付役・荒木十左衛門、榊原采女が先ず赤穂へ到着した。

城受渡しに関する手つづきも、めんどうをきわめたものであったが、皮肉なことに、大石内蔵助は三十六歳の折、亡き内匠頭をたすけ、備中・松山城を受け取りにいっている。

これは松山城主・水谷勝美が急死して後つぎがなかったため、家断絶となり、城明け渡しとなったが、幕府は受城使として浅野内匠頭を任命したのだ。

ときに元禄七年二月というから、安兵衛が高田の馬場に闘った同年同月のことである。

そのときは城を受け取る側に立った内蔵助が、いまは明け渡しの指揮をとる。

立場のちがいはあっても、八年前の経験によって、内蔵助の処置は水際だったものであり、目付役・荒木十左衛門が、こういっている。

「このたびのことについて大石内蔵助という仁は、まことに見上げた人物にて、城あけわたしの万端いかにもよくゆきとどき、われらが口さしはさむ儀のいささかもなかった。あの仁は尋常

のお人ではない。あの仁を何処の大名の家にもいる家老と思うてはならぬ。内蔵助などと軽がるしく呼びすてるべきお人ではない。かならず内蔵助殿と、うやまって呼ばなくては武士の冥加にはずれよう」

だから荒木は幕府の役人として赤穂へき、内蔵助に会ってから一目で好感を抱いてしまい、

「故内匠頭は将軍家に対したてまつり、うらみをかけたのではないゆえ家中の者に罪はない。城地あけわたしの後もゆるゆると引きはらうように」

と、あたたかい声をかけている。

それを見て、大石内蔵助はすかさず荒木十左衛門へ嘆願をおこなった。

荒木たちが本丸御殿内を検分し、金の間で休息をしたとき、内蔵助は浅野家を代表してあいさつをし、熱誠をこめて、

「……もともと浅野家は東照権現様（家康）より御取立てにあずかりし家柄にて代々御奉公つかまつり、御高恩をこうむってまいりましたのに、このたび一朝にして断絶なすこと、まことに残念にござります」

とのべ、浅野大学をもって、ふたたび幕府へ奉公ができるようにおとりはからい願いたいと嘆願をした。

このとき荒木も、うっかりした返事をしなかったが、内蔵助は執拗に喰い下り、検分がすんで大玄関から出ようとする荒木たちを、またも玄関傍の部屋へ招じて茶を出し、

「再三おそれいりたてまつることながら……」

またも嘆願をはじめた。

このとき大石内蔵助は、

「家中のさむらいどもは、御家再興の如何をも見きわめずに、このまま離散することを心外千万に思い、私もこれをもっともなことと存じている」

と、いっている。

このような処置をうけながら、再興の望みも得ぬまま散り散りになってしまうのは実に、もってのほかのことだ、と、思いきって幕府へいいかけたのと同じようなものだ。

堀部安兵衛は、他の藩士たちと共に、このときの内蔵助を遠くから目撃している。

幕吏だけに、うかつな返事はできぬと緊張している荒木たちが、思わず顔を見合したほどのことを、ずけずけといいきったと見てもよい。

それは、安兵衛ほどの男が、胃の腑にこたえた、と洩らしているようにすさまじい内蔵助の一面をのぞかせたもので、

「あの御家老の態を見たとき、これは何も彼もおまかせいたし、われらは御家老の後にしたがおうと心を決めました」

江戸へ帰ってから弥兵衛に報告をしている。

荒木十左衛門も、内蔵助の気魄に圧され、思わず、

「なるほど。内蔵助の申し分は一通り、もっとものことじゃ」

つぶやくように、もらすや、すかさず内蔵助がひざをすすめ、荒木の眼前にせまって、

「ねんごろなる御言葉にあまえ、重ねて申しあげまする」
「な、何じゃ」
「なにぶんにも御とりなしをもって、浅野大学が閉門をゆるされ、面目も立ちまするよう、人前をも相つとめ、こころよく御奉公つかまつるようなし下さるるならば、家中一統ことごとく安堵つかまつる儀と存じ、はばかりをもかえりみず申しあげまする」
切りつけるようにいい放ったものだ。
これは、すでに安兵衛へも洩らしたように、浅野家を再興させてもらうといっても単なる再興では困る。世間から指一本さされぬようにしていただきたい。それでようやく家来どもも安心できるのだ、と念を押したのである。
この声を目付たちの口から幕府へ、将軍の耳へとどかせねばならぬというのが内蔵助のねらいであった。
さすがに荒木十左衛門も、この熱誠にうたれてしまい、
「江戸へまかり帰れば御老中方へ言上つかまつろう」
こたえて、同役の榊原采女に、
「いかが」
問いかけるや、采女も、
「もっとものことにござる」
というので、荒木も肚をきめ、

「つぶさに御老中方へ物語つかまつる。家中一統へ、この段を申しつけられよ」
はっきりと、武士の一言、を口に出したので、内蔵助は、
「かたじけなく存じたてまつる」
退って平伏した。
このときの大石内蔵助一人の嘆願によって過激派の藩士たちもなっとくし、切腹さわぎも起らず、脇坂、木下両上使の到着を待って赤穂城は無事に明け渡された。
安兵衛は四月二十二日、赤穂を発して江戸へ帰った。

決起

その日の午後——というのは、翌元禄十五年六月のことだが……。
本所・回向院境内の茶店で、堀部安兵衛は妙な男に出会った。
五千坪のひろい境内の、表門を入った北側に葦簀張りながらさっぱりと気のきいた茶店がならび、参詣の人びとに茶と滲粉餅を売っている。
茶店の前は参道、うしろは塀をへだてて客殿の庭があり、そこの木立に鳴く蟬の声を安兵衛がぼんやりきいていると、
「もしや……」
その男が声をかけながら茶店へ入ってきたのである。

安兵衛は手にとりかけた茶碗をおき、
「私のことかな？」
若い、その武士を見やると、
「はあ」
はっきりうなずき、縁台に腰をかけている安兵衛の前へ直立したままで、
「山吉新八と申します」
と、名のった。
山吉という姓もめずらしかったし、小柄ではあるがしっかりと肉のついた体軀にも陽に灼けた精悍な顔だちにも、まだどこかに土の香がただよっているような男であった。安兵衛は、いま長江長左衛門と名を変え、ここから程近い本所林町五丁目に小さな家を借りて住んでいる。
「それがしは長江長左衛門と申し、そこもとを存じあげぬが……」
不審そうにいうと、
「はい、その通りです」
あくまでも謙譲な態度で、山吉新八が、
「わたくし、九年ほど前のそのころ十七歳でありましたが、ちょうど江戸に出ておりまして、かげながら、お姿を見かけたことが……」
「それがしの」
「はあ」

安兵衛は顔の色にこそあらわさなかったが、何か戸まどった。

九年前といえば、まだ堀部家へ入る前のことだろうし、そのころの自分を知っているこの若者は、いったい何処で自分を見たというのだろう。

すると、山吉新八がいった。

「高田の馬場で叔父御さまの助太刀をなされました折、わたくしは近くの放生寺近くの親類の家におりまして、堀部様がお引きあげになるところを、見物のうしろからお見かけいたしました」

安兵衛は苦笑をした。

何といっても、あの事件以来、安兵衛の名は高く、堀部の養子となったことも浅野の臣となって去年の大変にあったことも、心ある者の知らぬ筈はない。

それにしてもまずかった。

長江長左衛門と名を変えているのも、他の同志たちと共に吉良上野介を討つ計画を押しすすめているからのことで、しかも、吉良が住む屋敷は目と鼻の先にあるのだ。

安兵衛は注意ぶかく山吉新八をながめつつ、

「人ちがいではござらぬかな」

さり気なく、いった。

「いえ、人違いとは思えませぬ」

というのが山吉新八の返事であった。

「困ったな、どうも……」

「他意はありませぬ。先程、この茶店へお入りなされたのをお見かけいたし、ただもう夢中で、ぶれいとは存じながら声をかけてしまいました」

つまり、山吉にとって安兵衛は〔あこがれの武人〕であったらしい。声をかけて、一言でも二言でも返事をもらえるのなら、それだけで満足という、いかにも青年らしい卒直な動機から名のり出たものであろう。

こそばゆい気もしたが、こうなっては仕方もなかった。

「ま、おかけなされい」

安兵衛が縁台を指すと、なぜか山吉は少し狼狽したような、また何かはにかむような、或る困惑の色をちらりと見せ、

「いえ、よろしいのです」

「なぜ」

「お声がきけただけで満足なのです」

「なれど……」

「いささか用事もありますので……」

「左様か」

「また、お目にかかるときもあろうかと存じます。そのときは酒の相手をさせていただきとうござる」

「いまからのもうではないか」

「いえ、その……まだ、とても心の用意ができておりませぬ。今日は、これで」

心の用意などと大げさなことをいう、と、安兵衛は可笑しくもなったし、別に引きとめてみたところで、このひたむきな青年と、どんな会話をかわしたらよいのか、考えれば面倒なことでもある。

「では……」

安兵衛のほうから会釈をすると、

「はっ」

山吉新八は飛び上るように姿勢を正し、

「ごめん下され」

最敬礼をして茶店を出ていった。

興奮で真赤な顔に汗をかいていた若者の顔に笑いをさそわれながら、安兵衛はぬるい茶をのんだが、

（いつになったら内蔵助様の肚がきまるのか……）

山吉新八の出現で中断していた憂悶が、また胸を重くした。

あれから一年、さまざまなことがあった。

大石内蔵助は、赤穂を引きはらってのち、京都に近い山科へうつり住んだ。

内蔵助の家は、もともと近江国・栗太郡大石村の出であるし、山ひとつをへだてた京の地には親類縁者も多い。

ことに山科には内蔵助の叔母の夫にあたる進藤源四郎（同じ浅野の臣）がむかしから土地を持っていたので、ここへ浪宅をかまえることにしたのだ。

内蔵助は、浅野内匠頭刃傷の第一報が赤穂へとどいて間もなく、早くも京都周辺の地に浪宅をかまえる準備にとりかかっていたという。

彼が親しくしていた石清水八幡宮の大西坊ほかにあてた二通の書状が、それを証明するもので、そのうちの一通は、まさに内蔵助の筆跡だそうだ。

もしそうなら、大石内蔵助という人物の底のふかさには恐るべきものがあるといってよい。

京都へ移ってからの内蔵助は、依然として執拗な精力を浅野家の再興運動へ投入しつづけている。一年前の赤穂開城の折、内蔵助の嘆願をききとどけた目付役荒木十左衛門たちは、江戸へ帰るとすぐに老中・若年寄などという幕閣の人びとに内蔵助の意をつたえた。

さらに荒木は将軍・綱吉にも目通りをゆるされているから、或る程度は将軍へじきじきに赤穂での出来事を言上したものと思われる。

のちに荒木十左衛門は、故内匠頭の一族である浅野美濃守をおとずれ、

「御老中方の様子を見まするに、浅野家再興の見こみもあるような気がいたします。このことは、それがしのみの考えではござるが……」

わざわざ知らせてくれたりした。

これをきいて、内蔵助は勇躍した。

赤穂の遠林寺・住職〔祐海〕を通じて、あの護持院の大僧正・隆光をうごかし、隆光から将軍

や幕府へ再興運動をしかけてもらうようにもはたらきかけている。

さらに、柳沢出羽守の権勢をも利用すべく諸方に指示をあたえているし、そのために金がいるのなら、いくらでも送ると、祐海へ手紙を出しているほどだ。

ただし、

「むずかしいことではあろうけれども、天下に対し、浅野家がいささかも面目がたたぬようでは困る」

という赤穂で決意した一点だけは、きびしく守りぬこうとしているのである。

つまり、吉良と浅野の処分が同等にならなければ困るというのだ。

「そのようなことが成りたつ筈はない」

と、諸方に待機している過激派の赤穂浪士たちの中には、さすがに一年を経て、大石内蔵助の再興運動に期待をかけぬものも出てきた。

堀部父子も、

「内蔵助殿の粘い仕様には、ただただ感嘆するよりほかはないが、われらが恐れるのは機を失うことじゃ」

と、弥兵衛がいえば、

「御家再興のことのみにすがりつき、これが駄目になってから、吉良を討ったのでは、やれやれ生きのびる道を絶たれた浪士どもが、自棄ふんべつとなってのことかと思われましょう」

安兵衛も、御家再興と吉良の首を天秤にかけているような大石のやり方が、このごろではふし

ぎでならなくなってきている。

吉良上野介へ対する世間の評判は悪くなるばかりで傷が癒えた吉良も心身がめっきりとおとろえ、家督を子の左兵衛義周へゆずり、隠居をしてしまった。

すると幕府からも、すぐさま、呉服橋の屋敷にいた吉良へ、

「本所松阪町・松平登之助屋敷へ引き移るべし」

と、屋敷替えを命じてきた。

これも一説には、赤穂浪士の吉良邸討入を考慮した幕府の処置であったという。

吉良の屋敷が呉服橋にあるのと、本所にあるのとでは、安兵衛たちにとって非常なちがいがある。呉服橋は、いわば江戸城内といってもいいわけだし、ここへ討ち入れば自然に将軍のいる江戸城を侵すことになる。

本所は府下とはいえ、つい先ごろまでは下総国であった土地で、つまり新開地だ。こんなところへ屋敷を移された吉良上野介には、かつての権力や威勢が一夜のうちに消えた感がする。

安兵衛が、本所の吉良邸の近くへ居をかまえ、同志の毛利小平太や木村岡右衛門、小山田庄左衛門なども近くに住みついている。

堀部弥兵衛老人は築地の隠居所をひきはらい、本所とは大川をへだてた矢ノ倉に借家をし、安兵衛も妻のお幸をあずけてある。

奥田孫太夫は養子の貞右衛門と共に深川黒江町にいて、細井広沢家のすぐ近くであった。

この一年の間に、はじめ大石内蔵助に一味同志の誓いをたてた同志百二十余人も、次々に脱落

し七十人ほどになってしまった。

（もはや待てぬな）

回向院の境内を出たときの安兵衛は、ようやく肚をきめたようである。

（内蔵助様をたよらず、江戸にいる同志のみで吉良を討とう）

このことである。

いままでに、何度も安兵衛は京の内蔵助へ手紙を送り、向うからも原、大高、吉田などが使者として江戸へきて、内蔵助の、

「いま少し待て」

という意をつたえたのだが、

「大石様の嘆願なぞ、虫がよすぎるわ」

と、内蔵助の使いで江戸へきた原惣右衛門なぞは、急に安兵衛たちと結んで京へ帰らぬこともあった。

回向院を出て堅川辺りまでくると、大川から吹きつけてくる風が涼しい。

このあたりも、むかし安兵衛が徳山五兵衛へ奉公をしていたころにくらべると、町家が隙間もなくたちならび、両国橋をわたった川向うの盛り場と同じようなにぎわいを見せている。

晴れあがった夏空の下で物売りの声がゆき交い、回向院参詣の人びとが引きもきらぬ。

（なぜ、このように寺まいりがさかんなのか……）

大きな寺のまわりには、いつでも人がむらがっているのだ。

ふり返ると、相生町の町家の向うに、吉良邸の木立や屋根がのぞまれる。

吉良も近頃は警戒をきびしくしており、上野介の子でいまは米沢十五万石の領主になっている上杉綱憲が差し向けた付人が邸内に住み、赤穂浪士の討入りにそなえているらしい。

それが、どれほどの人数か突きとめてはいないが、安兵衛や孫太夫は、

（同志十人もあれば、立派に吉良の首をあげて見せる）

と思っているし、それだけにまた、大石内蔵助の腰のおもさが歯がゆくてならないのである。

実は、秋に入るまで、安兵衛たちは内蔵助には無断で吉良邸へ討ち入るつもりでいたのだ。

大坂にいる原惣右衛門をはじめ、京にも武林唯七、大高源五、岡野金右衛門などの同志がいて、

「どう考えて見ても、大学様をもっての御家再興を待つのはよろしくない。とてもとても大石様がいうような面目が立つとは思われぬし、もしたとえ、名のみの御取立てをこうむり、それが不満だからといって吉良を討ったとなれば、返って大学様が御とがめをうけることになりかねないのだ。大石様をのぞき、いまここでわれわれのみが吉良の首をあげるのならば、大学様へさしさわりはあるまい」

と、原が安兵衛へ手紙をよこしている。

安兵衛は、これに対し、

「七月中に江戸へきてもらいたい。必死の者が十四、五人いれば本望は達せられる」

書き送った。

こうした気配を大石内蔵助は敏感に知ったと見え、昨日のことだが、

「来年三月には自分が江戸へゆき、幕府の意向をしかとたしかめるつもりだから、待ち遠しくもあろうが、それまでは自分に告げずに行動をおこすことのないように」

と、堀部父子、奥田孫太夫にあてて手紙をよこした。

それで、今日の安兵衛はおもしろくなかったのだ。

来年の三月といえば故内匠頭の三周忌がくる。それまで待って、幕府が知らぬ顔をしているようなら、討入り決行というのが内蔵助のいい分なのである。

堀部弥兵衛も、

「内蔵助殿の気の長さにもつくづくあきれる。わしの命がそれまでつづくかの」

いささか不機嫌で、

「それにしても、このようにトドメをさされては無断で事をおこすわけにもゆくまい」

昨夜、安兵衛にもらしていた。

（よし、京へ発とう！）

というのが、回向院境内で安兵衛が決意をしたことである。

いまの同志たちは三つの方向にわかれている。

一は、安兵衛たち急進派で、一時も早く吉良の首を討たねば武士の大義をつくすべき機会を失うであろうというもの。

一は、主家の再興と討入りを並行して希望するもので、これは大石内蔵助以下、上方にいる浪士たちの大半である。

一は、主家の再興のみを希望するもので、これは長生きをして再び禄にありつきたいという人びとだが、これは少数で、もともと、こうした考えの連中はすでに脱盟してどこかへかくれてしまっている。

（とにかく京へゆき、内蔵助様に会うてから、おれも肚をきめよう。いざとなれば弥兵衛殿、孫太夫殿の三人で討ち入りをかけてもよいし、おれ一人でやってのけてもよいのだ）

とにかく弥兵衛宅へゆこうと、安兵衛は堅川河岸から東両国の広場へ向いかけたが、

（や……先刻の、山吉新八とか申した男だ）

思わず足をとめた。

そこは左手が堅川に面した河岸地で、茶店や麦茶などを売る屋台がたちならび、右側は本所元町の町屋であった。

その角に〔原治〕という蕎麦やがある。

蕎麦切の流行は、茶漬やと共に大変なもので、そのころはまだ後年のように種々雑多な飲食店が無かった江戸市中にも（そばや）の看板だけはふえるばかりだ。〔原治〕は、そばのすきな安兵衛もよく出向いたし、そのときも、

（腹がへったな）

ふらりと立ち寄る気持ちもあって原治の店先へ視線を向けたのかも知れぬ。

と……先刻の若者が店の中から、出てきたのである。

山吉新八も安兵衛に気づき、

（あ……）

少しおどろいたような表情で口をあけたが、すぐに微笑をうかべ、ていねいな一礼を送ってよこした。

安兵衛も、その人なつかしげな彼の笑いにさそわれ、共に蕎麦を食べようという気になり、

「いま一度、蕎麦切をつきあわぬか」

いいかけようとして（いま……）とまで声に出したとき、山吉新八はあきらかに狼狽の色をうかべ、ぺこぺこと頭を下げつつ、むしろ安兵衛を避けるように走り出した。

走り出すというよりも逃げ去るといったほうがよい。

（おかしなやつ……）

安兵衛が、あっけにとられて見送っていると、山吉新八は回向院門前の人ごみの中へ消える前に、もう一度ふりむき、ぴょこりと頭を下げたものだ。

（浪人らしいが妙な男だ）

かるく舌うちをして、安兵衛は急ぎ足になり、両国橋をわたった。大川をこえれば義父・堀部弥兵衛の浪宅は間近い。

弥兵衛は在宅していた。

「よし京へゆけい。わしも、もはやこれ以上腕をつかねてあくびをしているわけにはゆかぬ」

堀部安兵衛が江戸を発ち、京都へ到着したのは六月二十九日のことで、これから大高源五・原惣右衛門などと共に上方の急進派七名をあつめ、密議をかさねた。

密議は主として大坂の天満老松町にある原惣右衛門の浪宅でおこなわれ、安兵衛はわざと山科の大石内蔵助をたずねようとはしなかったようである。

それというのも、京にいた大高源五が、

「大石様に会うては、また説きふせられてしまう。あのお人には、はかり知れぬやわやわとした力があって、目と目、声と声をかわしたが最後、つまりはあのお人のいうままにされてしまいますぞ」

しきりにとめたし、そういわれてみれば、

「たしかにな……」

安兵衛も内蔵助には歯がたたぬ。いくらこちら方が激しくつめ寄ってみても、結局は、去年の赤穂で説得されたことと同様の結果になってしまうのである。

そして大石内蔵助は、江戸にいる同志たちの指導者として、どこまでも安兵衛を信じ、何事にも先ず、

「堀部父子に……」

という態度をくずさない。それだけに安兵衛としても独断で事をはかることができない立場にあるわけだ。

「よろし。では、上方の同志のみにて打合せをするし、万事ととのうたところで、原惣右衛門殿ひとり大石様のもとへいってもらおう。もはや待ち疲れた。この上は、われらのみにて事をはかるとな」

「堀部うじ。それがよい、それがよろしゅうござる」

原惣右衛門は五十をこえた老熟の人物だし、もと足軽頭をつとめ俸禄は三百石という、浅野家でも中堅の士として重んじられてきた。

「程よくいたそう」

というのが口ぐせで、この一年の間にも、同志たちの激論をとりしずめるのは、いつも惣右衛門の、程よくいたそうの一言なので、それだけに大石内蔵助も、吉田忠左衛門や小野寺十内、堀部父子などと共に惣右衛門へかけている信頼は大きい。

この惣右衛門の母は、赤穂をひきはらうとき自害をしている。

「このような場合、武士というもの、男子というものは初一念をつらぬき通すことが何よりも大切なことゆえ、あれこれと思いなやみ、進退を決しかねるようなことがあってはなりませぬ」

と、母はいいのこして自殺をした。

老母のことに惣右衛門の心がかたむくことをおそれたからである。

初一念ということは、思いたった最初の決意をさすもので、今度の場合、浅野家来としてなすべきことは、先ず、

「吉良上野介の首を討つ」

ことのみを遂行することが初一念をつらぬくことにあたる。

このことが、単に亡き主人のうらみをはらすことのみにとどまらぬことは、これまでにもくり返してのべておいた。

一見おだやかに感じられる原惣右衛門の胸底に燃える熱火のきびしさは、

「もはや待てぬ！」

今年にはいってからの堀部安兵衛との文通によって爆発寸前のものとなった。

「内蔵助殿による主家再興への尽力は別におき、われら少数にて吉良を討つなら大学様への差しさわりはない」

と、思いきわめている。

これは安兵衛たちが集めた種々の情報を検討した上で出た惣右衛門の結論なので、将軍も幕府も現在ではあのときの裁決を悔いていることは歴然としているし、亡びた浅野家へ対する好意あふれる世論を見ても、

「われらが事をおこしたとて、御家再興に不利はあるまい」

見きわめをつけているし、安兵衛もまた、

「吉良を討ったあとでなら、たとえ大学様が小身の旗本になりと取りたてられても、われらが正義はつらぬけたことになる」

という持論であった。

さて……。

安兵衛たちの密議は、およそ一か月にわたり、上方の同志七名は七月二十六日をもってひそかに京を発し、江戸在住の八名をあわせ計十五名、他の同盟者は別々にして吉良を討つことにきまった。

惣右衛門一人が江戸へ向う途中、山科へ寄って内蔵助にこのことを告げる手筈で、

「もはやこれまで。いかに内蔵助殿といえども、それがしを引きとめることはあるまいし、それがしにしても引きとめられるわけのものでない」

いいきった声も、それが原惣右衛門だけにたのもしかった。

ところが、いよいよ明日は京都を引きはらうという七月二十五日の昼すぎに、大坂から京の大高源五宅へ戻っていた安兵衛のもとへ奥田孫太夫から密書がとどいた。ひらいて見て、安兵衛はうなり声をあげた。

「いかがなされた？」

問いかける大高へ、たたきつけるように安兵衛がいった。

「大学様御身の上がきまったぞ」

幕府が浅野大学処分にふみきったのはこの月の十八日であった。

大学は故内匠頭の弟で、赤穂領内に三千石を分知せられ、子のない内匠頭に万一の事があれば赤穂藩主になるべきよう養子の手つづきがとってあった。

去年の凶変以来、江戸・木挽町の屋敷にあった大学は閉門謹慎（へいもんきんしん）をいいわたされていたのだが、幕府は、

「閉門をゆるされ、松平安芸守へ引き取らせよ」

と、命じたのである。

松平安芸守はいうまでもなく芸州・広島四十二万六千石・浅野本家のことだ。

申しわたしをうけた浅野大学は、この日のうちに桜田門外の浅野屋敷へ引き取られ、大学の妻子も家来たちと共に引き移って、木挽町の屋敷は召しあげられ松平駿河守へあずけられた。

何となく生ぬるい処分ではある。

閉門はゆるしたけれども身を立ててやろうというのでもない。

そうした幕府の態度の裏側には、どのような経緯があったか知れぬが、この知らせをうけた大石内蔵助も

（もはや、これまで）

と復讐の一途へ突きすすむ決意をした。

内蔵助は安兵衛より一日早い二十四日に、江戸の吉田忠左衛門から大学処分の知らせをうけた。長男の主税をのぞいた妻子を、妻りくの実家である但馬・豊岡へすでに帰している内蔵助だけに、今度の大学処分についても或る程度は覚悟をしていたのであろうか、知らせをうけてもおどろくことはなかった。

内蔵助にして見れば、

（こちら方は、吉良殿を討つ前に、これだけのことをし、力をつくして幕府へ運動をしたのに対し、幕府はこのような処置に出た）

ということが、はっきりと表に出てくれることが大切なので、それが明確となった上は、吉良を討つ上での赤穂旧臣としての名目も後指さされることなく立派に立ち、同志をひきいる頭領としての自分もすべてになっとくして行動が起せるわけなのである。

内蔵助は、安兵衛がひそかに京都へきていることを知っていたし、

「大学様処分のことが今少しおくれたならば、安兵衛や惣右衛門を押えかねたかも知れぬな」

と、後に吉田忠左衛門へ洩らしている。

そうなれば「忠臣蔵」のかたちも大分に変ってきたことだろうし、後世における評判も別のものとなりかねなかったであろう。

「事ここにいたれば内蔵助様も心をおきめなされよう」

安兵衛の発言に、原も大高も同意をした。

京都・円山の重阿弥において上方の赤穂浪士が密議をひらいたのは二十八日である。

重阿弥は安養寺の塔中であって、むかしは非俗非僧の者が住持となり、景勝地円山の中にあるため、庵を客に借して酒食を供した。

この日は、内蔵助をはじめ、安兵衛、惣右衛門、小野寺十内など十九名が参会し、内蔵助も、

「おのおのを押えに押え、今日に至ったのも臣下としてつくすべき道をつくさんといたしたわけで、それが成る成らぬは別のことにござる。さだめし、おのおのは内蔵助の腰がぬけたかと思われたであろう」

むしろ肩の荷をおろしたようにさばさばとした笑顔を見せ、

「大学様の安否もさだまり、この上は心にかかるものとてない。九月中には上方での用事を取りかたづけ、十月には内蔵助も江戸表へまいる。なればこそ、おのおのも抜けがけの功名をあせらぬよう御約定いただきたい」

と、いった。

翌二十九日に、堀部安兵衛は潮田又之丞を同行し江戸へ出発をしたが、この日、浅野大学も江戸を発って広島の本家へ向った。

安兵衛たちは、浜松の近くで大学の行列とすれちがったが、

「お目通りをせぬがよい。他の人目もあることだし下手にうたがいをかけられてもつまらぬ」

行列を避けてゆきすぎた。

こうして浅野大学が左遷されたので、主家再興の望みは絶えたことになり、そうなると、

「亡君の仇討ちなぞ、とんでもないことだ」

といい出す同志が相次いで脱盟をした。

「去る者は去りやすいようにしてやれ」

内蔵助は前にとってあった同志たちの誓紙を一たん返してやることにした。

「かくなる上は、ぜひもござらぬ」

誓紙をうけとって去る者もあり、ふたたびこれを内蔵助へ返して死を誓う者もありで、同志の〔ふるいわけ〕がおこなわれた後、五十四名が残った。

最後にはこの中からも脱落者が出るわけだが、先ずこれで内蔵助の指揮が透徹すべきほどの男たちが残ったといえよう。

大石内蔵助の京における遊蕩ぶりは有名なもので、事実、廓通いもし、妾もかこっていたのであるが、死ぬことと同様に生きてあるたのしみをもおろそかにしなかった彼の面目は、ここにも

遺憾なく発揮されたようだ。

それはそれとして、内蔵助が実家へ帰した妻りくへあてた、やさしい手紙を次に披露したい。およそ次のようなものである。

「……先頃、京の祇園祭を主税と共に見物したが、おどろくばかりの見事さで、お前にも見せてやりたく思った。そちらで子が生まれ、お前も産後に血のわずらいもなく、子も可愛らしいそうだし、無事で肥立ちもよく大三郎と名づけてくれたそうだが、けっこう、けっこう。ひとしお見たい気持ちがする。江戸より大学様処分のことについて知らせてきたが、あまりよろしくない結果で気の毒に思うている。とかく因果のめぐりあいというものであろう」

切迫

この年の九月一日。幕府が浅野家から没収をした播州・赤穂は永井伊賀守直敬が三万三千石をもって封ぜられることになった。

これより先、浅野大学の処分が決ったとき、江戸にいた吉田忠左衛門と近松勘六は芝の松本町にある前川忠太夫方へ間借りをしていたが、

「大学様の処分も決った上は、もはや江戸におることもござるまい。故郷へ帰ろうと存ずる」

といいおき、前川方をひき払うとともに、新麹町六丁目の大家、九左衛門支配の店を借り、忠左衛門は田口一真と名を変え、町医者を開業した。

吉田忠左衛門は六十をこえた老熟の武士で、浅野家には郡奉行（兼）足軽頭をつとめ、文武に通じ、器量もすぐれている。大石内蔵助の片腕といわれた人物だけに、医薬への造詣もふかい。事実、開業をしてからは森清助と変名をした近松勘六に指図をし、薬も調合すれば患者も診察したものであった。

この吉田忠左衛門宅が、赤穂浪士たちの本拠となった。

開業医ならば、さまざまな人物が出入りをしてもふしぎはないからである。

上方の同志たちは十月いっぱいに江戸へあつまることになっており、岡野金右衛門、武林唯七など四名が閏八月二十五日に、次いで九月二日から二十日にかけて、不破数右衛門、木村岡右衛門なども江戸へ到着をした。

「しかし、内蔵助殿は、いつ江戸へ下られるつもりなのか」

「事がここに至っても、まだ腰が重いのでは困る」

なかなか大石内蔵助が江戸へあらわれないので、過激派の人びとは、また不安になったようだが、

「わしのかわりに、そなたが江戸へ」

と、内蔵助は息・主税へ間瀬久太夫など四名をつけそえ、江戸へ先発させたので、一同も内蔵助の決意の変らぬことを知った。

大石主税一行は九月二十四日に江戸到着。日本橋石町三丁目の宿屋・小山屋弥兵衛方へ、

「垣見左衛門と申す江州浪人」

というふれこみで泊りこんだ。

つづいて、小野寺十内が内蔵助下向の準備に江戸へ着き、やがて山科の家財その他の始末をつけた内蔵助が十名ほどの同志をつれ、相模（神奈川県）川崎在・平間村まできて、ここへ居をかまえた。

平間村には前に浪士の一人である富森助右衛門が小さな家をかまえていたので、これに手入れをした上で内蔵助を迎えたわけだ。

ここからは江戸も近い。

十月二十六日に平間村の仮家へ入った大石内蔵助は、以後、ここを秘密指揮所として活動することになった。

討入りを決行することになった以上、あせるわけではないが、

「急がねばならぬ！」

と堀部安兵衛は思った。

これは大石内蔵助が、まだ京都にいたときのことだが、当時の伏見奉行・建部政宇の耳へ、赤穂浪士の復讐計画がもれてしまったことがある。

伏見といえば京都から三里そこそこの町で、建部政宇は幕府から任命された伏見の知事のようなものだ。

この建部が、なぜ浪人たちのうごきを知ったかというと、これは浪士の一人、糟谷勘左衛門が自分のむすめ聟へ、

「いよいよ、吉良を討つことに決した」

うちあけてしまったのだ。

ところが、この聟どのは建部政字の家来なのである。

そして建部と吉良上野介は姻戚関係によってむすばれている。

だから、たちまちに建部から吉良へ、

「浪士どものうごきが不穏でござるゆえ、御注意ありたい」

知らせがとどいた。

吉良上野介の身辺の警戒が、にわかにきびしくなったのは、このためであった。

糟谷勘左衛門も、ばかなことをしたものだが、こういう人物であるから、間もなく同志たちを裏切り、どこかへ逃げてしまったのである。

糟谷の聟と建部奉行、さらに吉良との関係は同志の人びとも知っていたし、しかも糟谷自身が脱盟して姿を消したことから、内蔵助たちも、

（吉良へもれたな）

感づいたようだ。

江戸でも、吉良屋敷の警戒ぶりがそれまでとは全く違った緊張に包まれてきたのを、本所界隈に住む浪士たちは知った。

これまでに何度ものべてきたように、出羽国・米沢十五万石の領主・上杉綱憲は吉良の実子である。

綱憲はこの年の四月、国もとの米沢から参覲で江戸へ出てきて桜田門外の屋敷にいるが、どう

も健康がおもわしくない。

綱憲にしても、いくら吉良上野介の実子であるにせよ、現在は上杉家に入って十五万石の主なのである。実父が浅野内匠頭と事件をひきおこした去年三月以来上杉家の立場は、まことに微妙なものになったといえよう。

実父の吉良の身が心配だといっても、これを堂々とかばうわけにもゆかない。

ことに、いまの吉良は逆境にあるといってよく、世評は武家から町人に至るまで、同情と討入りの期待を赤穂浪士にあつめ、むしろ吉良は四面楚歌の状態にあるとみてよい。

吉良上野介も、綱憲の見舞いと称して桜田の藩邸へあらわれ、何日も滞在しては本所の自邸へ帰らぬことが多い。

上杉屋敷にいれば浪士たちの襲撃をうけることもないので、吉良はしきりに、

（自分を上杉へ引きとってもらえぬだろうか……）

と考え、いろいろ手をまわして綱憲の気をひいて見るのだが、これとても、なかなかにむずかしい。いくら綱憲が殿さまでも養子の身であるし、上杉家に代々つかえる重臣たちの考えを無視するわけにはゆかぬ。

もともと上杉家のものの多くは殿さまの実父である吉良上野介をこころよく思っていない。

それはこういうことである。

吉良は、上杉の先代藩主・定勝のむすめ富子を妻に迎えているが、この妻との間に生まれた綱憲（当時三郎）を上杉の養子とするため、妻富子の兄でもあり次の藩主となった綱勝を毒殺した

というのだ。

むろん、これは何の根拠もない説なのだが……。

それにしても、そのころの吉良が高家筆頭の羽ぶりをきかせ、妻の実家の上杉へ出入りし、傲然たる態度と干渉をもって、

「うるさい親類じゃ」

と、家中の顔をしかめさせていたことは事実であった。

上杉綱勝の毒殺説を裏づけるものは、彼が吉良上野介の屋敷へまねかれて御馳走になり、その帰途、駕籠の中で血を吐き、七日後に急死をしたという（事実）である。

吉良は上杉家の家老・千阪兵部とむすび、綱勝を殺して我子・三郎を上杉の殿さまにしようとはかった、という評判は当時やかましく世上にながれたものだ。

とにかく、後つぎのない若い藩主が急死をしたので、これは家名断絶ということになる。

上杉十五万石は呆気なくつぶれてしまうわけであった。

ここに吉良上野介の暗躍が開始された。

足利以来の名家たる吉良は姻戚関係によって将軍にも、紀州家、島津家などともむすびついている上に、高家筆頭の威勢もあり、吉良の工作は見事に成功し、ついに我が子を上杉家へ入らしめた。

そのかわり、それまでは三十万石だった上杉家が十五万石にけずられてしまったわけだが、何にしても、これで上杉の家名は絶えることをまぬがれたのである。

吉良にいわせれば、

（上杉がつぶれなかったのは、わしのおかげじゃ）

と、いうわけであった。

毒殺問題さえなければ、上杉家のものもよろこんだであろうが、いかに証拠がないといっても、殿さまの変死については、

（吉良の仕わざにちがいない）

と、感じぬわけにはゆかない。

だが、主家がつぶれてしまっては家来たちの家もつぶれるわけなのだから、これを口に出すものは、ほとんどいなかった。

後世の史家たちも、この毒殺説をみとめてはいないし、筆者も断定を下すことは避けたい。

ただ、上杉綱憲が上杉の主となるについて、このような事件と評判が存在したことをのべておきたいのだ。

ゆえに上杉家では、年老いて逆境の身を死の恐怖におののかせている吉良上野介へ好意と同情をかたちの上でしめすことをきらったのである。

以上のような理由から、綱憲は実父の身が心にかかっても、思いきった手がうてない。

しかし何とか吉良を我が手に引きとりたいと願い、諸方へはたらきかけてはいたのだ。

堀部安兵衛が、急がねばならぬといったのは、このことである。

もしも吉良が上杉家へ引きとられ、領国の米沢にでもいってしまったら、手も足も出なくなろ

うし、そのうちには老齢の吉良が病死をしてしまうこともあり得る。

大石内蔵助が出てきたのを機に、安兵衛たちの活動も急になった。

いま、同志たちはほとんど江戸へ集まった。

その中で、本所界隈に住みついた赤穂浪士たちは、安兵衛を筆頭に片岡源五右衛門、貝賀弥左衛門、毛利小平太、武林唯七、杉野十平次、など十一名であった。

林町にある安兵衛の浪宅にも、毛利、横川、木村の三名が同居するようになったし、前原伊助は五兵衛と称して米屋の店をひらき、神崎与五郎もその近くに小豆屋の店をかまえた。

町人になりすました二人が住む相生町二丁目は吉良屋敷裏門のすぐ近くである。

この二人と毛利小平太が吉良邸内偵察の尖兵となった。

彼らの報告によると、

「邸内の要所は大竹をもって垣をつらね、用心もきびしいとのうわさであったが、それらしき様子は見えない」

と、ある。

米屋と小豆屋になった前原、神崎によれば、

「近くに火事などがあれば、火事見物をよそおい屋根にのぼり、風雨のときは屋根を修理するかたちに見せてのぼり、吉良邸内を少しでも見ようと心がけた。吉良邸は、もと松平登之助のものであったので種々苦心をして手をまわし、ようやく、その当時の絵図面を得たけれども、吉良が入ってからは諸方を改築したりしているので、偵察の結果、古い絵図を少しずつ修正した」

のである。

十一月の半ばごろになると、吉良屋敷の構造は、およそつかめてきた。

「この上は、相手方の人のそなえだ」

と、堀部安兵衛がいった。

吉良邸内には、いったいどれほどの人数がいるのであろうか……。

女中や小者などは別として、浪士たちが討ち入ったとき、これを迎え撃つべき敵がどれほどいるのか、である。

上杉家からも吉良を守るために付人をよこしていることはたしかなのだが、果して何人いるのか、不明であった。

これを探りとらねば、こちらの作戦がたたぬ。

機会は一度のみだ。

この一度に吉良を逃がしたなら、すべては泡沫となる。

いくらめんみつな作戦をたてても、たてすぎることはないのだ。

討入ったときのあらゆる場合を想定しておかねばならぬ。こうして十一月も半ばになった或る日、安兵衛は、またあの男に出会った。この夏に回向院の境内で名乗り出てきた山吉新八とかいう、あの若者にである。

その日、安兵衛は麹町四丁目裏町で、これも町医者を開業している間喜兵衛をたずねた。

間喜兵衛は六十八歳になるが、前には馬廻役をつとめ、一時は江戸詰めになっていたこともあ

り、堀部弥兵衛とは仲のよい間柄であるし、二人の息・十次郎と新六は老父と共に住んでいる。ことに長男の十次郎は安兵衛と同じ堀内源左衛門の門下であった。

この喜兵衛が杣荘喜斉なぞと凝った変名をつかい町医者に化けたときいた同志のものは、

「そりゃ藪医匙庵の間違いではないか」

と、大笑いをしたものだ。

ところが堀部弥兵衛は少し健康を害すると、

「匙庵どのの薬をもらってまいれ」

という。

安兵衛が、

「そりゃ父上。吉田忠左衛門殿の薬のほうが効目があるのではございませぬか」

「いや、喜兵衛のほうがよい」

また奇妙に、効くのである。

弥兵衛も七十七歳になった。

元気ではあるが、季節のかわりめなどには腹をこわしたり風邪をひいたりする。

その日の前夜、安兵衛が矢ノ倉の弥兵衛宅へ泊ったときも風邪気味で鼻をぐずぐずいわせているので、

「久しぶりに十次郎殿の顔を見たい。ついでに父上の薬をもらってこようか」

お幸にいって、家を出た。

間喜兵衛は謹直な性格で、非常な無口だ。

弥兵衛などは蔭へまわると

「あの唖どのが」

と、よんだりする。

安兵衛が薬をたのむと、大きくうなずいた喜兵衛が、むずかしい顔つきで薬を調合しはじめた。手つきもあやしいものなのだが当人は熱心で真剣なのだ。

その傍で、十次郎が、

「安兵衛殿。昨日、久しぶりで汗をかいてきました」

「堀内道場へいったのか」

「はあ」

「先生にお変りはないか」

「お元気でした。安兵衛殿に一度会いたいとのことで……実は私、昼すぎから本所へまいるつもりでいたのです」

「そうか。孫太夫殿とも語り合い、そのうちにぜひ参上せねばならぬな」

堀内源左衛門と細井広沢には、安兵衛も復讐計画を打ちあけている。

（先生が会いたいとおおせられるからには、きっと重い御用事があってのことなのであろう）

薬を受けとり、間喜兵衛宅を出たのは八ツ（午後二時）ごろであったろうか。表通りへ出ると「ひゃくたんや」と呼ぶそばやがあり、安兵衛はいつか、この店から出てきた鳥羽又十郎に声を

かけられたことがあった。

（あれは、高田の馬場の事件があった年であったな……あれからもうおよそ十年にもなる）

姉のさちが、夫の町田新五左衛門と暮らしている溝口屋敷もすぐ近かった。

姉にも義兄にも、安兵衛は二年ほど顔を見せていない。

討入り決行の直前には何らかの方法で別れを告げにゆくつもりでいたから、この日はわざと溝口屋敷を避け、平河天神の西側から旗本屋敷がならぶ坂の多い道を曲りつつ虎の門へ向った。

江戸城外濠に面した〔虎の御門〕は明暦の大火で焼けた後に再造されたもので、ここには番士たちがいかめしく詰めている。

この門の少し先の外濠へかかった橋をわたり、安兵衛は濠端の道をすきや橋へ向った。

朝から冷え冷えとした曇り日で、風もつよく、道をゆく人びとは、風に突き飛ばされるように歩いていた。

雪国に生まれた安兵衛だが、江戸の町の埃をふきあげる初冬の風は好きでない。

ちょうど日比谷御門の前にきたとき、かぶっている編笠もろとも吹きつけた風が顔をうち、

「あ……」

安兵衛の右眼に芥が入った。

立止って指で芥をぬぐいとり、ゆるんだ編笠のひもをむすび直そうとしたとき、日比谷門の橋をわたってくるあの若者を見たのである。

何となく、なつかしい気持ちがわいて、

「これ、山吉殿」

笠をあげ、安兵衛が声をかけると、ふり向いた山吉新八は、本所元町のそばやの前で見せたようなおどろきの表情をうかべ、ぽかりとあけた唇をあわてて閉じ、何度も頭を下げたが近寄ろうともしない。

「これどうしたのだ」

こちらから進みかけると、山吉新八は狼狽し、尚も頭を下げながら逃げるように走り出した。

（おかしなやつ）

おのれが武人として尊敬する安兵衛に出会って恥ずかしいのか……いや、そうではあるまい。彼は回向院で、みずから元気よく名乗り出たではないか……。

何となく釈然とせぬまま、安兵衛は深川へ向って足を早めた。

これは間家を出るときに思いついたのだが、久しぶりで細井広沢を訪問しようというのだ。いま、内蔵助はじめ同志たちは討入りの作戦をねっていて、いろいろに意見も別れている。自分の考えものべて、広沢の批判をうけようと安兵衛は思いたったのである。

深川八幡門前の家に、いまも細井広沢は住んでいる。

ただ不幸なことには、あの若々しい妻のもや女が病死をしてしまったのである。

それは去年の夏のことで、もや女は二十二歳。その前に長男が早死をし、もや女の没後すぐに三男が夭折したので、いまの広沢は六歳になる次男の勇を男手ひとつで育てていた。

「ごめん」

玄関へ入った安兵衛の声に、女の声がこたえた。そして勇を抱いたその声のぬしがあらわれたのを見たとき、

（もやどの）

安兵衛は愕然となった。

安兵衛は死んだもや女があらわれたと感じたのだが、これが、もや女の妹くめ女であった。双生児ではないが姉妹であるから、よく似ている。

細井広沢が、片手に書物、片手に幼児を抱え、さらに炊事、洗濯までおこなうという悪戦苦闘のさまを、くめ女が見ていられなくなった。

「亡妻の妹でもあるし、心にとがめることもなかったもので、つい先頃、妻に迎えたのだよ」

と、広沢が安兵衛にくめ女を引きあわせた。

ちかごろの広沢は、その学問よりも、むしろ書のすばらしさが評判になって、諸家から種々の依頼も多く、

「何とか食うに事欠かぬようになったよ」

なのだそうである。

早目の夕飯の膳が出、酒も出た。

盃をあけつつ、安兵衛は、ふと何気なく、

「このごろ奇妙な男に出会いましてな」

と、山吉新八のことを酒のさかなにのぼせた。

「ほほう……」
広沢は、いたく興味をよせて、
「その男、浪人か……」
「そのように見えますが……」
「名は、何と申したかな」
「山吉……」
「うむ。やまよし、しんばち、とな」
「いかにも」
「ふむ、山吉か……」
「御存知の男なので？」
「いいや……」
くびを振った広沢が、にやりとした。
微妙な笑いであった。
「……？」
「安兵衛殿。山吉という姓は、むかし越後・蒲原郡・山吉邑より起ったときいておる」
「越後の……そういえば、かすかに越後なまりもあったような気がする……」
「おぬしがそれと気づかなんだのは、その男、江戸の水にも幼少のころからなじんでいたらしいな。子供のころに高田の馬場から引上げてくるおぬしを見た、というのは嘘ではあるまいよ」

「左様か、なるほど……」

自分と同じ故郷をもつ若者らしいと知って、安兵衛は単純にうなずいたのだが、次の広沢の言葉は彼を愕然とさせた。

「戦国のころ、越後を制した名将を何というたかな」

「上杉謙信……」

「その謙信の家来に山吉を名のる武将も、二、三いる」

「左様か……」

「上杉家は、のちに越後より出羽国へうつり、いま米沢十五万石……」

「あっ……」

ここまでいわれて、

(山吉新八は吉良の付人であったのか……)

顔色の変った安兵衛へ、細井広沢はしずかにうなずいて見せた。

(おれは何という迂闊な男か。広沢殿は山吉ときいたのみで、たちまちに看破されたではないか)

広沢の博識におどろくと同時に、いまこのさい、切迫した状態にある自分と同志たちのことを考え、

(おれは、まだ駄目な男だ)

われながら悲観せざるを得なかった。

「まだ、はっきりときめてしまうわけにもゆくまいが」

と、広沢はなぐさめてくれたが、山吉新八が吉良の付人であることを安兵衛は確信した。彼と出会った本所周辺は、いうまでもなく吉良屋敷の近くだし、今日の日比谷御門を出てきた山吉は、おそらく外桜田の上杉屋敷へ用事があって出向いた帰途だったにちがいない。

満面に血をのぼらせて唇をかみしめている安兵衛へ、

「ま、よいわさ」

広沢が事もなげに、

「おぬしからきいたその男の挙動には微妙なものがひそんでいると見た」

「と申されるのは？」

「おぬしを斬るつもりでもなく、またおぬしの身辺から赤穂遺臣の動静をさぐり出そうとしているのでもないらしい」

「む、そう申されれば、いずれも出会うたときは偶然のことゆえ……」

「山吉に敵意あれば、当代一流の剣士たる安兵衛殿の心眼に映らぬ筈はない。な、そうであろう？」

「広沢殿……」

安兵衛は赤面して手をふりふり、

「私の心眼なぞと申されては穴へでも入りたくなる」

「いや、弄うておるのではない。その通りなのだ」

「いや、本日、広沢殿をおたずねしてよかった」
「また出会うたときは何とする」
「あの男をさそって酒をくもうと思います」
「できた」
「え……？」
「それでよい、それでよい。浅野と吉良のことなぞ互いに忘れきってな。おそらく、山吉新八も、おぬしと同じ心底だと私は見ている」
「左様かなあ」
「ゆえにこそ、かれの剣はいざというときにはたらくぞ」
「む……」
あとは雑談になったが、話題はつまるところ討入り決行に関連したものになってくる。
諸方の大名や旗本にも、よく招かれる細井広沢だけに種々の情報を得ており、
「柳沢出羽守はむろんのこと、去年の浅野家を片手落ちにさばいたことを将軍家においても後悔されておらるるらしい。さりとて、大公儀が一度ふみ出した足を引きこめるわけにもゆかぬ。しかも内蔵助の嘆願には、あくまでも吉良上野介と同格のあつかいをもって浅野家の再興を……という一条があり、それだけに公儀も内々は困っているらしい」
さらに、
「おぬしたちが吉良の首を討ったとて、広島の本家にあずけおかれた浅野大学殿の身には何の

とがめもあるまい」

と、断言してくれたものである。

その夜、義父や妻の待つ家へ帰って、このことを報告したときには、堀部弥兵衛が手をうってよろこんだ。

「広沢殿の申すことゆえ間違いはあるまい。これでわれわれも晴れ晴れと命を捨てられるというものじゃな」

ところで……。

細井広沢をたずねて四日目に、安兵衛はまた山吉新八を見かけた。

その前夜。すでに川崎から江戸へ入っていた大石内蔵助の宿所である石町三丁目の宿屋・小山屋方へ弥兵衛と共におもむき、種々の打合せをすました安兵衛は、矢ノ倉の家へ泊り、朝になってから本町の浪宅へ戻ろうとして表へ出た。

安兵衛が村松町の通りを左へ折れたとき、両国橋の方向からやってくる四人の武士の中に山吉がいたのだ。

安兵衛は〔御眼鏡師・美濃屋吉兵衛〕としるされた木看板のかかった町家横手の路地へすばやく飛びこんで、四人をやりすごした。

山吉新八は、まったく安兵衛に気づかなかったようである。

先頭に立つ武士は四十がらみの骨格たくましい男で、山吉をふくめた三人が、この男のうしろへ従っているように見えた。

やりすごしておいて安兵衛は、路地を駆けぬけ四人の先きまわりをし、堀部家へ戻り、妻のお幸を玄関へよび出した。

「何事でございますか？」

「早く、早く出てきてくれ」

「はい」

家の前の小路から裏通りへ出る、その角に立って、

「お幸。向うを見よ。四人づれの武士がやってくるであろう」

「え……あ、たしかに」

「お前なれば、さとられる気づかいはない。四人の後をつけ、どこへいくか見とどけてくれい」

「あれは、吉良の……」

「付人だ」

「では、いってまいります」

お幸は落ちついて表通りへ出ていった。安兵衛は家へ引返し、弥兵衛夫婦に、

「案ずるにはおよびませぬ」

と、いった。

お幸は意外に早く戻ってきて、

「四人とも浅草御門を出て神田川沿いに新橋（あたらし）まで……」

「何、新橋」

「はい。そこの船宿へ入りました。たしか掛行灯には玉やとか」

玉やは、お秀の店ではないか。

お幸の見たところによると、四人とも何かのびやかな様子で笑い合いつつ船宿へ入っていったらしい。

当時、これといった料理屋などが、まだ普及していなかった江戸だから、女をよび酒食をする場処として船宿は恰好なものとなりつつある。

これも一つの流行といえよう。

安兵衛は、とっさに決心をした。

今度は、一人きりで家を出た。出る前に手早く筆をとって紙へ何事かをしたためている。

これは、お秀を呼び出すためのものなのだが、さすがにお幸にたのむことは躊躇されたのである。

いまの安兵衛とお秀の間柄は、愛欲をぬけきった情によってむすばれているわけだが、二人の過去を思えば、お幸の手をわずらわすことを遠慮すべきが男の礼儀というものであろう。

お秀の船宿〔玉や〕から神田川沿いに西へ少しゆくと和泉殿橋がある。

この橋のたもとが草地になっており、茶店が一軒ある。一軒といっても〔よしず張り〕の小屋のようなものだが、老爺が小女を相手に茶とだんごを売っているのだ。

安兵衛はここへ入り、小女にたのんで結び文にした手紙を玉やへもたせてやった。

『急いできてもらいたい』という簡単な文面であったが、お秀はすぐに小女の案内で茶店へあ

らわれた。

風もないおだやかな小春日和で、茶店の中には二組ほどの客もいたが、安兵衛は奥の縁台にお秀をみちびき、

「たのみごとがある」

と、きり出した。

「あい。何なりとも」

「いまおぬしのところへ四人づれの武士が入ったな」

するとお秀は、待ちかまえていたように、

「あの方々は吉良屋敷の付人でございますよ」

と、いったものである。

声は安兵衛の耳にだけとどくほどの低いものだが、よそから見るとお秀の顔つきは何気ない世間話をしているように屈託もない。

安兵衛は、くだくだと語るにもおよぶまいと感じた。

お秀は、すべてを知っているらしい。

安兵衛は黙って、彼女のささやきに耳をかたむけていればよかった。

お秀によると——ふた月ほど前のことだが、吉良上野介の中小姓をつとめる加藤太左衛門という老人のために玉やから舟を出したのがきっかけとなり、それからは吉良屋敷のものが、よく顔を見せるようになったという。

用事のための舟を出すことはもちろん、玉やを利用して数人ずつが入れ替り立ち替りして、ささやかな酒宴をするらしい。

それも夜ではなく日中にかぎられてい、日暮れまでには必ず帰ってゆくそうな。

これは、赤穂浪士が日中に襲撃することはないと見きわめをつけているからだし、またする筈もない。

安兵衛たちも、吉良邸討入りは丑の刻（午前二時から三時）ごろときめてあるし、これは兵法の常識でもある。

だから、たまさかには吉良邸の人びとも交替で日中の息ぬきをするものと見える。

今日、玉やへ入った四人のうち、中年の精悍な男は上野介の用人をつとめる清水一学というもので、あとの三人は、上杉家から派遣をされた付人だ、と、お秀は語った。

「吉良の家来衆は別にして、上杉からまわった付人たちは、およそ……」

と、指を折って考えながら、

「およそ二十名ほどではないかと思いまする」

「二十名、な」

「私が、ぬすみぎいたところによると、この夏から秋にかけるころは付人の数もふえていたようでございますが……近ごろでは、どことなく安堵の様子も見え、おそらく浪士たちの討入りはあるまい、などといい出すものもおりまするようで」

「ふむ……」

同志たちのすべてが江戸へ集結していることは、相手にわかっていないらしい。

「なれど、安兵衛さまなどが本所に住むことを、吉良方では知っておりまする」

しかし、いまだに執念ぶかく吉良邸のまわりをうろつく赤穂浪士たちについては、

「彼らのみにては手出しもなるまい」

と、玉やへあらわれた付人たちが語り合っていたこともあるらしいが、一方では吉良上野介が上杉家にかくまわれる手筈も進んでいるらしいのだ。

「お秀どの。ありがたい。おかげをもっていろいろと相わかった」

知らず安兵衛の言葉が丁重なものとなったので、お秀は笑い出した。

「何がおかしいの？」

「いいえ、別に……」

話をそらし、お秀は立ちあがって、

「又十郎が帰ってまいるそうで」

「そうか」

「雲州・松江から、先ごろに便りがございまして、自分も若くはなくなったことだし、ようやくおだやかに暮らす気になった、と申しますのも、前々からの仲間も死んだり捕えられたり諸方へ散ったりして、他国での仕事もむずかしゅうなったのでございましょう」

「それはよかった」

また新たな客が入ってきたので、二人は別れることにした。

お秀の名は出さなかったけれども、安兵衛の報告によって吉良邸内付人の状態もおよそつかめた。相手方の戦闘員と、その力を知ることを得たので、討入りの準備は急速度をもってすすめられ、十一月も終るころには、

「もはや、いつにてもよい」

ということになったのである。

ただ吉良上野介の所在を、うまくつかむことが大切であった。

吉良は外桜田の上杉屋敷へよく出かけてゆき、滞在もするし、本所へ帰ってからも茶の湯の会をもよおしたりして泊りこむ客などもあるらしい。

また絶対に夜中の外出はせぬし、日中に駕籠で出かけるときも供回りは厳重をきわめているし、浪士たちも白昼に、この行列へ斬りこむわけにもゆかぬ。

中には、

「ええ、もはや我慢ならぬ。行列へ斬り込もう」

という者もいたが、

「それでは只の喧嘩さわぎとなる。このたびのことは単に主君のうらみをはらせばよいというものでなきことは方々も御承知の筈ではないか。上野介殿を討つことによって天下政道へ物申すためには、あくまでも天下からうしろゆびを指されるようなことがあってはならぬ。ここまで共に歩みをそろえてまいったからには内蔵助の指図にしたがっていただきたい」

大石内蔵助は厳然といましめた。

事情はともあれ、内蔵助が江戸へ出てきたころには五十数名いた同志のうち、十一月末には五十人となり、十二月へ入ると二人が脱落し四十八人となった。

さらに十二月十日ごろ、安兵衛とも気が合い人格もしっかりしていた毛利小平太が姿を消してしまった。

こうなると、脱落した数名の口から討入計画が外へもれることも考慮しなくてはならぬ。

浪士たちは、あせりはじめた。

大石内蔵助はじめ浪士たちの意向は、十二月十四日決行ということにしぼられていた。

このまま年を越してしまえば、また、だらだらと機会をつかみそこねよう。

同志たちの結合も、いまが頂点に達したところで、ここが限度だといえる。

十四日は故浅野内匠頭が去年三月、刃傷におよんだ日であり、したがって、その命日でもある。

「ともあれ、十四日を目ざすことにいたそう」

と、内蔵助がいい、これは十一月下旬のころから、翌月十四日決行と一応は決っていたものだ。

そこで問題は、その十四日に吉良上野介が本所に在邸するか否か、であった。

それについて、以前には思いもかけなかった協力者があらわれたのである。

その一人は、京橋三十間堀の富商・中島五郎作（ごろさく）という町人で、この人は内蔵助と前々からの知り合いで、堀部弥兵衛私記には、

「中島五郎作こと大石氏学友にて……」

とあるから、町人ながら、かなりの知識人であったことがわかる。

いま一人は、羽倉斉という人物で、もと京都の妙法院宮につかえたこともあって、内蔵助とは旧知の間柄であった。

この羽倉は神職（社家）の出でもあり、神道、歌道を通し、吉良邸へも出入りをしていて、

「上野介にも会ったことがあるけれども、あまりに世上の評判がよろしくないので、自分も気がすすまなくなり、あまり本所の屋敷へはいかぬことにしているが、吉良の家老で松原多仲という者が歌道の弟子であるから、折節、多仲は自分をたずねてくる」

と、羽倉はいっている。

さらに、江戸へきてからの羽倉は、中島五郎作の世話をうけ、住居も提供されていた。

内蔵助は羽倉斉に対し、別にあらたまって大事をうちあけたわけではないが、羽倉のほうでは頓着なく堀部父子その他の同志との交際をふかめ、同志も羽倉の人柄を信頼している。

羽倉は自分の立場を利用し、十二月に入ってからは、また吉良邸へも出入りしはじめ偵察の役をつとめてくれた。

中島五郎作も、だまっていたわけではない。

五郎作の茶道の師は、四方庵宗遍という茶人で、この四方庵が吉良上野介に可愛いがられており、五郎作も四方庵につき従い、吉良邸へ出入りするようになった。

この二人の指示によって、赤穂浪士が手に入れた吉良邸絵図面はこまかく修正され、充実したものとなったわけだ。その絵図面を見ながら、予想された相手方の戦闘力を安兵衛たちは何度も検討した。

大高源五を四方庵に入門させたのも中島五郎作の手引きによるものである。むろん四方庵は大高源五が赤穂浪人であることを知らなかった。

十二月三日——。

大高源五が四方庵へ稽古に出たとき、

「次は六日の朝、参上いたします」

いうと、四方庵宗遍が、

「いや、六日は吉良様で朝の茶会があるので……」

と、こたえた。

大高は雀躍して戻り、報告するや、大石内蔵助は、即座に、

「それがまことなれば、十四日を待たず五日夜に討ち入ろう。なれど念を入れて尚もたしかめよ」

と命じた。

だが、結局、討入り決行日は延期されたのである。

その理由については種々の説があるけれども、その当日、将軍・綱吉が松平右京太夫邸へおもむくことがわかったので、

「将軍家御成日とあらば、決行を遠慮いたそう」

内蔵助が断を下したというのが、真相のようだ。そのため若い同志の中には、

「大石殿の肚は、まだきまっておらぬのではないか」

と、怒り出した者もいたらしい。

どちらにしても年内には決行ということなのだからと、大高源五が十日になって四方庵へおもむき、

「事情あって、近いうちに上方へ参ることになりました」

思いきって切り出してみると四方庵が、

「それはそれは残念なこと。折角にお近づきになれましたものをな」

「はい。お名残り惜しゅう存じます」

「で、いつごろ江戸を発たれる？」

「来春早々の心づもりにございますが、その前に一度、ぜひとも参上いたし、お別れの茶を……」

「いや、わしものぞむところではあるが、ここ数日は諸方の茶事へ顔を出さねばならず……左様、十四日。十四日には、また吉良上野介様の御会日がありましてな、それがすめば、ゆるゆるとお目にかかれましょう」

「心得ました」

何気なく辞去したが、二度目の機会をさぐりとった大高源五だけに、内蔵助の前にあらわれたとき、顔色が変っていた。

例によって、内蔵助は、

「念を入れよ」

と命じたので、それからは一同、血まなこになった。

すると、本所・林町の安兵衛浪宅へ同居している横川勘平が、

「吉良の茶会は十四日に間違いありませぬぞ」

と、知らせてきた。

横川は、三島小一郎と名を変えていたが、浪宅から程近い亀戸村の羅漢寺の住職・松雲と親しくなっていた。

この松雲和尚も茶の湯をたしなみ、吉良屋敷へまねかれていくことが多い。

大高源五の報告があった翌朝、横川勘平が羅漢寺へ出向き、それとなくさぐりを入れるつもりでいたが、和尚は、

「これは三島どの、ちょうどよいときにお見え下された。ひとつ、御自慢の筆をもって返事をしたためていただけぬか」

いきなり、いい出したものである。

横川勘平は、もと五両三人扶持という軽い身分のものだが、前にのべた浅野家の消防隊では何度も目ざましいはたらきをし、故内匠頭も目をかけていたほどだし、書もすぐれている。

だから羅漢寺へ遊びにくるたび、松雲和尚の代筆をしてやったものだ。

「実はな、先刻、吉良殿から御状がきたので、返書を差しあげねばと思うていたところでござるよ」

「どれ、拝見」

吉良からの手紙は家老・松原多仲の代筆で、内容は次のごとくだ。

「主人こと近々、麻布の御屋敷へ引き移られるにつききたる十四日に当屋敷お名残りの茶会をひらかれるにつき、僧門の方々も多く見えられるので、貴僧もぜひぜひ御来会あって御饗応の御とりもちをしていただきたい」

麻布の屋敷というのは、上杉家の中屋敷にちがいない。そこへ引き移るというのは、上杉十五万石が吉良上野介を引き取ろうというのか……。

返書をしたためる横川勘平の指は、ふるえていた。どうせ帰り道であるから、この返書を吉良さまへおとどけ申そう、といい、恐縮する和尚に、

「何の、御遠慮無用」

返書をとどけるついでに、邸内の様子もさぐってきたらしい。

十四日の茶会、吉良の在邸。大高と横川の報告は、ぴたりと一致をした。

次いで十二日になると、羽倉斉からも『十四日に間違いなし』と知らせてきたのだが、

「こなたの仕度はととのうている。今夜にても討入ることができるのであるから、十四日当日まで尚も念を入れよ」

大石内蔵助の粘り方と慎重さには、安兵衛も、

「いまさらにおどろくこともないといえようが、大石様のなされ方は生身の人のものではないように思えてきた」

と、細井広沢へもらしている。

それで、大高源五は十四日の早朝に、また四方庵を訪問し、

「明日まいる筈にございましたが、今日は少々ひまができましたので、ちょっと寄って見ました。この竹を自在にこしらえたいと思いますが、いかがでございましょうか」

と、持参の竹を見せた。

すると四方庵が、

「結構に思うが、実は吉良様から早目にきてほしいといわれておるので、いまも供の仕度にかかっているところゆえ、やはり御約束通り、明日の昼すぎからおこし願いたい」

と、いう。

この大高の報告で、米屋になっていた前原伊助などが、ひそかに吉良邸門前をうかがっていると、やがて四方庵宗遍がきて邸内へ入っていった。

「もはや大丈夫」

はじめて大石内蔵助がいった。

堀部安兵衛は、すでに、しかるべき人びとにはそれとなく別れを告げておいた。

林光寺の道山和尚・稲生七郎右衛門・亡き菅野六郎左衛門の未亡人・宇乃をはじめ、義兄・町田新五左衛門、姉のさち、お秀、堀内源左衛門、そして弟・弥太郎の成長した姿を蔭ながら見とどけたし、坂本の善養寺にある伊佐子の墓へも別れを告げた。

吉良邸討入

去年、あの事件によって赤穂の浅野家が取りつぶされた後、大石内蔵助の手もとに残った公金は、六百五十両余であった。

内蔵助は、これをあずかり、

「大学様によって御家再興が成ったるとき御わたし申そう」

そのつもりでいた。

けれども、その希望が消え、いよいよ討入りの一途を目ざすことになったので、この金をそのための軍費に支出することにした。

明細はのべるにもおよぶまい。

支出の内容は次のごとくだ。

一、主家再興運動資金
一、寺院への寄付
一、同志往来のための旅費
一、同志への救助
一、会議費
一、江戸仮寓の同志への費用
一、商人への謝礼
一、武器の購入——その他

そして、帳尻を合せると不足金が七両ほど出た。

これを内蔵助は自分の金をもって当て、その明細帳と共に、亡き内匠頭の未亡人・瑤泉院へ送りとどけている。

しかも、支出の用途をいちいちあきらかにし、数十におよぶ請取書までそえてあったという。

さて、討入りの日も迫ったので、内蔵助は同志一同の趣意書をつくった。

先ず「浅野内匠頭家来口上」とあり、その中に、「君父の讐は共に天を戴くべからず」の語がある。

これは中国の古典・礼記の中の『父の讐は……』とあるのを『君』の一字だけつけ加えて書いたものなのだが、

「そうした古語を、われらが勝手に変えてよいものか、どうか……後で物笑いになっては恥ずかしいことだが……」

と内蔵助がいい出した。

趣意書の文章をつくるために協力をした堀部弥兵衛が、はっとして、

「これは……御念の入ったること、おそれ入り申した」

「いかがあろう、弥兵衛殿」

「されば――」

弥兵衛はにこりとして、

「よきか悪しか、早速にあらためていただき申そう」

「だれにな？」
「うっての御仁がござる」
「細井広沢殿であろう」
「御明察」
内蔵助も江戸へきてから、何度も広沢に会い、心をゆるしていた。
安兵衛は、これをきき、すぐに広沢を訪問し、
「いかがなものでござろう」
「少しも差しつかえはあるまいよ」
「左様か」
「御一同が大事を決行なさるというに、一つや二つの文字にこだわることはないと思う」
「広沢殿が左様に申されるならば、みなみな大安心でござる」
「ときに……」
いいさして、細井広沢が酒を、安兵衛の大盃へなみなみとそそぎ入れ、
「いよいよ、別れのときも迫ったようだな、おれとおぬしの……」
「いかにも……」
「伊佐子どのの墓に詣ってこられたかな？」
「はあ」
あのとき、伊佐子が死んでいなければ彼女と夫婦になった安兵衛はおそらく細川越中守の家来

となっていたろう。

それを思うと、さすがに或る感慨もわいてくる。

「いつか、おぬしにきいたことがあった」

「何を、で？」

「ほれ、おぬしが少年のころに新発田城下で出会うた山伏の言葉さ」

「おお……」

久しぶりに、安兵衛は思い出した。あれは、父とおなよの密会をはじめて知った夜の翌朝であった。

諏訪神社の裏道で、あの山伏はすれ違った十四歳の安兵衛をよびとめ、

「剣をとって進むとき、安兵衛どのは短命であろう。二十を越える前に一度、そのとき生き長らえたときは、二十をこえ三十にならぬ間に死を迎えよう」

といった。

二十をこえ三十にならぬ間に……というのは、ぴたりと、あの高田の馬場での中津川祐見との決闘にむすびつくわけだ。

あのとき山伏は、さらに言葉をつけ加えようとしてやめ、

「剣術はおやめなされ」

と、いったものだ。

あのとき、山伏がいいかけたことは、

「もしも尚、生き長らえたときは三十をこえ四十にならぬ間に、かならず死を迎えよう」

と、いうことではなかったか……。

「なるほど、ふむ、なるほど……」

安兵衛は微笑しつつ、しきりにうなずく。

死は確実に、目の前にあった。討入りで戦死。たとえ生き残っても、幕府のさばきを受け死を命ぜられることは必定であった。

「首尾よく吉良の首を討ったるとき、天下は双手をあげて赤穂浪士へ喝采を送り、ほめたたえるであろう」

と、細井広沢は前に断言をしたことがある。

「なれど浪士たちは死をまぬがれまい。なぜならば、幕府はそのときこそ去年の失敗を取り返そうとするからだ」

つまり、今度こそは「喧嘩両成敗」の法を間違いなく適用するというのである。

浪士には死を命じ、

「おそらく吉良家は取りつぶしとなろう」

と、これは広沢が安兵衛に洩らしたのではなく、妻女にいった言葉だ。

「さて……」

ややあって、広沢が安兵衛にいった。

「このとき、もしも、わしにすることがあれば遠慮なく申しつけてくれぬか」

「もはや、ありませぬ」

元禄十五年（一七〇二年）十二月十四日――討入決行の当日となった。

この日は現代の一月二十日にあたる。

前日来の大雪も当日の昼近くにはやみ、細井広沢は妻女に、

「所用あって出かけるが、夕飯の仕度はよろしい」

と、いいおき、夕暮れ近くなってから深川の家を出た。

前夜に、雪の中を堀部安兵衛が来訪し、

「明日、出立前におやじどのの家で一献差しあげたいと存ずる。ぜひにもおこし願いたい」

あわただしく、いいおいて帰った。

安兵衛も明日をひかえて多忙らしく、玄関で立話をしたのみである。

広沢は途中で生卵を三十個ほど買い求め、これを真新しい笊に入れて矢ノ倉の堀部弥兵衛宅へおもむいたのである。

「よくこそ――」

安兵衛が飛び出してきて、

「大石様が、待ちかねてござる」

「内蔵助殿もここにか」

「これまでの、広沢殿のお心入れに対し、あらためて御礼を申しのべたいといわれましてな」

「何の……わしが何をしたというのだ」

弥兵衛の居間には、石町の旅宿・小山や方にいた大石内蔵助・主税の父子をはじめ、小野寺十内、早水藤左衛門など六名が到着しており、

「これは、これは」

広沢とは顔を合せるのが初めての大石内蔵助は、かたちをあらため、ゆるやかに両手をつき、

「これまでのお心入れ、かたじけのう存じまする」

頭を下げた。

細井広沢も無駄なことはいわぬ。

「目出度う、本望をとげられまするよう」

と、礼を返す。

「さ、広沢殿も見えられた。早う酒を、酒を……」

いさみたつ弥兵衛の声に、老妻の若や安兵衛の妻・幸が台所へ入った。

「安兵衛殿、これを……」

広沢が笊に盛られた卵を出すと、

「ありがたく頂戴」

安兵衛は押しいただくようにして、台所へ去ったが、やがて大きな鉢と共に卵を持ち、部屋へ戻ってきた。

「どうしたのじゃ？」

と、弥兵衛。

「いえ、この鉢へ割り入れよと、女房どのが指図にござる」
こたえて安兵衛は、鶏卵の一つ一つをとり、
「広沢殿」
「うむ」
「手向う敵は、このように……」
ピシリと割っては鉢へ割り入れてゆく。
その後の、お秀からの情報によると、吉良を守る武士は、上杉家からの付人二十名のほかに、名も知れぬ浪人たちを七名ほど雇い入れていることがわかった。それに吉良の家来たちも加われば相当の人数になり、その抵抗ぶりも強烈なものと見なくてはならぬ。
赤穂浪士は四十七名であるが、これらのすべてを吉良邸の屋内へ突入させるわけにはゆかなかった。
何よりも吉良上野介を逃がしてはならないのだから、屋外のすべてをかため、表裏の両門にも見張りの人数を配置しておかねばならぬ。
安兵衛や奥田孫太夫などが中心となって何度も検討がなされ、結局、討入りは表裏両門の二手に別れることとなった。
部署は次のごとくである。

東組（表門）

（屋内に入って闘うもの）
片岡源五右衛門、奥田孫太夫、富森助右衛門、武林唯七、矢田五郎左衛門、岡島八十右衛門、勝田新左衛門、吉田沢右衛門、小野寺幸右衛門。
（屋外で闘うもの）
早水藤左衛門、大高源五、神崎与五郎、近松勘六、矢頭右衛門七、間十次郎。
（司令部――表門内）
大石内蔵助、原惣右衛門、間瀬久太夫。
（表門・新門をかためるもの）
堀部弥兵衛、村松喜兵衛、岡野金右衛門、貝賀弥左衛門、横川勘平。
西組（裏門）
（屋内）
堀部安兵衛、磯貝十郎左衛門、杉野十平次、大石瀬左衛門、赤垣源蔵、倉橋伝助、菅谷半之丞、村松三太夫、三村次郎左衛門、寺坂吉右衛門。
（屋外）
大石主税、潮田又之丞、中村勘助、奥田貞右衛門、間瀬孫九郎、千馬三郎兵衛、茅野和助、間新六、木村岡右衛門、不破数右衛門、前原伊助。
（司令部裏門）
吉田忠左衛門、小野寺十内、間喜兵衛。

いうまでもなく、この配置の中で屋内へ突入するものが、もっとも激烈な戦闘を受け持つわけであった。

だから、安兵衛や孫太夫をはじめ、同志の中でも選りすぐった手錬の闘士たちを、これに当てている。

安兵衛が、この配置を細井広沢に洩らすと、

「これは一度、堀内先生にも聞いていただいたらどうかな」

広沢はいった。

堀内源左衛門ならば、すべてを打ちあけてある。安兵衛は、奥田孫太夫と共に堀内道場を久しぶりで訪問した。

「よかろう」

堀内源左衛門は、大きくうなずき、

「作戦はきいた。ときに両人」

「はい」

「このようなものを、こしらえてみたが、どうじゃ」

みずから立って、長さ六尺余におよぶ細長い木箱を二つ持ち出してきた。

木箱の中には異様な武器がおさめられてあった。

一見、長刀のように見える。

四尺余の柄に二尺四寸ほどの刀身をつけたもので、大きな鉄の鍔が、はめこまれていた。
「これは……」
安兵衛と孫太夫が顔を見合せると、
「屋内での闘いには、このような得物がよいと思う。もし、よければと思い、わしがおぬしたちのためにこしらえて見たのだが、つかうもつかわぬも、それは、そちらの勝手次第」
淡々と堀内はいう。
二人は感動した。
手にとって見ると、
「むゥ……」
「なるほど……」
二人とも、感嘆の声をあげざるを得なかった。
刀にも、なぎなたにも使用できるし、四尺の柄の根元は鋭い鉄のこじりになっており、刃で斬り、こじりで突くという二面のはたらきをそなえている上に、振ってみると、いかにも屋内での戦闘に便利であった。
「どうじゃ」
「ありがたく頂戴つかまつります」
「そうか。それはうれしい」
別れるときも堀内源左衛門は水のように、

「ではな……」

あっさりと言葉をかけたのみである。

そのときのはなしが、今日も出た。

二人の、その武器は、すでに林町の安兵衛浪宅へはこび込んである。

「これまでに、安兵衛殿の肝もさぞ煎り返ったことであろうが……ようも辛抱をしてくれた」

内蔵助は、しみじみといった。

内蔵助も、急進派の主脳であった安兵衛を操縦するためには、ずいぶんと神経をつかっていたらしい。

やがて、台所から熱い汁がはこばれてきた。

汁は鴨の肉と菜を入れたものでいわゆる名とりの吸物といい、今日の討入りを祝う意味がこめられている。

それに搗栗、昆布などもはこばれ、酒が出た。

外は、すでに暗い。

そこへ、奥田孫太夫や吉田忠左衛門などもあらわれ、腹の空いた若い同志たちは、熱い飯に、広沢が持ってきた生卵をかけて食べた。

鉢の中の卵には、わずかに味がつけられ、焼きあげて小さく切った鴨の肉も入っていたようである。

亥の上刻（午後十時）になると、大石内蔵助が、

「広沢先生。まだ、いささか用意も残っておりますれば、それがしは、これにて失礼をさせていただきまする」

と、挨拶をした。

今夜、四十七名が集合する場処は、いずれも本所にある同志の家で、林町の安兵衛宅。徳右衛門町の杉野十平次宅。相生町の前原伊助宅の三か処であった。

赤穂浪士討入りの装束は、頭巾、小袖、など、およそ火消役人の体にきめてあり、もし途中で何者か、と問いかけられたときは、

「火消方役人でござる」

と、こたえる申し合せにしてあった。

これも消防に熱心だった故内匠頭をしのんだものであろうか——。

堀部安兵衛の服装は——。

白地に萠黄大筋入りの下着。黒の小袖（紅裏つき）に黒羽織。籠手脚当をつけ兜頭巾をかぶり、大小を帯した上に、あの堀内源左衛門より贈られた大太刀を提げた。

三か処に集合した浪士たちが合流し、吉良屋敷の表・裏の両門から打ちこんだのは、十五日の午前二時ともいうし、四時ごろともいう。おそらく後者であろう。

皎々として、月が頭上にあった。

したがって提灯も松明も不要となり、氷りついた雪と月の光が、吉良屋敷をはっきりと浮き上らせており、

「吉兆、吉兆……」

と、堀部弥兵衛が安兵衛をかえり見て、

「ようやくに漕ぎつけたのう」

「いかにも」

「おぬしのはたらきぶりを見たく思うが、それもならぬ」

といったのは、二人の部署もちが、東組西組に別れて打ちこむことになっていたからである。

裏門へまわった西組二十四名は、ただちに杉野十平次と三村次郎左衛門が、用意の大槌をふるって門を打ち破った。

うわあ……。

と、表門から打ちこんだ同志たちの喊声に合せて、

「それっ！」

それぞれの部署に別れて展開するや、こちらもおめき声をあげて突入した。

裏門の番所からあらわれた吉良の家来三名は、間新六と奥田貞右衛門が走り寄って、たちまちに斬り伏せる。

それを、ちらりと眼の中へ入れつつ、安兵衛は杉野の大槌に破られた小台所口から屋内へ飛びこんだ。

ひろく暗い土間の向うの廊下のどこかで、女の悲鳴がきこえた。

戸外とちがい、屋内の闇は濃かった。

「あわてるな」

安兵衛は屋内組の九名に声をかけ、ゆっくりと進んだ。

と……。

台所の向うの家来専用の湯殿のあたりから人影が一つ走り出て何処かへ逃げようとするのが見えた。

「待て！」

磯貝十郎左衛門が飛びかかって捕えると、

「お、お助けを」

小者らしい中年男で、頭を板敷へすりつけ、ひどくふるえている。

「何もせぬ。そのかわり手伝うてくれい」

小者に「ろうそく」を出させ、屋内の諸方に灯を点じた磯貝のはたらきは後世にうたわれるものとなったわけだが……。

すでに安兵衛は台所から奥御殿の一角へふみこんでいた。

前方の闇に、きらり刃が光った。

「おのおの」

同志たちに声を投げかけておいて安兵衛は猛然と突き進んだ。

吉良上野介屋敷の規模は、敷地坪数・二千五百五十坪、建家坪数が家来たちの長屋をふくめて千二百余坪という宏大なものであった。

前日の茶会は申の刻（午後四時）にはじまり戌の下刻（午後九時）に終ったといわれる。庭の積雪と月と……茶会は何時か雪見の宴とかわり江戸中の名だたる茶人たちが続々と参集して、上野介も久しぶりのはなやかな宴に満足であったらしい。

客が帰った後も、家来一同に酒肴が出されたようである。

だからといって吉良方の抵抗が弱まったかというと、そうではない。

家来と付人と合せ、赤穂浪士たちと同じほどの人数が迎え撃ったのである。

後に、上杉家から公儀に届出た吉良方の戦死者は十六名、負傷者は二十名となっているが、これらはいずれも身もとがはっきりしている人たちで、その他に雇い入れた浪人七、八名がいたようだ。

となると、少くみても四十二、三名の戦闘員が吉良方にもいたわけである。

しかし、すでにのべたように屋内へ斬りこむ浪士たちは東西合せて十九名であり、はじめのうちは敵の反撃に喰いとめられ、むしろ苦戦であった。

この中で奥田孫太夫（表）と堀部安兵衛（裏）が敵のうちでも（これは――）と思うほどのものを一手に引きうけて奮戦した。

その間隙を縫うようにして、浪士たちは少しずつ奥へ突き進んだのである。

邸内は、怒号と悲鳴にみち、争闘の物音が、ことに屋内ではすさまじい響きとなって闇の中にわき起っている。

そのうちに、屋外の浪士たちが外側から雨戸を破り縁側や外廊下へ飛び出してくる敵へ打ちか

かった。

月光が雪の反射をともない、白く屋内へも流れこんだ。

安兵衛は、廊下から室内へ、そして縁側へと大きな躰を自在にあやつり、自分へ集中する数人の敵を相手に闘った。

たしかに、大太刀はつかいよかった。

せまい室内では柄を短くにぎって闘い、ひろいところへ出れば、とっさに柄をのばして薙ぎ払うことができる。

「む！」

と、腹の底からひびき出るような安兵衛の気合が起るたびに、敵の悲鳴があがった。

上杉からの付人・山吉新八は、吉良上野介の寝所に近い宿直部屋に眠っていたが、赤穂浪士の討入りと知って、それでも、すばやく袴をつけ、暗い大廊下へ走り出た。

どこかで、

「火事だ！」

叫ぶ声がする。

それが敵のものか味方のものか、わからなかった。

付人たちが数人、抜刀して大廊下へあらわれ、その中から、付人の頭領ともいうべき小林平八郎が、

「山吉、ここでふせげ。われらは殿様を……」

いい捨てて、三人ほどを従え、上野介の寝所の方へ走り去るのを新八は見た。山吉は、まさに細井広沢が推察した通りの若者であった。

父の兼定は上杉家の臣で、新八は次男に生まれ、家は兄の忠兵衛がついでいる。

山吉家では、父子兄弟みな和気藹々とした暮らしぶりで、新八も厄介者の悲哀を味わうこともなく、父も兄も、

「行先のことなど心配せずとも、今のうちに文武の道にはげんでおけ」

あたたかくいってくれたし、新八は藩の指南役・添田伝五郎に好きな剣術をまなんで、二十歳の夏に一刀流の免許を得た。この間に、彼は米沢と江戸の間を何度も往復している。

高田の馬場に近い放生寺裏に住む羽黒山の修験者で観妙院竜海というのが山吉家の遠縁にあたっており、この竜海に新八は可愛いがられていたので、十七歳から二十三歳ごろまでは、ひまがあると江戸見物へ出かけたものだし、時によっては半年も竜海のもとで暮らしたことがある。

だから新八が、高田の馬場の決闘を終えて引きあげてくる堀部安兵衛を見たことは嘘ではなかった。

こうして、二十五歳までは、のんびりと日を送っていた山吉新八に、突然〔御用〕をおおせつけられたのはほかでもない。

藩主・上杉綱憲が、実父の吉良上野介の身を心配して、ひそかに付人を送って警護にあたらしめることになったからだ。

はじめ、上杉から吉良邸へ派遣された付人は十五名であったが、のち七名の増員があり、さら

に浪人七名を雇い入れたものである。

この中で、新八のような若者たちは、いずれも家中の次男、三男にかぎられている。

「われわれのような次・三男でも殿さまの御役にたつことができる。この御役目を果して国もとへ帰れば、きっと御取立になるそうだぞ」

「よし。赤穂の浪人どもなど、一歩もふみこませるものか」

と、気負うものもあるし、

「なに、御公儀のおさばきあって浅野家はつぶれたのだ。その御公儀にさからってまで主君の仇を討つなぞと、いまどき、そのようなばかなまねはすまいよ」

と、いうものもある。

しかし新八は、米沢を出発するに際して、父の兼定から、

「浪士の討入りはあるやも知れず、なきやも知れぬ。人の世のことは先のことなどわかるものではない。ともあれ、お前は御役目大切につとめることを考えよ」

と、教えられた通り、江戸へきて吉良邸に詰めるようになってから、まじめに警衛の役目を果してきた。

しかし、新八は、安兵衛の姿を吉良屋敷の近くで、たびたび見かけるようになってから、

（きっと討入ってくるにちがいない）

思いきわめていた。それは付人たちも知っていることで、問題は敵の人数なのである。

「なに、二十人とはおるまい。おそらく十四、五名の赤穂浪士が当屋敷を狙うているのみであ

ろう」

というのが、みなの一致した意見であった。

そして十一月も末ごろになると、上杉綱憲の幕府へ対しての運動が効を奏したものか、吉良上野介が上杉家へ引き取られるというわさが付人たちの間にささやかれるようになった。

山吉新八にとっては、それが、どの程度の信憑性をもったうわさなのか、よくわからない。だが、上野介の様子にも明るいものが見えはじめたし、十二月十四日の茶会が、この屋敷における名残り茶会だと招待状のいくつかにしたためられたことは、たしかなのである。

そこへ、討入ってきた。

新八は、吉良の中小姓・堀江勘右衛門や杉山三右衛門などと共に、上野介寝所近くの廊下で浪士たちを迎え撃った。

（この敵の中に、堀部安兵衛殿もいる）

夢中で闘いつつ、新八は一個の剣士として、

（堀部殿に出会うてみたい）

と、のぞんだ。

板戸や襖を倒して、敵の侵入をふせぎ、斬って出ては、物かげへ引きあげ、手当り次第に火鉢や品物を投げつけ、さらにまた斬りこむという防禦を新八たちは何度もくり返した。

押しこんでくる浪士たちの喊声は次第に量感を増し、彼らの声が屋敷内をひろがってゆくのを新八は、はっきりと知った。

後でわかったことだが、こちらで雇い入れた浪人たちのほとんどは、かなわぬとみて逃亡してしまったらしい。

中庭と外庭の境の塀からも、敵はぐんぐんと奥へ入ってきた。

板戸が打破られ、月光が縁側から流れこんでくる。

新八は暗がりをえらんでは浪士たちと闘い、懸命に防いだ。

（この間に吉良様が逃げてくれることだ）

そして、

（早く上杉家からの助勢が駆けつけてくれぬことには）

と、あせり、

（急を上杉へ知らせた者がいるだろうか？……いるにちがいない！）

そのように手筈はととのえてある。

呼吸もあがり、喉がひりつくようにかわいていた。

刀をふるう我が手が自分のものとは思えなかった。

手傷もかなりうけた。

どれほどの時がすぎたろう。

山吉新八は、吉良上野介専用の湯殿わきの小部屋で、戸外から突入してきた浪士の一人と闘っていた。

新八の捨身の一刀が敵のどこかを突いたらしく、

「あっ……」

叫んで、次の間へのがれた敵を追いかけようとした新八の前に、

「出会うたな、山吉殿」

大きな黒い影が立ちはだかった。

「堀部安兵衛でござる」

「あ……」

安兵衛の、たくましい体軀からは反り血の匂いが濃厚にたちのぼっていた。何人の味方の血が、この男の剣にはねられたことか……。

「先ず、息をしずめられい」

と、安兵衛が声をかけてきた。

山吉新八は素直に頭を下げ、

「はあ」

と、こたえた。

うしろの縁側の戸は何枚も打破られてい、雪あかりの庭を浪士たりが走ってゆくのが見えた。

その中の一人が、刀をさげたまま立っている新八の背後へ駆け寄ってくるのへ、

「かまうな」

安兵衛が声をかけた。

「堀部殿か……」

「左様。ここは、おれが受けとる。吉良殿はまだ見つからぬか？」
「まだでござる」
と、その声に思わず焦りが出ていたのを新八は感じた。
（早く……早く上杉からの助勢が駆けつけてきてくれぬものか……）
闘争の響みは、いま屋内から屋外へ移動しつつあるようであった。
「山吉殿。どうなさる？」
安兵衛がきいた。
「では……」
「一騎討ち、よろしいか」
「その前に、いささか……」
「何でござる」
「すぐる日、回向院境内において、御貴殿へ、私、声をかけました」
「うむ」
「これは、何も、御貴殿に近づき赤穂方の動静をさぐりとろうとしたわけではありませぬ。私は、ただ、一人の剣士として、貴殿の御高名をうやまい、心なつかしく存じておりましたので、ついつい、声をかけてしまいました」
「うけたまわった。御丁重なあいさつにて安兵衛、いたみ入る」
「では……」

「おう……」

互いに、一歩退って太刀をかまえ合ったが、

（これは……）

安兵衛も微笑せざるを得ない。

山吉新八は、もう疲労しつくしていた。

新八は新八で、眼前に大太刀をかまえた安兵衛の巌のような体軀に圧倒され、

（この敵と勝負したいなどとは、おれの慢心であったな……もう、いかぬ。この上は、いさぎよく……）

覚悟をきめたらしい。

さっと、一間ほど後退したかと思うと、

「やあ！」

捨身の、すさまじい突きを山吉新八が入れてきた。

同時に、堀部安兵衛も躍りかかっている。

闇が激しくゆれうごき、飛び違った二人の躰が……安兵衛は縁側を蹴って庭へ、そして新八は、のめりこむように縁側から湯殿わきの小部屋の中へ飛びこんでいった。

安兵衛は庭に立って一息入れ、すぐに小部屋へ入っていった。

山吉新八は、そこに倒れていた。

斬られたのではない。

安兵衛は、新八の突きを大太刀の柄で払いのけざまその「こじり」をもって相手の急所を撃ったのである。

安兵衛は、気を失った山吉新八を抱き起し、彼を湯殿の中へはこびこんだ。

「ようもはたらかれた。もはや死ぬるにもおよぶまい」

ささやくようにいい、ぐったりと倒れ伏している新八をながめやってから、また安兵衛は身をひるがえして新たな戦闘と、吉良上野介を求めて暗い屋内へ突きすすんだ。

屋内は、すでに浪士たちのものとなっていた。

むろん上野介の寝所へも突入したが、姿は見えぬ。

だが、夜具の中には、まだ温みが残っていた。

これから懸命に邸内をさがしまわったが、なかなか発見できぬ。

堀部弥兵衛なぞは、

「逃がしたと思い、もはや、あきらめかけたほどじゃ」

と、後に洩らしている。

しかし、ついに発見をした。

夜が明ける前の、最後の捜索をおこなったとき、大台所の土間の一隅にある内炭部屋に目をとめた間十次郎が、

「この中は、まだ見てはおらぬぞ」

と、いい出したものである。

数人の浪士が集まって、戸を打ち破るや、
「わあ！」
おめき声をあげて斬って出た吉良方の武士が一人、つづいて、また一人が浪士たちにかこまれて討ちとられた。
「まだ、おりますぞ」
と、間十次郎が炭部屋の一隅へ槍を突込むと、相手は悲鳴をあげながらも無我夢中で短刀のようなものをふりまわしつつ、ひょろひょろとあらわれた。
武林唯七が、おどりかかって一太刀あびせた。
「や……」
唯七は、あわてて刀をひき、倒れ伏したその人を抱き起してみて、
「き、吉良殿らしい」
と、いった。
土間へ引き出してみて、
「まさに……」
「上野介殿にちがいなし」
「早う大石様へ知らせよ」
一同、叫び合ったものだ。
身に白小袖をつけた六十前後の老人で、年頃といい風体といい、まさに上野介にちがいないと、

誰もが直感した。

すぐに、大石内蔵助がきた。

大台所に、あかあかと灯がともされ、合図の呼笛が邸内の諸方に鳴りわたった。

内蔵助は入念に、その老人の面体をしらべた。

故内匠頭が最初に斬りつけたひたいの傷は、よくよくの薄手とみえて痕がなかったけれども、背中をあらためると、ここに二の太刀の痕が歴然としていた。

「まさに……吉良上野介殿じゃ」

内蔵助は、集結を終った同志たちを見わたしつつ、

「首尾よう、本望をとげ申したな」

さすがに、安堵の思いが内蔵助にしてはめずらしい感動をともなって、その声にあらわれていたようである。

さらに、打落した吉良上野介の首を、捕えておいた表門の番足軽に見せると、

「殿さまのお首に相違ござりませぬ」

言下に、こたえた。

吉良邸を引きあげるときの赤穂浪士は、寺坂吉右衛門の姿が消え、四十六名になっている。

寺坂吉右衛門については、種々の異説があり、逃亡説もある。だが、彼についてのべることは、この小説では不要のことであろう。

吉良上野介の首は泉岳寺へ持参し、亡き主君の墓前にそなえることは決定していたが、一応は

吉良邸近くの回向院へ入り、休息すると同時に、吉良方もしくは上杉家からの討手があれば、これを迎撃するつもりでいた。

ところが回向院では、浪士たちの門内に入ることを拒絶したので、

「では、泉岳寺へ――」

と、内蔵助が命を下した。

はじめは吉良の首を船ではこぶつもりであったが、船を手に入れることができず、仕方なく一同は隊列をととのえ、回向院前から一ツ目河岸を経て深川へ入り、永代橋をわたり、鉄砲洲の旧藩邸前をぬけ、汐留から日比谷、芝口、泉岳寺へというコースをとることになった。

細井広沢は前夜から一睡もせずに吉報を待っていたが、夜が明けたとき、深川の家の書斎の机に頭をつけ、とろとろと、まどろんだようである。

そのとき、

「旦那さま――」

妻女が飛びこんできて、

「あの門の外に堀部さまが……」

興奮の叫びをあげた。

「何――」

玄関へ飛び出そうとすると、まぎれもない安兵衛の大声が門の外から、

「広沢殿、広沢殿！」

「ああ、いま門をあけるぞ！」
「それにはおよびませぬ。おかげをもって本懐を達しましてござる」
「そ、そうか……」
「これより泉岳寺へ引きあげまするが、何よりも広沢殿へと存じ、それがし一人、隊列をぬけて駆けつけましたゆえ、もはや、これにて……」
「そうか、そうか……」
「さらば、細井広沢殿」
「おお……」
雪を蹴って駆け去る安兵衛の足音が、広沢夫妻にきこえた。
「仕度せよ。仕度、仕度」
広沢は身仕度もそこそこに安兵衛の後を追い、永代橋をわたりかけている浪士一行に追いついた。
白無垢の片袖に包んだ吉良上野介の首は間十次郎の槍の柄にくくりつけられ、この前後を四人の浪士が守り、大石内蔵助は列の先頭にあった。
弥兵衛も安兵衛も、孫太夫もいる。
あれほど物に動じない広沢が、このときばかりは取り乱して祝いの言葉もすらすらとのべられなかったようである。
細井広沢は永代橋の上で、しずかに去ってゆく浪士たちを見送った。

堀部安兵衛とは、眼と眼を見合せ、大きくうなずき合ったのみの別れであった。

浪士一行は、鉄砲洲の浅野旧藩邸前へきて、名残りを惜しんだ後、湊町へかかった。

ここに、むかしから藩邸へ出入りをしていた「とうふや」の菱屋三十郎というものが住んでいる。

菱屋の前を通りかかる一行を知って、あるじの三十郎が狂気のように飛び出してきた。

「おめでとうございます、おめでとうございます」

三十郎はよろこびの泣声をあげ、女房や奉公人を督励して湯茶や熱い「とうふ汁」をつくり、湯漬けも出して浪士たちをもてなしたという。

そのため、ここで休息の後、築地・本願寺を経て汐留橋へかかったのだが、このとき大石内蔵助は、吉田忠左衛門と富森助右衛門の両人をもって、愛宕西久保にある大目付・仙石伯耆守の屋敷へ自首せしめたのである。

こうして一行は、ぶじに高輪の泉岳寺へ到着した。

いうまでもなく泉岳寺は浅野家の菩提寺であり、ときの住職を長恩和尚という。

浪士たちが、ここへついたのは午前八時すぎであったろう。

内蔵助は、

「われらは故浅野内匠頭家来にて、今朝、亡主のかたき吉良上野介殿を討取り、引きあげてまいりました。よって吉良殿の御首を亡主墓前にそなえたし。決して当山へは御めいわくをおかけ申しませぬ」

と、寺へいいおき、香炉や抹香を借りうけ、内匠頭の墓前へ吉良の首をささげ、一同、その前に平伏した。

「方々、それぞれ亡き殿の前に名のれよ」

内蔵助にいわれ、浪士たちは墓に向って実名を名のりたてた。

このころになると、見物人が寺のまわりから境内へも入りこみ、大変なさわぎとなった。中には本所からここまで後をついてきたものもいる。

さすがに、泉岳寺のもてなしは心のこもったもので浪士たちは衆寮へまねき入れられ、じゅうぶんに休息をとることができた。

このことを泉岳寺から公儀へ届け出ると、すぐに寺社奉行から役人が駆けつけてきて、夕暮れになると、幕府からは御徒目付・石川弥一右衛門、市野新八郎、松永小四郎の三人が礼装に身をかためてあらわれ、四十六名の前で、

「おおせ渡さるる儀これあり、追つけ、仙石伯耆守様屋敷へまいるべきように」

と、申しわたした。

ために一同は、この夜、泉岳寺を出て大目付・仙石伯耆守邸へ出頭したのであるが、吉良上野介の首は翌朝になり、寺僧の一呑、石獅の二人によって本所の吉良屋敷へとどけられた。

吉良邸には、上野介の子・左兵衛義周がいる。

吉良の長男三郎は上杉家へ養子に入り上杉綱憲となったので、上野介は綱憲の二男でもあり、自分の孫でもある左兵衛を養子に迎え、吉良家をつがせたわけだ。

この若者は、浪士の討入りと知ったとき、敢然、長刀(なぎなた)をとって闘ったが、武林唯七の一刀をうけて昏倒し翌朝になって、救助に駆けつけた上杉家の人びとによって介抱をうけた。

ところで……。

浪士討入りの急変を真先(まっさき)に上杉屋敷へ知らせたものは、吉良邸近くの〔とうふや〕であったという。

ときに七半刻というから十五日の午前五時すぎで、浪士たちはまだ引きあげてはいない。

つづいて、吉良の家来・丸山清右衛門が駆けこみ、急を報じた。

〔上杉家年譜〕によれば……この凶変をきいた上杉綱憲は大いにおどろき、ただちに救援の一隊をさし向けようとしたが、吉良と同じ高家衆で上杉家とも関係のふかい畠山下総守が桜田の上杉屋敷へ駆けつけてき、

「いまこのとき、こなたから討手を出して騒動になれば、将軍家に対しておそれ多し。浪士どもは、他日、大公儀によって成敗をうけること必定でござれば、何とぞ、おとどまり下されたい」

必死にとどめた。

上杉綱憲としては、このまま手をつかねていれば実父・吉良への孝道がすたり、それかといって討手をくり出せば公道にそむくというわけであった。

綱憲個人としては、みずから陣頭にたって本所へ駆け向いたいのは山々であったろう。

けれども、いまの彼は上杉十五万石の当主である。

ここで、むやみなことをしたら、あの浅野内匠頭の二の舞にもなりかねない。

ついに、思いとどまった。

また畠山ばかりではなく、上杉家の江戸家老・色部安長が断固として、この養子の主君をいさめ、一歩も退かなかったらしい。

浪士たちが引きあげた後に、上杉家から人数がくり出し、後始末に当った。

そして山吉新八も介抱をうけ、一時は死ぬ一歩前までいったが奇蹟的に蘇生した。

幕府は評議をかさねた結果、四十六名の赤穂浪士を四人の大名へあずけることにした。

今度は慎重であった。

去年の事件では、その日のうちに内匠頭へ切腹を命じた将軍・綱吉も、浪士の討ち入りがあったときいて、

「あっぱれ忠義のものどもではある」

と感激したというから、このように気まぐれな将軍の独裁に支配されていた当時の国民の不満や怒りは、そのまま大石内蔵助以下の浪士たちが内蔵する天下政道への怒りであったといってもよかろう。

ここで四大名へあずけられた浪士たちの割当てを記しておこう。

肥後熊本城主・細川越中守（大石内蔵助、吉田忠左衛門以下十七名）

伊予松山城主・松平隠岐守（大石主税、堀部安兵衛以下十名）

長門長府城主・毛利甲斐守（吉田沢右衛門以下十名）

三河岡崎城主・水野監物（間瀬孫九郎以下九名）
かくて十五日夜のうちに、浪士たちはそれぞれの大名家へ引き取られていった。

一期

愛宕・西久保にある大目付仙石伯耆守屋敷に待機をしていた赤穂浪士が、四大名がさしむけた護送の家来たちに引取られていったのは、この夜の十一時前後であったと思われる。
すでに、四組に分けられた浪士たちは大広間で、主人の仙石伯耆守から親しげなもてなしをうけてい、伯耆守は職務上の調べが終ったあとでは、しきりに討入り当夜の模様をききたがった。
灯もあかるい。
諸方に置かれた大火鉢には赤々と炭が燃えていた。
安兵衛は松平家へあずけられる十名の中にいて大石主税のうしろにひかえていたが、畳一帖をへだてた右手の列には、細川家へあずけられる十七名が並んでおり、堀部弥兵衛は安兵衛の座と並行したところにすわっている。
弥兵衛は七十七歳になる。
さすがに疲れが浮いて見えたし、この剛毅な老父が懸命に気を張り、失態を見せまいとしているのが安兵衛にはよくわかった。
「父上……父上……」

安兵衛は低く声をかけてみた。
いま、上座にある仙石伯耆守の前へ大石内蔵助が出て、質問にこたえているところであった。
「父上……」
「うむ？」
弥兵衛は、にこりと笑ってみせた。
「おつかれでございましょう」
「何の……」
激しくくびをふって、弥兵衛が、
「いよいよ、別れじゃの」
「はい」
これ以上の会話をかわすことは、つつしまねばならぬ。
泉岳寺では、かなり長い間、語り合う時もあったのだが、安兵衛は内蔵助のそばにつききりで何かと忙がしかったし、
（まだ何か、父にいうべきことはなかったろうか……）
急に、胸がさわぎはじめた。
別れの時は、すぐそこまできている。
今夜の別れは、いうまでもなく死別を意味する。
堀部家の人となり、この父の子となってから六年。その歳月の流れを想いうかべてみて、

（よき父と家をもち、まこと幸せであったな）

弥兵衛の顔が菅野六郎左衛門にも見え、実父の中山弥次右衛門にも見えるような気がした。

このとき、上座のあたりに何人もの武士があらわれ、広間の空気が緊張にひきしめられた。

内蔵助が元の座へ戻ってきた。

いよいよ、別れのときがきたらしい。

先ず、内蔵助以下十七名をあずかる細川越中守の家来、三宅藤兵衛、鎌田軍之助など三名が大広間へ案内をされてきた。

声にならぬかすかな、それでいて重々しいどよめきのようなものが浪士たちの間におこった。

浪士たちは、互いに眼と眼を見かわし、ことに親しい者たちは、それぞれに無言の別れのあいさつを送り合った。

「細川越中守家来、三宅藤兵衛にござります」

名のった三宅に、仙石伯耆守が、

「うむ。このたびのことはよくわきまえておられよう。念を入れるまでもあるまいが、じゅうぶんにいたわりとらすように」

「ははっ」

大石内蔵助が伯耆守に向って平伏し、しずかに礼をのべてから立ち上った。

せがれの主税は熱心に父親を見つめている。

内蔵助は、この十五歳になるせがれをちらりと見てから、急に堀部安兵衛へ視線をうつしてき

た。

そのときの内蔵助の双眸の光を、安兵衛は忘れることができなかった。

その眼の色が、何も彼も物語っていた。

内蔵助は、

（少年の主税をたのむ！）

と安兵衛にいっているのである。

（せがれの死まで、せがれのことのすべてを、おぬしにたのむ）

全身の意力と父の愛をこめて内蔵助は安兵衛を凝視し、大きくうなずいてみせた。

安兵衛も、うなずき返した。

すると、内蔵助の面に微笑が波紋のようにひろがり、主税を見送り、一つ二つと小さくうなずいて見せた。

他の十六名も立ちあがっている。

弥兵衛が、内蔵助や吉田忠左衛門などについて大広間を出てゆくとき、安兵衛の傍へ一歩近より、

「ではな……」

といった。

安兵衛が何かいいかけようとするとき、早くもこの老人は背を向けて歩き出している。

そのとき、

「おぬしと暮らしたる六年は、百年にも思える」

という弥兵衛のつぶやきが、はっきりと安兵衛の耳へきこえた。

奥田孫太夫が、安兵衛の横手をすりぬけてゆきながら、これは簡単に、

「安兵衛殿、さらば」

「父を……」たのむといわせもせず、このたのもしい年長の友人は、ぽんと胸をたたいて弥兵衛のうしろから広間を出ていった。

浪士たちは、すべて駕籠にのせられ、きびしい警固の列にかこまれ、それぞれ大名家へ引取られていった。

安兵衛たち十名を引取った松平家では、浪士の駕籠一挺につき、騎馬一名、歩行士二名、足軽十名をもってかこみ、仙石邸から程近い愛宕山下の屋敷へ到着をした。

毛利家、水野家も略同様である。

松平家では翌十六日になると、浪士たちを芝・三田にある中屋敷へうつすことにし、浪士一名に対し一軒の長屋を用意したが、その後、幕府から『それにはおよばぬ』と指図があり、二軒の長屋に五名ずつが起居することになった。

浪士たちをあずかった四大名は、江戸城中に会合して打合せをし、待遇のことをきめたが、松平隠岐守のみは病気引こもり中であったので、書状の往復をもって、これに替えた。

中でも、大石以下十七名をあずかった細川越中守は幕府から〔御預けの〕命が下ったとき『よし、躬が引取りに出向こう』と、いい出したほどであるから、浪士たちへの優遇ぶりは当時評判

になったものだ。

越中守が赤穂びいきなのは前々からのことで、殿さまは亡き伊佐子や北島雪山と安兵衛のいきさつも知っているし、ことに一時は堀部安兵衛を召抱えようというところまで話がすすんだこともあるだけに、

「安兵衛をぜひにも躬が屋敷へ引取りたいものじゃ」

熱望をしたものだが、大石父子でさえ別れ別れになったことでもあり、浪士たちの肉親は、それぞれ別れてあずけられたのだから、この無理は通らなかった。

さらに、堀部弥兵衛の遠縁にあたる堀部甚之允というものが細川家につかえており、彼はいま国もとの肥後・熊本にいる。

細川越中守は、わくわくしながら、みずから細ごまと命を下し、

「毎食、二汁五菜の膳部をととのえよ」

とか、

「もしも浪士たちが罪をゆるされ、晴れて自由の身となったるときは、当家として恥ずかしからぬ仕度をさせねばならぬ。先ず、十七名が腰にすべき両刀をととのえよ」

と、そこまで気をつかってくれた。

大石主税は、三田の中屋敷へうつされると、発熱をした。

風邪をひいたのである。

松平家からの医薬も丹念なもので、主税は間もなく全快をしたが、安兵衛はつききりで看護に

あたった。

「安兵衛殿に、そのようにされては、まことにおそれ入るばかりです」

主税は恐縮したが、

「何の……兄とも思うて下されい」

心から安兵衛はいった。

この十五歳の少年は、別れた父・内蔵助の名をはずかしめまいとして極度の緊張をしつづけている。

主税につきそいつつ、安兵衛は、

「退屈やも知れぬが……私のこれまで通ってきた人の世の道を語ってみましょうかな」

と、いい出たものだ。

大石主税は、堀部安兵衛の過去が、これほどに多彩をきわめていたことを知らなかった。

ことに——。

中津川祐見にお秀をうばわれた安兵衛が、京の町で父・内蔵助から金五両を借りたはなしをきいたときには、主税の声がはずんで、

「左様なことがありましたのか……父は何も申しませなんだ」

「私の恥をおかくし下されたのでござろう。そのころの私は、もはや十九歳にもなりながら、いまの主税殿とくらべて雲泥の相違。まことにもって自堕落な男でしてな」

いいさして、安兵衛は口をつぐんだ。

十五歳の主税は、間もなく、その生涯を終ろうとしているのだ。今度の事件では、世上の人気が圧倒的に赤穂浪士へあつまり、何とか浪士たちを助命しようというごきが幕府にも諸大名にもあって、一見それは有利な展開も予想されるかに考えられているが……。

（われわれは、細井広沢殿の申された通りに処刑されるにちがいない）

と、安兵衛は思いきわめていた。

（おれが死ぬ前に、この少年の死を見とどける役目を、おれは内蔵助様からゆだねられた）

そうなると、自分の死について思いをめぐらすことが、後まわしになったかたちである。

指で一突きすれば、一度にくずれこわれてしまうような主税の緊迫を、安兵衛は自分の過去を面白おかしく語りきかすことによって解きほぐすかたちになった。

お秀のことも、伊佐子のこともすべて語った。

語りつつ、

（主税殿は、まだ女を知らぬのではあるまいか……あの、世の中でもっとも美しい生きものを抱きしめ、抱きしめられるよろこびを知らぬままに死を迎えるのであろうか……）

と、思ったが、これは杞憂にすぎなかった。

大石内蔵助はぬかりなく、京の山科に住んでいたころ、我が子の主税にも、その「よろこび」をあたえてやっていたのである。

はじらいつつ、大石主税がそのことを打ちあけたとき、安兵衛の眉も明るくひらいた。

年が明けて元禄十六年となった。

正月五日には、病気が癒えた松平隠岐守が三田の中屋敷へあらわれ、浪士たちに面接をした。

隠岐守は、ことに大石主税へいたわりの言葉をかけ、

「各々首尾よく本望を達して満足であろう。われらも各々をあずかることとなり、本懐に思う。躬も早速に各々と対面いたすべきところ、不快のため、心ならずも延引し今日に至ったわけじゃ。各々に対し、いろいろと御馳走の致しようもあり、致したきは山々なれども、天下御大法のことも思い合せ、御公儀にもはばからねばならぬこともあるゆえ、何かと不自由のこともあろう。なれど所望のことあらば遠慮なく申し出られるように」

と、ねんごろなものであった。

鳥羽又十郎が、松平中屋敷へあらわれたのは、この翌日のことである。

その六日の夕暮れに、松平家の臣で、浪士たちの接伴をつとめている渡辺甚三郎が一番長屋へあらわれ、

「堀部殿。こちらへ――」

さしまねいた。

安兵衛が外へ出ると、長屋をかこむ板囲いの通路に待っていた。

安兵衛は、

（切腹か、打首の内示があったのではないか？……）

と、瞬間、異常な緊張に顔色をひきしめ、

「何事でござりましょう？」

通路へ出てゆくと、渡辺甚三郎が部厚い一通の書状を差し出し、
「只今、堀部殿の御朋友とか申されて、御勝手門へまいられた立派なる風采の仁が、この書状を……」
と、いう。
「それがしの友、と申しましたか？」
「いかにも。御尊名は？　と問うたところ、この手紙を見ればわかるということでござった」
「それはそれは……」
「念のために申しあぐるが、この書状の取次は、拙者の一存にておはからい申した」
と、渡辺がいったのは、いうまでもなく、浪士たちは一応、処罰を待つ身であり、たとえ一通の手紙であっても、これは幕府の裁可を得なくては当人にわたすことはならぬ。けれども、渡辺甚三郎は上司にも通ぜず、ただちに安兵衛へ手渡してくれた。
よほどに肚のすわった男でないと、こういうまねはできぬ。
「では……」
と、ゆきかける渡辺に、安兵衛が、
「お待ち下され。書状の内容もおしらべ願いとうござる」
「何の、御気づかい無用にござる」
「では……御好意にあまえまする」
板囲いの出入口から出ていった渡辺甚三郎を見送り、安兵衛は表書きのない手紙の封を切って

みて、

（あ……鳥羽又十郎からだ）

かすかに、胸がさわいだ。

鳥羽又十郎の手紙を、彼の声に変えてのべると、こうなる。

『この手紙が首尾よう貴公の手にわたればよいと思いつつ、書いている。わしは、この手紙を堂々と松平家の士にたのむつもりだが、もしも聞き入れられぬときは、いくらも手段はある。さてさて、久しぶりでござる。

すぐる元禄七年の正月に、たしか麹町四丁目の夜道でお目にかかって以来、およそ十年ほどの歳月が流れてしもうた。あれから間もなく、わしは配下の者たちと共に大坂から中国すじへかけて仕事をたてにまいったが、どうしたものか、することなすことが失敗つづき、まあその辺は、よろしくおくみとり下され。

というわけでな。五十に近い今となって、やはり帰るべきところは一つ。お秀のもとへ、ということになってしまい申した。留守中、貴殿の身に起ったことは又十郎も、とんとおどろき申した。高田の馬場での御名誉、そしてまたこのたびの御はたらき、お秀と共に、つくづく感じ入っております。などと月並なることを申すのは、もうこれほどにしておきたい。

さて、お秀よりの伝言がござる。

と申すのは貴公よりおあずかり致した備前長船清光の脇差、たしかに弟ごの弥太郎どのへ、おわたしいたしたそうにござる。これは、わしが旧臘十九日に江戸へ戻る前、すなわち十二月十二

日のことにて、そのせつ、お秀は貴公と弥太郎どのとのつながりを語りきかせたるところ、弥太郎どのも、もちろん高田の馬場における貴公の評判をきいており、あの中山安兵衛殿が共に御尊父の血をうけて兄弟と知ったときには、おどろきとよろこびのあまり、しばらくは口もきけなんだそうな……。

さらに十五日となって吉良屋敷討入りの報をきき、お秀はすぐさま、浅草の瀬戸物問屋・柏や方へ走り、このときはじめて貴殿が討入りの御浪士方の中におらるることを打ちあけ申したるところ、弥太郎どのは……』

そのとき弥太郎は、お秀にこういったそうである。

「まだお目にかかってはおりませぬが、浅野様御家来の兄さまゆえ、世間の評判のごとく、もしも討入りのあったときには、かならず、かならず兄さまも、その中にと、思っておりました」

そして、お秀はすぐに弥太郎をつれ、浪士たちの引上げの順路をたどり、泉岳寺へおもむいたのだという。

お秀は、さすがに武家奉公をしてきた女だけに、こうした場合、自分や弥太郎が安兵衛との面会を願うというつもりはなかった。

上杉の討手が押し寄せてくるやも知れず、幕府から武装の一隊が泉岳寺をかこむという場合もあり得る。お秀のみでなく、寺内にいた浪士たちも、その覚悟でいたのである。

弥太郎もまた、無理に兄との対面を願うようなことはしなかった。

そのとき、弥太郎がいうには、

「兄さまのお顔を、一目見ることができれば、本望でございます」

で、二人は泉岳寺のまわりをかこむ見物の中にまじって、辛抱づよく時を待った。

あの日、赤穂浪士一同が仙石屋敷へおもむくため泉岳寺を出たのは午後六時とも八時ともいわれている。

いずれにしても泉岳寺山門のあたりは、寺や公儀役人の高張提灯がつらなり、見物の群も、それぞれに提灯を持っているから、昼のような明るさであった。

お秀は家を出るときに万一の場合にそなえ、にぎりめしの用意もし、むろん提灯もたずさえてきている。

「来た！」

見物のどよめきが高まり、浪士たちが公儀目付役・市野新八郎の指揮する一隊に前後をまもられ、整然と寺内から山門へあらわれた。

いずれも討入りのときの、血と泥にまみれた装束のままであったが、かなり長い間休息をとった直後なので、一同、生色がよみがえっている。

「あれが、お兄さまですよ」

難なく、お秀は安兵衛を発見して弥太郎に教えた。

同時に、彼女も……。

「お秀も、われを忘れ候よう申し候」

と、鳥羽又十郎は手紙に記している。

それはそうであろう。

雪ふかい越後・新発田の城下で、十四歳の安兵衛は、その童貞をお秀にささげた。それから二十年におよぶ人生に、二人は付かず離れず出会っては別れ、また出会った。奇縁というべきであろう。

ふっと、お秀は、弥太郎が両眼に涙をいっぱいたたえ、すでに眼前から消え去った兄を呑みこんだ夜の闇を見つめているのに気づいた。

「とうとう名のり合わぬまに……」

いいかけると、二十歳の青年に成長した弥太郎がこたえた。

「兄さまのお顔を、しっかりと胸にきざみましたゆえ、まんぞくでございます」

ここでまた鳥羽又十郎の手紙に戻ろう。

『これより後、わしは船宿の亭主として、おだやかに老い朽ちてゆくつもりでござるが……安兵衛殿のおもかげを、お秀ともども心なつかしく想いつつ、生きてまいろうと存ずる』

と、これが最後で、筆がとめてあった。

又十郎らしく、さっぱりとした文面であり、『何かいいのこすことはないか』とか『自分にできることがあれば何なりといたそう』とか、そのようなことは一語も書いてはいない。

堀部安兵衛が、この期にあっては、思い残すことの何一つないまでに、おのれのまわりの始末をつけていることを、又十郎は、よくわきまえていたと思える。

（弟も二十歳になったか……）

部屋へ戻ってきた安兵衛のたのしげな微笑を、大石主税が不審そうにみやった。

年が明けると、幕府も本腰を入れて、赤穂浪士の処分につき評議をかさねた。

老中は将軍の意を体し、大目付・寺社町奉行・勘定奉行などから成る〔評定所〕の意見をもとめた。

柳沢出羽守も、今度は沈黙をしている。

世論が、あげて浪士たちを賞讃し同情をよせているので、彼ほどの権力家も、うかつに口を出すわけにはゆかない。

何しろ将軍・綱吉が、

「大法を曲げずに、何とか浪士たちを救う道はないものか」

などといい出しているのだから、吉良びいきだった出羽守も老獪に口をつぐんでいるのみであった。

こうした空気にかりたてられたように〔評定所〕が意見を差し出した。およそ次のごとくだ。

一　吉良左兵衛は養父・上野介が首をとられたというのに、自分だけが生き残っているのはふとどきであるから、切腹を申しつけられたい。

一　上野介家来のうち、逃亡したり、また手傷も負っていないものは不忠者であるから、斬罪に処せられたい。

一　上杉綱憲は実父・上野介の首をとった浪士たちに対し、手をつかねて見のがしている。これは武士道の風上にもおけぬふるまいであるから、その領地知行を取りあげるべきである。

一　赤穂浪士たちの行動は手段として誤はあるが一律に徒党と見なすことはできまい。

一　浪士一同は現在、四家におあずけとなっているのであるから、しばらくこのままにして後、おもむろに処分をきめたほうがよろしかろう。

とあって、吉良方は、もうさんざんである。

これを二年前の刃傷事件の処分とくらべてみるとき、その差のいかに大きなものであるかが、はっきりとわかる。

今度は吉良方や上杉家に対して、みじんも同情がない。なさすぎるほどだ。それに反して、赤穂方へは無条件に、

「何とか命を助けてやろう」

という同情が幕閣の中にみなぎっているのである。

当時の有名な学者たちの意見も徴せられた。

さすがに、これらの人々の意見には、浪士たちの義挙をみとめながらも、天下の大法をみだしてはならぬという冷静さがある。

将軍は迷いぬいたあげく、上野・寛永寺の輪王寺宮・公弁法親王の声をたよりにすることにした。

親王が年賀のため、江戸へあらわれたとき、

「……何ともいたして浪士どもを助けつかわしたく存ずるが、左様いたさば天下政道が立たず、いかんとも詮なきことにて、まことに、ふびんに存ずる」

と、もちかけてみた。

このとき、親王が『助けておやりなされ』といえば、親王の声がそうさせたということにして、綱吉も方法をめぐらすつもりであったのかも知れぬ。

このとき輪王寺宮は、将軍・綱吉に、

「天下御政道につき、いろいろと御苦心のほど、お察し申しあげる」

と、こたえたのみであった。

この日、上野山内へ戻られた親王は側近のものに、

「将軍家は、浪士たちの処分について、自分に謎をかけてまいられた。なるほど、自分としても浪士たちを、この法衣の袖の下に隠してつかわしたいのは山々であったが……浪士たちの中には、まだ歳の若い、血気ざかりのものも多く、万一、命を助けつかわしたがために、将来をあやまる者もないとはいえぬ。そうなっては折角の名誉を汚すことにもなろうし、苦しゅうはあったが、これが弥陀の大慈悲と思い、将軍家の謎を、わざと解かずに帰ったのじゃ」

と、もらしたそうな。

ともかく、これで将軍の肚もきまったらしい

いよいよ、二月三日に内命が四家に発せられ、翌四日をもって赤穂浪士の切腹がきまった。

四日の当日、午後二時ごろであるが、四家にあずけられている浪士たちへ、切腹の申しわたしがあった。

細川家へおもむいて、申しわたしをしたのは、幕府・御目付・荒木十左衛門であるが、荒木は

赤穂開城の折も幕府から派遣せられ、大石内蔵助必死の嘆願をきいた人物であった。

申しわたしがすんでから、荒木十左衛門は、

「内蔵助殿。久しぶりでござるな」

と、うちとけ、

「これは上使としてではなく、荒木一個の考えから申しあぐるが、今日、吉良左兵衛殿は、家を取りつぶしの上、信濃・高島の諏訪安芸守へ永あずけとなり申した。左様おふくみおかれい」

告げてくれた。

大石内蔵助の面上に、満足のいろが、はっきりとあらわれた。

今度こそ〔喧嘩両成敗〕の定法が、あやまりなく用いられたのである。

四十余名が命をかけて、二年前の政治のあやまりを正したことになった。

これこそ、まさに内蔵助の本望であったろう。

「この期におよび、吉良左兵衛殿の処分をうけたまわり、まことに、かたじけなく存じまする。一昨年以来、荒木様よりの重ねての御厚情、内蔵助は死しても忘れませぬ。たとえ、この身はほろぶとも……」

と、いいさしたとき、いままでは何事にも喜怒の感情を見せたことのない内蔵助の両眼に見る見る熱いものがあふれ、

「この身はほろぶとも、このご恩にむくいたく存じまする」

熱誠をこめて荒木十左衛門を拝礼したのは、よほどにうれしかったものと見える。

ちなみにいうと……。

吉良左兵衛義周は、三年後の宝永三年に、信州の配所で病死をしている。

山吉新八は、このときまで身辺にあって左兵衛の世話をしつづけ、その死後はじめて故郷の米沢へ帰ったという。彼もまた、最後まで、おのれの使命を果しぬいたわけである。

細川家では、切腹の前に、浪士たちの遺言をききとどけたが、堀部弥兵衛は、こういっている。

「御当家につかえるわが親類の堀部甚之允に、飲め、とおおせつけられたい」

生きてあるうちは、酒を大いにのめとつたえてもらいたいというのだ。いかにも弥兵衛らしい。

さて、松平隠岐守屋敷へは、目付・杉田五左衛門が切腹申しわたしに向った。

「……内匠頭家来徒党をいたし、上野介宅へ押込み、飛道具など持参。上野介を討ち候儀、公儀をおそれず候段、重々ふとどきに候。よって切腹申しつくるものなり」

と、杉田五左衛門が申しわたしたとき、十六歳になったばかりの大石主税が十名を代表し、

「いかようの重罪にもおよぶべきところ、すべよく切腹おおせつけられまして、ありがたき仕合せに存じたてまつる」

懸命に、声に力をこめ、顔面を紅潮させて、こたえた。

杉田五左衛門が顔をそむけるようにした。

杉田には主税と同年の長男がいる。見るにしのびなかったのであろう。

堀部安兵衛は安兵衛で、自分のことより、何とか大石主税の死を無事に見とどけたいと願う心でいっぱいになり、申しわたしがすんで長屋へ引取った後も何かと気をくばった。

邸内では、ただちに切腹の仕度がととのえられる。

このことは、前夜ごろからわかっていたので、今朝は浪士一同も身をきよめ、肌着も替えていたので、すでに浅黄無垢の小袖に麻の裃をつけ、時を待った。

このころになると、先刻までは紅潮していた大石主税の顔色が蒼白となった。

死を恐れているのではなく、人間が生きているうちは絶対に経験することのできない〔死〕というものに直面したための、おそろしいまでの緊張なのである。

（おれの顔色も、同じように変っているやも知れぬ）

と、思いつつ、安兵衛は主税の身仕度を手つだってやったりした。

この松平中屋敷では、切腹の場所が大書院の庭にあてられた。

大書院の縁側から庭先にかけて、杉田五左衛門以下幕府の役人が居ならび、その前面に切腹の座が用意された。背後は白い幔幕を張りめぐらしてある。

大書院と廊下一つをへだてた広間の一角に、浪士たちが死装束でひかえたときには、朝から晴れわたった空も桔梗色に暮れかかり、庭には高張提灯が、いっせいに立ちならんだ。

金屏風にかこまれた広間の一隅に、大石主税、堀部安兵衛、中村勘助、菅谷半之丞などの順に十名が居ならんだわけだが、このとき安兵衛は何気なく、となりにかしこまっている大石主税へ、

「主税どの。われらはこれより、早目に一日の眠りにつくわけでござる。そのように思われい。それがしも左様に思うております」

と、ささやいた。

ふと思いついて、ささやいた安兵衛の言葉なのだが、これをきいたとき、大石主税の硬化している顔の表情が、じわりとゆるんだ。

永久にさめぬ死の眠りながら、

「さ、共に眠みましょうかな」

とでもいっているような安兵衛の口調に、この十六歳の少年の心は落ちついたものらしい。

座のかすかなざわめきが、いつの間にかぴたりと熄んでいた。

水の底のような、異様に緊迫をはらんだ静寂が、松平屋敷全体にゆきわたっている。

この寂寞を、庭前からの声が、おもおもしく破った。

「大石主税殿、お出でなされ」

呼出しの声であった。

浪士たちに付きそう松平家の士、三人の顔色が変った。

「かしこまった」

叫ぶように主税がこたえ、立ち上った。

主税は懸命の意力を双眸にこめ、安兵衛へふり返った。

「すぐに、私も……」

と、あたたかく声をかけてやり、安兵衛も全力をつくして何気ない微笑をうかべて見せた、ように思う。

大石主税はうなずき、白布をしきつめた縁側から座へ下りていった。

庭には、新しい白砂の上へ筵を置き、この上へ白布をしきつめ、浪士たちを切腹の座へみちびいている。

浪士たちも、ひたすらに主税の死のおだやかなことをのぞみ、息をのんで、その時を待った。

「む！」

腹の底からうなり出したような気合がきこえた。これは主税の首を打ち落とした介錯人・波賀清太夫のものである。

声にならぬ、どよめきが庭先からつたわり、

「大石主税殿。しゅびようお仕まいなされました。堀部安兵衛殿、お出でなされ」

呼出しの声と共に、また静寂がもどる。

「かしこまった」

こたえて安兵衛は残る八名の同志たちへ向き直り、

「では……」

と、いった。ときに、安兵衛三十四歳。

同志たちの顔は硬直しているが、かなりの落ちつきが見てとれる。

（これなら、みなも大丈夫だな、だが、いまのおれは、いったい、どのような面をしておるのかな……）

立って縁側へ出たとき、二月四日の夕空の色が、ふっと夏の空に見えた。それは、故郷の新発田城下の夏空なのである。

このとき安兵衛の脳裡へ電光のようにひらめいた一瞬の光景は、新発田の盆の花市であった。

七月十一日の夜から翌朝にかけて、上、中、下三町の通りへならぶ露店の花市には、盆花として、萩やすすき、桔梗、おみなえし、千日紅などがならび、近在の農家の女が、これを売る。

この花市で買った花を、盆の寺まいりにささげるのであった。

明るい灯の下にならぶ花の色が、安兵衛の脳裡から消えたとき、彼は白布におおわれた切腹の座へ足をかけていた。

解　説

二部上場の銘柄と見做されていたものが、みるみるうちに一部市場の花形株となり、今や高配当、堅調をはやされているものに、池波正太郎株がある。

小学卒の総理大臣が出現した今日、学歴を云々することは茶番にしか過ぎまいが、ゴルフ好きの首相がニッカボッカーをはいても、どこか土建現場のおもかげが抜け切らない。小学卒の池波正太郎氏にはそのような俗臭はみじんも無い。

「堀部安兵衛」は一部上場以後の作品であるが、地方新聞数紙に昭和四十年から四十一年へかけて連載されたもので中央市況でのひびきは薄かった。これだけの分量を必要とするかどうかについては、一言半畳を入れてみたくなる節がないではないが、構成力には目を瞠るものがある。強烈な既成イメージで枠づけされた〝高田の馬場の血斗〟と〝忠臣蔵討入り〟という大芝居をこれほどの迫力で描き切るのは、まさにプロ中のプロにしてはじめて成し得る芸当と言えよう。

赤穂球団の強打者堀部安兵衛選手について、作者がストレートに形容してみせたスケッチをピンセットでつまみ上げると——

まだ前髪もとれていない少年として先づ登場したとき

——安兵衛の顔は、亡母のるいに生きうつしといわれたもので、切れ長の目や、しまった口元や、

ぷくりと小鼻の張ったたかい鼻すじなど、あぶらくさい吹出物を別にしたら、なかなかの美少年なのである。（14才）

——酒と飯で、むくむくと肥った躰がひきしまり、鍛えぬかれた筋肉がこれに代った。細かった鼻すじにも肉がついたし、小鼻が張り出し、頬から顎へかけての、がっしりとした肉づきは、亡父・弥次右衛門を彷彿とさせるものがあった。（22才）

八年の歳月は母親生きうつしの安兵衛の顔を、父親似へと変容させている。その変容の裏側ではどんなことが起っていたか。

——新発田を出奔して親類のものへも迷惑をかけた。女に迷い、主人を捨てて情痴におぼれ、武士の子でありながら借金をしてまで女を追いかけ、そのためには何度もみにくいさわぎをおこし、死にかけてもいる。

安兵衛がこのような二十五才へ辿り着くまでに五百八十頁ほどが費され、登場人物は百人近い数に上っている。まことにまことしやかにおびただしい人物像が動員され、端役といえども決して蒸発してしまうようなことなく、几帳面に転結がはかられている。おそるべき管理能力である。明けて二十六才の横顔を作者は次ぎのようにはさみ込む。

——手打ちのそば切りを大根おろしの入った辛い汁にひたして少しずつ食べながら酒をのむのが安兵衛は好きである。

どうやら作者は、そのような安兵衛が好きらしく、すすめ上手のきき上手、のむほどに酔うほどに、すっかり作者は安兵衛の身の上ばなしのメモをとってしまったようである。作品のリアリティに厚味を加えているものとして、地理、制度、風俗に通暁する作者の博識を見逃すわけにゆかぬ。浅草生れの早熟児は人情の機微に通じ、江戸の町々については、まるで今日の東京よりも身近かに説明してみせる。叙述が精細をつくすために運びの平板さが目につきはじめると、伝奇的人物と奇抜な発想でアクセントを入れることを忘れない。大盗鳥羽又十郎と邪剣中津川祐見との間で、安兵衛の童貞を奪ったお秀がピンポン玉のように音を立てて動く。そして安兵衛の魂を奥底から揺すぶり上げる女性を、作者は、水もしたたる男装に仕立てて、安兵衛の眼前へ突如としてお目見得させる。お秀とのベッドシーンを臆せず中継してみせた作者は、男勝りの美少女、伊佐子を純情の女へプレイバックさせてみせ、そして彼女を死の前夜〝女〟に仕上げするシーンを描くに当たっては

――「ご、ごめん」

「あれ……」

「ゆるされい」

あとは筆者は知らぬ。

と、いきなりレンズの前へ暗幕をかけてしまうのである。

少し独断的に憶測を試みるなれば、作者のプライバシーをのぞきみる思いがする場面を、二つ

挙げることが出来そうだ。

少年安兵衛が父を不慮の死で失い、母方へ引きとられ祖父の慈愛に包まれる件りは、作者が幼くして父母の離婚に会い、母の里へおくられ、銃職の祖父に寵愛された回想がオーバーラップしているとみられよう。

前編のラストシーンで高潔の書家、北島雪山が九州へ旅立つ別離の情景は圧巻である。とりわけ直弟子、細井広沢と安兵衛が師を慕って立ちつくす切なさは、直木賞受賞を真ッ先きに師匠長谷川伸へ報告した人間池波正太郎の真情に裏打ちされてまことに清々しい。雪山と安兵衛の年齢差は三十四才、長谷川と池波は四十才違いだ。しかもこの場面の描写は、非凡なる演劇的才能の所産と断じても過言ではあるまい。

全盛期の新国劇のため名舞台を書きおくった池波は、モノになるまでに三十本近い脚本を死産させて倦まなかったという。芝居の台本で苦労した作家は、観客の手応え、すなわち読者の共感の反応を、目と皮膚で受けとめ骨の髄で承知しているはずである。

高田の馬場の一時間に及ぶ決斗は、水際立った手法で、十数場面にカットバックして描き尽し、映画通池波の骨頂をのぞかせて快よい。カットとカメラワークの見事さは、読む者に息を吐かせず、臨場感を呼ぶに十分である。

堀部弥兵衛が安兵衛の入り婿を口説き落す経緯と、大石が復讐をはやる安兵衛ら急進派を抑えつつ運ぶ器量のほどは、池波の人間洞察の奥行きをうかがわせて心憎い。

後編の三分の一を過ぎたあたりから、安兵衛は主役の座を大石に譲った形となって進行するが、

史料渉猟の確かさと、現地検証の旺盛な実証精神が作品の木目につやぶきをかける。

たとえば、説を成すもので、浅野内匠頭の刃傷を、頭痛持ちで、当日曇天の不快指数に触発された発作、と片付ける手合いを引き据えて

――これが〔怒り〕を忘れた近代人の解釈の仕方であり、こういう説をなす人ほど、その著書の中で、大石頼母を内蔵助の父だなどと間違ったことを平気で書いている。

と、手きびしい一撃を加え、さらに

――筆者は浅野びいきでもなければ吉良びいきでもない。

この小説を書くについて、現存する史料を読み、さらに新しく得た史料の中から浅野と吉良の確執を追っているのだ。

と、堂々と立場を鮮明にして憚らない。

堀部弥兵衛の娘、幸が父の粘りの蔭に隠れて、とんと発言がききとれぬのと、菅野と安兵衛が叔父―甥の盃を交わす必然性が乏しいのが気になるが、とにもかくにも作者が強調したかったのは、武士における一期一会の思想ではなかったかと推察する。今のはやり言葉で言えば、命の燃えるナウの積み重ね、という表現になるのだろうが、そう言ってしまうと何かが洩れているようでピンと来ぬ。

昭和元禄という言葉があるが、二つの時代に共通する精神公害の摘発を、芝居の背景にじんわり塗り込めている手練を見落してはなるまい。

人間に類似点と相似形が見出されるのはおもしろいことだ。

学校歴浅く、都庁に職を奉じてから人気作家になったのが池波正太郎なら、同じコースを辿って人気漫画家になったのは加藤芳郎である。庶民的ぬくもりを失わぬ体温は共に同じである。

突飛な発言にきこえるかも知れないが、吉川英治が企業家を志していたらナショナルを経営していたかも知れないし、松下幸之助が小説家になっていれば、或いは「太閤記」を書いていたかもわからない。小学校しか出ていない者の大常識が、二人のバックボーンに脈々と貫流して、仕事の拡がりをキングサイズにしているのである。

司馬遼太郎は、史実を点検して、論理を設計し、壮大な建築物を構築してみせる。

池波正太郎は、史実を選り別けて、そこから湧きあがる実感を丹念に撚り合せて、極彩色の曼荼羅を織り上げる。

「書いてみないとイメージがはっきりして来ない」とは池波がかつて述懐した言葉である。

ともあれ「堀部安兵衛」は今や数少い日本的アルチザンの、甲の下と乙の上の間に位する作品である。但、明き盲の評者の採点には甲がないのを常としている。念の為——

小谷正一

堀部安兵衛

下巻　全二冊

池波正太郎



角川文庫 2984

昭和四十八年 三月 十日　初版発行
昭和五十八年十一月二十日　十八版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一（大代表）
〒一〇二　振替東京⑧一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——大谷製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-132305-3　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

毒の矢　横溝正史
迷路の花嫁　横溝正史
殺人鬼　横溝正史
花園の悪魔　横溝正史
幻の女　横溝正史
呪いの塔　横溝正史
恐ろしき四月馬鹿　横溝正史
山名耕作の不思議な生活　横溝正史
羽子板娘　横溝正史
自選人形帖(1)佐七捕物帖
自選人形帖(2)佐七捕物帖
神隠しにあった女　横溝正史
舟幽霊　横溝正史
自選人形帖(3)佐七捕物帖
憑かれた女　横溝正史
刺青された男　横溝正史
双仮面　横溝正史
ペルシャ猫を抱く女　横溝正史
壕侯爵一家　横溝正史
誘惑　横溝正史
蛾燈　横溝正史
悪魔の家　横溝正史
芙蓉屋敷の秘密　横溝正史
殺人暦　横溝正史
青い外套を着た女　横溝正史

病院坂の首縊りの家　全二冊　横溝正史
真説金田一耕助　横溝正史
金田一耕助の冒険　全二冊　横溝正史
七つの仮面　横溝正史
悪霊島　全二冊　横溝正史
血蝙蝠　横溝正史
迷宮の扉　横溝正史
怪獣男爵　横溝正史
夜光怪人　横溝正史
黄金の指紋　横溝正史
仮面城　横溝正史
金色の魔術師　横溝正史
蠟面博士　横溝正史
まぼろしの怪人　横溝正史
大迷宮　横溝正史
真珠塔・獣人魔島　横溝正史
白蠟仮面　横溝正史
幽霊鉄仮面　横溝正史
青髪鬼　横溝正史
シナリオ　悪霊島　原作　横溝正史　脚本　清水邦夫
横溝正史読本　小林信彦編

幻想の未来　筒井康隆
アフリカの爆弾　筒井康隆
にぎやかな未来　筒井康隆
わが良き狼（ウルフ）　筒井康隆
ホンキイ・トンク　筒井康隆
筒井順慶　筒井康隆
革命のふたつの夜　筒井康隆
脱走と追跡のサンバ　筒井康隆
日本列島七曲り　筒井康隆
時をかける少女　筒井康隆
緑魔の町　筒井康隆
筒井康隆全童話　筒井康隆
ミラーマンの時間　筒井康隆
農協月へ行く　筒井康隆
腹立半分日記　筒井康隆
六本木心中　笹沢左保
乾いた空の流れ　笹沢左保
招かれざる客　笹沢左保
轢き逃げ家族　笹沢左保
さよならの値打ちもない　笹沢左保
暗い傾斜　笹沢左保

三人の登場人物　笹沢左保
死化粧　渡辺淳一
自殺のすすめ　渡辺淳一
白い宴　渡辺淳一
酔いどれ天使　渡辺淳一
廃礦にて　渡辺淳一
恐怖はゆるやかに　渡辺淳一
無影燈　全二冊　渡辺淳一
花埋み　渡辺淳一
冬の花火　渡辺淳一
わたしの女神たち　渡辺淳一
公園通りの午後　渡辺淳一
日本アパッチ族　小松左京
ウインク　小松左京
明日泥棒　小松左京
見知らぬ明日　小松左京
ゴエモンのニッポン日記　小松左京
果しなき流れの果に　小松左京
牙の時代　小松左京
最後の隠密　小松左京
復活の日　小松左京
見えないものの影　小松左京
宇宙漂流　小松左京
青い宇宙の冒険　小松左京
継ぐのは誰か？　小松左京
エスパイ　小松左京
怨霊の国　小松左京
御先祖様万歳　小松左京
時の顔　小松左京
鏡の中の世界　小松左京
神への長い道　小松左京
旅する女　小松左京
模型の時代　小松左京
青ひげと鬼　小松左京
三本腕の男　小松左京
短小浦島　小松左京
結晶星団　小松左京
地には平和を　小松左京
蟻の園　小松左京
明日の明日の夢の果て　小松左京
こちらニッポン　全二冊　小松左京
ゴルディアスの結び目　小松左京
空中都市008　小松左京
原作　小松左京　高田宏治　脚本　深作欣二　G・ナップ　シナリオ　復活の日
小松左京監修　雑学おもしろ百科　既刊二冊
小説日本銀行　城山三郎
重役養成計画　城山三郎
風雲に乗る　城山三郎
イチかバチか　城山三郎
一発屋大六　城山三郎
価格破壊　城山三郎
鮮やかな男　城山三郎
大義の末　城山三郎
望郷のとき　城山三郎
成算あり　城山三郎
危険な椅子　城山三郎
うまい話あり　城山三郎
辛酸　城山三郎
百戦百勝　城山三郎
盲人重役　城山三郎
男たちの経営　城山三郎
零（ゼロ）からの栄光　城山三郎

アポロンの島　小川国夫
漂泊視界　小川国夫
一本の鉛　佐野洋
完全試合　佐野洋
直線大外強襲　佐野洋
透明受胎　佐野洋
華麗なる醜聞　佐野洋
二人で殺人を　佐野洋
赤い熱い海　佐野洋
金属音病事件　佐野洋
壁が囁く　佐野洋
第六実験室　佐野洋
金色の喪章　佐野洋
無効試合　佐野洋
野球が殺した　佐野洋
不幸な週末　佐野洋
賭の季節　佐野洋
ひとり芝居　佐野洋
蜜の巣　佐野洋
10番打者　佐野洋
地下球場　佐野洋

しかし殺人は…　佐野洋
I・N・S探偵事務所　佐野洋
感傷旅行　田辺聖子
女の日時計　田辺聖子
私の大阪八景　田辺聖子
あかん男　田辺聖子
浮舟　田辺聖子
女の目くじら　田辺聖子
おせいさんの落語　田辺聖子
箪にりんご　テーブルにお茶…
田辺聖子
ほとけの心は妻ごころ　言うたらなんやけど　全二冊
田辺聖子
鬼の女房　田辺聖子
家出のすすめ　寺山修司
幸福論　寺山修司
誰か故郷を想はざる　寺山修司
さかさま世界史　怪物伝　寺山修司
さかさま世界史　英雄伝　寺山修司
書を捨てよ、町へ出よう　寺山修司
ポケットに名言を　寺山修司
さかさま文学史　黒髪篇　寺山修司

馬敗れて草原あり　寺山修司
競馬への望郷　寺山修司
花嫁化鳥　寺山修司
さかさま博物誌　青蛾館　寺山修司
さかさま恋愛講座　青女論　寺山修司
地球をしばらく止めてくれ　ぼくはゆっくり映画を観たい
寺山修司
戦争を知らない子供たち　北山修
さすらいびとの子守唄　北山修
男友達　河野多恵子
天然記念物の動物たち　畑正憲
われら動物みな兄弟　畑正憲
どんべえ物語　畑正憲
ムツ・ゴローの怪事件　畑正憲
深海艇F7号の冒険　畑正憲
無頼の船　畑正憲
ムツゴロウのゆうびん箱　畑正憲
さよならどんべえ　畑正憲
人斬り半次郎（幕末編）　池波正太郎
人斬り半次郎（賊将編）　池波正太郎
にっぽん怪盗伝　池波正太郎

堀部安兵衛 全二冊　池波正太郎
近藤勇白書　池波正太郎
戦国幻想曲　池波正太郎
英雄にっぽん　池波正太郎
夜の戦士 全二冊　池波正太郎
仇討ち　池波正太郎
江戸の暗黒街　池波正太郎
西郷隆盛　池波正太郎
炎の武士　池波正太郎
男のリズム　池波正太郎
ト伝最後の旅　池波正太郎
戦国と幕末　池波正太郎
夫の論理・妻の論理　会田雄次
日本人の忘れもの　会田雄次
表の論理・裏の論理　会田雄次
回想アーロン収容所　会田雄次
原点からの発想　会田雄次
戦国残酷物語　南條範夫
宝石泥棒G・オハラ　南條範夫
元禄太平記 全二冊　南條範夫
黒い九月の手　南條範夫

家畜人ヤプー　沼正三
木かげの家の小人たち　いぬいとみこ
北極のムーシカミーシカ　いぬいとみこ
人蟻（ひとあり）　高木彬光
成吉思汗の秘密　高木彬光
刺青殺人事件　高木彬光
誘拐　高木彬光
破戒裁判　高木彬光
検事霧島三郎　高木彬光
人形はなぜ殺される　高木彬光
死神の座　高木彬光
ゼロの蜜月　高木彬光
密告者　高木彬光
黒白の虹　高木彬光
ノストラダムス大予言の秘密　高木彬光
肌色の仮面　高木彬光
失踪　高木彬光
死を開く扉　高木彬光
都会の狼　高木彬光
追跡　高木彬光
わが一高時代の犯罪　高木彬光

捜査検事　高木彬光
炎の女　高木彬光
連合艦隊ついに勝つ　高木彬光
二幕半の殺人　高木彬光
灰の女　高木彬光
脅迫　高木彬光
白昼の死角　高木彬光
死美人劇場　高木彬光
黒白の囮　高木彬光
花の賭罰　高木彬光
霧の追われる刑事　高木彬光
裂けた視覚　高木彬光
断層　高木彬光
ハスキル人　高木彬光
影なき女　高木彬光
帝国の死角 全二冊　高木彬光
黄金の鍵　高木彬光
法廷の魔女　高木彬光
邪教の神　高木彬光
羽衣の女　高木彬光

角川文庫　最新刊

藤原審爾
怒りて猿よ山を揺すれ
ボス猿雷電を狙うはぐれ猿。隊あらばば急襲の牙をむく野良犬の群れ。壮大な自然を背景に展開する、動物小説の傑作
300円

高千穂遙
ダーティペアの大冒険
キュートな美人ケイと、色白でお人形さんみたいなユリ。宇宙の犯罪に、かよわき(?)美女二人がたち向う！第一弾
340円

横田順彌
ヨコジュンのびっくりハウス
ナンセンスそして無節操！この八方破れ無双無敵のハチャハチャSFの始祖、ヨコジュンの原点を探る！日本初公開
420円

門田泰明
狙撃（そげき）
特命武装検事 黒木豹介
雪原に消えた自衛隊員、相次ぐ暗殺、CIA、KGBの暗躍。特命武装検事・黒木豹介の活躍を描くアクション巨編
420円

平井和正
狼男だよ
アダルト・ウルフガイ・シリーズ
一匹狼といってもこの俺は本物の狼。満月期の狼男がフルパワーで活躍するアダルト・ウルフガイ・シリーズ傑作！
380円

吉田拓郎
BANKARA（ばんから）
吉田拓郎詩集
フォーク界のプリンスが、いま世に問うアンソロジー。二冊のエッセイ集に続いておくる拓郎ファン必読の文庫本！
260円

草野唯雄
抹殺の意志（まっさつのいし）
推理作家の作品が、しかも、殺人までが…。そのまま現実となって起こり始めた。追力あるプロットで綴る本格推理
340円

小堺昭三
けむりの牙
大正から昭和の日中戦争まで、大陸を舞台に〝阿片王〟の異名をとった風雲児の波乱の生涯を描く現代史小説の傑作
580円

高峰秀子
いっぴきの虫
心の中の「虫」にかきたてられて、懸命に生きてきた著者の洞察力の鋭さとしゃれたユーモアがあふれた人物エッセイ
380円

加納一朗
ホック氏の異郷の冒険
陸奥宗光をまきこんだ機密漏洩事件とそれにまつわる奇怪な殺人事件！その解決に奔走したホック氏とは一体だれ！
380円

角川文庫　最新刊

浅井慎平
カメラはスポーツだ
フットワークの写真術
何を、どんなふうに撮っても、写っているのは、きみ——カラー、モノクロ作品多数。シンベイの「写想」エッセイ
420円

角川書店編
日本史探訪
2 古代王国の謎
女王ヒミコのヤマタイ国から、大和朝廷を震撼させた磐井の叛乱まで、日本統一の黎明期にひそむ謎とロマンに挑む
490円

寺山修司
スポーツ版裏町人生
勝とうとしながら勝てず、怨念のうちに燃えつきていったヒーローたちの人生と、作者自身の人生とを重ねて描く
260円

山川惣治
少年ケニヤ 1・2・3・4
いま蘇る山川惣治、愛と冒険のファンタジー。アフリカ大陸に展開する圏民的絵物語作家の大ベストセラー文庫版！
各380円

美輪明宏
紫の履歴書
三島、寺山ら天才たちに激賞された役者であり、歌手である現代の〈異端児〉が、その手でえがく華麗なる自叙伝！
490円

森村誠一
新版続・悪魔の飽食
幻の部隊「石井細菌戦部隊」を通して、集団の狂気と、その元凶たる〝戦争〟を告発する衝撃のノンフィクション！
420円

植松黎編・訳
ポケット・ジョーク⑪
医者と患者
医者vs患者。ますます深まりつつある両者の不満とうっせきを、笑いによって一気に治療する貴重な妙薬となる一冊
300円

レナード・モズレー　高田市太郎訳
天皇ヒロヒト 上・下
はじめて語られた昭和天皇紀。二十一世紀をまぢかにし、再考を求められる昭和の時代。そして、その存在の大いさ
各380円

半村良
太陽の世界
2 牛人の結婚
聖なる地〝ラ・ムー〟を目ざすアム族と〈超能力集団〉モアイ族。その彼らを襲う凶悪な部族が出現！大河ロマン
380円

清水一行
同族企業
新婚旅行先で新妻が失跡！行方を探索する夫の前に浮かび上ったおそましい事実とは？横暴な企業の恐るべき実態！
420円